

初期台密における仏頂尊とその周辺

大正大学大学院仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻天台学コース

一三〇四〇一五 那波 良晃

初期台密における仏頂尊とその周辺

目次

序	1頁
第一部 初期台密における仏頂尊について―最澄及びその周辺を中心に―	
第一章 入唐以前の最澄における仏頂尊理解―五仏頂法を中心に―	5頁
第一節 序言	5頁
第二節 『伝述一心戒文』にみえる五仏頂法に関する問題	5頁
第三節 最澄入唐以前における仏頂法	7頁
第四節 五仏頂法が説かれる典籍	9頁
第五節 五仏頂法と菩提流志訳・不空訳との関係	9頁
第六節 画像について	11頁
第七節 結言	12頁
《註》	13頁
第二章 『内証仏法相承血脈譜』における仏頂尊の位置づけ	17頁
第一節 序言	17頁
第二節 「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」	17頁
第三節 「三部三昧耶の印信」	17頁
第四節 「雜曼荼羅相承師師血脈譜」	20頁
第五節 『一字仏頂輪王経』と『陀羅尼集経』について	20頁
第六節 『一字仏頂輪王経』・『陀羅尼集経』と『蘇悉地経』との関連性	22頁
第七節 結言	23頁
《註》	24頁
第三章 最澄帰国後における仏頂尊との関係	
―『灌頂七日行事鈔』を中心に―	28頁
第一節 序言	28頁
第二節 『灌頂七日行事鈔』の奥書について	29頁
第三節 諸目録にみえる『灌頂七日行事鈔』に関連する書について	31頁
第四節 『灌頂七日行事鈔』の構成	36頁
第五節 『灌頂七日行事鈔』における諸問題	43頁
第六節 結言	47頁
《註》	47頁

第四章 葉雋撰『破邪弁正記』にみえる最澄の密教について……………52頁

第一節 序言……………52頁

第二節 『破邪弁正記』の撰者について……………52頁

第三節 『破邪弁正記』にみえる両部について……………53頁

第四節 『灌頂七日行事鈔』の成立年次について……………56頁

第五節 結言……………60頁

《註》……………60頁

第五章 台密における『陀羅尼集經』の依用について
—『息心抄』を中心に—……………65頁

—『息心抄』を中心に—……………65頁

第一節 序言……………65頁

第二節 『陀羅尼集經』について……………65頁

第一項 經典の構成……………65頁

第二項 『陀羅尼集經翻訳序』……………66頁

第三節 『陀羅尼集經』の依用に関する概略……………67頁

第一項 奈良期における『陀羅尼集經』の依用……………67頁

第二項 初期台密における『陀羅尼集經』の依用……………68頁

第四節 「釈迦四天王法」について……………69頁

第一項 『門葉記』『相乘法印不伝此法事』について……………69頁

第二項 法曼院藏『息心抄』『四天王法』について……………71頁

第五節 結言……………77頁

《註》……………77頁

《註》……………78頁

第二部 『瑜祇經』における仏頂尊に位置づけについて……………85頁

第一章 従来の『瑜祇經』研究における仏頂尊との関係について……………85頁

第一節 序言……………85頁

第二節 『瑜祇經』に説かれる仏頂尊について……………86頁

第三節 『瑜祇經』『金剛吉祥大成就品第九』について……………87頁

第四節 結言……………89頁

《註》……………90頁

第二章 『瑜祇經』所説の「壞二乗心」について……………92頁

第一節 序言……………92頁

第二節 『瑜祇經』『四攝行品』について……………92頁

第三節 安然撰『瑜祇經疏』『四攝行品』疏について……………93頁

第一項 「摩訶那囊」……………93頁

第二項 「薩縛達摩尼鉢弟」……………95頁

第四節	「四攝行品」の本尊について	98
第五節	「壞二乘心」の印相について	101
第六節	結言	103
《註》		103

第三章 青蓮院吉水藏『瑜祇經母捺羅』『𑖀𑖄𑖅𑖆私記』『瑜祇經西決』について

第一節	序言	110
第二節	『瑜祇經母捺羅』『𑖀𑖄𑖅𑖆私記』奥書について	110
第三節	『瑜祇經西決』奥書について	112
第四節	『瑜祇經母捺羅』『𑖀𑖄𑖅𑖆私記』『瑜祇經西決』における一、二の問題	114
第五節	結言	120
《註》		121

《翻刻資料》

◇凡例		130
○『瑜祇經母捺羅』		131
《註》		155
《引文箇所》		160
○『𑖀𑖄𑖅𑖆私記』		163
《註》		189
《引文箇所》		196
○『瑜祇經西決』		200
《註》		227
《引文箇所》		234

結 237 頁

《参考文献》	242
《初出一覽》	247

《凡例 文献略称》

※本論では、典拠を示すとき次のような略称を用いる。

- 『大正新脩大藏經』 ↓ 『大正』
- 『大日本仏教全書』 ↓ 『仏全』
- 『日本大藏經』 ↓ 『日藏』
- 『天台宗全書』 ↓ 『天全』
- 『續天台宗全書』 ↓ 『續天全』
- 『伝教大師全集』 ↓ 『伝全』

『智証大師全集』↓『智全』

『真言宗全書』↓『真全』

『弘法大師全集』↓『弘全』

※本論における傍線並びに波線は筆者によるものである。

※註記は各章ごとにその末尾に付す。

※本論において引用された梵字のフォントは、「SAT大正新脩大藏経データベース」・「今昔文字鏡」を使用した。また、これらを用いて表記できないものは手書きで著した。

序

伝教大師最澄（七六六―七八二）は、『内証仏法相承血脈譜』などによれば、延暦二十三年（八〇四）に入唐し、台州において主たる目的である天台の法門を道邃・行滿より伝授され、さらに台州では国清寺惟象より「大仏頂大契曼荼羅の行事」を、貞元二十一年（八〇五）の帰国の際には、越州龍興寺において順曉より「三部三昧耶」をそれぞれ伝授された。また、以上の受法に加え、草堂寺大素より「五仏頂法」・「冥道無遮齋法」を、明州檀那行者江秘より「如意輪壇」・「普集会壇」を、開元寺靈光より「軍荼利法」をそれぞれ受法したとされる。

日本天台の密教、すなわち台密は、最澄のこれらの受法に始まる。その後、台密は承和五年（八三八）に入唐した慈覚大師円仁（七九四―八六四）、仁寿三年（八五三）に入唐した智証大師円珍（八一四―八九一）によって拡充され、胎藏界と金剛界の両部に蘇悉地を加えた三部の密教として確立される。そして五大院安然（八四一？―九一五？）やそれ以降の諸師らによって台密は大成していく。

円仁は、不空訳三卷『金剛頂経』の註書『金剛頂大教王経疏』（『金剛頂経疏』）をはじめ、蘇悉地の根本經典である善無畏訳『蘇悉地羯羅経』（『蘇悉地経』）の注釈書『蘇悉地羯羅経略疏』（『蘇悉地経疏』）等を著述している。そして特筆すべきは蘇悉地に拘わる印契や曼荼羅等の解説書『蘇悉地妙心大』を著している。蘇悉地に関しては、具体的内容・伝承等不明瞭なことが多いが、昨今の研究により『蘇悉地経』の中尊は仏頂尊であることが指摘されている¹。

円珍は『大日経心目』・『大日経指帰』等の『大毘盧遮那成仏神変加持経』（『大日経』）とその注釈に関する書や不空訳『菩提場所説一字頂輪王経』に対する注疏である『菩提場所説一字頂輪王経略義釈』（『菩提場所経略義釈』）等を著している。『菩提場所経略義釈』は、仁和二年（八八六）における光孝天皇の病氣平癒の祈禱に対する恩賞として「大日経業」一名と「一字頂輪王経業」一名の計二名の年分度者を増やすことが許されたとする事例に基づいた書である²。

このように、円仁、円珍いずれも仏頂尊に関連するとみられる著作をいくつか遺している。それでは、胎金蘇を特色とする台密の中に仏頂尊を主とする密教がどのように関連しながら浸透していったのだろうか。

台密の権威である三崎良周博士は『台密の研究』で「仏頂系の密教」と呼称して中国における密教と台密とを関連させて蘇悉地乃至三部の密教について探求され克明に分析をなされた。さらに、三崎博士は『台密の理論と実践』において、仏頂尊に関する密教を台密における問題点の一として取り上げた中で、「仏頂系の密教」という称呼は、最澄が『依憑天台集』において、一行禅師の「真言宗」と並べて、唐の惟懿の『大仏頂経疏鈔』について「仏頂宗」と称されていることに影響を受けて用いたことを述べている³。さらに、三崎博士は両書にて最澄と仏頂尊との関わりについて論究を行っている。しかしながら、こうした三崎博士の研究の他に件の調査研究例は少なく、最澄における密教について著された論文も多くはない。したがって、台密における仏頂尊との関連性をより解明するためには、最澄とその周辺の密教に関する事例や記事の収集調査がさらに求められる。

そこで、第一部では、三崎博士の研究を鑑み、最澄における密教が仏頂尊とどのように

結びつくかに重点を置き、最澄の撰著や伝記類をはじめ、最澄在世時における最澄周辺の台東両密の事績や密教に関する記事等を調査し、各先行研究と照らし合わせながら最澄の台密の形成に果たした役割について説明を試み、そして後の台密での展開等を検証する。

まず第一章では、最澄が入唐前にどの程度密教乃至仏頂尊について理解を有していたのか考察する。日本には、すでに奈良時代に『大日経』はもとより、多くの密教経典や『仏頂尊勝陀羅尼経』等の陀羅尼経典等が伝来していたとされ、最澄は入唐以前に密教に接し、何らかの知識が具わっていたと推察される。光定撰『伝述一心戒文』に、最澄が弟子の円澄に、自身（最澄）が入唐している期間に、自身の代わりに桓武天皇の為に五仏頂法の儀式を遂行し、国家を守るように命じている記事がある。（この記述が事実であるならば、）最澄の入唐前における密教の理解度を示す貴重な資料とこの記事は見做される。そこで、『伝述一心戒文』の記述の真偽に関し、先学の研究を参照しながら検証し、灌頂が（行われたのであるならば）どのような経典・儀軌に則っていたのか調査を進める。

第二章では、最澄が、唐において受法した密教の詳細を収めた『内証仏法相承血脉譜』中、「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脉譜」と「雜曼荼羅相承師師血脉譜」を重点的に考察する。「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脉譜」は順曉からの受法に関係する血脉譜である。この血脉譜と順曉授法の密教であり（後に蘇悉地との関連も指摘される）「三部三昧耶の印信」との関係について言及する。また、「雜曼荼羅相承師師血脉譜」には、仏頂尊に関わる内容がいくつか記され、血脉の始まりである「金剛道場大牟尼尊」から仏頂尊を主とする密教経典を翻訳した菩提流志と阿地瞿多が列ねられている。この二人の訳した『一字仏頂輪王経』と『陀羅尼集経』とに注目し、仏頂尊を主として考える二経典の共通性を挙げ、これらと、同じく仏頂尊を主とする『蘇悉地経』との関連性について論じ、最澄が蘇悉地の要素と繋がる可能性があるのか検証する。

第三章では、帰国後に行った高雄灌頂に関連する可能性がある書『灌頂七日行事鈔』の真偽を検証する。『灌頂七日行事鈔』は、主尊を仏頂尊とする旨が記されており、本書が最澄の真撰であるならば、最澄における密教理解の端緒となりえる。しかしながら、本書に関する研究は乏しい。筆者は、『灌頂七日行事鈔』が如何なる書なのか改めて調査し、本書にまつわる問題を挙げて（最澄真撰の）真偽を論じる。

第四章では、『灌頂七日行事鈔』の著された時期を論点にする。『灌頂七日行事鈔』の名は、その奥書にも記される薬雋撰『天台宗遮那経業破邪弁正記』（以下『破邪弁正記』）で初めてみつけることができる。そのため、『破邪弁正記』を精査することによって、『灌頂七日行事鈔』の成立と由来について検証する。

第五章では、『内証仏法相承血脉譜』所収「雜曼荼羅相承師師血脉譜」にも記される阿地瞿多訳の『陀羅尼集経』に焦点を当てる。本経は、奈良時代にすでに日本に将来された経典であるが、台密においては、最澄が血脉に列ねて以後、安然が『八家秘録』や『教時間答』においてこの経典を採り上げ、さらにそれ以後の台密事相に少なからず影響を与えた経典である。また、『陀羅尼集経』は、第三章・四章で考察した『灌頂七日行事鈔』所説の作法の基盤となっているため、『陀羅尼集経』に説かれる修法等の依用について調査する必要があると考える。そこで、実際に修された『陀羅尼集経』に由来する修法に着目して、『陀羅尼集経』の訳者に纏わる事績、日本における依用を奈良時代より遡って時系列的に探索を行い、法曼流の祖相実の著作とされる『息心抄』にみえる『陀羅尼集経』由来と記

される「釈迦四天王法」に着目し、『灌頂七日行事鈔』の成立年代を類推する傍証のひと成り得るような件の資料について考究を試みる。

第二部では、『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇経』（『瑜祇経』）に説かれる仏頂尊に関する事例に焦点を当てて論じる。『瑜祇経』に関する研究は、幾つか確認することができるものの、主に東密側の研究が多く、台密に焦点を当てた研究は、三崎良周博士と、水上文義博士の各各重厚な研究以外に確認できない。かかる状況を踏まえた上で、『瑜祇経』の台密における意義影響に関して調査研究を進める。台密において、初めて『瑜祇経』の註解を作したのは、安然である。その安然の著作『教時問答』巻四の四蔵（瑜伽瑜祇蔵）には、蘇悉地法については、胎蔵界と同じように三部立てであり、この法は胎蔵大法中の悉地成就法であるという。これに相對して、『瑜祇経』は兩部大法の肝心といい、ここに説かれる「大悲胎蔵頓証八字印明」は、『大日経』「阿闍梨真実智品第十六」の印明であるが、（金剛界）五部三十七尊法を明かすものであるため、金剛界中の悉地成就法であり、その観点から『瑜祇経』は蘇悉地法と相對すると述べている。四蔵の中心となるのは、『瑜祇経』であり、この経は金剛界における蘇悉地法であると解釈し、本経中にも仏頂尊に関連する記述が随所にみられる。そこで、仏頂尊について『瑜祇経』ではどのように説かれているのか、『瑜祇経疏』を述べた安然や台密諸師はどのように解釈したのか調査を行う。

第一章では、台密における『瑜祇経』に関する研究を行った、三崎良周・水上文義兩博士の研究を参照し、本経に説かれる仏頂尊に関する事柄（記述）を整理・検討し、問題点を抽出する。

第二章では、『瑜祇経』「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六（四攝行品）」に説かれる壞二乗心について考察する。「四攝行品」は品題に仏頂尊の名が確認できるが、その理由について未だ研究事例が無い。そこで、「四攝行品」が台密の中で如何に解釈され、扱われているかを中心に論を進める。また、そこから波及したと思われる安然以降の台東密の諸師の関連する章疏類についても考証する。

第三章では、青蓮院吉水蔵『瑜祇経母捺羅』『*धृष्ट*私記』『瑜祇経西決』三書の整理・解析を行う。安然以降、台密における『瑜祇経』に関する書は、聖一國師円爾弁円（一一〇二—一一二八〇）秘書『瑜祇経見聞』一卷、応長二年（一一三二）頃成立と考えられる『瑜祇経口決拔書』八卷（尾欠）、澄豪の講述口決を弟子が書き留めたものとされる『瑜祇経聴聞抄』三卷等が伝わっているが、未だ活字化が進んでいない。台密において『瑜祇経』は、（仏頂尊、仏眼仏母が主として考えられる「金剛吉祥大成就品」に説かれる）「大悲胎蔵頓証八字真言」に関して重要視され、なかでも慈鎮和尚慈円（一一五五—一二二五）のいわゆる仏眼信仰は、密教教学上多くの研究対象になっている。慈円が幼少期に入寺した青蓮院の吉水蔵聖教は、現存する最古の密教聖教とされ、平安時代中期に谷阿闍梨皇慶の時代に成立し、青蓮院初代門跡行玄のときに現在の姿に整えられたとされる。しかしながら、この価値ある吉水蔵所収の『瑜祇経』に関する書物については、未だ内容等の詳細検討はあまり進んでいない。そこで、吉水蔵聖教類収蔵書目の中、同時代に書写されたものと考えられる『瑜祇経母捺羅』『*धृष्ट*私記』『瑜祇経西決』の三本が如何なる書なのか調査を行う。

また、『瑜祇経母捺羅』『*धृष्ट*私記』『瑜祇経西決』三本の翻刻を行ったものを翻刻資料として本論末部に提示する。

《註》

- 1 三崎良周・林慶仁『蘇悉地經・蘇婆呼童子經・十二面神呪心經』〔新国訳大藏経〕密教部2・大蔵出版、二〇〇二）十六頁等。
- 2 木内堯央『天台密教の形成』（溪水社、一九八四）三三八頁参照。
- 3 三崎良周『台密の理論と実践』（創文社、一九九四）三〇三頁。

第一部 初期台密における仏頂尊について

―最澄における密教及びその周辺を中心に―

第一章 入唐以前の最澄における仏頂尊理解―五仏頂法を中心に―

第一節 序言

伝教大師最澄(七六六―七八二)の唐における密教受法に関する事績は、最澄撰『内証仏法相承血脈譜』中順曉(生没年不詳)から受法されたことが記された「胎藏金剛兩曼荼羅相承師師血脈譜」¹とそれ以外の受法についてまとめられた「雜曼荼羅相承師師血脈譜」²という二種の血脈譜に著されており、特に仏頂尊との関連について注視すると、「雜曼荼羅相承師師血脈譜」の中に、国清寺惟象より「大仏頂大契曼荼羅の行事」を、草堂寺大素より「五仏頂法」を受法したといった記述を確認できる。また『台州録』³には、惟象より授けられた「大仏頂通用曼荼羅一張」や「新訳梵漢兩字大仏頂陀羅尼一卷」・「梵漢兩字仏頂尊勝陀羅尼一卷」の三部の将来品の記述があり、さらに『越州録』⁴には、密教に関係する三十八部の将来品の内、「五仏頂轉輪王經五卷(一百張)」や「金輪仏頂像様一卷」等、少なくとも八部の仏頂尊に関する記録がみえる。

最澄帰国後の仏頂尊に関連する記事をもとめてみると、一乗忠撰『叡山大師伝』の中に延暦二十四年(八〇五)に高雄山寺で行った灌頂法に関する以下の記述がある。

又九月上旬、臣弘世、奉_レ勅、令_三最澄闍梨為_レ朕、重修_二行灌頂秘法_一。即依_二勅旨_一、於_二城西郊_一、択_二求好地_一、建_二創壇場_一。又召_二画工十余人_一。敬_二画_二五仏頂浄土一幅、大曼荼羅一幅_一⁵。

おそらく大日如来が画かれる「大曼荼羅一幅」に加え、「五仏頂浄土一幅」を画くように指示した内容である。さらには、最澄が天台宗の学問と修行をする学徒向けにまとめた規則集の一つ『天台法華宗年分学生式』(『山家学生式』六条式)の一文に「凡遮那業者、歳歳毎日、長_二念遮那・孔雀・不空・仏頂、諸真言等、護国真言_一⁶。」と、遮那業の者に護国の実を挙げるために、「遮那・孔雀・不空」に加えて、仏頂等の真言を長念させる旨の記述もある。これらのことから、最澄が「遮那・孔雀・不空・仏頂」を代表的な護国の真言法として捉え、仏頂尊に関する作法も重用していたことを示唆している。

このように、最澄は仏頂尊に関する何らかの見識を有していたことが推察できる。それでは、最澄はいつ頃からどのようなようにして仏頂尊に関する知識を得たのだろうか。

第二節 『伝述一心戒文』にみえる五仏頂法に関する問題

まず、入唐以前についてみると、最澄に最も近侍していた光定撰『伝述一心戒文』下「大法師円澄功能」に次のようなことが記されている。

随_二師之命_一奉称_二五仏頂_一、礼拜。為_二奉桓武天皇_一修_二念五仏頂法_一、在_二先師後_一、奉_レ守_二国家_一。為_レ奨_二入唐_一之随_二先師之心_一、住_二如如觀_一。…(中略)…三七箇月、修

二念秘法一。不入唐一前行事之旨注^三於今文一、挙^三法師行^一 7。

これは最澄が弟子の円澄に、自身(最澄)が入唐している期間に、自身の代わりに桓武天皇の為に五仏頂法の儀式を遂行し、国家を守るように命じている部分である。五仏頂法とは、一字金輪仏頂、白傘蓋仏頂、高仏頂、勝仏頂、帝聚羅施(光聚) 仏頂の五仏頂を請じて障難を取り除く修法である。この記述は、最澄が唐において密教を修学する以前に、すでに五仏頂法なる灌頂作法が行われていたことをあらわす。この五仏頂法に関する記述は、先学にながな疑問を呈させ、議論の対象になった。

大山公淳氏⁸は、この記述を事実と解釈して取り上げている。さらに、台密の權威である三崎良周博士は、次の二つの記事、『統後紀』嘉祥三年(八五〇)二月五日の條「請^二僧綱十禪師及有驗者^一、於^二御簾外^一、令^レ奉^二加持^一。」と、同七日の條「是日、大法師真頂、与^二北山近士觀善^一、特入^二御簾中^一奉^二加持^一。觀善誓曰。御病不^レ除、不^二更起^レ坐、不^二復飲食^一。」より、天皇の御病平癒のために、内供奉十禪師だけでなく、民間の修験者が禁中で祈禱していることを指摘する。それに加えて、承和十五年(八四八)二月十八日の條「亦遣^二中使於八省院^一、別試^二持經持呪拔萃者^一。於^レ是、負^レ笈杖錫、自^二四方^一至者數百人、就^レ中、及第者七十余人、並聽^二得度^一。皆以^二延宇^一、居^二名上^一。」なる記述を引き、延宇のために多くの持経者・持呪者が得度を許されているように、叡山にいた円澄も、呪験の令名が聞こえて宮中に召され、五仏頂法を修して得度を許されたとすることは首肯している⁹。

それに対して、水上文義博士は『伝述一心戒文』の記述に対して次の三つの問題点を挙げて疑義を唱える¹⁰。

一に、この記述を事実と捉えた場合、最澄は入唐以前、すなわち『内証仏法相承血脈譜』所収「雜曼荼羅相承師師血脈譜」の唐の貞元二二(八〇五年)五月五日に草堂寺大素から相承したとされている記述より以前に、五仏頂法を得ていたことになる。また最澄の入唐の前には、円澄は未受戒であり、いかに師の命であれど、未受戒の沙弥が天皇の為に単独で修法を行う点も疑問視している。

二に、『類聚国史』一七八「灌頂」の項が、『伝述一心戒文』を裏づけるかと思われる資料のごとく取り扱っているが、三崎博士もすでに『類聚国史』の記述が疑わしいことを指摘している。

三に、『天台霞標』収録文書及び葉集の『破邪弁正記』に引用されるものがある『円澄和尚手書』を挙げ、この文書が円澄真撰ならば天長六年(八二九)以後の成立であるとし、この文書によると五仏頂法は三回修されていることになるが、この記述に対して四つの奇妙な点を挙げている。第一に、冒頭部分で最澄より空海の名が先に書かれている点、第二に、『破邪弁正記』では最澄と呼び捨て呼称が用いられていて、写誤にしても他では大師とあることから伝教大師を敬称無しで記すことは考えられない点、第三に三昧耶戒に関する記述がある点、第四に「紫金上」とか「紫金殿上」という表現で、内裏を「紫微」「紫禁」という例はあるが「紫金」といったかどうか、また桓武天皇を柏原朝というのはいつ頃からかという点である。

第三節 最澄入唐以前における仏頂法

『伝述一心戒文』の記述に関する様々な疑問点が指摘されている以上、最澄が入唐前より仏頂尊に関心を示し知見を有していたために円澄に命じて五仏頂法を修させたところとを容易に首肯するわけにはいかず、一度整理する必要がある。

最澄入唐以前に密教が伝わっていたことは、すでに三崎博士等先学が指摘されているが、仏頂法に関しても同様に伝わっていたと考えられる¹⁾。

奈良末期に成立した『延暦僧録』一「従高僧沙門釈思託伝」の部分には「宝亀年、勅思託東大寺攘災大仏頂行道、勅請三入内¹⁾、香水散²⁾御帳及大宮¹⁾」とあり、光仁天皇の勅により鑑真(六八八―七六三)と共に来朝した思託(生没年不詳)に、東大寺において攘災のために大仏頂行道をさせたことを載せる。また、同じく『延暦僧録』五「守真居士伝」にも「宝亀十年、東夷起³⁾盜、佐伯將軍失⁴⁾守。挙⁵⁾朝懷⁶⁾怖。守真、奏⁷⁾於東大寺¹⁾、仏頂行道攘⁸⁾災。限⁹⁾三七日¹⁾、至²⁾入三三七¹⁾、東夷逼伏¹⁾」とあるように、宝亀十年(七七九)、東國の武士に攻められた時に、東大寺で仏頂行道が行われている。これらの史料は、奈良末期にはすでに仏頂法が伝わっていたことを示している。

大仏頂に関しては、奈良時代において般刺蜜帝訳『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』(『首楞嚴經』七所説「大仏頂陀羅尼」の誦呪が受容・流通され、また『延暦僧録』五「智名僧沙門釈戒明伝」¹⁾にみえる本經の真偽論争が宝亀十年(七七九)から平安時代に至るまでなされていたことが知られている⁵⁾。

「大仏頂行道」に関しては、『首楞嚴經』に、「於¹⁾道場中¹⁾一發²⁾菩薩願¹⁾、出入澡浴、六時行道¹⁾。」と行道に関する文が確認できる。さらに、「恒¹⁾於²⁾三六時¹⁾誦呪、繞³⁾壇至⁴⁾心行道。一時常行⁵⁾二百八遍¹⁾」¹⁷⁾と、「大仏頂陀羅尼」を誦呪し行道する記述があり¹⁸⁾、それを行ずることによって、降伏諸魔・制諸外道や、賊難・兵難、風水火難等を鎖散させるといった種々の利益が説かれている¹⁹⁾。

「仏頂行道」については「大仏頂行道」と同趣意であると考えられるが、『仏頂尊勝陀羅尼經』²⁰⁾に、率都婆を造り、そこに「仏頂尊勝陀羅尼」を安置して、行道禮拜を行う記述も確認でき、これに由来するとも推測できる。

ところで、最澄における大仏頂に関連する資料については、前述の通り、『台州録』²¹⁾にみえる「大仏頂通用曼荼羅一張」・「新訳梵漢兩字大仏頂陀羅尼一卷」の記述がある。それに加えて、葉雋の『破邪弁正記』²²⁾では、最澄の撰述書をまとめた「先大師隨身録」なる目録を挙げ、その中に「大仏頂集一卷」(現存せず)という書を示している。また、空海において、『御将来目録』に、「大仏頂如来放光悉怛他鉢陀羅陀羅尼一卷³⁾」・「梵字大仏頂真言一卷²⁴⁾」が録され、『弘法大師全集』収録の『大仏頂略念誦法』²⁵⁾・『大仏頂經開題』²⁶⁾が挙げられる。これらは、真偽が定かではないが、平安期に至っても『首楞嚴經』に対する関心が高かったことがうかがえる。これらの書については、未だ研究事例が無いため、詳細に研究する必要があるだろう。ともあれ、「大仏頂行道」や「仏頂行道」は、これらの記述に由来するものと考えられ、当時の仏頂法において、これらの經典の重要性が垣間みえる。

また、『大日本古文书』(一―五八三)によると、仏頂陀羅尼が誦呪される事例が天平六年(七三四)頃からみられるようになる。例えば、先の仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼經』の中に、「若人、遇¹⁾大悪病¹⁾、聞²⁾此陀羅尼¹⁾、即得³⁾永離²⁾一切諸病¹⁾。亦得³⁾消滅¹⁾。応¹⁾

隨三惡道。亦得三除斷²⁷。」とあるように、仏頂尊の陀羅尼の誦呪は、療病に関する効能であり、その代表的な事例として、病氣平癒を祈った聖武天皇の勅願経によって執り行われた東大寺玄昉（？―七四六）による誦呪が知られている。当時は、こうした仏頂尊の陀羅尼の誦呪は、病氣平癒の秘呪として重要視されていたと考えられる。

しかし、これらの事例以外に、この時代の仏頂尊法要に関する記録は見出し難い。その理由は、平安時代に編纂された法令集である『類聚三代格』二の「修法灌頂事」に「貞元元年（七八五）に、勅語によらずして山林寺院にて陀羅尼を読み、壇法を行わずすることを禁ず²⁸」とあるように、勅語によらず、僧尼が王臣や民衆と私的な交流を持ち、私的な要請により呪法を修することが禁じられていたこと、つまり勅命による国家の大事の場合以外に密教法要の実施が禁じられていたと推測できる²⁹。三崎博士は、民間の修験者が禁中で祈禱している例を挙げているが、これは私的なものではなく、「僧綱十禪師及有驗者」とあるように、官僧等と共に祈禱しているのである。だが、理由はともあれ、事例こそ少ないが、仏頂法が修されていたことは事実であり、最澄が仏頂法についての知識を有していたとすれば、『伝述一心戒文』が伝えるように、その修法を弟子の円澄に委ねることも可能であったであろう。

では、入唐前の最澄に、その仏頂法を学ぶ機会が存したのであるうか。最澄の入唐以前に日本に伝来した仏頂尊に関わる儀軌としては、『五仏頂法決（訣）』一卷が挙げられる。本書は現存していないため、その詳細内容は不明であるが、台密の大成者とされる五大院安然の編纂した『諸阿闍梨真言密教部類総録』（『八家秘録』）の中に、この書は梵釈寺永忠（七四三―八一六）が著したものとある³⁰。

また、『八家秘録』には、「梵唐語対訳大仏頂真言一卷」なる「大仏頂陀羅尼」と関連性があるか及ぶ書が永忠述であることが記されている。それ故に、永忠とは仏頂法について何らかの知見を有していた僧であったと推察できる。

梵釈寺とは、円澄と道忠教団で同門の徳円（七八五―？）が住持することになる寺である。そして、最澄撰『守護国界章』に「又案³¹招提真大和上、並東大寺法進僧都及普照法師等将来、第二本十卷円頓止観、江州梵釈寺一切経内所³²写正本³³」云。……³⁴とあるように、梵釈寺は比叡山に近い江州（近江国）に位置し、なおかつ天台宗の重要書『円頓止観』を含めた一切経が備えられた寺でもある。したがって、最澄が比叡山の御膝元にある梵釈寺で『五仏頂法決』を修学した可能性は十分に予測できる。

また、先学によると、奈良時代には多くの密教典籍が伝わっていたとし、具体例として『開元釈教録』入蔵の大小乗の経・律を合わせた経五〇四八巻の伝来を示す。その根拠に、『正倉院文書』や『続日本紀』の天平七年（七三五）に玄昉が、諸仏像と経論五〇〇〇余巻をたずさえ帰国したとの記録等を挙げる³⁵。前述の禁中における祈禱や仏頂法、また『五仏頂法決』なる書が著されていたことから鑑みても、その修法の拠所となる多くの經典が唐より奈良時代に伝わっていたと考えることは妥当であろう。

このように、最澄入唐以前において、すでに多くの密教經典が日本に伝播し、仏頂法に関連する事例もいくつか確認できることから、最澄も入唐前よりこれらに充分触れる機会を有していたことが推察できる。また、円澄が五仏頂法を修したと安直に断定することはできないが、絶対的に否定することもできず、桓武天皇の内供奉十禪師の一人であった最澄が、入唐中に円澄が行った五仏頂法を（当然ながら私的ではなく）修法したと考えるこ

とは、現段階では(三崎博士の指摘のように)矛盾はないものとして捉えてよいのではないだろうか。

第四節 五仏頂法が説かれる典籍

円澄が五仏頂法を修したとすれば、何れの経軌に則って行われたのであろうか。まず考えられるのは、その修法の典拠として、前にも述べた『五仏頂法決』一卷が挙げられる。その著者永忠の住持する梵釈寺は、円澄とも縁のある寺院であり、円澄が書を披見していた可能性がある。しかしながら、本書は現存しておらず、その内容を検討することは適わない。また、後の台密章疏類においても、わずかに『八家秘録』にその著者を確認できるのみであり、いつ頃作成されたのか等、その詳細は不明である。

そこで、次に着目したのは、最澄入唐以前にすでに日本へと伝来していたとされる『開元釈教録』所収の多くの經典の中に、仏頂尊を主として説く典籍が数多く存していることである³³。その内、『開元釈教録』入蔵中の経軌、尚且つ五仏頂法に関連する内容に関連する典籍を次に示す。

(a) 『五仏頂三昧陀羅尼經』四卷 菩提流志訳(六九三)

(b) 『一字仏頂輪王經』五卷 菩提流志訳(七〇八)

(c) 『菩提場所説一字頂輪王經』五卷 不空訳(七五三)

(d) 『一字頂輪王念誦儀軌』一卷 不空訳(七五三)

中でも、五仏頂法について詳細に説かれているのは(a)と(c)であり、これらは同本異訳と見做すことができる。(a)・(b)は共に菩提流志の訳出經典である。特に、菩提流志は『内証仏法相承血脈譜』中の「維曼荼羅相承師師血脈譜」にも記される人物であり、菩提流志訳を通じて最澄が入唐以前からこれらの経軌を認知していたことも予想される。さらに、(憶測が過ぎるが)永忠もこれらの典籍を基にして『五仏頂法決』を著した可能性も考えられる。

また、(c)・(d)は共に不空訳とされる。不空訳については、『開元釈教録』二十末に「大唐不空三藏新訳衆經論及念誦儀軌法筆目録」として収録されている。ここでは、「興元元年八月一日、於正覚寺一新写入蔵、便作此目録³⁴。」と、不空訳は興元元年(七八四)入蔵の目録とあり、奈良期に日本に伝来していたか定かでない³⁵。そのため、(d)は本論文では除外し、(c)は(a)・(b)の異訳經典であるため、一往ここに挙げる。

かかる観点から、五仏頂法について説かれる(a)と(c)の經典と最澄乃至円澄との関連について改めて調査した。

第五節 五仏頂法と菩提流志訳・不空訳との関係

(a)菩提流志訳『五仏頂三昧陀羅尼經』四卷、(b)同『一字仏頂輪王經』五卷、(c)不空訳『菩提場所説一字頂輪王經』五卷について比較すると、以下の通りである。

(a)五仏頂三昧陀羅尼經

(b)一字仏頂輪王經

(c)菩提場所説一字頂輪王經

第一卷

第一卷

第一卷

序品第一	序品第一	序品第一
五仏頂王陀羅尼	画像法品第二	示現真言大威徳品第二
入三摩地加持顕徳品第二		
一字頂王画像法品第三	第二卷	第二卷
五頂王三摩地神変加持	分別成法品第三	画像儀軌品第三
化像品第四		
第二卷	分別密儀品第四	行品第四
五頂王行相三昧耶品第五	分別秘相品第五	儀軌品第五
五頂王儀法秘密品第六	成像法品第六	分別秘密相品第六
五頂王成就法品第七	第三卷	第三卷
第三卷	印成就品第七	末法成就品第七
五頂王密印品第八	第四卷	密印品第八
第四卷	大法壇品第八	第四卷
五頂王修証悉地品第九	供養成就品第九	諸成就法品第九
五頂王普通成就法護摩品第十	第五卷	世成就品第十
	世成就品第十	第五卷
	護法品第十一	無能勝加持品第十一
	証学法品第十二	証学法品第十二
	護摩壇品第十三	護摩品第十三

『五仏頂三昧陀羅尼經』と『一字仏頂輪王經』は共に菩提流志訳であるが、『五仏頂三昧陀羅尼經』は分量的に少なく、その上品題名も未整理と考えられる。対して『一字仏頂輪王經』は、分量も多く、品題名も整理されており、先学は、『一字仏頂輪王經』は『五仏頂三昧陀羅尼經』の増広の可能性があると指摘している³⁶。

(a)～(c)の共通する特徴は、次に示すように、それぞれの序品第一に「一字仏頂輪王の呪を誦せば、世間・出世間の一切の呪を成就する功がある」とあることである。

(a) 若有下念³⁷是頂王呪³⁸者³⁹、則得⁴⁰出世世間一切大呪悉尽成弁⁴¹。

(b) 若有下念³⁸是一字仏頂輪王呪³⁹者⁴⁰、即得⁴¹出世世間一切大呪悉尽成弁⁴²。

(c) 若纔憶⁴³念此真言⁴⁴、一切世間出世間真言悉皆成就⁴⁵。

また、他の四仏頂の中、高仏頂輪王呪の効能に関して、(a)～(c)に以下の記述がみられる。

(a) 若善男子女人等、樂⁴⁶成⁴⁷就⁴⁸一字輪王呪⁴⁹者、必令⁵⁰内外嚴飾清潔⁵¹、特以⁵²樺皮或絹紙上⁵³、雄黃書⁵⁴斯高頂王呪⁵⁵、佩⁵⁶帶肩臂⁵⁷并持⁵⁸斯呪⁵⁹、即速成就⁶⁰。若国王・王族・大臣・僚佐・清信・男女、一切人等、信⁶¹斯呪⁶²者、亦令⁶³書写⁶⁴佩⁶⁵頂・肘・臂⁶⁶。為⁶⁷諸人衆⁶⁸互相敬諾、而不⁶⁹侵惱⁷⁰災垢銷滅⁷¹。当下得⁷²弁才⁷³、福相円満⁷⁴。

(b) 若善男子、樂⁷⁵欲⁷⁶成⁷⁷就⁷⁸一字仏頂輪王呪⁷⁹者、必令⁸⁰内外嚴飾清潔⁸¹、以⁸²樺木皮⁸³或以⁸⁴紙素竹帛等上⁸⁵、雄黃書⁸⁶斯高頂輪王呪⁸⁷、佩⁸⁸帶肩臂⁸⁹并持⁹⁰斯呪⁹¹、速得⁹²成就⁹³。若有⁹⁴国王・王族・妃后・大臣・僚佐・清信・男女・一切人民⁹⁵、信⁹⁶斯呪⁹⁷者、亦令⁹⁸書写⁹⁹戴¹⁰⁰頂・頸・臂¹⁰¹。為¹⁰²諸人衆¹⁰³互相敬諾、而不¹⁰⁴侵擾¹⁰⁵災垢銷滅¹⁰⁶。当下得¹⁰⁷弁才¹⁰⁸、吉相円満¹⁰⁹。

(c) 若有^二善男子・善女人^一、修^二習輪王頂^一者、及余淨信者、所^レ往処、鬪戰・論理・
諍訟、一切処若誦、所^レ去処、悉皆得^レ勝。或余有^下大國王淨^二信佛法^一者^上。用^二牛黃
一於^二樺皮上或素上^一書^二此真言^一、繫^二旗纛上^一。或於^二額下^一則往、他敵若見、則便
破敗、他軍消融互不^二相救^一。何以故、以^二如来神力加持^一故、或余塢波塞迦・塢波斯
迦、於^二頭上^一帶持、彼人吉祥清淨威德。吉慶威光威力、不^レ被^二他凌突^一、獲^二得吉
祥弁才^一^{4.2}。

ここにはそれぞれ、世間・出世間を問わないあらゆる人々を対象となし、呪を信じ唱え
ることに關しては何人も問わないと述べられ、仏頂輪王の呪を信誦することで、あらゆる障
難を排除して、善法を成就することができるとしていることが、この三經典に共通する要
旨として理解できる。それ故、当時晩年に病に臥されていた桓武天皇に対する除難を願ひ、
官民一体となつて五仏頂法が積極的に修されたことが推察できる。

菩提流志訳と不空訳との違いについては、先学がすでに比較研究を行っている^{4.3}。その
中に、(b)『一字仏頂輪王經』『大法壇品第八』に相当する部分が、(a)と(c)には全く無
いという違いがある。「大法壇品」は、一字頂輪王大秘密曼拏羅、一字仏頂輪王曼拏羅道場
法会の作壇、結界、入壇や曼荼羅、灌頂や随心供養成就壇法等が説かれる品である。この
品は、「略説^二一字頂輪王大秘密曼拏羅^一。此曼拏羅、於^二出世世間^一、為^レ最為^レ上^{4.4}。」と、
出世間・世間どちらにおいても最上なものであると説明しており、曼荼羅の題について嚴
密に題されているのはこの品のみであり、(b)『一字仏頂輪王經』『大法壇品』の重要性が
うかがえる。しかし、「大法壇品」が如何に重要であるにしても、上述の『伝述一・心戒文』
等には円澄が五仏頂法を行ったという記述があるのみで、この品に説かれる作法を中心
に行ったことには必ずしも繋がらない。

第六節 画像について

密教修法において重要な要素の一に画像(図像)がある。密教では、經典や儀軌に尊容・
印相・持物・坐法等を規定し、これに基づいて尊像を画き、その画像を用いて修法を行う。
五仏頂法を修したとするのであれば、五仏頂の尊像が必要となる。そこで、五仏頂法に關
連するであろう「画像」に着目すると、次の(a)~(c)にそれぞれ次のような記述が確認さ
れる。

(a) 若有^下擬^二画輪王像^一者^上、先曾入^二頂輪灌頂無勝壇^一、手授^二具足呪句印法法式^一、
入^二最勝頂王等壇^一已成就者。謂、阿闍梨印讚許可、求^レ証^二出世大涅槃處^一。如^レ
是行人、乃^レ堪^レ画^レ像^{4.5}。

(b) 画^二斯像^一者、先曾入^二此頂輪王灌頂無勝法壇^一、於^二阿闍梨^一手授^二具足呪句印法^一、
或復入^二於勝頂王壇^一已成就者。為^二阿闍梨印讚許可^一、求^レ証^二出世大涅槃處^一。如^レ
是行人、乃^レ堪^レ画^レ像^{4.6}。

(c) 我今說^二世尊仏頂輪王画像法^一。修行者先^下入^二曼荼羅^一、從^レ師受^中得^二印契儀軌^上。
曾入^二仏頂輪王壇^一、或無能勝忿怒壇、或勝仏頂壇見^三三昧耶^一、得^レ受^二灌頂^一、
得^二阿闍梨印可^一、無上涅槃道入修行、当依^二儀軌^一、応^レ作^二先行^一。先行已、然後
画^レ像^{4.7}。

菩提流志・不空訳共に、画像する者は、先ず頂輪灌頂無勝壇に入り、印呪を授かり、勝

頂王等の壇に入ってその法を成就した者でなくてはならないのである。もし、(a)～(c)を典拠とした作法を修したとするのであれば、この灌頂を授かった何者が画いた尊像が用いられたはずである。しかし、日本においてこの灌頂を行って尊像を画いたとする記録は管見の限りみつからない。

最澄の入唐以前の五仏頂に関連する画像の記録を調査すると、淡海三船(七二二―七八五)著『唐大和上東征伝』に、鑑真将来の「画五頂像一鋪⁴⁾」という記述が確認できる。「五頂」という表現は、菩提流志訳の(a)・(b)でみられる語であり、五頂像は五仏頂像のことと推察できる。なお、(c)ではこの表現はみられない。

また、『五仏頂法決』の著者である永忠が住持した梵釈寺は、前に述べたように、最澄と縁のある道忠と同門の徳円が後に住持する寺であり、『守護国界章』に鑑真将来の典籍等が備えられていたことが記されている⁴⁹⁾。

円澄との関係については、『元亨釈書』二「延暦寺円澄」に「十八事」道忠菩薩¹⁾。忠者鑑真之神足也⁵⁰⁾。」と、円澄が鑑真の弟子の一人である道忠に師事していたことが述べている。さらに、道忠は延暦四年(七八五)勅願により緑野寺を開いたとされており、この緑野寺は『天台霞標』二編之二には「弘仁八年五月十五日、在²⁾緑野寺法華塔前¹⁾。故最澄大和上、為^下鎮²⁾国家¹⁾、利^中樂有情^上入^二於胎藏^一・金剛兩部大曼荼羅壇^一、親執²⁾宝蓋¹⁾。於^二円澄^一・広智兩弟子頂^一、而伝²⁾授兩部灌頂^一者⁵¹⁾。」と、最澄が鎮護国家・利樂有情のため、胎藏・金剛界兩部の大曼荼羅壇に入り、宝蓋をとって円澄と広智の二人の弟子の頂に兩部の灌頂を伝授したとの記述があり、この地は最澄が帰唐後の修法を行った場所でもあり、最澄・円澄共に道忠との親しい関係がうかがえる⁵²⁾。そして、(a)～(c)と『五仏頂法決』との直接的な繋がりは定かではないが、少なくとも鑑真将来の画像と『五仏頂法決』との関連が推測されるだろう。

それに加えて、帰国後の事績ではあるが、最澄は『伝教大師消息』所収の空海(七七四―八三五)との書簡において、自身の密教理解を補うために、さまざまな密教書の借覧を申し出ているが、その中には「菩提場所説一字転輪王経一帖」という不空訳(c)と関係があると思しき書が含まれている⁵³⁾。このことから、最澄は、すでに修学していたであろう菩提流志訳に加え、五仏頂に関する見識をさらに拡充するために不空訳の借用を申し出たとも推察できる。なお、補足すると、最澄が菩提流志訳に知見があったことは、『内証仏法相承血脈譜』中の「雜曼荼羅相承師師血脈譜」に菩提流志の名を列ねていることから裏づけられよう。

第七節 結言

『伝述一心戒文』にみえる円澄が修したとされる五仏頂法修法について論じた。件の修法の実施に関しては問題点はあるが、奈良時代にすでに仏頂法に拘わる事例がみつげられたり、梵釈寺永忠が『五仏頂法決』なる書を著述していること等から、最澄は入唐以前より五仏頂法に関して何らかの知識を有していたと考えられる。また、永忠の『五仏頂法決』は五仏頂法修法に大いに関係する典籍であると考えられるが、残念ながら現存していない。最澄入唐以前に日本に伝わっていた菩提流志訳『一字仏頂輪王経』(または『五仏頂三昧陀羅尼経』)は、五仏頂法を説く經典であることから、『五仏頂法決』の製作に多大な影響を

及ぼしたと推察できる。さらに、最澄は『内証仏法相承血脈譜』中の「雜曼荼羅相承師師血脈譜」に菩提流志の名を列ねているため、入唐以前の最澄の仏頂尊に関する知識において、菩提流志訳『一字仏頂輪王經』（または『五仏頂三昧陀羅尼經』）は重要な位置を占める経典と考えられる。

《註》

- 1 『伝全』一・二三七～二四七頁。
- 2 『伝全』一・二四四～二四七頁。
- 3 『大正』五五・一〇五七頁中。
- 4 『大正』五五・一〇五八頁中～下。
- 5 又九月の上旬、臣弘世、勅を奉り、最澄闍梨をして朕の為に、重ねて灌頂秘法を修行せしむ。即ち勅旨に依り、城西郊に於いて、好地を択求し、壇場を建創す。又画工十余人を召す。敬つて五仏頂浄土一幅、大曼荼羅一幅を図す。『伝全』五付・二三頁。）
- 6 凡そ遮那業の者は、歳歳毎日、遮那・孔雀・不空・仏頂、諸真言等、護国の真言を長念せしめん。『伝全』一・十二頁。）
- 7 師の命に随いて奉じて五仏頂を称し、礼拝す。桓武天皇の奉為に五仏頂の法を修念し、先師の後に在つて、国家を守り奉る。入唐を奨めんが為の先師の心に随つて、如如の觀に住す。…（中略）…三七箇月、秘法を修念す。入唐せざる前の行事の旨を今文に注し、法師の行を挙げ。『伝全』一・六三八～六三九頁。）
- 8 大山公淳「伝教大師の密教觀」『印度学仏教学研究』八一、一九五六）や勝又俊教『密教の日本的展開』（春秋社、二〇〇〇）
- 9 三崎良周『台密の理論と実践』（創文社、一九九四）十三～十四頁。
- 10 水上文義『台密思想の形成』（春秋社、二〇〇八）三六四～三六六頁。
- 11 三崎良周『台密の理論と実践』（創文社、一九九四）十頁。
- 12 宝龜の年、勅して思託に東大寺攘災大仏頂を行道せしめ、勅して入内を請い、香水を御帳及び大宮に散らしむ。（藏中しのぶ『延暦僧録注釈』（大東文化大学東洋研究所、二〇〇八）八一頁。）
- 13 宝龜十年、東夷盜を起こし、佐伯將軍守を失す。朝を挙げて怖を懷く。守真、東大寺に奏して、仏頂行道して災を攘う。三七日を限り、三七に入るに至りて、東夷逼り伏す。（藏中しのぶ『延暦僧録注釈』（大東文化大学東洋研究所、二〇〇八）二六五頁。）
- 14 藏中しのぶ『延暦僧録注釈』（大東文化大学東洋研究所、二〇〇八）二四五～二四七頁。
- 15 『首楞嚴經』（『大仏頂經』）の真偽論争については、松本信道『大仏頂經』の真偽論争と南都六宗の動向（『駒沢史学』三三、一九八五）、同「得清の入唐について」（『駒沢大学文学研究紀要』六八、二〇一〇）に詳しい。前者では、三論僧玄叡（？）（八四〇）『大乘三論大義鈔』（『仏全』七五・六六頁下）や、円仁将来である明空の『勝鬘經疏義私鈔』序文（『仏全』四・三七九頁上）にみえる、『大仏頂經』の真偽の解明のために、誠明（または戒明）・得清（または徳清）等の八人の僧が唐大曆七年（七七二）に入唐した記述を基に、石井正敏「渤海の日唐間における中継的役割について」（『東方学』五一、一九七六）の八人のうちに、本章で述べられる『五仏頂法決』の著者である永忠がいた説を是認し、石井氏の渤海經由入唐説を援用した東野治之「日唐間における渤海の中継貿易」（『日本歴史』四三八、一九八四）の得清等が渤海經由で入唐したという推論を首肯している。しかし、後者において、大曆七年（七七二）の入唐には種々の疑問があることを自ら呈して再検討が行われている。松本氏の研究

から鑑みるに、大暦七年（七七二）の入唐ではなかったにしても、『大仏頂経』の真偽の解消に永忠が加わっている可能性があることは、永忠の仏頂尊理解における傍証の一つと考えられる。それに加え、『大仏頂経』と『五仏頂法』との関連性も検討する必要があるだろう。さらに、佐々木大樹『陀羅尼集経』所収の仏頂系経軌の考察（『智山学报』五三、二〇〇四）には、『首楞嚴経』の成立に関する先行研究がまとめられている。また、林敏氏は、本経に関して多くの研究を行っており、中でも「日本における『首楞嚴経』の展開」（『印度学仏教学研究』五八―二、二〇一〇）では、『首楞嚴経』の将来について、金剛寺本・興聖寺本・中尊寺本の日本古写経本は、道慈が養老二年（七一八）に将来し、天平十五年（七四三）に、普照が玄朗・玄法に託して、大正蔵の底本となった高麗版をはじめとする刊本一切経や、敦煌写本および各地で刊行された流布本・房山石経本等の現行本を将来したと考察している。

16 道場中に於いて菩薩の願を発し、出入澡浴し、六時に行道す。『大正』十九・一三三頁上。）

17 恒に六時に於いて誦呪し、壇を繞りて至心に行道せよ。一時に常に一百八遍を行ぜよ。『大正』十九・一三三頁下。）

18 三崎良周「奈良時代の密教における諸問題」宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教」一（法蔵館、一九九四）参照。

19 『大正』十九・一三六頁下。

20 仏陀波利訳『仏頂尊勝陀羅尼経』（『大正』十九・三五―一頁中）、杜行顛訳『仏頂尊勝陀羅尼経』（『大正』十九・三五―四頁中）、地婆訶羅訳『仏頂最勝陀羅尼経』（『大正』十九・三五―六頁下）等。

21 『大正』五五・一〇五七頁中。

22 『大全』七・二二八頁下。これに基づき、以後の目録類にも収録されている。

23 『大正』五五・一〇六一頁下。

24 『大正』五五・一〇六三頁中。

25 『弘全』二・五二二頁。

26 『弘全』四・一二五頁。

27 若し人、大悪病に遇いて、此の陀羅尼を聞けば、即ち永く一切の諸の病を離れることを得ん。亦た消滅を得ん。応に悪道に墮すべし。亦た除断を得ん。『大正』十九・三五―一頁下。）

28 『新訂増補国史大系』二五・七四頁。

29 堀池春峰『南都仏教史の研究』下 諸寺編（法蔵館、一九八二）参照。

30 『大正』五五・一一一―八頁中。また、江戸時代の成立になるが、『本朝台祖撰述密部書目』（享保（一七一六）以後成立）中に、「本朝高僧伝第六十七」に云く、梵釈寺永忠和尚、五仏頂法決一卷を著す。『仏全』二・二〇七頁上）とある。『五仏頂法決』に関しては、すでに三崎良周『台密の理論と実践』（創文社、一九九四）十・十四頁において指摘されている。

梵釈寺と永忠に関して、『新修大津市史1 古代』（大津市役所、一九七八）三〇〇頁、小林崇仁「施暁と梵釈寺」（『蓮花寺仏教研究所紀要』一、二〇〇八）等に詳しい。特に、永忠に関して、伝記類は非常に少ないが、『元亨釈書』（『仏全』一〇一・一九二頁上）によると、永忠は宝龜年間（七七〇）七八一（の初め）に入唐し、長安の西明寺などにて学んだ後、延暦二十四年（八〇五）に最澄らと共に帰朝し、その後梵釈寺に住持したとされる。この記録の通りであるならば、永忠は三十年近くを唐で過ごしたのであり、そこで学んだ五仏頂法の知識を帰国後に記した可能性も考えられるため注意が必要である。

31 又招提の真大和上、並びに東大寺の法進僧都及び普照法師等将来の、第二の本の十巻の円頓止観、江州梵釈寺の一切経の内の写す所の正本を案ずるに云く。……『仏全』二・二九三頁。）

- 32 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』(東洋文庫、一九三〇)、島地大等『日本仏教教学史』(明治書院、一九三三)、堀池春峰『南都仏教史の研究』下 諸寺編(法蔵館、一九八二)、苦米地誠一「奈良時代の密教経典」高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫『初期密教』(春秋社、二〇一三)等。
- 33 三崎良周『台密の研究』(溪水社、一九八八)一一四頁〜一九九頁において、仏頂系の経典については年代ごとに整理・分類し列ねられている。
- 34 興元元年八月一日、正覚寺に於いて新写入蔵して、便ち此の目録を作れり。『大正』五五・七〇〇頁下。
- 35 三崎良周「奈良時代の密教における諸問題」宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教」(法蔵館、一九九四)では、不空の訳経の将来は空海に始まると断定している。
- 36 長部和雄『唐代密教史雑考』(『密教学研究』四、一九七二)、千葉照観「不空の密教における仏頂尊の位置づけ」(『大正大学総合仏教研究所年報』九、一九八七)、頼富本宏『密教仏の研究』(法蔵館、一九九〇)等。
- 37 若し是の頂王呪を念ずる者有らば、則ち出世世間の一切の大呪を悉く成弁することを得ん。『大正』一九・二六五頁中。
- 38 若し是の一字仏頂輪王呪を念ずる者有らば、即ち出世世間の一切の大呪を悉く成弁することを得ん。『大正』十九・二二七頁中。
- 39 若し纔に此の真言を憶念すれば、一切の世間出世間の真言を悉く皆成就す。『大正』十九・一九五頁下。
- 40 若し善男子女人等、一字輪王呪を成就せんと樂う者は、応に内外をして嚴飾し清潔ならしめ、特に樺皮或いは絹紙上を以て、雄黄に斯の高頂王呪を書し、肩臂に佩帶して并に斯の呪を持すれば、即ち速やかに成就す。若し国王・王族・大臣・僚佐・清信・男女、一切の人等、斯の呪を信ずる者に、亦た書写せしめて頂・肘・臂に佩せしめよ。諸人衆の為に互いに相敬諾せられ、而も侵擾せられずして、災垢を銷滅す。当に弁才を得て、福相円満なるべし。『大正』十九・二六六頁中。
- 41 若し善男子、一字仏頂輪王呪を成就せんと欲することを樂う者は、応に内外をして嚴飾し清潔ならしめ、樺木皮を以て或いは紙素竹帛等上を以て、雄黄に斯の高頂輪王呪を書し、肩臂に佩帶して并に斯の呪を持すれば、速やかに成就を得ん。若し国王・王族・妃后・大臣・僚佐・清信・男女、一切の人民有りて、斯の呪を信ずる者に、亦た書写せしめて頂・頸・臂に戴せしめよ。諸人衆の為に互いに相敬諾せられ、而も侵擾せられずして、災垢を銷滅す。当に弁才を得て、吉相円満なるべし。『大正』十九・二二八頁下。
- 42 若し善男子・善女人有りて、輪王仏頂を修習せん者、及び余の淨信の者は、往く所の処、鬪戰・論理・諍訟のごとき、一切処に若し誦せば、去る所の処に、悉く皆勝つことを得ん。或いは余の大王の佛法を淨信する者有らん。牛黄を用いて樺皮の上或いは素上に於いて此の真言を書し、旗纛の上に繫げ。或いは頸の下に於いて則ち往かんに、他の敵若し見れば、則便ち破敗し、他の軍消融して互いに相救わず。何を以ての故に、如来の神力加持を以ての故に、或いは余の鳩波塞迦・鳩波斯迦、頭上に於いて帶持せば、彼の人吉祥清淨にして威徳あり。吉慶に威光威力あつて、他に凌突せられず、吉祥弁才を獲得せん。『大正』十九・一九六頁下〜一九七頁上。
- 43 頼富本宏『密教仏の研究』(法蔵館、一九九〇)、千葉照観「不空の密教における仏頂尊の位置づけ」(『大正大学総合仏教研究所年報』九、一九八七)。
- 44 略して一字頂輪王大秘密曼拏羅を説く。此の曼拏羅、出世世間に於いて最と為し上と為す。(『大正』十九・二四六頁中)。

45 若し輪王の像を擬し画く者有らば、先ず曾て頂輪灌頂無勝の壇に入りて、手に具足せる呪句印法の法式を授かり、最勝頂王等の壇に入り已て成就する者なり。謂く、阿闍梨より印讃を許可せられて、出世の大涅槃処を証せんことを求むべし。是くの如くの行人は、乃ち応に像を画くべし。〔大正〕一九・二六七頁上。）

46 斯の像を画く者は、先ず曾て此の頂輪王灌頂無勝法壇に入りて、阿闍梨に於いて手に具足せる呪句印法を授かり、或いは復た勝頂王壇に入り已て成就する者なり。阿闍梨より印讃を許可せられて、出世の大涅槃処を証せんことを求む。是くの如くの行人は、乃ち堪に像を画くべし。〔大正〕一九・二二九下～二三〇頁上。）

47 我今世尊仏頂輪王画像法を説かん。修行者は先ず応に曼荼羅に入りて、師従り印契儀軌を受得すべし。曾て仏頂輪王壇に入り、或いは無能勝忿怒壇、或勝仏頂壇において三昧耶を見、灌頂を受くることを得、阿闍梨の印可を得、無上涅槃の道に入りて修行せば、当に儀軌に依て、先ず行を作すべし。先ず行じ已て、然る後に像を画せよ。〔大正〕十九・一九八頁中。）

48 『大正』五一・九八九頁上。

49 『伝全』二・二九三頁。

50 十八にして道忠菩薩に事う。忠とは鑑真の神足なり。〔伝全』一〇一・一六六頁下。）

51 弘仁八年五月十五日、緑野寺の法華塔前に在り。故最澄大和上、国家を鎮め、有情を利樂する為に胎藏・金剛の両部大曼荼羅壇に入り、親く宝蓋を執る。円澄・広智の両弟子の頂に於いて、両部灌頂を伝授せる者なり。〔伝全』一二五・一六〇頁上。）

52 道忠教団と円澄等については、由木義文『東国の仏教―その原型を求めて』（山喜房仏書林、一九八三）に詳しい。

53 『伝全』五・四五二頁。

第二章 『内証仏法相承血脈譜』における仏頂尊の位置づけ

第一節 序言

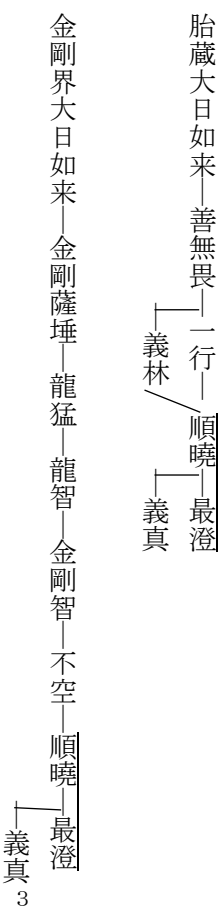
最澄は、『内証仏法相承血脈譜』などによれば、延暦二十三年（八〇四）に入唐し、台州において主たる目的である天台の法門を道邃・行滿より伝授され、さらに台州では国清寺惟象より「大仏頂大契曼荼羅の行事」を、貞元二十一年（八〇五）の帰国の際には、越州龍興寺において順曉より「三部三昧耶」を伝授されたとある。また、以上の受法に加え、草堂寺大素より「五仏頂法」・「冥道無遮齋法」を、明州檀那行者江秘より「如意輪壇」・「普集会壇」を、開元寺靈光より「軍荼利法」をそれぞれ受法したとされる。ここに、すでに仏頂尊の名をいくつか確認することができる。この血脈譜を基に、入唐中または帰国後の最澄の仏頂尊に関する理解度をさらに考察したい。

第二節 「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」

最澄撰『内証仏法相承血脈譜』は、弘仁十年（八一九）に大乘戒壇の独立の提唱に対する南都の批判に答えるため、最澄が入唐して円・密・禪・戒の四宗を相承したことを証明し、自らの仏教の正統性を明らかにした重要な系譜である¹。五通の血脈譜の内の密教に關係する系譜は、先述の「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」と「雜曼荼羅相承師師血脈譜」である。

最澄は帰国後に胎金の灌頂を空海より受法するが、「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」にはその受法については一切触れられておらず、胎金の密教は入唐時に順曉より相承していることのみが示されている²。順曉は、「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」によれば、泰山靈巖寺に住し、『大日経』・『蘇悉地経』等の訳者である善無畏（六三七―七三五）の弟子義林（七〇三―八〇五以後）に師事したとされる。なお、血脈には胎藏と金剛界との二系列があり、共にこの順曉より最澄に受法されたことがあらわされている。

「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」



第三節 「三部三昧耶の印信」

順曉より受法した密教については、これだけでなく、『内証仏法相承血脈譜』と共に朝廷へ提出した『顕戒論縁起』所収の「順曉阿闍梨付法文一首」の中にその内容が記されている。

大唐泰嶽靈巖寺順曉阿闍梨付法文一首
毘盧遮那如来三十七尊曼荼羅所

阿鑊藍咩欠 上品悉地
阿尾羅咩欠 中品悉地
阿羅波者那 下品悉地

灌頂伝授三部三昧耶阿闍梨沙門順曉、図様契印法、大唐貞元二十一年四月十八日、泰嶽靈巖寺鎮国道場大徳内供奉沙門順曉、於_レ越府峰山頂道場_一、付_レ三部三昧耶_一、牒_レ弟子最澄_一⁴。

この付法文は、最澄は唐の貞元二十一年（八〇五）四月十八日に順曉より越府峰山頂道場において灌頂を受け、「三部三昧耶の印信」を附与されたと記す。また、この『顕戒論縁起』の順曉からの受法については、『叡山大師伝』に同取意の記述が確認できる。

大唐貞元二十一年四月上旬、来_レ到船所_一、更為_レ求真言_一、向_レ於越府龍興寺_一。幸得_レ値_レ遇泰岳靈巖山寺鎮国道場大徳内供奉沙門順曉_一。曉、感_レ信心之願_一、灌頂伝受。
三部三昧耶図様契印法文道具等、目錄如_レ別_一⁵。

ここにおいても、越府龍興寺で順曉より「三部三昧耶図様契印法文道具等」を伝受されることが示されている。つまり、これら資料は、順曉より受法した具体的な内容の一は、「三部三昧耶の印信」に関するものであったことを説明している。

この三部三昧耶とは「阿鑊藍咩欠。上品悉地。阿尾羅咩欠。中品悉地。阿羅波者那。下品悉地。」であり、現代の台密でも用いられる三種悉地真言と全く同じものである。悉地 (siddhi) とは成就の意で、これを上・中・下に分けたものが三種悉地である。この印信に関しては、『天台霞標』や『余芳編年雑集』等に収録される「徳円阿闍梨印信」に確認することができる。

阿闍梨伝_レ弟子僧順曉阿闍梨_一。阿闍梨大唐貞元二十一年四月十八日、於_レ越府峰山頂道場_一、付_レ本国最澄阿闍梨_一。皆是国師供奉大徳矣。澄阿闍梨、去大同五年五月十四日、比叡山止観院妙徳道場伝_レ灯広智阿闍梨_一。皆有_レ印信_一。師_レ相付也。復澄阿遮梨、去弘仁八年三月六日、下野州大慈山寺伝_レ付弟子徳円_一。印署未_レ蒙。大師遂没去。天長七年潤十月十六日、為_レ取_レ印信_一、於_レ野州大慈山道場_一、更受_レ広智阿闍梨_一。方給_レ印信_一。今阿闍梨徳円、嗣_レ師跡_一故、伝_レ授弟子僧円珍_一。……⁶

最澄は道忠に師事した広智、そして徳円に三部三昧耶を付し、さらに徳円から円珍へ伝承されたことが記されている。特に円珍は、以下に示すように、『顕戒論縁起』に記された三真言について『決示三種悉地法』において初めて言及したことと知られる。

唐貞元末年、順曉阿闍梨付_レ囑比叡山大師_一文云。

上品悉地 阿鑊藍咩欠
中品悉地 阿尾羅咩欠
下品悉地 阿羅波遮那
伝授血脈、具如_レ彼中_一。大唐東都、水南天宮寺、門楼柱上題云。

法身真言 阿鑊藍咩欠
報身真言 阿尾羅咩欠
化身真言 阿羅波灑娜……⁷

これによると、円珍は「三部三昧耶の印信」にみえる三真言と、自身が大唐東都（洛陽）

の水南天宮寺の門樓の柱上にてみつけた法・報・応の三身真言とを並記し、その後の箇所においてそれぞれの真言の出処や最澄の付法について述べている。

そして、下って安然是『胎藏大法対受記』にて「安然近得^三尊勝破地獄法中有^二此等三種悉地真言^一。稍同^二順曉阿闍梨伝^一」⁸。と、三部三昧耶の真言の典拠が「尊勝破地獄法」であることを指摘する。これらは、最澄が受法した「三部三昧耶の印信」にみえる三真言の出拠に言及した資料とされる。

台密は、胎金両部に蘇悉地を加えた三部を特色とするが、この三種悉地は台密における蘇悉地の形成に大きく関係する。それは、善無畏訳『蘇悉地経』に、次のように記されていることに起因する。

復次、上中下成就法者、如^二別経説^一。求^二成就^一者、須解^三真言上中下法^一。此経通攝^二三部所作漫荼羅法^一。仏部真言扇底迦法、観音部真言補瑟微迦法、金剛部真言阿毘遮嚩迦法。從^レ腋至^レ頂為^レ上。從^レ臍至^レ腋為^レ中。從^レ足至^レ臍為^レ下。於^二真言中^一、當^三応分^二別三種成就^一。⁹

上・中・下の成就法は別経に説かれる等の文から、三種悉地との関連性を想起させるのである。この台密の特色とされる蘇悉地は、梵語 *Susiddhi* の音写であり、「妙成就」を意味する。特に『蘇悉地経』は、「妙成就」に関する儀則を説く經典であり、代表的密教經典である『大日経』・『金剛頂経』においてその主尊は大日如来であるのに対して、『蘇悉地経』の中尊は仏頂尊である。したがって、最澄における仏頂尊の理解を説明する上で、最澄と蘇悉地との関連性に注視せざるをえない。最澄が「三部三昧耶の印信」の蘇悉地との関連を認識していたとすれば、円仁の蘇悉地法（会昌元年（八四一）に唐の青竜寺義真より）受法以前に、最澄はすでに蘇悉地に関する要素を修学していたことになる。重ねて、蘇悉地の起源を最澄に求めるなら、「三部三昧耶の印信」と『蘇悉地経』の経題が示す悉地の語との関係が推測され、また最澄自身が「三部」と示していることから、この「三部」を台密の特色である胎金蘇の三部に結びつけて捉えることも考えられる。しかし、『蘇悉地経』には上・中・下品の三種悉地の思想はあっても、この三部三昧耶の真言についての記述は全く無い。また、最澄に近侍した弟子である円仁も、自著である『蘇悉地経疏』をはじめとする密教撰述書の中で「三部三昧耶の印信」については全く言及していない。つまり、蘇悉地法を受法してきた円仁は、「三部三昧耶の真言」と蘇悉地とが関係することを認識していないのである。

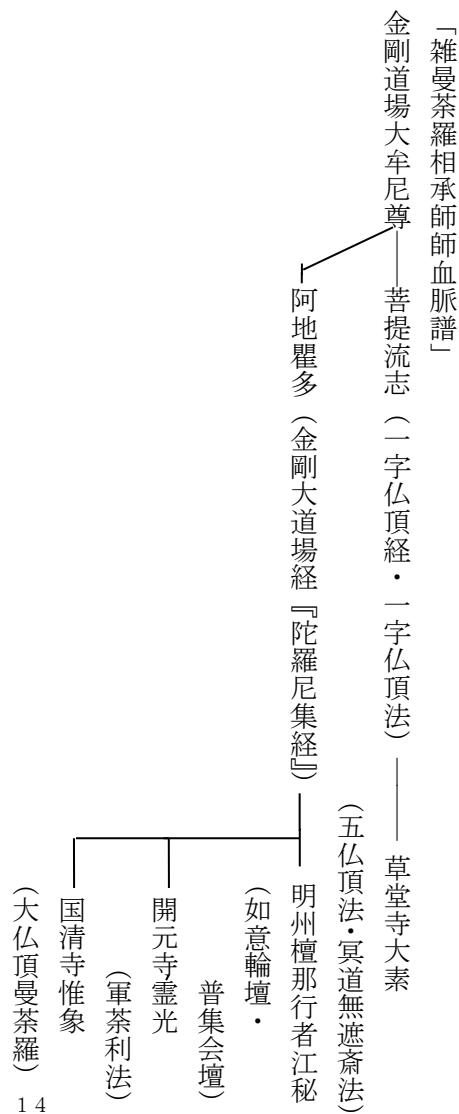
また、安然が指摘した「尊勝破地獄法」は『三種悉地破地獄儀軌』と呼ばれる儀軌に則ったものであるが¹⁰、尊勝破地獄法の成立は遅く、中・晩唐期とされ、最澄の時代にはその典拠となる書は日本に伝わっていないかかったと考えられる。したがって、時代的に合致せず、安然の指摘によって明かされた出拠を、最澄が知りえた可能性は低い¹¹。

さらに、「三部三昧耶の印信」を授けた順曉についても、その伝はほとんど残されておらず、最澄が受法した三部三昧耶の典拠等を明らかにすることはできない。

このように、最澄が順曉より授かったとされる「三部三昧耶の印信」が、蘇悉地または仏頂尊に関するものであるという積極的な証拠は見出しえない。最澄が順曉からの受法を「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」にまとめてある以上、順曉を胎金の密教を授けた師としてのみ捉えるべきであろう¹²。

第四節 「雜曼荼羅相承師師血脈譜」

「胎藏金剛兩曼荼羅相承師師血脈譜」は、順曉授法についてまとめたものであるが、それ以外をまとめたのが「雜曼荼羅相承師師血脈譜」である¹³。



「雜曼荼羅相承師師血脈譜」は、「金剛道場大牟尼尊」を始点とし、唐代の訳経僧の菩提流志（五七二―七二七）から草堂寺大素を経て最澄へと列なる系譜と、同じく唐代に活躍した阿地瞿多（？―六五二―六五三―？）から明州檀那行者江秘、開元寺靈光、国清寺惟象の三人から最澄へと続いていく系譜とに分かれている。菩提流志は前述の『一字仏頂輪王經』や『五仏頂三昧陀羅尼經』等を翻訳しており、阿地瞿多は『陀羅尼集經』の訳者である。『一字仏頂輪王經』と『陀羅尼集經』の両經典の主尊は共に仏頂尊である。また、『蘇悉地經』の場合、教説主は執金剛、対向者は軍荼利菩薩、そして中尊は仏頂尊である。これらの共通する点に注目してみると、「雜曼荼羅相承師師血脈譜」は仏頂尊に関する密教の受法をまとめたものと考えることができる。

第五節 『一字仏頂輪王經』と『陀羅尼集經』について

前述したように、最澄と仏頂尊との関わりは、入唐以前に始まり帰国後さらに深まったことはいくつかの関連事例が示す通りである。特に、最澄が著したとされる「雜曼荼羅相承師師血脈譜」は仏頂尊を主尊とする密教經典翻譯僧の名を列ね、最澄と仏頂尊との鮮明な関わりを示している。そこで次に、仏頂尊に関連する次の二つの經典、菩提流志訳『一字仏頂輪王經』⁵と阿地瞿多訳『陀羅尼集經』と最澄との関わりを示す資料を提示していきたい。

まず『越州録』には、菩提流志訳「大陀羅尼經一卷」の将来が記されているが、その『大陀羅尼經』は現存していない。だが、安然の『八家秘録』の中で、この經典は「一字仏頂法」に分類されている¹⁶。また、同じく菩提流志訳『一字仏頂輪王經』は、五仏頂について説かれている經典で、最澄が入唐前に修学したと考えられる梵釈寺永忠撰『五仏頂法決』との関連性がうかがえる。そして、五仏頂法についての入唐前の修学があったからこそ、唐にて草堂寺大素より改めて五仏頂法を学び、血脈に示されるように、大素が漢訳者である菩提流志から学んだ五仏頂法に対する理解を深めたのではないだろうか。

一方、阿地瞿多訳『陀羅尼集經』については、その序に「三月上旬赴_二慧日寺浮図院内_一、法師自作_二普集会壇_一。大乘琮等一十六人。爰及_三英公鄂公等一十二人、助_二成壇供_一」¹⁷とあるように、訳者である阿地瞿多が、慧日寺浮図院内にて法師自ら普集会壇を作り、『陀羅尼集經』を基に灌頂を修したことが記録されている。浮図（釈迦のこと）院で行われたことから、ここでなされた灌頂は、釈迦仏頂に関する修法であると考えられる。この普集会壇とは、『陀羅尼集經』十二に説かれる「灌頂普集会壇法」のことであり、その主尊は釈迦仏頂である。「雜曼荼羅相承師師血脉譜」にも、この『陀羅尼集經』の序文が附されており¹⁸、『陀羅尼集經』の普集会壇が最澄の密教の修法に重要な役割を果たしていたことが推察される。

さらに、両經典の主尊について確認する。『陀羅尼集經』は、卷一・二に仏部、三から六に菩薩部(卷三は特に般若)、七から九に金剛部、十・十一に天部、そして十二に一から十一までの集大成ともいえる「灌頂普集会壇法」が説かれた經典であり、「灌頂普集会壇法」の主尊である仏頂尊の性質については、『陀羅尼集經』一に説かれている。この『陀羅尼集經』一は、「大神力陀羅尼經釈迦仏頂三昧陀羅尼品一卷於大部卷第一」という題であり、この経題に示されるように、主尊は釈迦仏頂である。つまり、『陀羅尼集經』では釈迦如来がそのまま仏頂尊として捉えられるのである。また、『一字仏頂輪王經』では、主尊は釈迦仏頂とは明記されていないが、この經典が説かれた場所が、釈迦成道の地である「摩竭提国菩提樹下」であることから、主尊は釈迦如来所變の仏頂尊であると推察できる。

そして、この両經典の主尊である仏頂尊の性質について、まず『一字仏頂輪王經』一を挙げると以下の通りである。

是一切如来、白傘蓋仏頂輪王呪、高頂輪王呪、勝頂輪王呪、光聚頂輪王呪、同等住_二於一切如来三摩地中_一。神力、皆等無量广大。猶不能_レ及_二一字仏頂輪王最上大三摩地明呪之力_一¹⁹。

一字仏頂輪王を囲んで白傘蓋仏頂、高仏頂、勝仏頂、光聚（帝殊羅施）仏頂の五仏頂が登場し、その中心に最上なる一字仏頂輪王が配される。一方、『陀羅尼集經』一「金輪仏頂像法」では、最勝の仏頂尊について、次のように説かれている。

爾時世尊、起_二大慈悲_一、即於_二頂上肉髻相中_一、放_二五色光_一。遍照_二十方一切世界_一。於_二虚空中_一遊旋如_レ蓋。其光明中有_二菩薩_一。名_二帝殊囉施_一。結加趺坐放_二大光明_一…（中略）…我有_二心呪_一。名曰_二金輪_一。最尊為_レ極。更無_二過者_一。惟仏与_レ仏乃能知之。是呪、能滅_二帝殊囉施並呪等法_一²⁰。

これによれば、世尊が、頂上の肉髻から五色の光を放って、（先の五仏頂の一である）帝殊羅施菩薩を現ずる。さらに、その後に頂上の肉髻から顕現した帝殊羅施をも滅する最勝の呪である金輪呪が説かれている。このように、『一字仏頂輪王經』は釈迦如来所變の一字仏頂輪王を、『陀羅尼集經』は金輪仏頂をそれぞれ最勝とするが、いずれにしてもこの最勝なる仏頂尊が釈迦如来由来であるという点では異ならないのである。

次に、仏頂尊の呪について考えてみたい。まず、『一字仏頂輪王經』一には、一字仏頂輪王の呪は「娜莫娑曼鞞一勃駄南_二唵_三咤_三勃琳_二合_二咤_三」²¹と示されている。この「勃琳（ボロン）」(brūm)とは、経題に出るように、最勝の金輪仏頂を「一字」で表した真言・種子のことである。一方、『陀羅尼集經』一についてみると、「帝殊囉施金輪印呪第十三」に「唵_二浮嚩那_一鳴_二咤_三莎訶_四」²²とあり、また「帝殊囉施金輪仏頂心法印呪第十四」には「唵

鉢^一毘藍毘藍^二鳴鉢^三挿^三莎訶^四2³とある。これらの呪は、呪の題から分かるように、共に金輪に関係しており、呪においても最勝なものとして捉えることができる。また、先の第十三呪の中の「浮嚕那」（ブルナ）、及び第十四呪の中の「毘藍」（ピラン）は、『一字仏頂輪王経』の「ボロン」に相当すると考えられている²⁴。つまり、『陀羅尼集経』の金輪に係する呪は、『一字仏頂輪王経』の金輪仏頂の呪との類似性が見出されるのである。さらに、『陀羅尼集経』の「一字仏頂法印呪第三十二」に「苾唎」とあるが²⁵、呪の題が示すように「一字仏頂法」という仏頂尊を一字で表した呪が「苾唎」である。この呪の音は、「ピリヨウ」とあり「ボロン」と読むには少し無理があるが、先の「浮嚕那」・「毘藍」と同様に「ボロン」の呪の変形の一としてみることもできよう。

さらに、『一字仏頂輪王経』^一には、呪の効能について次のように説かれている。

爾時如来、説^二是呪^一時、殞伽沙等三千大千世界、一時六返震動、如^三瞻部洲旋嵐猛風^一吹^二諸叢林^一、草木動等、是中一切蘇弥山王亦皆大動。一切河海尽皆涌沸、以^二仏神力^一一切魔宮大火遍起。是中諸魔、為^レ火所^レ逼。悉皆惶怖称^レ仏帰依、一切地獄苦、皆消息。……²⁶

釈迦如来の呪の力として、この呪を説くと、三千世界を大いに動揺させ天変地異が起こる。さらに、仏は神力によって魔宮に火を起したところ、あらゆる魔は悉く仏に帰依し、あらゆる地獄の苦は消え去ったと説かれている。一方、『陀羅尼集経』では、前記した「金輪仏頂像法」の一節に「此陀羅尼、悉能破^三壊一切諸法^一2⁷。」とあり、あらゆるものを破壊する性質を具しており、さらに金輪印呪の効能について「若能受^二持此印呪^一者、悉能滅^二除一切罪障^一。誦^レ呪滿^三三十万遍^一、所^レ往之處皆悉歡喜、一切賊難皆悉退散²⁸。」と、あらゆる罪障を滅し、賊難は悉く退散するとあり、『陀羅尼集経』でも金輪仏頂の陀羅尼は、一切の罪障を滅する最極の呪として記されている。

「雜曼荼羅相承師師血脈譜」は、「金剛道場大牟尼尊」から菩提流志・阿地瞿多に二分されて密教が伝えられている。それにもかかわらず、菩提流志の系譜と阿地瞿多の二系譜が、「雜曼荼羅相承師師血脈譜」の中で一括りにされるのである。その理由は、以上述べてきたように、菩提流志訳『一字仏頂輪王経』と阿地瞿多訳『陀羅尼集経』との間には、仏頂尊を主尊とする等の共通性があり、これら二經典を一つの血脈譜の中にまとめたと推察できよう。換言すれば、仏頂尊を主尊とする二經典の系列が、最澄によって統合的に受法されていることを「雜曼荼羅相承師師血脈譜」は主張するものと考えられるのである。

第六節 『一字仏頂輪王経』・『陀羅尼集経』と『蘇悉地経』との関連性

以上のように、「雜曼荼羅相承師師血脈譜」に関連する『一字仏頂輪王経』と『陀羅尼集経』においては、各々主尊が釈迦仏頂、釈迦如来所変であり、中心として捉えるべき各々の主尊の性格の類似性、そしてその呪「ボロン」の類似性、呪の効能に関する共通性をこれら二經典から見出すことができた。それでは、この血脈譜は蘇悉地の根本經典である『蘇悉地経』に説かれる主尊と関連があるのだろうか。『蘇悉地経』では、その主尊こそ仏頂尊だが、『一字仏頂輪王経』と『陀羅尼集経』の主尊のように、釈迦如来が変じた仏頂尊であることは示されていない。

しかし、三崎博士は『一字仏頂輪王経』と『陀羅尼集経』、そして『蘇悉地経』を同じ

く仏頂系の経典として一括りにまとめ、しかも前の二経典が『蘇悉地経』より先立つて訳されたものと推定されている²⁹。この見解に従えば、最澄の「雑曼荼羅相承師血脉譜」に関連する前二経典の成立を経て、円仁の学んだ『蘇悉地経』が訳されたのであり、前二経典の中に後の蘇悉地の萌芽となる要素、特に仏頂尊を主とする点において、これらの三経典の関連性を見出すことができるのである。

そこで、『一字仏頂輪王経』と『蘇悉地経』の関連性について調べてみると、まず『蘇悉地経』中「補欠少法品」第十五に、以下のように述べている。

其漫荼羅、方四角、安^二四門^一如^三前所^レ説、分^三布界道^一。…(中略)…右辺置^レ輪王
仏頂^一、左辺置^二白傘蓋仏頂^一、右辺置^二帝殊囉詩^一、左辺置^二勝仏頂^一、右辺置^二超越仏
頂^一。…(中略)…中央置^レ輪、於^レ上置^下其所^二成就^一物^上、或置^二本尊^一³⁰。

曼荼羅の右辺と左辺に五仏頂をそれぞれ配し、中央に輪を置き、その輪上に成就される物、或いは本尊を置くところ。中央に置く輪とは、仏頂尊と関係の深い金輪と考えられる。つまり、最勝である金輪が中央に配置されるのであり、『蘇悉地経』中のこの一文の内容は)『一字仏頂輪王経』一における一字仏頂輪王を最上なものとする点とよく符合する。

次に、『陀羅尼集経』と『蘇悉地経』についての関連を摘出すると、『陀羅尼集経』十二「仏説諸仏大陀羅尼都会道場印品」の普集会壇法の内、曼荼羅の中尊を述べる七日作壇法を述べる箇所には、「以^二帝殊囉施^一之為^二座主^一、当^二中心^一敷^二大蓮花座^一。座主即是釈迦如来頂上化仏。号^二仏頂仏^一³¹。」とあり、普集会壇の中心に帝殊囉施を座主として配するが、その帝殊囉施は釈迦如来の化仏であり、仏頂仏と号されている。帝殊囉施とは、『陀羅尼集経』一「帝殊囉施金輪印呪第十三」の題にあるように金輪として扱われる。つまり、『蘇悉地経』の文にある金輪の記述と同様に、仏頂尊が最勝の金輪として扱われる点で、『蘇悉地経』は『陀羅尼集経』ともその共通性を見出せるのである。

また、『陀羅尼集経』十二の普集会壇法の帝殊囉施の配置を示す下文には、「発遣^一・護摩^一・敷粉」といった作法が説かれるが、「発遣」を説く箇所に「然後、発^二遣壇内諸仏・菩薩・金剛^一³²。」とあり、仏・菩薩・金剛の三部が登場する。これと同様に『蘇悉地経』でも、仏部・蓮華部(観音)・金剛部の三部を分類して、三部それぞれの成就を祈る法が説かれ³³、『陀羅尼集経』の三部は、蘇悉地にみえる三部「仏・蓮・金」と同等なものと考えてよいであろう。

さらに、前述の『陀羅尼集経』十二の普集会壇法の後に示される「普集会壇下方莊嚴十六肘図」には、「中央一院、縦広二肘、此院正中作^二蓮華座^一、座上作^レ輪。穀・輻・輦形皆悉具足³⁴。」と、(道場の主が座する)中央の一院の中心に蓮華座を作り、その上に輪を作ることができることを説いており、前に引用した『蘇悉地経』の「中央に輪を置く」部分との関連性があるが、うかがえる。

第七節 結言

以上、本章では、『内証仏法相承血脉譜』中「雑曼荼羅相承血脉譜」に関連する『一字仏頂輪王経』・『陀羅尼集経』の二経典と『蘇悉地経』は、中尊がいずれも仏頂尊であり、その中尊の捉え方の説明箇所に共通性が認められることを述べた。このことを重視すれば、最澄の仏頂尊を通じての密教の理解が、円仁における蘇悉地伝承の素地となったというこ

とは十分に考えうることではないだろうか。円仁は、入唐前に最澄から密教を学んだとされ、おそらく最澄の仏頂尊に対する考えが脳裏にあったであろう。このことが、円仁が唐で蘇悉地を受法し、帰国後に仏頂尊を主とする『蘇悉地経』に基づき、蘇悉地法を大成させていく背景になったのではないだろうか。従来、蘇悉地は円仁にはじまるとされるが、最澄に端を発する可能性も考慮したい³⁵。しかしながら、この血脈譜は、少なくとも仏頂尊に關係する血脈譜であることは理解できるが、最澄自身の蘇悉地に対する理解とは直接的には繋がらない点は留意すべきである。入唐以前から仏頂尊に關する知識を有していた最澄は、入唐中に仏頂尊に対する造詣をさらに深化させる。そして、帰国後仏頂尊を主とする灌頂を執行し、さらに自身が受法した仏頂尊を主とする密教を、胎金とは別箇のものとして系統化し、「雜曼荼羅相承師師血脈譜」としてまとめたのではないだろうか。つまり、最澄は、胎金については空海に受法しなければならなかったにしても、仏頂尊を中心とする「雜曼荼羅相承師師血脈譜」に集約される密教は独自のものと自覚していたとも考えられないだろうか。

《註》

- 1 この点について少し触れておく。天台の教観とは本来、隋の天台大師智顛（五三八―五九七）によって体系づけられたものであり、智顛に至る天台の法門の相承については、金口相承と今師相承という二種の相承が天台三大部の一である『摩訶止観』序（『大正』四六・一頁中）に示されている。金口相承とは、釈迦如来が法を釈迦の弟子の摩訶迦葉に伝え、以下師資相承して第二十三祖の師子比丘に至るまでの系統を明らかにしたもので、第十三祖の竜樹が天台の高祖師であることを明示し、その源流は釈迦如来より始まることを示すのである。今師相承も『摩訶止観』序に説かれるもので、一心三觀の法門はどのようにして天台大師に伝えられたのかということを示すものである。今師である智顛より遡り、南岳慧思、北斉慧文を挙げ、さらに慧文は滅後相承として金口相承で示された竜樹につながるものとされる。（『新編 天台宗の教義（一）』（天台宗総合研究センター、二〇一三）一頁等参照。）金口相承は途中で途絶えており、智顛への流れは無く、今師相承によって「釈迦如来―竜樹―智顛」の系譜を築くことにより、その流れが補充されるのである。このように、天台宗では古来よりその血脈は内証（自らの心の中の悟り）とするのである。そのため、最澄は『内証仏法相承血脈譜』中にて、金口相承と今師相承とを結び『法華経』の訳者である鳩摩羅什（三四四―四一三）、一説に三五〇―四〇九）を血脈に加えた経卷相承（訳主相承）や、「常寂光土第一義諦靈山浄土久遠実成多宝塔中大牟尼尊」から直接に靈鷲山で説法を聞いた者である南岳慧思（五一五―五七七）と智顛とに付法相承があったとされる直授相承をたてるのである。
- 2 「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」については、金剛界の付法にては弘法大師空海撰『略付法伝』にみえる「不空―惠果―空海」の箇所が「不空―順曉―最澄」に代わっているだけであり、「不空―順曉」の箇所に疑いがあること、また「一行―順曉」の系譜は一行（六八三―七二七）と順曉との關係が、最澄の入唐期間（八〇四―八〇五）と両者の生没年とを併せて考えると事実性が認められないこと等、三崎博士がすでに指摘している（『台密の研究』（創文社、一九八八）一九七頁）。
- 3 『伝全』一・二二七―二四七頁。
- 4 大唐泰嶽靈巖寺順曉阿闍梨付法の文一首。

毘盧遮那如来三十七尊曼荼羅所

阿鑊藍呬欠 上品悉地

阿尾羅吽欠 中品悉地
阿羅波者那 下品悉地

灌頂伝授三部三昧耶阿闍梨沙門順曉、凶様契印の法、大唐貞元二十一年四月十八日、泰嶽靈巖寺鎮国道場大徳内供奉沙門順曉、越府の峰山頂道場に於いて、三部三昧耶を付し、弟子最澄に牒す。〔『伝全』一・二七九頁。〕

5 大唐の貞元二十一年四月上旬、船所に来到し、更に真言を求めんが為に、越府の龍興寺に向むく。幸に泰岳靈巖寺鎮国道場大徳内供奉沙門順曉に値遇することを得たり。曉、信心の願を感じて、灌頂伝受せり。三部三昧耶凶様契印法文道具等、目錄別の如し。〔『伝全』五付・一九頁。〕

6 阿闍梨弟子僧順曉阿闍梨に伝う。阿闍梨大唐貞元二十一四月十八日、越府の峰の山頂の道場に於いて、本国の最澄阿闍梨に付す。皆是れ国師供奉大徳なり。澄阿闍梨、去る大同五年五月十四日、比叡山止観院妙徳道場に於て広智阿闍梨に伝灯す。皆印信有り。師師相付なり。復た澄阿闍梨、去る弘仁八年三月六日、下野州大慈山寺にて弟子徳円に伝付す。印署未だ蒙らず。大師遂に没去せり。天長七年潤十月十六日、印信を取る為に、野州大慈山道場に於いて、更に広智阿闍梨より受く。方に印信を給わん。今阿闍梨徳円、師跡を嗣ぐが故に、弟子僧円珍に伝授す。……〔『智全』四・一二九四頁上。〕

7 唐の貞元末年、順曉阿闍梨の比叡山大師に付嘱せる文に云く。
上品悉地 阿鏤藍哈欠
中品悉地 阿尾羅吽欠
下品悉地 阿羅波遮那
伝授血脈、具さに彼の中の如し。大唐東都、水南天宮寺、門樓柱上の題に云く。
法身真言 阿鏤藍哈欠
報身真言 阿尾羅吽欠
化身真言 阿羅波灑娜……〔『智全』三・九八五頁上。〕

8 安然近く尊勝破地獄法中に此れ等の三種悉地真言有ることを得。稍順曉阿闍梨の伝に同じき。〔『大正』七五・九八頁中。〕

9 復た次に、上中下の成就の法とは、別の経に説くが如し。成就せんと求る者、須らく真言の上中下の法を解すべし。此の経に通じて三部所作の漫荼羅の法を攝す。仏部の真言は扇底迦法、観音部の真言は補瑟微迦法、金剛部の真言は阿毘遮嚕迦法なり。腋従り頂に至るを上と為す。臍従り腋に至るを中と為す。足従り臍に至るを下と為す。真言中に於いて、当心に三種の成就を分別すべし。〔『大正』八・六六三頁下。〕

10 『大正』五五・一一一七頁上。「尊勝破地獄法」の主尊は仏頂尊であり、安然は、『八家秘録』の中でこれを蘇悉地部の一環として著録している。

11 「尊勝破地獄法」の成立については、長部和雄「漢訳三種悉地法の系譜」〔『密教文化』七七―七八、一九六六〕、三崎良周『台密の理論と実践』（創文社、一九九四）八六頁を参照。

12 以上「三部三昧耶の印信」並びに三種悉地に関しては、木内堯央『天台密教の形成』「最澄と密教」（溪水社、一九八四）、三崎良周『台密の研究』「蘇悉地の源流と展開」（創文社、一九八八）、同『台密の理論と実践』「台密の蘇悉地をめぐる諸問題」（創文社、一九九四）、水上文義『台密思想形成の研究』「台密の教相と事相」（春秋社、二〇〇八）、大久保良峻『天台学探尋』「天台密教の伝灯」（法蔵館、二〇一四）等を参照。

13 「雜曼荼羅相承師師血脈譜」に関する詳細な研究は、木内堯央『天台密教の形成』「最澄と密教」（溪水社、一九八四）等を参照。

14 『伝全』一・二四四〜二四七頁。

15 菩提流志訳は、『五仏頂三昧陀羅尼經』という『一字仏頂輪王經』の同本異訳があるが、『内証仏法相承血脉譜』に付されている「謹案、一字仏頂經第二云、薄伽梵、在_三摩竭提国菩提樹下金剛道場」。『伝全』一・二四四〜二四五頁）の記述が、『一字仏頂輪王經』、『大正』十九・二二四頁上）の文であることから、本論では『一字仏頂輪王經』を用いることとする。

16 『大正』五五・一一一八頁下。

17 三月上旬に慧日寺浮図院内に赴き、法師自ら普集会壇を作る。大乘琮等一十六人、爰に及_三英公鄂公等一十二人、壇供を助成するに及ぶ。『大正』十八・七八五頁上。）

18 『伝全』一・二四五頁。

19 是の一切の如来は、白傘蓋仏頂輪王呪、高頂輪王呪、勝頂輪王呪、光聚頂輪王呪と、同等にして一切如来三摩地の中に住す。神力、皆等しく無量広大なり。猶お一字仏頂輪王最上にして大三摩地の明呪の力に及ぶこと能はず。『大正』十九・二二六頁中。）

20 爾の時に世尊、大慈悲を起して、即ち頂上の肉髻相の中に於いて、五色の光を放つ。遍く十方の一切の世界を照らしたまう。虚空の中に於いて遊旋すること蓋の如し。其の光明の中に菩薩有り。帝殊囉施と名づく。結加趺坐して大光明を放つ。：（中略）：我れに心呪有り。名づけて金輪と曰う。最尊にして極たり。更に過ぎたる者なし。惟だ仏と仏とのみ乃ち能く之を知りたまえり。是の呪、能く帝殊囉施並びに呪等の法を滅す。『大正』十八・七九〇頁中〜下。）

21 『大正』十九・二二六頁下。

22 『大正』十八・七九〇頁上。

23 『大正』十八・七九〇頁上。

24 千葉照観「仏頂尊と仏眼に関する問題―その成立を中心として―」（『印度学仏教学研究』三七―一、一九八八）参照。ところで、ボロンの呪自体は、菩提流志と同時代に洛陽で活動した宝思惟によって神龍元年（七〇五）に訳された『大陀羅尼末法中一字心呪經』中にも登場する。この經典は『密教大辞典』によると、釈迦金輪を説き、さらに前述した梵刹寺に蔵していたものである、としている。もし最澄がみていたならば、ボロンに関しての理解があつたかもしれない。しかし、このボロンについて言及するのは円珍述『菩提場所説一字頂輪王經略義釈』からであり、最澄がこの呪をどの程度理解していたかは不明である。

25 『大正』十八・七九三頁上。この呪については、千葉照観「仏頂尊と仏眼に関する問題―その成立を中心として―」（『印度学仏教学研究』三七―一、一九八八）において、「高麗蔵に「已上元本竟已下二印呪後加_レ之」（『大正』十八・一九二頁下）の細注がある」と指摘しており、後に書き加えられたものである可能性があるため注意が必要である。

26 爾の時如来、是の呪を説く時、苑伽沙等の三千大千世界、一時に六返震動し、瞻部洲の旋嵐猛風の如く諸の叢林に吹き、草木動く等、是の中の一切の蘇弥山王も亦た皆大いに動く。一切の河海尽く皆涌沸し、仏の神力を以て一切の魔宮に大火遍く起る。是の中の諸の魔、火の為に逼せらる。悉く皆惶怖し仏を称え帰依するに、一切の地獄の苦、皆消息す。……『大正』十九・二二六頁下〜二二七頁上。）

27 此の陀羅尼は、悉く能く一切諸法を破壊す。『大正』十八・七九〇頁下。）

28 若し能く此の印呪を受持せば、悉く能く一切の罪障を滅除す。呪を誦すること三十万遍に満つれば、往する所の処皆悉く歡喜し、一切の賊難皆悉く退散す。『大正』十八・七九〇頁上。）

29 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）一一四頁。また、『一字仏頂輪王經』と『蘇悉地經』の比較については、長部和雄『唐代密教史雑考』（溪水社、一九九〇）に詳しい。

30 其の漫荼羅、方にして四角、四門に安ずること前に説く所の如くして、界道を分布せよ。：(中略)
：右辺に輪王仏頂を置き、左辺に白傘蓋仏頂を置き、右辺に帝殊囉詩を置き、左辺に勝仏頂を置き、
右辺に超越仏頂を置き。：(中略)：中央に輪を置き、上に其の成就せらる物を置き、或いは本尊を
置き。(『大正』十八・六七五頁上。)

31 帝殊囉施を以て之が座主と為し、中心に当たりて大蓮華座を敷く。座主は即ち是れ釈迦如来頂上の化
仏なり。仏頂仏と号す。(『大正』十八・八八八頁中。)

32 然る後に、壇内の諸仏・菩薩・金剛を發遣す。(『大正』十八・八八八頁上。)

33 『蘇悉地經』において最も中枢とされる下巻「灌頂壇品」第三十三に、蘇悉地曼荼羅の図位が示され
ている。(『大正』十八・六九〇頁中。)

34 中央の一院は、縦広二肘、此の院の正中に蓮華座を作り、座上に輪を作れ。轂・輻・輞の形皆悉く具
足す。(『大正』十八・八九四頁上。)

35 三崎博士は、台密の蘇悉地とは、円仁が最澄以来の山家における仏頂信仰を蘇悉地の中に組織的に再
構築したもので、それが台密の中心基調となったものであると予測している。さらに、三崎博士は、
円仁が蘇悉地灌頂における曼荼羅の中尊を一字仏頂輪王として心意にもつていたのでないかと推測して
測し、その理由の一つに最澄の五仏頂法修法と、釈迦仏頂に関連する「雜曼荼羅相承師血脈譜」を
例証として、「雜曼荼羅相承師血脈譜」が円仁の蘇悉地の相承を示唆するものではないかと推測して
いる(三崎良周「円仁の密教における一二の問題―蘇悉地の形成と一字仏頂輪王―」(福井康順編『慈
覚大師研究』天台学会、一九六四)参照)。三崎博士も推測で止まっているため、今後円仁の蘇悉地理
解と仏頂尊理解については、より詳細に検討する必要があるだろう。

第三章 最澄帰国後における仏頂尊との関係―『灌頂七日行事鈔』を中心に―

第一節 序言

延暦二十四年（八〇五）に高雄山寺で行われたいわゆる高雄灌頂に関し、『叡山大師伝』に次のように記されている。

又九月上旬、臣弘世、奉_レ勅、令_三最澄闡梨為_レ朕、重修_二灌頂秘法_一。即依_三勅旨_一、於_二城西郊_一、挾_二求好地_一、建_二創壇場_一。又召_二画工十余人_一。敬_三画_二五仏頂浄土_一幅・大曼荼羅一幅¹。

最澄が重ねて修したとされるここでの灌頂において、「五仏頂浄土一幅」を画くように指示する一文がある。仏頂尊に関する何らかの修法を行ったことが想起される。第一章で、『伝述一心戒文』²における円澄が修したと思われる五仏頂法では、図像について言及されておらず、鑑真将来の「画五頂像一鋪³」が用いられた可能性を指摘したが、城西郊におけるこの灌頂では、新たに「大曼荼羅一幅」と共に「五仏頂浄土一幅」を图画している。この灌頂は、最澄が「雜曼荼羅相承師師血脈譜」にみえる草堂寺大素による五仏頂法について修学する際に、菩提流志訳『一字仏頂輪王経』に説かれる作法を獲得したことに影響を受けたとも考えられる⁴。

一方、この図像と共に画かれた「大曼荼羅一幅」に関しては、高雄灌頂の記述をみると、「勅召_二画工上首等二十余人_一、敬_三画_二毘盧遮那仏像一幅・大曼荼羅一幅・宝蓋一幅_一、又縫_二造仏・菩薩・神王像・幡五十余旒_一」⁵とあり、「毘盧遮那仏像一幅」等と共に城西郊における灌頂よりも前に图画されている。この灌頂は「毘盧遮那仏像一幅」すなわち大日如来とあることから「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」にみえる順曉所伝の作法を用いたことが推察できる。それでは、高雄灌頂において行われた灌頂とは、具体的にはどのようなものだったのだろうか。その作法内容について、最澄は著わしているのだろうか。

最澄における密教に関連する著作は、『伝全』等にくつか収められている。しかし、その大部分を「偽」「偽か」と判定をしている研究も少なくない⁶。他方、それに対して、『伝全』等には、「真」「真か」とされている書も幾例がある。その中に、『灌頂七日行事鈔』がある。

『灌頂七日行事鈔』は、『伝全』四に収められている。塩入亮忠「現存祖書の分類」⁷・同氏における『仏書解説大辞典』の解題⁸、浅井円道『上古日本天台本門思想史』⁹や渡邊守順『伝教大師著作解説』¹⁰では、「真」と判定されている。さらに、『仏書解説大辞典』で塩入亮忠氏は、『灌頂七日行事鈔』を唐永貞元（八〇五）四月の著作とまで表示しており、高雄灌頂に関連する書であることを述べている。また、『灌頂七日行事鈔』は、そこにおいて説かれる作法の主尊が、（釈迦如来頂上の化仏である）仏頂尊であることを記しており、城西郊における灌頂との関連がうかがわれる。もし、本書が本当に高雄灌頂において用いられた作法であれば、最澄と仏頂尊との関係を考証する有力な資料の一ともなりえる。そして、順曉所伝の密教との関連性も認められるだろう。しかし、何れの先学の著書にも真偽を検証するに至るまでの論述はなされておらず、そのまま「真」とするには問題があると考えられる。

また、『灌頂七日行事鈔』に関する研究として、菊岡義衷「山家大師と密教」¹¹・清水谷恭順「伝教大師の密教の相承に関連して」¹²・酒井敬淳「伝教大師と台密」¹³等も挙げられるが、これらにおいては『灌頂七日行事鈔』に関する研究は限定的であり、真偽の解消には供しえない。

そこで、本章では、『灌頂七日行事鈔』がどのような書であるのか、その由縁・性格を調べ、整理を行い、最澄の撰著か否かを検証する。それと共に帰国後の最澄と仏頂尊との関係について調査していきたい。

第二節 『灌頂七日行事鈔』の奥書について

『伝全』四に収められている『灌頂七日行事鈔』全三巻は、原本「菊岡氏所蔵写本全三巻書者及年時不詳」として、イ本「比叡山無動寺所蔵写本全三巻書写年時不詳」・ロ本「伊勢西来寺所蔵写本一卷但上巻第三日以下及中下両巻欠」と、再刊対校本「青蓮院所蔵良祐師親写本全三巻」の三本を用いている¹⁴。本書の題下には、イ・ロ本によって加えられた「叡山集」という語が記されている。「叡山集」については、後に触れるが、塩入亮忠氏は「最澄集」として表記しているのである¹⁵。

『灌頂七日行事鈔』について、現存本の『灌頂七日行事鈔』の編者は、その奥書に菓雋『天台宗遮那経業破邪弁正記』、『破邪弁正記』・可透『顕戒論賛宗鈔』、『賛宗鈔』・杲宝『大日経疏演奥鈔』、『演奥鈔』の三師の説を挙げ、本書の由縁・性格を以下のように示している。

編者云。破邪弁正記比叡山菓雋師撰上巻云。祖師、既製二両部灌頂行事等一。即是順曉闍梨次第伝授之作法也。又同書云。祖師所製胎藏灌頂行事鈔、依二大日経及一行記・蘇悉地并集経等一明二其行儀一。金界行事鈔、依二略出経及三摩地法等一明二其作法一。又顕戒論賛宗鈔比叡山可透師撰、引二破邪弁正記説一云。雋老曰。胎金灌頂七日行事鈔各三巻、即大師記二順曉闍梨伝法次第一也。胎事鈔、依二大日経及一行記・蘇悉地并集経等一。金事鈔、依二略出経及三摩地法一云。大日経疏演奥鈔東寺杲宝師撰、就二七日作壇法一則二挙三異説一。而取二大師行事鈔之説一其結文云。已上準二伝教大師七日行事鈔上・安和尚持誦不同第一也¹⁶。

まず、菓雋の『破邪弁正記』を引用し、祖師（最澄）既製の『両部灌頂行事鈔』は、最澄が順曉から次第を伝授された作法書であり、『胎藏灌頂行事鈔』は『大日経』・『一行記』・『蘇悉地経』・『陀羅尼集経』等によってその行儀を明かし、『金界行事鈔』、『金剛界灌頂行事鈔』は『金剛頂瑜伽中略出念誦経』、『略出念誦経』・『金剛頂瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』等によってその作法を明かすと記す。『破邪弁正記』は、天仁二年（一一〇九）に勝陽房菓雋が、東密の仁和寺恵什（一〇六〇—一一四四）による天台の相承脈譜の不審に対して、天台の相承脈の正当性を主張した書である¹⁷。この奥書によれば、『灌頂七日行事鈔』は『破邪弁正記』にみえる『両部灌頂行事』中の一つ『胎藏灌頂行事鈔』として捉えられている。したがって、『灌頂七日行事鈔』は胎藏灌頂に関する作法書であるといえよう。

次に、比叡山無動寺可透（一六八二—一七三四）は、『顕戒論』の註書である『賛宗鈔』の中で、『破邪弁正記』の説を引用し、菓雋と同様に、『灌頂七日行事鈔』は最澄が順曉の

伝法次第を記したものであるとする¹⁸。『破邪弁正記』での『胎藏灌頂行事』という呼称が、『賛宗鈔』では『胎金灌頂七日行事鈔』と「七日」が入り呼称が変わっていることに一応注意を要するが、『灌頂七日行事鈔』を構成する経軌が（奥書にもみられるように）、『破邪弁正記』と同じ記述であるため、伝承の課程で呼称が変化していったと推察される。また、『賛宗鈔』では、『伝教大師全集』所収の『灌頂七日行事鈔』と同様にこの『胎金灌頂七日行事鈔』が三巻本であることが示されている。

最後に、東寺杲宝（二三〇六—一三六二）の『演奥鈔』を引用する。『演奥鈔』では、「七日作壇法」に基づく前二説とは異なる説を挙げている。すなわち、一伝として『七日行事鈔』上と安然の『大日経供養持誦不同』一（『持誦不同』）とを並べ、その作法を説明する。『持誦不同』一では七日行法について『大日経』「具縁品」等で説かれる、いわゆる「七日作壇法」に関係する作法を記し¹⁹、『七日行事鈔』の「七日」はこの「七日作壇法」に由来すると示唆する。いずれにしても、「七日作壇法」を介することによって、『灌頂七日行事鈔』の作法と『持誦不同』に記される七日行法との深い結びつきが解る。また、『演奥鈔』に「七日行事鈔上」すなわち「上」の記述があることから、この書も現存の『灌頂七日行事鈔』と同様に、三巻本であると推察できる。しかし、『演奥鈔』では「行事鈔²⁰」「七日行事鈔²¹」とあるだけで、「胎藏」を冠しておらず、具名が明示されていない。これに対して、『演奥鈔』十二では「伝教大師金剛界灌頂行事鈔²²」とあり、『破邪弁正記』や『賛宗鈔』にもみえる『金界行事鈔』、『金剛界（七日）行事鈔』との関連を表している。すなわち、杲宝は『破邪弁正記』に記される『両部灌頂行事鈔』の中の『金界行事鈔』は金剛界と捉えていたことを明示しているが、（葉雋らと違って）『胎藏灌頂行事』については「胎藏」と捉えるべき作法であるのかどうかを、その題に明記していない。『演奥鈔』における両部の行事鈔の扱いについて、これ以上本論で触れることはないが、いずれにせよ、『破邪弁正記』・『賛宗鈔』・『演奥鈔』の三書全てにおいて『灌頂七日行事鈔』に関連するであろう書が、いずれも最澄撰であることを示している。

ここで、『灌頂七日行事鈔』と共に示される『伝教大師全集』所収の『金剛界灌頂行事鈔』全三巻についても触れておく。当該書の内容については、『破邪弁正記』の記述等から看取できる。この書は、原本「菊岡氏所藏写本中下二卷（上巻欠）書写年時不詳」として、イ本「比叡山無動寺所藏享保丙午年万谷師写本中下二卷（上巻欠）」・ロ本「伊勢西来寺所藏文化年中宗淵師写本中下二卷」と、再刊対校本「青蓮院藏良祐師親写本上巻欠中下二卷」の三巻が用いられている。『灌頂七日行事鈔』と全二において出拠が同じであることから、両書を合わせて両部の灌頂作法として扱われていたと考えられる。また『金剛界灌頂行事鈔』上巻は古来欠損しているが、下巻冒頭に「第六日行事授楊枝²³」とあることから、上巻は第一日から第五日前半の行事を叙述したものであることが推測できる。

次に、題下の著者名として示される「叡山集」について着目する。『金剛界灌頂行事鈔』イ本の奥書に、以下の記述がみられる。

右、開山大師所撰 両部灌頂行事鈔各三卷、金剛界欠二上巻一。葉雋所述破邪弁正記載之。日。從順曉和尚一所伝也。時正徳甲午歳、以洛東青蓮院御経庫之本一写之。

原本亡冊不完。写誤頗多。今、檢二所引経疏一校讐訂正。伏願、酬二祖恩之涓埃一。時、享保丙午年臘月上浣日、遮那業末裔万谷謹識²⁴。

前半に、この書の由来について『灌頂七日行事鈔』と同様に『破邪弁正記』の説を挙げ

て説明している。後半にはイ本の由来が記されていて、そこには万谷という者が正徳四年（二七一四）より享保十一年（二七二六）に亘って青蓮院にある本を写すも、欠損があり不完全な状態であったので、引用される經典を検め、訂正したとある。万谷とは、『伝教大師全集』所収の『胎藏縁起』の奥書等によると、西塔無量院に住した遮那業僧と記されている人物である²⁵。

『胎藏縁起』も、『灌頂七日行事鈔』と同様に題下に、『胎藏縁起』の奥書に「叡山集」について次のように記されている。

右胎藏縁起一卷、余偶獲^二之於古藏中^一。然題下、不^レ著^二撰人之名^一、只曰^二叡山集^一焉。或曰。凡稱^二叡山集^一者、乃是開山大師之所^レ撰也。余竊疑^レ之。爾後、藏中又獲^二山王院藏經目錄者^一蓋証大師目録也。其中、録^二開山撰述^一、並避^二其諱^一曰^二叡山集^一。且載^二乎頭戒縁起二卷・胎藏縁起一卷^一。於^レ是始信、斯書實為^二開山大師所製^一也。……

時正徳第五龍集乙未孟冬下浣、沙門万谷、謹識^二台山浄土院西廂^一²⁶。

これは、正徳五年（二七一五）に万谷が浄土院で写本を写した際に記した識語である。これによると、「叡山集」とは、在る人は、およそ「叡山集」と称されるものは最澄の撰であるといい、余（万谷）は竊に疑ったが、後に円珍の私録である『山王院藏經目錄』というものを獲、その中に最澄撰述であるものの、その諱を憚って「叡山集」といっており、『頭戒論縁起』と共に『胎藏縁起』が録されているので、ここにおいて『胎藏縁起』が最澄の所製であることを知ったと記されている。『山王院藏經目錄』は、『山王院藏書目錄』のことであり、ここに記される「頭戒縁起二卷」「胎藏縁起一卷」の記述も『山王院藏書目錄』に確認できる。さらに、「胎藏縁起一卷」の下に「叡山」と書かれていることからこれらが裏づけられる²⁷。

『山王院藏書目錄』は、佐藤哲英氏によると、延長三年（九二五）頃に書かれたもので、円珍の住房であった山王院藏の藏書目録とされる。また、この目録は四帖ある内、二帖のみ現存しており、現存するものの一帖は密教関係の典籍、他の一帖は天台及び他家の典籍の目録と示されている²⁸。しかし、『胎藏縁起』と同じく、題下に「叡山集」と記される『灌頂七日行事鈔』及び『金剛界灌頂行事鈔』に関連するであろう書は『山王院藏書目錄』にはみつけられない。欠損している二帖にその名があるのかもしれないが、密教典籍を並べる帖にその名をみつけることができないことに不審を覚える。

第三節 諸目録にみえる『灌頂七日行事鈔』に関連する書について

次に、『灌頂七日行事鈔』を列ねる目録類について検討していきたい。本書と関連すると考えられる書を確認することができる目録は以下の通りである

a、義真（七八一―八三三）記『伝教大師御撰述目録』『修禅録』

已上伝教大師御記

右外

正像末記（一卷）

末法灯明記（一卷）

弘惑袖中策

薬師法（一卷）

灌頂行事鈔（両界各三卷）

吉祥天文集（一卷）

愍諭弁惑章（一卷）

內証仏法血脈（一卷）

29

b、謙順（一七四〇—一八一二）撰『增補諸宗章疏錄』「延曆寺伝教大師撰述」〔謙順録〕

胎藏縁起一卷

胎藏灌頂七日行事鈔一卷

三種灌頂五種三昧文一卷

灌頂儀式二卷

金剛界灌頂行事鈔三卷

金剛界三十七尊積名一卷

三十七尊私記一卷

灌頂次第儀軌一卷³⁰

c、可透（一六八二—一七三四）撰『伝教大師撰集録』〔可透録〕

胎藏灌頂七日行事鈔三卷

金剛界灌頂行事鈔三卷

金剛界灌頂式一卷

灌頂次第儀軌一卷

灌頂儀式二卷

新集総持章十二卷

古印並遮那雜記一卷

住心品私記二卷

遮那經疏抄要決二卷

毘盧遮那經雜抄一卷

遮那經第四卷記一卷

註遮那經一卷

遮那私記一卷

胎藏造曼荼羅支分一卷³¹

d、『台密略目錄』「伝教大師撰述」

大仏頂集一卷（梵本五本集五十五紙）

胎藏灌頂行事鈔上（二十紙）中（十紙）下（二

十二紙）

金剛灌頂行事鈔上（二十六紙）中（四十紙）下（二十五紙）

金剛界灌頂式一卷（九

紙）

胎藏界灌頂式一卷（三十三紙）宮中灌頂記（延曆二十四年九月朔日於高雄道場行。其後

於宮中行記也）

灌頂次第儀軌一卷（二十一紙）胎藏縁起一卷

藥師法一卷

秘密大血脈

略血脈

秘密即身成仏論一卷³²

e、龍堂（生没年不詳）編『山家諸德撰目集』「山家高祖伝教大師最澄撰」〔龍堂録〕

胎藏界灌頂七日行事鈔三卷

金剛界灌頂行事鈔三卷³³

f、覺千（一七五六—一八〇六）集『自在金剛集密林目錄』「伝教大師密部撰述」〔覺千録〕

胎藏灌頂七日行事鈔三卷

上十紙中十六紙下二十二紙

金剛界灌頂行事鈔

上十六紙中四十紙下二十五紙 山

門淨土院藏上卷欠本

金剛界灌頂式一卷
灌頂儀式二卷
胎藏縁起一卷
薬師儀軌法一卷
金剛界灌頂式一卷
灌頂次第儀軌一卷
吉祥天文集一卷
相承血脉譜一卷³⁴

g、『密乘撰述目録』「伝教大師」

胎藏灌頂七日行事鈔三卷^{上二十紙中十六紙下二十二紙}
紙下二十五紙

金剛界灌頂行事鈔三卷^{上十六紙中四十}

金剛界灌頂式卷第一
灌頂次第儀軌一卷
胎藏縁起一卷
薬師法儀軌一卷
秘密大血脉³⁵

h、『本朝台祖撰述密部書目』「開山大師撰述」

灌頂式二卷
三種悉地付法一卷
金剛界灌頂行事抄上中下
金剛界灌頂式一卷
灌頂次第儀軌一卷³⁶
薬師法一卷
胎藏灌頂七日行事抄上中下
金剛界灌頂式卷第一
灌頂次第儀軌一卷

i、『延曆寺密乘目録』「伝教大師撰述」

胎藏灌頂七日行事抄三卷
金剛界灌頂行事鈔三卷
金剛灌頂式卷第一
胎藏界灌頂式一卷
胎藏縁起一卷
薬師法一卷
秘密大血脉
灌頂次第儀軌一卷
大日元真抄二卷³⁷

a 『修禪録』を除けば、他は江戸以降成立の目録である。塩入亮忠氏が、これらの目録を系統ごとに分類している。それを参考にしてさらに書名巻数に着目して整理すると次のようになる³⁸。

- ① 胎藏灌頂七日行事鈔三卷（『破邪弁正記』を引用）… e 『龍堂録』、c 『可透録』
- ② 胎藏灌頂七日行事抄三卷… i 『延曆寺密乘目録』
- ③ 胎藏灌頂行事鈔上（二十紙）中（十六紙）下（二十二紙）… d 『台密略目録』
- ④ 胎藏灌頂七日行事鈔（抄）上（二十紙）中（十六紙）下（二十二紙）… f 『覚千録』
g 『密乘撰述目録』
h 『本朝台祖撰述密部書目』

⑤ 胎藏灌頂七日行事鈔一卷… b 『謙順録』

⑥ 灌頂行事鈔（両界各三卷）（「右外」部に録す）… a 『修禪録』

①と②に関しては「鈔」と「抄」の字の違いはあるが恐らく同書とみて良いだろう。また、

③と④については題名の「七日」の有無の相違はあるが、枚数も一致しているので、同書であろう。①と②は、現存の『灌頂七日行事鈔』全三巻と同じ巻数であること、③と④については巻数の記載はないが上中下とあることから三巻と見做されることから、①から④は現存本と同じ本と考えて良いであろう。しかし、問題になるのは⑤と⑥である。

まず⑤は、書名は①や④と同名であるが、一巻本になっている。b『謙順録』における『金剛界灌頂行事鈔』は三巻本であり、⑥の各三巻にも該当しない。b『謙順録』は、智積院の謙順が編纂したもので、『諸宗章疏録』(巻一)と『増補諸宗章疏録』(巻二、三)の二部より成っている。『諸宗章疏録』(巻一)は、東大寺円超等の『五宗録』なるものを改訂したもので、『増補諸宗章疏録』(巻二)は、『五宗録』に漏れたものや、後に著述されたものをまとめたものである。『増補諸宗章疏録』(巻三)は、『五宗録』中に真言宗章疏が含まれていなかったため、惠範(二六一〇—一六四九)の『真言諸師製作目録』を基に謙順が新たに真言録を加え編纂したものとされる³⁹⁾。

『諸宗章疏録』・『増補諸宗章疏目録』の基の一である『諸師製作目録』や、『諸宗章疏録』の草案の『釈教諸師製作目録』には、共に「伝教」の項に、「灌頂行事抄両界各三⁴⁰⁾」とあり、「抄」となっているが、a『修禅録』と同じ題名が記されている。それにもかかわらず、『五宗録』及び『諸宗章疏録』(巻一)では転写漏れも十分に考えられるが、この書名をみつけることはできない。他方、『増補諸宗章疏録』(巻二)をみると、前述の「胎藏灌頂七日行事鈔一卷」がまさにここに記されている。しかしなぜか名称だけでなく、巻数も変わっている。

『諸宗章疏録』の冒頭にある凡例にこの目録の基の一つである『五宗録』について次のように記されている。

五宗録者、上古之録而遺逸不^レ少。今、為^二補助^一、曰^二増補諸宗章疏録^一。此亦摺^二摺上件諸録、及他録、並見行有本^一。又五宗中、天台録唯以^レ人分者、從^二台宗古録及旧刊^一耳。然天台録疑氷不^レ積者多矣。可^レ尋^二彼宗宿匠^一⁴¹⁾。

『五宗録』は上古の録であり、忘れられているものが多いつかあるからこの録や他の録等を加えて『増補諸宗章疏録』というのである、特に天台録はただ人物ごとに分類しているものであり、それは天台の古録や旧刊に従っている、しかし、その天台の目録にみえる書物の真偽についてほとんど解釈や説明はなされていないので、(不明のところは)天台の学匠に尋ねよと記されている。つまり、この記述を参考にすると、『増補諸宗章疏録』(巻二)に記された「胎藏灌頂七日行事鈔一卷」は古録、もしくは旧刊に依拠するものとも解積できる。『五宗録』中「天台宗章疏」は延暦寺玄日大法師が撰じたもので、その成立は延喜十四年(九一四)とされる。そこには「胎藏灌頂七日行事鈔一卷」はおろか『灌頂七日行事鈔』に関連する書の名をみつけることはできない。なお、「天台宗章疏」よりさらに古い目録のa『修禅録』にもまたこの「一卷」の名はみつけれない。果たして義真記のa『修禅録』に示される⑥の表現より古いものがあるのだろうか。

a『修禅録』は、題下に「修禅院和尚記⁴²⁾」とあることから、修禅大師と呼ばれる義真の録として扱われている。しかし、この録について『仏書解説大辞典』で塩入亮忠氏は、目録末尾に義真寂(八三三)より更に三十余年後(八六六、一説八六四)に賜る「伝教大師」の諡号が記されていること等から一部は後世更に附加されていたものではないかと指摘している。このa『修禅録』では、⑥に示された「灌頂行事鈔(両界各三巻)」は「右

外」に分類されている。この「右外」には、現在「偽」と判定される『末法灯明記』や、承和十四年（八四七）安慧の撰とされる『愍諭弁惑章』がここに属している。『愍諭弁惑章』に至っては、義真寂後の十四年後である。それ故に、「灌頂行事鈔（両界各三卷）」も後世に作成されて加筆されたものではないかとの疑義が生じる。換言すれば、『修禅録』の表現が一番古いとはいえず、古録等に前述の「一卷」のようなものがあつた可能性を否定できない。このことは、前述した円珍代における『山王院蔵書目録』に『灌頂七日行事鈔』に類する名をみつけることができなことから支持される。

では、円珍代に近い目録である安然の『八家秘録』はどうであろうか。『八家秘録』は台密の大成者とされる安然の編纂した目録であるが、「三摩耶戒録外法五」に「灌頂儀式二卷澄和上述⁴³」というb『謙順録』・c『可透録』等の目録にもその名を確認できる書は記されているが、『灌頂七日行事鈔』及び『金剛界灌頂行事鈔』に類する書の名はみつけられない。以上のことから、『灌頂七日行事鈔』に関連する書は安然以降に出てくる可能性がある。

また『破邪弁正記』には、「見定録」と「先大師隨身録」の両目録の一部が引用される箇所がある⁴⁴。葉雋は、この両目録について「正顕下祖師学」両部「誠証上門」という最澄が兩部を学んだ証拠を示す章に、次のように述べる。

私云。件見定録四卷并隨身録一卷、是根本御経蔵、先大師所持聖教目録也。其両目録是義真和上之時所撰出⁴⁵也。

すなわち、「見定録」四巻と「先大師隨身録」一卷は、根本経蔵の最澄の所持する典籍等の目録であり、両目録は義真が撰出せられたと記す。この記述通りと考えれば、両目録とa『修禅録』との関連性がうかがえる。

「見定録」については、『大日経義釈』の奥書等に、その存在が記されている⁴⁶。この目録は散逸しているため、今ではその全てを確認することはできないが、『破邪弁正記』によれば、最澄が唐より将来した経疏、並びに日本で学んだとされる書物を列ねた目録であると判断できる⁴⁷。

「先大師隨身録」については、この目録を挙げた後の箇所にも、「此等並是大師所製也⁴⁸。」とあり、ここに示される書は、最澄所製の密教書目であることが記されている。それ故か、『破邪弁正記』に引用される「先大師隨身録」所収の全四十三書目の内、『山家学生式』・「金剛界三十七尊釈名」・「金剛界悔過一卷」・「蓮華部次第通用儀軌一卷」の略抄三書を除いた全ての書に「叡山」と記されている⁴⁹。『破邪弁正記』に引用されるこの目録には次のように示されている。

胎蔵灌頂七日用事鈔卷上叡山二十番卷中叡山十六番卷下叡山二十二番

金剛界灌頂行事鈔卷上叡山二十六番卷中叡山四十番卷下叡山二十五番

金剛界灌頂式卷第一叡山九番

金剛界灌頂式一卷叡山三十三番⁵⁰

すなわち、この『破邪弁正記』にみえる本「胎蔵灌頂七日用事鈔卷上叡山二十番卷中叡山十六番卷下叡山二十二番」が、先にまとめた①〜④の書が、『破邪弁正記』にみえる本と同本であることとを裏づけている。

しかし、a『修禅録』において、「先大師隨身録」にみえる「胎蔵灌頂七日用事鈔」・「金剛界灌頂行事鈔」を除く最澄所製の密教に関する全ての書物を確認することができない。

後附された可能性の高い「右外」にもみられない。また、『山王院蔵書目録』や『八家秘録』においても同様である⁵¹。

第四節 『灌頂七日行事鈔』の構成

次に、『灌頂七日行事鈔』の内容を確認していきたい。本書は、『胎蔵灌頂行事鈔』・『胎蔵灌頂行事』とも称され、『大日経』や『一行記』（『大日経疏』または『大日経義积』・『陀羅尼集経』・『蘇悉地経』の引用に基づいた書であり、七日間に区切って修法を行うといった、いわゆる「七日作壇法」の作法書である。「七日作壇法」とは、法事を行う時に、七日七夜を費やして土壇を築き、其の上に諸尊の曼荼羅を画く作法とされる⁵²。本書に著される修法内容は、第一日目から第七日目までにそれぞれ区切られ、さらに作法ごと二二三項に分けられている。その構成は次の通りである。

卷上

第一日

1 定所

2 問答 『陀羅尼集経』（『大正』十八・八八六頁上）

3 啓白 『陀羅尼集経』（『大正』十八・八八六頁上）

4 結界 『大日経』「具縁品」か？

『陀羅尼集経』（『大正』十八・七九三頁上、八一〇頁〜八一二頁上、八五一頁下〜八六〇頁中、八八六頁上〜中）

『蘇悉地経』（『大正』十八・六八三頁中）

5 限日

6 住自性 『大日経疏』（『大正』三九・六二二頁上）

『大日経義积』（『續天全』、密教1・一一〇頁上）

7 警発地神 『大日経疏』（『大正』三九・六二二頁上）

『大日経義积』（『續天全』、密教1・一一〇頁上）

8 加護 『大日経疏』（『大正』三九・六二二頁上）

『大日経義积』（『續天全』、密教1・一一〇頁上）

9 警発地神 『大日経』（『大正』十八・四頁下）

『大日経疏』（『大正』三九・六一九頁中）

『大日経義积』（『續天全』、密教1・一〇五頁下〜一〇六頁下）

10 偈意 『大日経疏』（『大正』三九・六一九頁中）

『大日経義积』（『續天全』、密教1・一〇五頁下〜一〇六頁下）

11 警発 『大日経疏』（『大正』三九・六一九頁中）

『大日経義积』（『續天全』、密教1・一〇六頁下）

12 観釈 『大日経疏』（『大正』三九・六一九頁下）

『大日経義积』（『續天全』、密教1・一〇六頁下〜一〇七頁上）

13 字門釈 『大日経疏』（『大正』三九・六一九頁下）

『大日経義积』（『續天全』、密教1・一〇七頁上）

- 14 印相 『大日經疏』(『大正』三九・六一九頁下)六二〇頁上
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇七頁上)
- 15 供養 『大日經』(『大正』十八・四頁下)
『大日經疏』(『大正』三九・六二〇頁上)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇七頁下)
- 16 淨心地 『大日經疏』(『大正』三九・六二〇頁上)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇七頁下)
- 17 秘積 『大日經疏』(『大正』三九・六二〇頁上)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇七頁下)
- 18 贖地 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八二四頁中)
- 19 治地 (前) 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁中)
(中) 『大日經疏』(『大正』三九・六二三頁上)
(後) 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁上)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一一五頁下)
- 20 地色 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁中)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇〇頁下)
- 21 地味 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁中)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇〇頁下)
- 22 卜地 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁中)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇〇頁下)
- 23 卜地 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁上)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一一〇頁上)
- 24 填土 『大日經疏』(『大正』三九・六二一頁上)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一一〇頁上)
- 25 治弟子心地 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁中)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一一〇頁上)
- 26 除破壞菩提心障 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁中)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇二頁上)
- 27 除六十心 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁中)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇一頁上)
- 28 除無名妄想 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁中)下
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇一頁上)
- 29 除二乘自度心 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁下)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇一頁上)下
- 30 除不饒益行 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁下)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇一頁下)
- 31 除煩惱 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁下)
『大日經義積』(『續大全』、密教1・一〇一頁下)
- 32 除種種現行煩惱 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁下)

『大日經義積』(『續大全』密1・一〇一頁下)
33 除三毒 『大日經疏』(『大正』三九・六一七頁下)
『大日經義積』(『續大全』密1・一〇一頁下)

第二日

34 師弟行事 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁中)
35 其外威儀 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁中)
36 安物院 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁中)
37 結界 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁中)
38 作香泥 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁中)〔下〕
39 結界 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁下)

第三日

40 穿孔埋宝穀行事 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁下)
41 挽繩 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁下)
42 遮那疏 五宝 『大日經疏』(『大正』三九・六二一頁上)
『大日經義積』(『續大全』密1・一一〇頁下)
43 深秘積 (前) 『大日經疏』(『大正』三九・六二二頁上、六二二頁上)
『大日經義積』(『續大全』密1・一一〇頁上、一一三頁上)
(後) 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁下)

第四日

44 結界 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁下)
45 結界 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八六頁下)
46 塗泥 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
47 摩地 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
48 塗牛糞 『大日經疏』(『大正』三九・六二一頁上)
『大日經義積』(『續大全』密1・一一〇頁上)
49 秘密積 『大日經疏』(『大正』三九・六二二頁上)
『大日經義積』(『續大全』密1・一一〇頁下)
50 立椽 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
51 在木 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
52 懸幡 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
53 懸五法幡 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
54 繞繩 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
55 懸採色雜宝 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
56 繞珠 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
57 着網 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
58 定爐坑 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
59 作蓋 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁上)
60 作灌頂壇 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁中)
61 大結界 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁中)

第五日

卷中

第六日

- 62 第五日 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁中)
- 63 行道 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁中)
- 64 摩地 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁中)
- 65 作壇 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁中)

66 第六日 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁下)

67 弟子十德 『大日經疏』(『大正』三九・六二四頁中)

68 受法弟子數 『大日經疏』(『大正』三九・六二四頁下)

『大日經義釈』(『續大全』、密教1・一一九頁下)

『大日經義釈』(『續大全』、密教1・一二二頁上)

69 七宝五穀 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁下)

70 列坐 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁下)

71 護身 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁下)

72 作供養 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁下)

73 受戒 『大日經疏』(『大正』三九・六二六頁中)

『大日經義釈』(『續大全』、密教1・一二四頁下)

74 行香 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁下)

75 護身 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁下)

76 問答 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁下)

77 泮水 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八七頁下)

78 安肩 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

79 繫索 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

80 列坐 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

81 灑水 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

82 火繞 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

83 授齒木 (前) 『大日經疏』(『大正』三九・六二六頁下)

『大日經義釈』(『續大全』、密教1・一二五頁上)

(後) 『大日經義釈』(『續大全』、密教1・一二六頁上)

84 與楊枝 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

85 雜華 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

86 嚼枝 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

87 看枝 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

88 卜機 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

89 呷水 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

90 飲水 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

91 列坐 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

92 行香 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

93 遺夢 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

94 帰房 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

- 95 啓白 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)
 96 發遣 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)
 97 護摩 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)中
 98 敷粉 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 99 用法 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 100 座主 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 101 壇座 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 102 外院 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)八八八頁上
 103 飾鑪 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)
 104 作壇 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)
 105 灌頂壇 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)中
 106 檢校 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 107 守護 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)

卷下

第七日

- 108 作冠 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 109 自護身 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 110 大身印 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 111 結界 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 112 飾灌頂供瓶 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 113 水華 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 114 菓樹 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 115 列宝燭 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 116 具食盤 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 117 具灯 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)
 118 具器盛食 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁中)下
 119 具六食盤 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 120 蘇油 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 121 蜜漿 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 122 五穀 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 123 兩鐘 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 124 柴松 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 125 用分兩处 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 126 音樂列坐 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 127 敷坐 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 128 制乱 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 129 遣浴 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 130 三札呪鐘 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)
 131 呪鐘 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁下)八八八頁上
 132 宝樹 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八八八頁上)

- 133 宝燭 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁上)
 134 香華 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁上)
 135 食盤 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁上)
 136 餽施 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁上)
 137 香爐 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁上)
 138 行道 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁上)
 139 綿線繞 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁上)
 140 作梵唄 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 141 供灌頂壇 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 142 定座 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 143 列音樂 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 144 檢校 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 145 啓白 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 146 奉請 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 147 請次第 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 148 華座印 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 149 放華 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 150 一一次第請 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁中)
 151 作大三昧耶結界 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁下)
 152 散香 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁下)
 153 散華 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁下)
 154 行道 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁下)
 155 作樂 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁下)
 156 神供 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁下)
 157 還入道場 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁下)
 158 讚唄 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁下)
 159 作樂 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁下)
 160 迎受法人 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁下) 八九一頁上)
 161 列音樂 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 162 正迎 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 163 徒衆起立 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 164 列行 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 165 常逐阿闍梨人 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 166 阿闍梨問 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 167 徒衆告 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 168 泮打 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 169 白芥子 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 170 引衆 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 171 思惟近道場 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 172 白芥子 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)

- 173 護身 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 174 洗手 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 175 敷席 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 176 懺悔 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)
 177 作礼讚嘆 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁上)〔中〕
 178 作樂 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 179 大護身 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 180 降伏 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 181 水打 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 182 手印 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 183 灑身 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 184 重護 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 185 印頂 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 186 洗手 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 187 掩眼 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 188 誦呪 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 189 散華 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 190 喚樂人 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)
 191 取水鐘 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁中)〔下〕
 192 自灌頂 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁下)
 193 灌頂 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁下)
 194 繫索 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁下)
 195 与灌頂竟 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁下)
 196 送鐘 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁下)
 197 還坐本処 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁下)
 198 護摩支分 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁下)
 199 燃柴 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁下)
 200 請火天 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁下)
 201 供蘇蜜 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九一頁下)〔八九二頁上〕
 202 移火天 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)
 203 請馬頭 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)
 204 弟子息災 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)
 205 燒蘇 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)
 206 還送 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)
 207 請座主 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)
 208 還送 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)
 209 請壇衆 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)
 210 還送 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)
 211 諸位 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)
 212 次第 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上)

- 213 結願 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁上〜中)
- 214 顕示 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁中)
- 215 懺悔 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁中)
- 216 満願 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁中)
- 217 発願 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁中〜下)
- 218 護身 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁下)
- 219 行道 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁下)
- 220 慚愧 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁下)
- 221 解界 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁下)
- 222 分法 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九〇頁上、八九二頁下)
- 223 示像 『陀羅尼集經』(『大正』十八・八九二頁下)

このように『灌頂七日行事鈔』は、『陀羅尼集經』に説かれる「七日作壇法」を基盤に、『大日経疏』(『大日経義釈』)等を付加させた作法書であることが理解できる。

第五節 『灌頂七日行事鈔』における諸問題

最澄撰『内証仏法相承血脉譜』中の「雑曼荼羅相承師師血脉譜」は『陀羅尼集經』の訳者である阿地瞿多から各三師を経て最澄へと繋がっている。『灌頂七日行事鈔』は、『陀羅尼集經』を儀範とし、『大日経疏』等にも説かれる「七日作壇法」を引用して『陀羅尼集經』所説の「七日作壇法」の説明を補填している。本書全体を通して『陀羅尼集經』を儀範としながらも、後世「胎藏灌頂行事鈔」等と扱われることは、聊か不可思議である。これに関して、いふなれば本書を大日如来を至尊とする『大日経』系と釈迦仏頂を至尊とする『陀羅尼集經』とを合わせた高雄灌頂に関係する作法書であると考えれば、すなわち最澄の意になつたものであるとするならば、『叡山大師伝』にみえる「大曼荼羅一幅」・「五仏頂浄土一幅」の記述より、少なくとも城西郊において重ねて修した灌頂との関係性を惹起させる。

また、『越州録』⁵³にみえる「三十七尊様一卷」・「三十七尊供養具様一卷」といった記述や、順曉から最澄への授法の道場が、「毘盧遮那如来三十七尊曼荼羅所」⁵⁴または「五部灌頂曼荼羅壇場」⁵⁵といった金剛界系の道場と連関する記述があることから⁵⁶、順曉所伝の密教は金剛界が主体と推察できる。これによって、高雄灌頂は、もう一方の『金剛界灌頂行事鈔』との関連性を想起させる。それ故に、『灌頂七日行事鈔』を胎藏系に関係する書として扱っていたとも考えられる。

しかし、『灌頂七日行事鈔』および引用された『陀羅尼集經』には、五仏頂に関する画像法はみつけれられない。最澄は、貞元二十一年(八〇五)四月に順曉による授法の後、五月に大素より五仏頂法を伝受されたことと、『越州録』に『一字仏頂輪王経』と関連するであろう「五仏頂転輪王経五卷」との記述があることから、順曉所伝の密教と五仏頂法との何らかの関係が憶測されるが、肝心の『灌頂七日行事鈔』の中に五仏頂法に関する記事がないばかりか、菩提流志訳経典が全く引かれてないことには不審を覚える。

また、『灌頂七日行事鈔』の本文からも問題を指摘することができる。

『灌頂七日行事鈔』上の4結界に、「依^二軍荼利部結界・蘇悉地五衛結界・胎藏曼荼羅^一云⁵⁷。」といった記述がある。「軍荼利部結界」は、『陀羅尼集經』十二⁵⁸等に説かれる作法の一である⁵⁹。

次の「蘇悉地五衛結界」とは、『蘇悉地經』下「供養品」に説かれる作法であり、以下の通りである。

若諸部事有^レ為^レ法者、^レ依^二甘露軍荼利法^一而遣^中除^上之。又有^二五種護衛法則^一。常於^二道場室內^一作^レ之。謂、金剛墻・金剛城・金剛橛・忿怒吉利枳羅・忿怒甘露軍荼利……⁶⁰。

仏・蓮・金の三部それぞれの結界を作すのであれば、甘露軍荼利法に依つて結界を作り、障りを除くべしとあり、甘露軍荼利法と並べて五種の護衛結界（金剛墻・金剛城・金剛橛・忿怒吉利枳羅・忿怒甘露軍荼利）が示されている。円仁撰述の『蘇悉地經疏』六に、この結界作法について説明がなされているが、当然というべきか、最澄が行った灌頂でこの作法を用いたという記述はない⁶¹。

「胎藏曼荼羅」とは、胎藏界曼荼羅をいうのではなく、恐らく「七日作壇法」が説かれる『大日經』「入曼荼羅具緣真言品」のことであろう。「結界」については、『大日經』の中では説かれず、『大日經疏』にその次第をみつけることができる。ここでは、不動明王或いは降三世の密印を組み、一百八遍呪を誦し、地を加持せよと説かれる⁶²。

つまり、『灌頂七日行事鈔』「結界」の儀範となる經典には、胎藏系に関連する『大日經疏』だけでなく、『陀羅尼集經』・『蘇悉地經』も含まれる。また、胎藏に最も近い『大日經疏』よりも上に、この二經典が配されていることがわかる。中でも問題となることは、「蘇悉地」の語がみえることである。蘇悉地の伝承は、円仁が会昌元年（八四二）五月に青竜寺義真より受法したことにより始まるとされる⁶³。最澄の入唐以前に、『蘇悉地經』も含めて已に多くの密教典籍が日本に流入されていたようであるが、果たして円仁の蘇悉地受法以前に、最澄が蘇悉地に関連する作法を修め得たのだろうか。

最澄が引用する『蘇悉地經』について確認すると、最澄真撰とされる書の中で、ただ『顕戒論』「開^下示住山修学期^二十二年^一明^上拋^上四十六」にのみ、『蘇悉地經』の引用がみられる。

謹案、蘇悉地羯羅經中卷云。若作^二時念誦者^一、經^二十二年^一。縱有^二重罪^一、亦皆成就。

仮使法不^二具足^一、皆得^二成就^一。^{已上經文。}明知。最下鈍者經^二十二年^一、必得^二一驗^一。常轉常講期^二二六歲^一、念誦護摩限^二十二年^一。……⁶⁴

これは、『蘇悉地經』⁶⁵に説かれる「十二年間一向に念誦をすれば、如何なる重罪であろうとも、皆目的を成就することができる」ことを文証とし、最下鈍の者であっても一驗を得ると論じており、十二年籠山の説明にしばしば用いられる箇所である。また、『蘇悉地經』を引用する箇所において念誦だけでなく、護摩という語がみえるため、『蘇悉地經』に説かれる密教修法的な要素を意識している可能性がある。

しかし、『顕戒論』の一文から、最澄が蘇悉地に関連する作法を行うことができたと判定するのは早計である。その理由として、まず『台州録』の記述が挙げられる。

大乘經律並陀羅尼目錄

合一十三部一十九卷

菩薩戒經一卷

蘇悉地經三卷

蘇婆呼律經三卷

新訳梵漢兩字大仏頂陀羅尼一卷

梵漢兩字隨求即得陀羅尼一卷

梵漢兩字仏頂尊勝陀羅尼一卷

梵漢兩字千臂陀羅尼一卷

梵漢兩字千手陀羅尼一卷

梵漢兩字一字呪王陀羅尼一卷

梵漢兩字文殊師利五字陀羅尼一卷

梵漢字隨求即得曼荼羅一張

梵種子曼荼羅一張

大仏頂通用曼荼羅一張⁶⁶

この目録をみると、「蘇悉地經三卷」とあり、最澄が唐より『蘇悉地經』を持ち帰ったことがわかる。しかし、三崎博士がすでに指摘するように、『蘇悉地經』は、「大乘經律並陀羅尼目録」中にあり、さらには「菩薩戒經一卷」と並んで収められていることから、『蘇悉地經』は律部の經典と見做されている⁶⁷。さらに、空海の『真言宗所學經律論目録』(『三学録』)においても、『蘇悉地經』は律部にその名が列ねられている⁶⁸。つまり、当時の日本において、『蘇悉地經』は律部の經典とされていた。故に、最澄は、在世時に『蘇悉地經』において、密教に関する一々の作法等が説かれていることを把握していたとしても、それを密教經典と認識し、後の台密における蘇悉地と連関するとは考えていなかったと推測される。

最澄の撰著の中で、『頭戒論』以外に『蘇悉地經』を引用する書はみつげられない。しかし、後世になってではあるが、蘇悉地の伝承に関連していると考えられる事例がいくつか提唱されている。それは、前にも述べた「三部三昧耶の印信」と『内証仏法相承血脈譜』中「雜曼荼羅相承師師血脈譜」である。

「三部三昧耶の印信」については、『頭戒論緣起』所収の「順曉阿闍梨付法文一首」にみえる「三部三昧耶の印信」が蘇悉地の根本真言ともいわれることが先学によって指摘されている⁶⁹。

「雜曼荼羅相承師師血脈譜」は、仏頂如来を中心に置き血脈の繋がりを示すと捉えられ、『蘇悉地經』の主尊も同じ仏頂如来であることから、「雜曼荼羅相承師師血脈譜」は蘇悉地の伝承を間接的にあらわしているとも考えられる。いずれにせよ、これらの事例が蘇悉地の伝承に関連すると考えられるようになるのは、後年のことであり、最澄が『蘇悉地經』に説かれる修法、乃至蘇悉地という語を用いて修法を行っていたことの根拠にはならない。

一方、真言宗においては、蘇悉地法と関連する「十八道」の記述がある。「十八道」とは『蘇悉地經』とともに唐で編纂された書『蘇悉地羯羅供養法』に依って構成されたものである。実は、『灌頂七日行事鈔』に依用される『蘇悉地經』由来の「蘇悉地五衛結界」にみえる「金剛墻」・「金剛楸」は、それぞれ十八道の基調となる十八の印明の一つである。それ故、最澄が「十八道」に触れる機会があったのか少しく検討してみたい⁷⁰。

真言宗の年分度者に関する『類聚三代格』二「承和二年(八三五)正月二十三日」の官符に、「十八道」の記がなされている。

心^レ度^二真言宗年分者三人^一事

一金剛頂業一人 応_レ学_二十八道一尊儀軌及守護国界主陀羅尼經一部十卷_一

一胎藏業一人 応_レ学_二十八道一尊儀軌及六波羅密經一部十卷_一

右二人業人、応_レ兼_二学_三三十七尊礼懺經一卷、金剛頂發菩提心論一卷、釈摩訶衍論一部十卷_一

一声明業一人 応_レ書_二誦梵字真言大仏頂及隨求等陀羅尼_一

右一業人、応_レ兼_二学_三大孔雀明王經一部三卷_一⁷¹。

三崎博士は、この記述は「十八道」が日本において使用された早い例を示しており、密教修法の基本の一としての「十八道」は、空海において十分に認識されていた可能性を示唆するが、『三学録』の中には「十八道」に関係する書は見つけられないとしている。他方、天長八年（八三一）九月二十五日付の円澄の記した『懇_三請受_二学_三真言教_一書』には次のよう記された箇所を引用する。

去弘仁三年冬、：（中略）：以_二其年十二月十五日_一、開_二灌頂道場_一、与_二三百余弟子_一、沐_二持明灌頂誓水_一、学_二十八道真言_一。梵字真言受学稍難。即問_二和上_一云。受_二大法儀軌_一幾月令_レ得。答曰。三年畢_レ功。歎曰。本期_二二夏_一。若可_レ經_二数年_一、不_レ若_下暫帰_上本居_一、且遂_二本宗之事_一、後日来学_上⁷²。

（最澄は）弘仁三年（八一二）十二月の高雄灌頂において、梵字真言の受学が困難であったため、中絶してしまつたとあれども、後日空海から十八道真言を与えられたらしいとしている。また、空海の「十八道」に関する言の真偽について、論を展開している⁷³。真言宗における「十八道」の記録に真偽の問題はあるが、この記述の通りならば、最澄は「十八道」に関する何らかの作法を学んでいたかもしれない。

また、「雑曼荼羅相承師師血脈譜」の江秘による授法の附文に「如意輪」、「如意輪壇」という語がみられる⁷⁴。「如意輪」に関連する書に、菩提流志訳『如意輪陀羅尼經』や不空訳『観自在菩薩如意輪念誦法』⁷⁵等が挙げられるが、特に『観自在菩薩如意輪念誦法』は、「十八道」の拠所となる儀軌とされることもある⁷⁶。「雑曼荼羅相承師師血脈譜」にみえる附文の通りであるならば、「十八道」に関する作法を最澄は唐滞在中に学んでいた可能性も考えられる⁷⁷。

しかし、『灌頂七日行事鈔』は、最澄帰朝後、すなわち延暦二十四年（八〇五）高雄山寺において営まれた灌頂に関わる書と考えると、最澄が空海所伝の十八道真言を知ることになるとしても、その機会はこの灌頂の後の話であり、高雄山寺の灌頂において蘇悉地法に関連する「十八道」が用いられていたと考えることは難しい。さらに、もし最澄が「十八道」について認知していたのであれば、「懇_三請受_二学_三真言教_一書」にあるような、「（最澄に近侍した）円澄が空海より「十八道」を学んだ」という記述がみえるのは不思議である。さらに、最澄が「十八道」を理解していたことが、伝承されていたのであれば、その当時の最澄の「十八道」にまつわる記録に、何らかの用語がどこかにみられても良いはずである。最澄が「十八道」に直接関わつたとされる記録が他にでてこない以上、還学生として唐留学中に（若干触れる機会があつたこととは否定できないが）修得した可能性を首肯することはできない。いずれにせよ、最澄が『灌頂七日行事鈔』に説かれる「蘇悉地」の語を冠する作法をそのまま行えたとは考えられない。

第六節 結言

『灌頂七日行事鈔』は、奥書に記される葉雋の『破邪弁正記』等において、最澄が順暁より次第を伝受された作法に関する書である旨が記されるが、円珍の私録とされる『山王院藏経目録』や安然の『八家秘録』等台密の先師の諸目録に本書の名はみつけられない。義真記『修禅録』に『灌頂七日行事鈔』に類する書の名を確認できるものの、それは明らかに最澄の撰述と見做しえない書物も収められる「右外」に位置する。更には『修禅録』は義真以降の人物の加筆が一部に認められるため、本書が安直に義真の時代に存在していたと考えることはできない。

それにもかかわらず、本書を先達が「真」とした理由としては、後世の目録でいくつか確認できるように「最澄撰」の拠所として『破邪弁正記』の説が重要視されていたこと、そして「叡山集」すなわち「最澄撰」という考えの由来および本書の奥書に記された三書ともが本書を最澄撰述であると述べていることなどが考えられる。

また、『灌頂七日行事鈔』には「蘇悉地五衛結界」という『蘇悉地経』由来の作法が『大日経』や『陀羅尼集経』所説の作法と並列して示されているが、最澄の時代には、『蘇悉地経』は律部として扱われていた。最澄は蘇悉地の要素があると思われる「三部三昧耶の印信」や「雑曼荼羅相承師師血脉譜」を遺しているが、それらが蘇悉地と結びつくかのように考えるようになるのは、後の台密の後継者たちの考察の結果である。つまり、最澄が帰朝して間もなく行つた灌頂は、『蘇悉地経』に関連する作法に則って行われたとすることは無理があり、そのことが『灌頂七日行事鈔』の成立に疑いを生じさせたと考えられる。『灌頂七日行事鈔』が最澄の撰著でないのであれば、果たしていつ頃の所製なのだろうか。次章よりその成立と由来について論究していく。

《註》

- 1 又九月の上旬、臣弘世、勅を奉り、最澄闍梨をして朕の為に、重ねて灌頂秘法を修行せしむ。即ち勅旨に依り、城西郊に於いて、好地を択求し、壇場を建創す。又画工十余人を召す。敬って五仏頂浄土一幅・大曼荼羅一幅を図す。(『伝全』五付・二三頁。)
- 2 『伝全』一・六三八〜六三九頁。
- 3 『大正』五一・九八九頁上。
- 4 趣意は少しく違うが、最澄は、空海との書簡中に「法華一乘真言一乘、何有^二優劣^一」。(『伝全』五四六九頁)と、法華円教と真言密教とに何ら差別は無いことを述べる。また、『法華秀句』において、『観普賢菩薩行法経』(『観普賢経』)の文「^一釈迦牟尼仏、名^二毘盧遮那遍一切処^一」(『伝全』三三・二六六頁)を引用し、『法華経』の教主である釈迦とは『華嚴経』の教主である毘盧遮那仏の異名であることを意識している。つまり、釈迦仏頂を主とする「五仏頂浄土一幅」と、大日如来が主である「大曼荼羅一幅」を並べて修するこの灌頂は、まさに最澄の意に似うようにもみてとれるのである。

5 勅して画工上首等二十余人を召し、敬って毘盧遮那仏像一幅・大曼荼羅一幅・宝蓋一幅を図し、又仏・菩薩・神王像・幡五十余旒を縫造す。(『伝全』五付・二二頁。)

6 菊岡義衷「山家大師と密教」(『山家学報』十四、一九二〇)では、大部分を偽撰と判定し、上杉文秀

『日本天台史』（破塵閣書房、一九三五）二二三頁には闍揚密乗部欠とし、大山公淳「伝教大師の密教観」（『印度学仏教学研究』八―、一九六〇）では両者の意見を全面的に首肯している。

7 塩入亮忠「現存祖書分類」（『山家学報』十三、一九一九）。

8 『仏書解説大辞典』二、一一七―一一八頁。

9 浅井円道『上古日本天台本門思想史』（平楽寺書店、一九七三）。

10 渡邊守順『伝教大師著作解説』（叡山学院、一九九二）。

11 菊岡義衷「山家大師と密教」（『山家学報』十四、一九二〇）。

12 清水谷恭順「伝教大師の密教の相承に関連して」（『伝教大師研究』、一九八〇）。

13 酒井敬淳「伝教大師と台密」（『伝教大師研究』、一九八〇）。

14 『伝全』四・四八二―四八三頁。

15 『仏書解説大辞典』二、一一七―一一八頁。

16 編者云く。破邪弁正記比叡山藥橋師撰上巻に云く。祖師は、既に両部灌頂の行事等を製す。即ち是れ順曉闍梨次第傳授の作法なり。又同書に云く。祖師の製する所の胎藏灌頂行事鈔は、大日経及び一行記・蘇悉地并集経等に依て其の行儀を明かす。金界行事鈔は、略出経及び三摩地法等に依て其の作法を明かす。又頭戒論贊宗鈔比叡山可透師撰は、破邪弁正記の説を引いて云く。雋老曰く。胎金灌頂七日行事鈔各三

巻は、即ち大師の順曉闍梨の伝法次第の記なり。胎事鈔は、大日経及び一行記・蘇悉地并に集経等に依り、金事鈔は、略出経及び三摩地法に依る云。大日経疏演奥鈔東寺吳空師撰は、七日作壇法に就いて則ち

異説を挙ぐ。而るに大師の行事鈔の説を取りて其の結文に云く。已上傳教大師の七日行事鈔上・安和

尚の持誦不同第一に準ずるなり。（『伝全』四・四八二―四八三頁。）

17 『破邪弁正記』「正破下祖師不レ伝二両部儀軌一偽難上門」（『天全』七・二〇四頁上―下）参照。

18 『天全』五・一〇頁上。

19 『大正』五九・七七頁上。

20 『大正』五九・四一頁上等。

21 『大正』五九・四五頁上、七七頁上等。

22 『大正』五九・一一八頁上。

23 『伝全』四・五三五頁。

24 右、開山大師の撰する所なり。両部灌頂行事鈔各三巻、金剛界は上巻を欠く。葉雋所述の破邪弁正記

に之を載せて曰く。順曉和尚に従つた所伝なり。時に正徳甲午歳、洛東の青蓮院の御経庫の本を以て

之を写す。原本亡冊して不完なり。写誤頗る多し。今、引く所の經疏を檢め校讐し訂正す。伏して願

くば、祖恩の涓埃に酬いんことを。時、享保丙午年臘月上浣日、遮那業末裔万谷謹んで識す。（『伝全』

四・五六四頁。）

25 万谷の伝記については、比叡山に住山した籠山僧に関する伝記集『重興籠山一乗僧略伝』上（『續天全』

史伝3・五頁下―六頁上）にも記録されている。

26 右の胎藏縁起一卷、余偶之を古藏の中より獲。然れども題の下に、撰人の名を著さず、只だ叡山集と

曰うや。或る曰く。凡そ叡山集と称する者は、乃ち是れ開山大師の撰する所なり。余竊かに之を疑う。

爾る後に、藏中より又山王院藏経目錄なる者蓋し証大師自ら録する所なり。其の中に、開山撰述を録し、並

びに其の諱を避けて叡山集と曰わん。且に頭戒縁起二巻・胎藏縁起一卷を載せんをや。是に於いて始

めて信じて、斯の書を実に開山大師の所製と為すなり。……

時、正徳第五龍集乙未孟冬下浣、沙門万谷、謹んで台山浄土院西廂にて識す。（『伝全』四・三九三

頁。）

- 27 「山王院蔵書目録」十四頁(『叡山学報』十三、一九三七)。
- 28 佐藤哲英「山王院蔵書目録について―延長三年筆青蓮院蔵本解説―」(『叡山学報』十三、一九三七)参照。
- 29 『伝全』五付・一五七〜一五八頁。
- 30 『伝全』五付・一六二頁。
- 31 『伝全』五付・一六八頁。
- 32 『伝全』五付・一七九頁。
- 33 『伝全』五付・一八九頁。
- 34 『伝全』三四・三二二頁上〜下。
- 35 『伝全』二・二五〇頁下。
- 36 『伝全』二・一九六頁上。
- 37 『伝全』二・二四五頁下。
- 38 塩入亮忠「現存祖書の分類」(『山家学報』十三、一九一九)参照。しかし、『本朝台祖撰述密部書目』について塩入氏は「私云。此録是義真和尚之時所撰也。一本批記左三円澄和尚治山之時署判。」という文を分類に用いているが、これは『破邪弁正記』にみえる文で、「先大師隨身録」のことを指すのであるが、その目録では「抄」の字は「鈔」となっている。さらに、『本朝台祖撰述密部書目』は、『覚千録』や『密乗撰述目録』にみえる『胎蔵灌頂七日行事鈔』と同じ体裁をとっているので、『覚千録』等と同じ分類に配して良いと考える。
- 39 『伝全』一・九一頁上〜九二頁下。
- 40 『伝全』二・三三八頁上、『伝全』二・三八〇頁下。
- 41 五宗録とは、上古の録にして遺逸少なからず。今、補助を為して、増補諸宗章疏録と曰わん。此れ亦た上の件の諸録、及び他録、並びに見行の有本を摺撫す。又五宗中、天台録は唯だ人を以て分かつ者にして、台宗古録及び旧刊に従うのみ。然るに天台録の疑氷を釈せざる者多きや。彼の宗の宿匠に尋ぬるべし。(『伝全』一・九一頁上〜下。)
- 42 『伝全』五付・一五一頁。
- 43 『大正』五五・一一一四頁中。
- 44 『伝全』七・二〇五頁下〜二〇八頁下等。
- 45 私に云く。件の見定録四卷并に隨身録一卷は、是れ根本御経蔵にして、先大師所持の聖教目録なり。其の両目録は是れ義真和尚の時に撰出する所なり。(『伝全』七・二〇八頁下。)
- 46 『大日経義釈』(『統伝全』密教1・六六四上、『唐房行履録』「大日経義釈十卷本奥書」『伝全』一一三・三三二頁下)等。「此延暦寺中有二教本釈」。且寺庫納二両本。並十四卷。其青標紙者、元初借二両大寺本_レ所_レ写也。故入唐徳清大徳将_レ来_レ之。其白標紙者、祖大師更令_レ抄_レ写_レ之。見定録云。山家勘定本也。聊有_レ別科目。而与_レ前別同本矣。」
- 47 『伝全』七・二〇六頁下、二〇八頁下、二〇九頁上、二二八頁下。
- 48 『伝全』七・二〇六頁上。
- 49 『伝全』七・一九八頁上、二〇五頁下〜二〇六頁上、二〇九頁下、二二一頁上、二二二頁上〜下。
- 50 『伝全』七・一九八頁上。
- 51 『破邪弁正記』上「別叙_三祖師帰朝勤_三修両部灌頂_二門」に、「延暦寺灌頂三昧耶戒啓白_三文_三略_三」(『伝全』七・一九八頁下)とあり、三昧耶戒に関する記述がみられる。この後の文には最澄の弟子である円澄の自記として、最澄が円澄に三昧耶戒を授けたことが記されている。『山王院蔵書目録』には、「灌頂

- 三昧耶戒 一本 叡山本（『山王院藏書目録』七五頁（『叡山學報』十三、一九三七））とあり、根本經藏に三昧耶戒に関する書が収められていたことが確認できる。この記述の通りであるならば、「三昧耶戒に関する書」と最澄との関連が予測される。一方、水上博士が『破邪弁正記』の中に三昧耶戒がみえること自身に疑問を呈されるように『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）三六六〜三六七頁）、この書を最澄撰と肯定するには検証不足と考えられる。だが、一応留意する必要がある。
- 52 『密教大辞典』（法蔵館、一九三二）九七四頁中。
- 53 『伝全』四・三七四頁。
- 54 『頭戒論縁起』（『伝全』一・二七九頁）。
- 55 『越州録』（『大正』五五・一〇五九頁下）。
- 56 大久保良峻『天台学探尋』『天台密教の伝灯』（法蔵館、二〇一四）六八〜六九頁参照。
- 57 軍荼利部結界・蘇悉地五衛結界・胎藏曼荼羅に依ると云う。（『伝全』四・四〇二頁。）
- 58 詳細な印契・真言等は卷一、卷三、卷四等。また卷八には「軍荼利法」が説かれる。
- 59 『大正』十八・七九三頁上、八一〇頁上〜八一頁上、八五一頁下〜八六〇頁中、八八六頁上〜中等。
- 60 若し諸部の事に法を為すこと有らば、応に甘露軍荼利法に依りて之を遣除すべし。又五種護衛の法則有り。常に道場の室内に於いて之を作すべし。謂く、金剛墻・金剛城・金剛櫛・忿怒吉利枳羅・忿怒甘露軍荼利と……。『大正』十八・六八三頁中。）
- 61 『蘇悉地經疏』『明三護衛所用真言』。：（中略）：於中有三護衛真言。初一真言是金剛墻、即結二方界。次一真言是金剛城、即結三方界。次一真言是金剛櫛、即結四地界。次第四第五亦是通結真言也。文末云。有如是等金剛墻真言者、是即奉初取攝後四故、云爾也。（『大正』六一・四六一頁下。）
- 62 『大日經疏』（『大正』三九・六二三頁中）。または『大日經義積』（『續大全』、密教1・一一七頁上）。
- 63 『入唐求法巡礼行記』（『伝全』一一三・二五四頁下）。
- 64 謹んで案ずるに、蘇悉地羯羅經の中巻に云く。若し時に念誦を作さば、十二年を経よ。縦い重罪有りと、亦た皆成就せん。仮使法を具足せざるも、皆成就を得ん、と已上釋文。明らかに知んぬ。最下鈍の者も十二年を経れば、必ず一験を得。常に転じ常に講ずること二六歳を期し、念誦護摩十二年を限る。……（『伝全』一・一五三〜一五四頁。）
- 65 『大正』十八・六八〇頁中。
- 66 『大正』五五・一〇五七頁中。
- 67 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）一七四頁参照。
- 68 『伝全』二・三〇八頁上。
- 69 三部三昧耶の印信について述べる論は、木内堯央『天台密教の形成』（溪水社、一九八四）、三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）、三崎良周『台密の理論と実践』（創文社、一九九四）、水上文義『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）、大久保良峻『天台学探尋』（法蔵館、二〇一四）等が挙げられる。
- 70 「十八道」に関しては、三崎良周『台密の研究』『蘇悉地の源流と展開』（創文社、一九八八）において詳述している。
- 71 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）五九〇頁参照。
- 72 去る弘仁三年の冬、：（中略）：其の年十二月十五日を以て、灌頂道場を開き、百余の弟子と持明灌頂の誓水を沐して、十八道真言を学す。梵字真言の受学稍難し。即ち和上に問いて云く。大法儀軌を受け幾月して得せしむるや。答えて曰く。三年して功じ畢ぬ。歎じて曰く。本一夏を期とす。若し数

年を経るべければ、暫く本居に帰りて、且に本宗の事を遂げ、後日來りて学するが若くならず。(『日藏』四〇・三八五頁上)。

73 三崎良周『台密の研究』(創文社、一九八八)五八三頁〜五九九頁。

74 『伝全』一・二四五頁〜二四六頁。

75 『大正』十九・二〇三頁。

76 三崎良周『台密の研究』(創文社、一九八八)五八三頁、智山伝法院『十八道念誦次第講義録』(『智山伝法院選書』十一、二〇〇二)二四頁等。

77 現行の『内証仏法相承血脈譜』には、疑うべき箇所があることを先学は指摘しており、特に附文に関しては注意が必要である。『内証仏法相承血脈譜』の真偽に関する論文は次の通りである。牛場真玄「伝教大師の禅法相承について―「内証仏法相承血脈譜」を中心として―」(『天台学报』十、一九六七)、同「伝教大師の禅法相承について―天台法華宗伝法偈を中心として―」(『印度学仏教学研究』一、一九六八)、福井康順「『内証仏法相承血脈譜』新義(承前)」(『天台学报』三〇、一九八七)、蓑輪顕量「光定と『内証仏法相承血脈譜』」(『印度学仏教学研究』三八、一九九〇)。

第四章 葉雋撰『破邪弁正記』にみえる最澄の密教について

第一節 序言

『破邪弁正記』¹は、天仁二年（一一〇九）に葉雋によって著された台密相承の論争書である。本書は、『灌頂七日行事鈔』の名をみつけることのできる初出の書であり、そのため、『灌頂七日行事鈔』の成立に何らかの関連性があると考えられた。そこで、『破邪弁正記』を『灌頂七日行事鈔』に関する記事を中心に精査し、『灌頂七日行事鈔』に関する一考を提案したい。

第二節 『破邪弁正記』の撰者について

『破邪弁正記』は、天仁元年（一一〇八）濟朝阿闍梨（仁和寺恵什）が著した台密相承を非難する勘状（欠本）に対する反論の書である²。その撰者である葉雋は「天台宗遮那經業破邪弁正記縁起」に「于時天仁二年己丑臘月黒半九日申午、延曆寺天台宗兼学真言・止観両業末葉、根本正法藏唐院真言藏下司、釈葉雋、謹疏³此記⁴。」と、唐院（慈覚大師円仁）の書籍を管理していたとされる。なお、葉雋についての伝記は、この一文以外を除いて知られていない。

『破邪弁正記』の撰者に関する記録として、東寺杲宝の『玉印抄』に、以下の二つの記述が確認される。

東寺中古学者恵什阿闍梨、頻加⁵疑難⁶。山門真源法橋、破邪弁正記中聊雖⁷述⁸會通⁹、更以不¹⁰叶¹¹理¹²。⁴

仁和寺恵什阿闍梨、疑¹³難¹⁴傳教大師御相承血脈譜¹⁵。松養坊真源法橋、為¹⁶救¹⁷彼難¹⁸製¹⁹破邪弁正記²⁰二卷²¹了²²。⁵

葉雋ではなく、真源法橋なる者が、仁和寺恵什の疑難に対して『破邪弁正記』を著述した旨が記されている。真源についての記録は、他にもいくつか存在している。その一例として応永三十年（一四二三）成立の『山王絵詞』を挙げる。

經藏坊の嚴算ハ、櫻本の円禅僧都の弟子、勝陽坊の真源法橋の師なり⁶。

叡山東塔南谷勝陽房法橋真源という碩学ありけり。…（中略）…さて真源ハ、保延三年正月四日、正念ニして入滅をはりぬ⁷。

真源は、經藏坊阿闍梨嚴算に師事して、東塔南谷の勝陽房（または松養房）に住し、そして保延三年（一一三七）に没したとされる⁸。さらに、鎌倉末頃の作とされる『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論見聞』（『菩提心論見聞』）にも真源についての記述が示されている。

古、東寺法師最朝云者、為⁹奉¹⁰破¹¹根本大師¹²、忝付¹³此実名¹⁴。構¹⁵惡言¹⁶云。傳教大師、只伝¹⁷三種悉地計¹⁸可¹⁹未²⁰受²¹兩部灌頂²²。奉²³遇²⁴弘法大師²⁵受²⁶兩部灌頂²⁷。…（中略）…故勝陽坊真源、聞²⁸此事²⁹捨³⁰頭宗³¹入³²密宗³³、稽古³⁴三箇年、而山門如³⁵此事聞、既及³⁶於奏聞³⁷被³⁸最朝罪科³⁹矣⁴⁰。^{委如破邪弁正記⁹。}

ここでは、『破邪弁正記』にまつわることが記されており、真源は恵什の論難によって密

教を学び始めたことがここに記されている。

この真源を『破邪弁正記』の撰者とする記事は、次に示す『謙順録』・『台祖密目』の二種の目録にもみえる。

○松養坊真源

破邪弁正記二卷(恵什疑_二伝教血脈_一。真源救_二彼難_一)¹⁰

伝教大師五十徳文(勝陽坊真源造。破_レ、_レ、上ノ五云是載_二別卷_一)¹¹。

『謙順録』では、前の『玉印抄』の文を附しており、『破邪弁正記』の著者は真源である
と見做している。また、『台祖密目』では、「伝教大師五十徳文」なる書を真源が造ったこ
とが『破邪弁正記』に載っていることが附記されており、『破邪弁正記』中にもその内容を
確認できる¹²。また、真源は兜率覚超(九六〇—一〇三四)六代の法孫としても知られる¹³。

これらの記述の通りであるならば、『破邪弁正記』は真源によって撰述された書であり、
すなわち薬雋とは真源のことではないかと考えられる。しかし、『台祖密目』・『自在金剛集』
にみえる『破邪弁正記』の附文には、薬雋・真源を並列して記しており、薬雋と真源とを
同一人物と見做すには注意を要する。本論では、『天台宗全書』所収『破邪弁正記』に準拠
して論を進めていくので、「縁起」に従って撰者は薬雋として取り扱う¹⁴。

第三節 『破邪弁正記』にみえる両部について

薬雋撰『破邪弁正記』では、七章二十門に分けて恵什の疑難が破されている。恵什の非
難の要点は、①順曉より受法した「三部三昧耶の印信」は、三種悉知の真言であるため、
最澄の高雄灌頂は、蘇悉地法であること¹⁵、②最澄は、胎金両部の密教を受法ないし伝承
していないこと¹⁶、③海雲・造玄血脈に対する疑難¹⁷の三つに分けられる。①・③に関し
ては、先学の詳しい研究に譲り、本論では、②に的を絞る¹⁸。

『破邪弁正記』中には、恵什の「最澄受法の密教は胎金両部ではない」という主張を随
所にみつけることができるが、その恵什の疑難に対して、薬雋はいくつかの反証を提示し
ている。

- 1 最澄親製の『顕戒論』上¹⁹に、「順曉和上より両部灌頂を授けられた」とはつきり
書いてある²⁰。
- 2 『越州録』²¹や『天台法華宗発願文』(現存せず)に、「五部灌頂に引入し真言法
を授けられた」とあり、五部灌頂とあるのに、どうして両部大法ではないといえ
るのか²²。
- 3 『叡山大師伝』²³に、「順曉阿闍梨より三部三昧耶を伝授された」とあるのだから、
両部伝法灌頂を授かったのは明らかである²⁴。
- 4 義真撰とされる『隨身録』に、最澄親製の『胎蔵灌頂七日行事鈔』・『金剛界灌頂
行事鈔』が収録されており、この両部の儀軌にはその行儀が事細かに詳述されて
いる²⁵。
- 5 『八家伝法灌頂密印口決』(現存せず)中の「伝教大師灌頂密印」に、「胎蔵界伝
法灌頂職位并三身説法密印_云。金剛界伝法灌頂職位并三身説法密印_云。」という

伝がある²⁶。

6 『円澄和上自記』²⁷・光定撰『叡山血脉譜』²⁸ともに「弘仁八年（八一七）緑野寺法華塔前において、円澄和尚は伝教大師から両部伝法灌頂を伝授された」とある²⁹。

7 『叡山血脉譜』中には、円澄の付法の後に『広智阿闍梨付法文』³⁰を載せており、前の円澄と同様に、「最澄は上野下野において、広智に両部伝法灌頂を授け、広智は徳円に両部灌頂を伝授した」とあり、もし最澄が両部を広智に伝えていないとすれば、どうして両部の語が記されているのか³¹。

8 最澄が東国において、両部伝法灌頂を授けた証拠は一つではなく、前の資料に加えて『慈覚大師伝』³²にも述べてある³³。

9 最澄は『相承血脉譜』³⁴中に両部の血脉を挙げているだけで、蘇悉地の稟承は記していない。また、広智・円澄の付法の記等には、ただ両部灌頂を授けたというのであって、蘇悉地の法を授けたとはいっていない³⁵。

10 『広智阿闍梨付法文』には、三悉地の印信が記されているが、これは両部灌頂の印信の書である。それ故に、高雄灌頂も両部灌頂であると推察できるはずだ³⁶。

11 蘇悉地を受法するということは、胎蔵・金剛界の二法を総じて受けなければ受けられないはずであるが、どうして最澄は蘇悉地法のみを稟けたといえるのか³⁷。

12 恵什は『越州録』には両部の儀軌が収録されていないので、最澄は両部灌頂を受けていないという。しかし、最澄は『胎蔵灌頂七日行事鈔』・『金剛界灌頂行事鈔』を製しておりこれは順曉伝授の作法書であるから、最澄は両部を伝授している³⁸。

13 最澄は、両部大法を伝えていないといわれているが、『内証仏法相承血脉譜』³⁹所収の胎蔵・金剛界の血脉中には、『大日経』や『大教王経』の説を引いている。また『隨身録』にも両部に関連する大師所製の書が収められている⁴⁰。

14 最澄は、『頭戒論』等にもあるように順曉より両部灌頂を伝受し、三密の教法を修学したのであって、空海に従って受法灌頂したのではない⁴¹。

15 最澄所製の「両部灌頂行事鈔」の文を調べると、両界の秘要が記されており、どうして順曉以外の師に従ってさらに受法灌頂をする必要があるのか⁴²。

16 もし、最澄が密教を学んでいなかったとすれば、最澄の伝法灌頂とは何を授け、何を受けたというのか。光定の『叡山血脉譜』⁴³にあるように、「円澄が弘仁八年（八一七）に最澄に従って広智と共に灌頂を受けた」というのは、両部灌頂である⁴⁴。

17 「両部灌頂行事鈔」は空海より受法した両部灌頂よりも前に抄記している⁴⁵。

以上おおよそであるが、恵什の「最澄受法の密教は胎金両部ではない」とする疑難に対する薬雋の反論を列ねた。しかしながら、薬雋が反証に用いた資料の中には疑わしきものが多々あり、薬雋の主張に必ずしも従えない。ここでは、その疑義に触れることなく、むしろ薬雋の認識に立脚して反証の根拠を精査し論を進める⁴⁶。

2の恵什の難に対して、薬雋は次のように批判を行っている。

箴喻曰。大師越府表啓之状、既云下詣順曉和上所一、引三入五部灌頂一、現蒙授中真言

法上。焉云^二全不^レ受^二灌頂^一耶。亦云^二五部灌頂^一、豈非^二兩部大法^一耶。如^二汝祖師^一進官錄出^二兩部灌頂^一。亦注^二五部灌頂之言^一也。鄭審則之判、遣唐使之署、既為^二明鏡^一。不^レ可^レ生^レ疑。汝、乍^レ見^レ之何不^二覺知^一哉。

天台法華宗發願文^二云^一 叡山大師撰

四月十一日、歴^二於越州城^一向^二龍興之寺順曉和上邊^一、稟^二五部灌頂^一、兼写^二真言教^一云。

箴諭曰。五部灌頂之言、此中亦分明也^{4.7}。

この箇所で葉雋は、『越州録』^{4.8}や『天台法華宗發願文』（現存せず）には、「五部灌頂に引入し真言法を授けられた」とあり、五部灌頂といっているのに、どうして兩部大法ではないといえるのかと主張している。さらに、「大師、在^二越府^一遇^二順曉闍梨^一、受^二五部灌頂^一、伝^二三密教法^一」^{4.9}、「叡山本師、随^二順曉闍梨^一、伝^二受兩部灌頂^一、習^二学三密教法^一」^{5.0}と記され、葉雋は、ここにおいても五部灌頂と兩部灌頂とを同義に扱っていることがわかる。前述したように、順曉から最澄への授法は、『顯戒論縁起』所収の付法文にみえる「毘盧遮那如来三十七尊曼荼羅所^{5.1}」やここに引かれる「五部灌頂」の語から金剛界系の密教であったと考えられている^{5.2}。当然、葉雋の時代には、胎藏三部の考えは存在していたはずである。それにもかかわらず、何を以て五部灌頂と兩部灌頂を同義と考えたのであろうか。

その理由として、最澄は、『顯戒論』^{5.3}では「兩部灌頂」と記しているも、『越州録』では「五部灌頂」と表記し、これらを明確に区別していなかった。葉雋もそれに準じたと考えられる。これに関して、岩崎日出男氏は、『大日経』や『蘇悉地経』の訳者である善無畏の密教の系譜の相承は、灌頂儀礼を伴わない密教の付法伝法であったと考え、それ故空海が行った胎金兩部の灌頂においては、いずれも五部が用いられ、それは最澄においても同様であったと述べている^{5.4}。この意見を首肯すれば、最澄在世時には、胎藏も金剛界も五部と見做されていたと考えられる。しかし、葉雋の立場に立つて考えれば、『破邪弁正記』中で葉雋は五部灌頂とは兩部灌頂であると明記していないし、また先師がそれを述べているわけではないので、我々はこうした岩崎氏の指摘等をその傍証の一に留めておくことが妥当と考える。

また、『破邪弁正記』において、最澄の密教の受法相承の正当性を主張するための資料の一として、度々引用される『灌頂七日行事鈔』に、以下の文がみられることを挙げる必要がある。

定知^レ処已至^二其白月一日平旦^一、阿闍梨与^二諸弟子^一香湯洗浴着^二新淨衣^一、将^二諸香華^一一至^二其処所^一、其阿闍梨、執^二金剛杵^一処^二壇地心^一、面^レ西安立、応^下当問^二彼諸弟子^一言上。汝等、必能決定授^二我諸仏等說金剛頂^一一切如来真實攝大乘現証大教王経・大曼荼羅瑜伽念誦法^一。不^レ生^二疑惑^一不^三問^二時諸弟子^一、一時答言。我某甲等、於^二諸仏等說金剛頂^一一切如来真實攝大乘現証大教王経・大曼荼羅瑜伽念誦法^一、決定誠信不^レ生^二疑惑^一三答^{5.5}。

阿闍梨、手把^二香炉及淨水等^一、用^二成弁諸事真言印^一其淨水呪三七遍而執^二香炉^一、**誦**跪焼^レ香、啓^二白十方一切諸仏如来・金剛界五部一切如来・十方一切金剛一乘一切如来・真實攝大乘現証大教王大曼荼羅瑜伽念誦秘密法藏・十六大菩薩・四波羅蜜菩薩・四内供養天・四外供養薩埵・賢劫一千大菩薩・一切金剛・諸天・龍神及與一切冥聖業道・

一切神祇・十二大神・諸神鬼等¹。悉誠知。我、今請²此地³。是我方地。……⁵⁶

前の文は「問答」の箇所、阿闍梨と弟子とが問答を行い、この灌頂での教えは諸仏等が説く教えであり、受法者は決して疑いを持つことがないようにと確認を行う箇所であるが、ここには金剛界系の経軌の名が列ねられている。後の文は「啓白」の箇所、この壇法を修する阿闍梨が、「成弁諸事真言印」を用いて浄水を呪し、香炉を執り香を焼き、この修法に關係する諸仏等に趣旨や所願を宣べている箇所である。ここにおいても、金剛界三十七尊に關連する諸尊の一部を確認できる。これらの箇所は、『陀羅尼集經』の引文であり、『陀羅尼集經』本文には金剛界系に相當するこれらの文は無いが、『灌頂七日行事鈔』は胎藏系の書としながらも、これらの金剛界系の記述が随所にみられるのである。

薬雫が『灌頂七日行事鈔』を閲覽していたことは、『破邪弁正記』の中に、「檢⁴祖師所製兩部灌頂行事鈔文⁵。兩界秘要既窮⁶源底⁷。5.7」とみられる一文からも明らかであり、胎藏であつても五部の思想が(薬雫によると)最澄所製とされる書に記されていることから、薬雫は五部灌頂を兩部と同義と見做したと推察できる。

ところで、薬雫は、五部灌頂だけではなく、先の十七の批判中の3・7・9・10にも挙げたように、「三部三昧耶の印信」でさえも兩部灌頂の印信と見做している。「三部三昧耶の印信」は、安然が『八家秘録』の蘇悉地部に三種悉地法を著録して以来、蘇悉地法との關連性が指摘されることも多々ある。しかし、薬雫は『広智阿闍梨付法文』中、広智から徳円への付法文に、「遮那三密開⁸於兩部⁹。5.8」とあることから、この印信が兩部の印信であると述べるのである。この付法文は天長七年(八三〇)の記であり、少なくとも、この付法文が記された年代には、最澄が順曉より受法した密教は兩部であると考えられていたことが推察できる。

以上のことから、最澄自身は五部灌頂と兩部灌頂を区別して用いていたわけではないが、最澄所伝の密教は兩部であるという伝統を継承した薬雫は、『破邪弁正記』中で、胎藏系といえども五部の思想が介在している『灌頂七日行事鈔』を『金剛界灌頂行事鈔』と併せて兩部伝授の証の一として見做し、これらの書を順曉次第伝授の作法書であると主張している。

第四節 『灌頂七日行事鈔』の成立年次について

『破邪弁正記』中では、『灌頂七日行事鈔』は、「胎藏灌頂七日行事鈔」と称され、胎藏系の儀軌とされ、『兩部灌頂行事鈔』の一として『金剛界灌頂行事鈔』と併せて用いられている。

前述したように、薬雫は『灌頂七日行事鈔』を「大師親製」・「祖師所製」等と定めて、最澄の撰著であることを強調している。それは、義真撰とされる「先大師隨身録」なるものにも、「胎藏灌頂七日行事鈔卷上¹⁰ 胎藏卷中¹¹ 胎藏卷下¹² 胎藏卷¹³」と著録されているところに「叡山」とあることから導かれている。古来、「叡山」は「最澄撰」と扱うものとされていたため、薬雫がこの目録から『灌頂七日行事鈔』を最澄所製と認識したことはやむをえない。だからといって、短絡的に最澄撰となすのは危険である。そこで、「兩部灌頂行事鈔」なる書の名が初めてあらわれた『破邪弁正記』において、薬雫は「胎藏灌頂七日行事鈔」乃至『灌頂七日行事鈔』を、何を以て真撰としたのかその根拠を探索する。

『灌頂七日行事鈔』が、最澄の撰述であるならば、『破邪弁正記』以前に、『灌頂七日行事鈔』に関する何らかの情報が何処かに存したはずである。『破邪弁正記』巻上には「大師、親製二両部灌頂行事鈔等十有余卷」。其本、多分流二布山院。一。両部灌頂行儀委悉更過レ此乎。以レ是、応レ知、祖師所伝正是両部也⁶⁰。」とあり、『灌頂七日行事鈔』がすでに比叡山中に流布されていたことが記されている。しかし、円珍の私録である『山王院藏書目録』や安然の『八家秘録』等の台密祖師らの目録類にその名が記載されていない事実を考えると、それ以降に著された可能性も高い。

『破邪弁正記』下「制叙問答決疑門」には、『灌頂七日行事鈔』に焦点を当てた問答が記されている。

記者、私云。設レ彼伏難^一。叡山大師製レ彼両部灌頂行事鈔等^一者、応^下是從^二於高野大師^一得^レ受^二両部灌頂^一之後、方抄^中記之上。何得^レ信^下於稟^三承順曉^一製^中作^二両部伝法灌頂之儀則^上耶。

今為通云。其高野師資、在^レ前已決断。全無^二其理^一。何勞^二会釈^一。況汝所^レ設難、太以可^レ咲。汝之所^レ言過失非^レ一。所謂如^レ汝說^一者、大師、於^二彼弘仁三年十二月十五日^一、於^二高尾寺^一、得^レ沐^二持明灌頂^一。始習^二十八道教、梵字^一難^レ解。方生^三退屈^一、於^レ後不^三復遂^二其學業^一云云。既許^三纒受^二持明灌頂^一、未^レ受^二大部伝法灌頂^一。又言。未^レ畢^二十八道^一不^レ伝^二両部法^一。豈^三自不^二伝受^一。自然悟解、方製^二両部灌頂儀式^一耶。汝、都未^レ檢^二彼行事鈔委細之相^一、致^二此謬難^一也^是。又、於^二顯戒論等処^一之文^一、明了見^三彼順曉闇梨伝^二授^二両部灌頂^一者乎^是。又、若猶不^レ信^二彼所製^一者、円澄・広智授^二於^二両部灌頂^一如何。故知、大師所^レ記、応^二是順曉付法之流^一。不^レ可^レ言^二是高野之伝^一是⁶¹。

これによると、記する者、私に云く、「最澄が両部灌頂行事鈔等を製した」というのは、順曉より稟承したことなく、空海に従って両部灌頂を受け得たことを抄記したのではないか、という問いに対して、菓雋は三つの批記を残している。それは、一に「最澄は、弘仁三年十二月十五日に、高雄寺において、持明灌頂を受法したものの、十八道の修法や、梵字受学が困難であったためにその学業を学べなかつた」と指摘されるが、仮に持明灌頂を受法したとしても、途中で中絶したのであれば、大部の伝法灌頂は受法していないわけで、どうして受法していない灌頂についてそのことを製することができるのか。二に『顯戒論』に、両部を順曉より受法したことが記されている。三に円澄や広智に授けた両部灌頂とは何なのか、である。ここに示された論証は、『破邪弁正記』中に幾度となくみられる内容であり、菓雋の検討内容は、『灌頂七日行事鈔』を批することはない。

「記者」という表現は、『破邪弁正記』において、この箇所での使用であり、「記者」なる人物が誰を指すのか定かではない。「記者」が恵什であるとするならば、『灌頂七日行事鈔』は、真言側にも流布されていたと考えられよう。しかし、『灌頂七日行事鈔』の内容を知っているのであれば、(この作法書は菓雋も述べているが)『大日経』・『大日経疏』・『蘇悉地経』・『陀羅尼集経』十二に基づいた七日作壇法であることが容易にわかる。作法のほとんどは『陀羅尼集経』十二に依るもので、いわば『陀羅尼集経』十二に他の胎藏系軌が付随している書である。『大日経』に基づく書であるならばまだしも、『陀羅尼集経』に基づいた作法書を空海に従って受法した灌頂であると難することは考えられない。こうした経緯からすると、「記者」とは菓雋と考えるのが妥当であろう。

また、葉雋は「汝都未_レ檢_レ彼行事鈔委細之相」。致_二此謬難_一也」と、恵什が「兩部灌頂行事鈔」を全く調べていないと評しているが、もし真言側にもすでに『灌頂七日行事鈔』が伝わっていたのであれば、やはり『灌頂七日行事鈔』について何らかの疑難があっても良いはずである。かかる観点から、この問答において、「記者」とは葉雋自身と考えるのが妥当であろう。葉雋は自問自答形をとって論を進めている。『灌頂七日行事鈔』の名が初めてあらわれたのが『破邪弁正記』であることを鑑みれば、その成立に葉雋の何らかの関わりがあったのではと見做さざるをえない。しかし、葉雋が関与したとすれば、『灌頂七日行事鈔』の中に『陀羅尼集經』由来の作法が導入された意図が理解できない。葉雋が『破邪弁正記』を撰著する以前に『灌頂七日行事鈔』に関連する何らかの記録を確認することができないのだろうか。

大原の長宴（一〇一六—一〇八二）が池上皇慶（九七七—一〇四九）から伝承された台密の口決集である『四十帖決』にそれに関連するであろう問答をみつけることができる。

問。金剛頂經有_二七日作壇法_一耶。

答。不_レ説_レ之。但、用_二七日作法_一、准_二胎藏_一用耳^{6.2}。

『金剛頂經』に七日作壇法はあるのか、という問いに対して、『金剛頂經』ではこれは説かず、七日作法を用いるとは、胎藏に准じて用いるのみであると答えている。さらに、長宴も次のように述べる。

私案_レ之、掘_レ地、治_レ地、塗拭等事、全如_二台藏_一。而七日作法、金界不_レ説_レ之^{6.3}。

皇慶の決と同様に金剛界系経典には七日作法は説かないと述べている。『灌頂七日行事鈔』と対の『金剛界灌頂行事鈔』には、『灌頂七日行事抄』と同様、七日に区切った作法が説かれている。『金剛界灌頂行事抄』は、『略出経』や『三摩地法』等の金剛界系経典に依った作法書とされるが、現存の金剛界系経典の中に、七日に区切られる作法は確認されない。それにもかかわらず、『金剛界灌頂行事鈔』には、皇慶・長宴の主張とは意に反す作法が説かれている。つまり、もし『四十帖決』をまとめる段階において『金剛界灌頂行事鈔』なる書が存在していたならば、山門にも流布されていたはずであり、本書について何らかの説明が『四十帖決』の中でなされて然るべきであるが、まったくなされていない。また、（金剛界系にもかかわらず七日作壇法が説かれている）『金剛界灌頂行事鈔』に関するかかる素朴な疑義のもとにこの問いがなされたと仮定しても、『金剛界灌頂行事鈔』の撰者とされる最澄の名は何処にもみられない。したがって、『金剛界灌頂行事鈔』を最澄撰とするこ

とには問題がある。

しかし、『四十帖決』にみられる主張を尊重すれば、『灌頂七日行事鈔』にみられる『陀羅尼集經』の引用に、なぜ金剛界系の諸尊等を配したのかなか一層の疑義を感じざるをえない。

『陀羅尼集經』を金剛界系と結びつけて考えている資料として、まず最澄撰『内証仏法相承血脈譜』所収「雜曼荼羅相承師師血脈譜」にみえる「金剛道場大牟尼尊」から『陀羅尼集經』の訳者である阿地瞿多に続く血脈が当然挙げられるだろう^{6.4}。『陀羅尼集經』は、「金剛大道場經」の抄訳であり、そのため「金剛道場大牟尼尊」から法脈が結ばれている。そして、「金剛」という字を冠しているため、金剛界に通じるものであると考えたのではないかと推量できる。しかしながら、最澄は当時、『陀羅尼集經』を金剛界系の経軌に関連づ

けていたとは考えたとは言い難い。もし、『陀羅尼集經』が金剛界系と結びつくのであれば、その訳者たる阿地瞿多を金剛界の血脈に加えたはずであるが、「雜曼荼羅相承師師血脈譜」にその名を列ねている。『内証仏法相承血脈譜』は、弘仁十年（八一九）に撰述され、翌年に『顯戒論』とともに朝廷へ提出されたものである。つまり、空海による高雄灌頂の後に撰述されたのである。空海は、『三学録』において、『陀羅尼集經』を雜部に分類しているため、「胎藏金剛兩曼荼羅相承師師血脈譜」が空海に則って製されたと考えられるのであれば、最澄は『陀羅尼集經』を雜部の經典であると意識していた可能性は高い⁶⁵。

次に、安然の『教時問答』（『真言宗教時義』）四を挙げる。

謂、陀羅尼集經是出_二金剛大道場經_一、大明呪藏之少分。故可_レ言_二金剛界法_一。然、其經中明_二十八道_一、可_レ言_二蘇悉地法_一。今、以_三行法相_二涉兩界_一、分為_二一藏_一⁶⁶。

ここで安然は、『陀羅尼集經』は、金剛大道場經なるものより出づる大明呪藏の少分であるから、（金剛の名があることから）金剛界法というのであるが、『陀羅尼集經』中には安然自身が蘇悉地法の紀綱となすとする十八道が明示されているから、この經典にみえる修法は蘇悉地法であるとし、その行法は胎藏金剛部に涉っていると説明している。最澄以後、安然に至るまで『陀羅尼集經』について詳述している書は一つもないが、この記述からは『陀羅尼集經』が金剛界法とも考えられていたかの如くみてとれる。安然にとつては、蘇悉地法と並べて『陀羅尼集經』にみえる行儀は兩部の成就に不可欠な經典であったと理解される。それは、『八家秘録』中に、『陀羅尼集經』を「蘇悉地灌頂本經法⁶⁷」や「蘇悉地同類法⁶⁸」に収録していることから明らかである。つまり、安然は、『陀羅尼集經』を金剛界系ないし兩部に涉る經典と捉えていたのだろう。葉雋も、『陀羅尼集經』について、最澄が『越州録』以外にも『見定録』や『隨身録』に密教に関する典籍を伝受していることを述べる箇所において「大日經・略出經・陀羅尼集經等、從_レ本編入_二開元・貞元入藏錄中_一」⁶⁹と、『大日經』・『略出經』・『陀羅尼集經』等は、『開元録』や『貞元録』にすでに収録されているから、請来していても名を出していないと述べている。ここに、『大日經』や『略出經』と並べて『蘇悉地經』ではなく、『陀羅尼集經』の名を出しているということは、葉雋は、まさに『教時問答』にあるように『陀羅尼集經』が兩部に涉る經典であることを認識していたと考えられる。

つまり、安然以降、『陀羅尼集經』は兩部に涉る經典として認識され位置づけられていた。このことは、次の『四十帖決』からもうかがえる。

兩部并集經

胎藏金剛界、唯約_二自行_一修行理智因果_一也。陀羅尼集說、化他方便耳_云⁷⁰。

ここでも、兩部と『陀羅尼集經』とが並記されているのであり、安然の説を受けていることが確認される。

第三章で述べたが、『灌頂七日行事鈔』には、「依_二軍荼利部結界・蘇悉地五衛結界・胎藏曼荼羅_一云⁷¹。」という箇所がある。「軍荼利部結界」は、『陀羅尼集經』十二等に説かれる作法の一であり⁷²、「蘇悉地五衛結界」とは、『蘇悉地經』下「供養品」に説かれる五種の護衛結界法である。十八道と直接関係する「蘇悉地五衛結界」（特に金剛墻・金剛橛）と並べて『陀羅尼集經』を配している点は、まさに『教時問答』にみえる『陀羅尼集經』の理解を踏襲しているといえる。

第五節 結言

以上論じてきたように、「両部灌頂行事鈔」特に『灌頂七日行事鈔』の成立は、『破邪弁正記』の精査および『灌頂七日行事鈔』の取り扱われ方からすると、少なくとも安然以降であったと推察せざるをえない。一方、最澄は「雜曼荼羅相承師師血脉譜」に『陀羅尼集經』の訳者である阿地瞿多を列ねている。このことは、間接的ではあるが『陀羅尼集經』が後世における『灌頂七日行事鈔』の成立に影響を及ぼしたとの暗示ともとれる。

《註》

- 1 『破邪弁正記』二卷には、いくつかの諸本が存する。『渋谷目録』によると、
 - ① 天全所収 二卷（底本、伊勢西来寺竹円房蔵写本。対校本、東京天王寺福田堯顯師蔵写本。
 - ② 日光天海蔵 二卷、平安末期写本。
 - ③ 生源寺蔵 一卷（巻上）、写本。
 - ④ 無動寺蔵 文化二年（一八〇五）真超写。
 - ⑤ 曼殊院蔵 二卷一冊、徳川末期写本。
 - ⑥ 菊岡師所蔵 二卷一冊、享保三年（一七一八）写本。

以上六本が挙げられる。本論では『天台宗全書』巻七所収『破邪弁正記』を中心に論じていく。

- 2 『続天台宗全書目録解題』五八頁上〜五九頁上参照。
- 3 時に天仁二年己丑臘月黒半九日申午、延暦寺天台宗兼学真言・止観両業末葉、根本正法蔵唐院真言蔵下司、釈葉雋、謹んで此の記を疏す。〔天全〕七・一八九頁下。）
- 4 東寺中古学者恵什阿闍梨、頻りに疑難を加う。山門の真源法橋、破邪弁正記中にて聊か会通を述すと雖も、更に以て理に叶わず。（仏乗院蔵『玉印抄』二・十三丁右。）
- 5 仁和寺恵什阿闍梨、伝教大師の御相承血脉譜を疑い難ず。松養坊真源法橋、彼の難を救わんが為に破邪弁正記二巻を製し了んぬ。（仏乗院蔵『玉印抄』十・六丁左。）
- 6 『續天全』、神道1・四四七頁下〜四四八頁上。
- 7 『續天全』、神道1・四四七頁下〜四四八頁上。
- 8 他に同取意の伝記に、『日吉山王利生記』七が挙げられる（『續群書類従』二下・六八九頁下〜六九〇頁上）。
- 9 古に、東寺法師最朝と云う者、根本大師を破し奉らんが為に、忝くも此の実名を付す。悪言を構えて云く。伝教大師、只だ三種悉地計りを伝えて未だ両部灌頂を受けざるべし。弘法大師に遇い奉りて両部灌頂を受く。：（中略）：故に勝陽坊真源、此の事を聞き顕宗を捨て密宗に入り、稽古すること三箇年して、山門此くの如きの事を聞きて、既に奏聞に及び最朝の罪科を被らん。委くは破邪弁正記の如し〔大正〕七〇・四八頁中。）

10 『仏全』一・一四九頁上。

11 『仏全』二・二一六頁上。

12 『破邪弁正記』上「叡山大師德行巨多。今略抽レ要粗過三五一（彼大師徳具載レ別巻）。此中雖レ要恐レ繁且止。」〔天全〕七・一九二頁上。）

13 『望月仏教大辞典』六「諸宗派系譜」三四頁参照。

14 真源については、野本覚成「密教の血脉相承の論争〜『密教伝来脈譜正訛勘決』梶宝撰一卷を中心に

『四天王寺』五二八号、一九八五)では、薬雋と別人であることが述べられる。また、上杉智英「真源撰『往生要集裏書』について」(『仏教大学総合研究所紀要』二〇〇六(一)、二〇〇六)においても同一人物であるか立証が困難であることが記されている。

15 『天全』七・一九三頁上〜二〇二頁上。
16 『天全』七・一九五頁上〜二〇九頁上、同・二二四頁上〜下、二二七頁上〜二二八頁上、二二二頁上、二二六頁上〜下。

17 『天全』七・二二一頁下〜二二三頁下。

18 破邪弁正記』に関する研究を列ねると、木内堯史『天台密教の形成』(溪水社、一九八四)、水上文義『台密思想形成の研究』(春秋社、二〇〇八)では、本書と『天台霞標』とに引用される光定撰『相承血脈』や広智・徳円の印信についての知見が述べられる。野本覚成『密教の血脈相承の論争』『密教伝来脈譜正訛勘決』梶宝撰一卷を中心に『四天王寺』五二八号、一九八五)では、「海雲記」と「造玄記」に関する一考に本書が引用される。福井康順『内証仏法相承血脈譜』新義(承前)、『天台学報』三〇、一九八七)、養輪顕量「光定と『内証仏法相承血脈譜』」(『印度学仏教学研究』三八、一九九〇)では血脈譜と光定との関係について述べられている。三崎良周『台密の理論と実践』(創文社、一九九四)では、三種悉知真言が蘇悉地真言とされた年代の推定に本書を引用している。

19 『伝全』一・三五頁。

20 『天全』七・一九五頁上〜下。

21 『大正』五五・一〇五九頁下〜一〇六〇頁上。

22 『天全』七・一九六頁上〜下。

23 『伝全』五付・一九頁。

24 『天全』七・一九七頁下。

25 『天全』七・一九八頁上。

26 『天全』七・一九八頁下。

27 『天台霞標』(『伝全』一・二五・一五八頁上)に同内容の文が収録されている。

28 『天台霞標』(『伝全』一・二五・一六〇頁上〜下)所収『相承血脈』にも引用されている。

29 『天全』七・二〇〇頁上。

30 『日藏』四一・一四五頁上〜下。

31 『天全』七・二〇〇頁下。

32 『續天全』史伝2・六〇頁下。

33 『天全』七・二〇〇頁下。

34 『内証仏法相承血脈譜』(『伝全』一・二三七頁〜二四四頁)か。

35 『天全』七・二〇〇頁下〜二〇一頁上。

36 『天全』七・二〇一頁下。

37 『天全』七・二〇二頁上。

38 『天全』七・二〇四頁上〜下。

39 『伝全』一・二三七頁〜二四四頁。

40 『天全』七・二〇五頁上〜二〇六頁上。

41 『天全』七・二二四頁下。

42 『天全』七・二二四頁下。

43 『天全』七・一九九頁上〜二〇〇頁上。

44 『天全』七・二二二頁上。

45 『天全』七・二二六頁上〜下。

46 例えば、『内証仏法相承血脈譜』中「胎藏金剛阿曼荼羅相承師師血脈譜」について、三崎博士は、最澄は弘仁三年（八二二）十一月と十二月に金・胎の結縁灌頂を空海から受けることで、初めて金胎別授の灌頂のことと、両部の密教の綱格とを知ったので、その故に順曉からの付法を両部として、それぞれの伝法の血脈を作ったと評している（三崎良周『台密の理論と実践』（創文社、一九九四）九五頁）。

また、水上博士は、光定の『相承血脈』には光定等が後で得たであろう密教の知識に基づいたと考えられる部分や、あるいはやや錯雑した信憑性に欠ける記述がみられると位置づけている（水上文義『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）三六九頁）。他にも疑義を生ずる箇所が多々存する。

47 箴諭して曰く。大師越府表啓の状、既に順曉和上の所に詣り、五部灌頂に引入し、現に真言法を授くること蒙ると云う。焉んぞ全く灌頂を受けざると云うや。亦た五部灌頂と云うこと、豈に両部大法に非ずや。汝が祖師の如き進官録に両部灌頂を出だす。亦た五部灌頂の言を注す。鄭審則の判、遣唐使の署、既に明鏡たり。疑いを生ずべからず。汝、之を見乍ら何ぞ覚知せざるや。

天台法華宗発願文に云く歎山大師撰。

四月十一日、越州城を歴て龍興の寺順曉和上の邊に向かい、五部灌頂を稟け、兼ねて真言教を写す、と云。

箴諭して曰く。五部灌頂の言は、此中に亦た分明なり。『天全』七・一九六頁下。）

48 『大正』五五・一〇五九頁下〜一〇六〇頁上。

49 大師、越府に在りて順曉闍梨に遇い、五部の灌頂を受け、三密教法を伝える。『天全』七・一九一頁上。）

50 叡山本師、順曉闍梨に随いて、両部の灌頂を伝受し、三密の教法を習学す。（天全七・二二四頁下。）

51 『伝全』一・二七九頁。

52 三崎良周『台密の理論と実践』十一頁（創文社、一九九四）、大久保良峻『天台学探尋』六八頁〜六九頁（法蔵館、二〇一四）等。

53 『伝全』一・三五五頁。

54 岩崎日出男「順曉から最澄への密教授法について―入唐時、唐土における密教伝播の状況からみたその内容と問題点―」（大久保良峻教授還暦記念論集刊行会『天台・真言諸宗論攷』二〇一五）二二八頁〜二二二頁。

55 定んで処を知り已て其れ白月一日の平旦に至り、阿闍梨と諸弟子と香湯もて洗浴し新浄衣を着し、諸の香華を將て其の処所に至り、其の阿闍梨は、金剛杵を執りて壇地の心に処き、西に面して安立し、応当に彼の諸の弟子に問いて言うべし。汝等、必ず能く決定して我が諸仏等の説きたまえる金剛頂一切如来真実攝大乘現証大教王経・大曼荼羅瑜伽念誦法を授く。疑惑を生ぜざるや不や三問。時に諸の弟子は、一時に答えて言く。我某甲等は、諸仏等の説きたまえる金剛頂一切如来真実攝大乘現証大教王経・大曼荼羅瑜伽念誦法に於いて、決定して誠信して疑惑を生ぜざらん。『伝全』四・三九九〜四〇〇頁。）

56 阿闍梨は、手に香炉及び浄水等を把り、成弁諸事の真言印を用いて其の浄水を呪すること三七遍して香炉を執り、跏趺して香を焼き、十方一切の諸仏如来・金剛界五部一切如来・十方一切金剛一乗一切如来・真実攝大乘現証大教王大曼荼羅瑜伽念誦秘密法蔵・十六大菩薩・四波羅蜜菩薩・四内供養天・四外供養薩埵・賢劫一千大菩薩・一切金剛・諸天・龍神及與一切冥聖業道・一切神祇・十二大神・諸神鬼等に啓白す。悉く誠知したまえ。我は、今此の地を請う。是れ我が方地なり。……『伝全』四・

四〇〇頁。）

57 祖師の製する所の兩部灌頂行事鈔の文を検むるに、兩界の秘要は既に源底を窮む。〔『天全』七・二二四頁下。〕

58 『日藏』四一・一四五下。

59 『天全』七・一九八頁上。

60 大師は、親しく兩部灌頂行事鈔等十有余卷を製す。其の本は、多く分かれたれて山院に流布す。兩部灌頂の行儀（が）委悉なること更に此れに過ぎんや。是を以て、応に知るべし、祖師の所伝は正しくは是れ兩部なり、と。〔『天全』七・一九八頁上。〕

61 記する者、私に云く。彼の伏難を設く。叡山大師が兩部灌頂行事鈔等を製すとは、応に是れ高野大師に従つて兩部灌頂を受くることを得るの後に、方に之を抄記すべし。何んぞ順曉に稟承して兩部灌頂の儀則を製作すと信ずることを得んや。

今為めに通じて云く。其れ高野の師資は、前きに在て已に決断す。全く其の理無し。何ぞ会釈を勞せん。況や汝が設くる所の難、太だ以て咲きつべし。汝の言う所の過失は一に非ず。所謂汝が説の如くんば、大師、彼の弘仁三年十二月十五日に於いて、高尾寺に於いて、持明灌頂に沐することを得。始め十八道の教、梵字を習うも解し難し。方に退屈を生じ、後に於いて復た其の学業を遂げず云。既に纔に持明灌頂を受くることを許すも、未だ大部の伝法灌頂を受けず。又云く。未だ十八道を畢らず兩部の法を伝えず。豈に応に自ら伝授せざるべしや。自然に悟解し、方に兩部灌頂の儀式を製せんや。汝、都て未だ彼の行事鈔の委細の相を檢めず、此の謬難を致す是。又、頭戒論等の処処の文に於いて、明了に彼の順曉闍梨より兩部灌頂を伝授することを見る者をや是。又、若し猶お彼の所製を信ぜざらんは、円澄・広智に兩部の灌頂を授くるは如何。故に知んぬ、大師の記する所は、応に是れ順曉付法の流なるべし。是れ高野の伝と言うべからず是。〔『天全』七・二三六頁上〜下。〕

62 問う。金剛頂經に七日作壇法有りや。
答う。之を説かず。但し、七日作法を用いること、胎藏に准じて用いるのみ。〔『大正』七五・八六四頁下。〕

63 私之を案ずるに、地を掘り、地を治し、塗拭等の事、全く台藏の如し。而も七日作法は、金界に之を説かず。〔『大正』七五・八六四頁下。〕

64 『伝全』一・二四四〜二四七頁。

65 『仏全』二・三〇七頁上。ただし、「雜曼荼羅相承師師血脈譜」にみえる菩提流志訳『一字頂輪王經』の同本異訳である不空訳『菩提場所説一字頂輪王經』は金剛界系に分類されている。単に不空訳を金剛界系に収めただけであるかもしれないが、注意が必要である。

66 謂く、陀羅尼集經は是れ金剛大道場經に出づる、大明呪藏の少分なり。故に金剛界法と言うべし。然れども、其の經中に十八道を明かし、蘇悉地法と言うべし。今、行法は兩界に相渉するを以て、分かちて一藏と為す。〔『大正』七五・四四一頁上。〕

67 『大正』五五・一一一四頁中。

68 『大正』五五・一一一六頁下。

69 大日經・略出經・陀羅尼集經等、本従り編じて開元・貞元入藏の録中に入れり。見定録第一卷中に載せり故に請来すと雖も名を出さず。〔『天全』七・二〇九頁上。〕

70 兩部并集經

胎藏金剛界、唯だ自行に約して理智因果を修行す。陀羅尼集の説は、化他の方便なるのみ云。〔『大正』七五・八七五頁下。〕

71 軍荼利部結界・蘇悉地五衛結界・胎藏曼荼羅に依ると云う。〔伝全〕四・四〇一頁。）
72 『大正』十八・七九三頁上、同・八一〇頁上、同・八一〇頁上、同・八五一頁下、同・八六〇頁中。同・八八
六頁上、中等。

第五章 台密における『陀羅尼集經』の依用について―『息心抄』を中心に―

第一節 序言

『陀羅尼集經』は、台密において、最澄が『内証仏法相承血脈譜』中、金剛道場大牟尼尊から始まる「雜曼荼羅相承師師血脈譜」に本經の訳者である阿地瞿多の系譜が列ねられていることに始まり、後に安然が『八家秘録』や『教時問答』においてこの經典を採り上げたこと等から、その後の台密事相に少なからず影響を及ぼすほど、重要な經典である。しかし、安然は『陀羅尼集經』における修法に関する具体的な記録を遺していない。

また、『陀羅尼集經』は、従来最澄撰とされた『灌頂七日行事鈔』の成立に、その修法が基盤となったことが記されている。しかし、前章までに論じてきたように、『灌頂七日行事鈔』は、最澄の撰著とするには疑わしく、少なくとも安然以降に撰述された書であると推定される。安然以降の撰著かどうか、より詳細に解明するには『灌頂七日行事鈔』の成立過程の追跡が必要と考え、その基となった『陀羅尼集經』の依用状況について調査を進めていきたい。

かかる観点から、本章では、台密において『陀羅尼集經』に由来する何らかの修法が行われたかどうかに着目して、『陀羅尼集經』の訳者とその周辺、そして、日本における依用を奈良時代からみていき、『灌頂七日行事鈔』の成立年代を類推する有力な根拠と成り得るような件の資料を精査し、その考究を試みた。

第二節 『陀羅尼集經』について

第一項 經典の構成

『陀羅尼集經』は、唐永徽四〇五年（六五三〜六五四）に阿地瞿多によって訳された經典で、全十二巻で、諸々の仏等の經軌を集約し構成されている。その經軌中に陀羅尼呪・印契・壇法・画像法等が説かれている。例えば、巻一は「大神力陀羅尼經釈迦仏頂三昧陀羅尼品一卷於大部巻第一」と題して、その中に、数種類の印呪・曼荼羅法・画像法・壇法が説かれ、巻三では「般若波羅蜜多大心經」という經典の中に、画像法・壇法、そしていくつかの印呪が説かれている。また、題されている印契や壇法以外にもこの經文中にはいくつかの作法が説かれている。

本經は、巻一・二に仏部、三から六に菩薩部(巻三は特に般若)、七から九に金剛部、十・十一に天部、十二に灌頂普集會壇法というように、各尊格がそれぞれの巻ごとに配され、それぞれに関する作法が説かれている。經と名づけられているが、『陀羅尼集經』中に様々な經典や作法が含まれているため、この經典は儀軌的な性格を有していることがうかがえる。

第二項 『陀羅尼集經翻訳序』

『陀羅尼集經』の漢訳者である阿地瞿多の伝記は、『仏説陀羅尼集經翻訳序』に詳述される¹。阿地瞿多とは、「有高徳沙門」。厥号「阿地瞿多」。是中天竺人也²。」と、中インドから来た訳経僧である。さらに、阿地瞿多の経歴は次のように記される。

法師聰慧超群。徳邁過人。弱冠慕道、歴五竺而尋友。低心躍歩而諮法要¹。故能精練五明¹、妙通諸部¹。意欲下運西域之風水¹、潤中東夏之渴仰^上。判身許于險難。務存弘道之心¹。跋山巖而不疲。涉沙流而無倦。頂戴尊經¹、向斯漢地¹。永徽二年正月、屈于長安¹。奉勅住慈門寺¹。³。

阿地瞿多は五明等様々な仏教の諸学に通じ、若くして仏道を志し、五天竺を歴訪した。五竺とは五天竺のことで、インドを東西南北と中央の五つに分けた称のことである。五明とは、インドで用いられていた学問の分類法である。仏教では、仏教徒の学ぶ内と、世俗一般の外とに分けられ、内の五明は、声明・工巧明・医方明・因明・内明、外の五明は、声明・工巧明・医方明・呪術明・符印明とされている。そして、永徽二年(六五二)の正月に経典を持って苦難をかえりみず長安に入り、勅命を受けて慈門寺に住した。

そして、『陀羅尼集經』に関する修法を行った実績が記されている。

但法師、含珠未吐。人、莫別于懷珍¹。雅辯既宣¹、方知有宝^云。故能決衆疑¹、言皆当理。然則、経律論業伝者非¹。唯此法門未興¹、斯土¹。所以丁寧三請

方許壇法¹。三月上旬、赴慧日寺浮図院内¹、法師自作普集会壇¹。大乘琮等一十六人。爰及英公・鄂公等一十二人、助成壇供¹。同願。皇基永固。常臨万国¹。庶類同沾。皆成大益¹。其中靈瑞。恐繁不述。余、慶逢此法¹。不勝忻躍¹。躬詣翻經所¹、悌翻広本¹。屢值事闕。不^レ及陳請¹。恐^レ幻質遷謝、失于大利¹。⁴。

この中で、阿地瞿多は、永徽二年(六五二)三月上旬に、英公・鄂公(玄悰・李世勣)等十二人の要請によって、慧日寺浮図院で灌頂を修したことが記され、(この一文は)唐において『陀羅尼集經』の基となる「普集会壇」の灌頂が行われたことを示唆する資料と考えられる。

最後に、『陀羅尼集經』の訳出に示される。

便請法師于慧日寺¹、宣訳梵本¹、且翻要抄¹一十二卷。暨興国之洪基¹、存隆民之秘宝¹。從四年三月十四日起首¹、至永徽五年歲次甲寅¹四月十五日上畢。以後、頻頻勅追法師¹入内、邂逅之間、無暇復校¹。此經、出金剛大道場經¹大明呪藏分之少分也。今此略抄擬勘詳定¹。奏請下流通天下¹、普聞焉^上。⁵。

これによって、阿地瞿多は永徽四年(六五三)三月から翌年五月にかけて『陀羅尼集經』を漢訳し、その『陀羅尼集經』とは「金剛大道場經」なる經典の抄訳であり、「金剛大道場經」は「大明呪藏」の少分であることが確認される。「金剛大道場經」については、『開元釈教録』⁶や、『貞元目錄』⁷にも同内容の記述がみられる。安然⁸も同趣意の文を記しているが、原本は現存していない。「大明呪藏」については、唐僧の義浄の『大唐西域求法高僧伝』下にみえる道琳伝に、義浄が耽情的に呪藏の研究を行っていた道琳に対しての試論に次のような記述が確認される。

夫明呪者、梵云毘睇陀羅必得家¹。毘睇訳為明呪¹、陀羅是持、必得家是藏。応云

「持明呪藏」¹。然相承云「此呪藏」。梵本、有二十万頌²。唐訳、可レ成三百卷³。現今求覓、多失少⁴。……⁹

(「大明呪藏」の記述ではないが)「明呪」とは「毘睨陀羅必得家」即ち「持明呪藏」であり、完全に遺つてはいないが、本来は梵本だと十万頌、唐訳は三百巻にもなるものであると記されている。「大明呪藏」も同様に、多くの真言が包括されたものと考えられる。また、『大唐西域求法高僧伝』下には道琳が那爛陀寺において大乘の経論を捜覧したことが記され、「持明呪藏」は、中インドの那爛陀寺に蔵されたものと推察できる。阿地瞿多はまさにこの中インドの人であり、「大明呪藏」乃至『陀羅尼集経』は「持明呪藏」と同様に、中天那爛陀の密教に配される。それに加えて、『陀羅尼集経』四所説の「十一面觀世音神呪経」は、玄奘(六〇二―六六四)訳『十一面神呪心経』の異訳経典であり、この玄奘もまた那爛陀寺で学んだ僧侶であることから、「大明呪藏」と中インドの密教との関連性が裏づけられよう¹⁰。

以上、『陀羅尼集経』とは、『陀羅尼集経翻訳序』によれば、あらゆる学問に長けた中天出身の僧である阿地瞿多が、「大明呪藏」の少分である「金剛大道場経」を抄訳した経典である。また、訳者の阿地瞿多は永徽二年(六五二)に『陀羅尼集経』とも大きく関連する「普集会壇」を実際に修したことも示されている。これらの伝記は、『開元釈教録』の「陀羅尼集経十二卷¹¹」にも同取意の文が示されているが、これ以外に記述は無く、どのように修法を行っていたのかどうか等多くは不明である。

第三節 『陀羅尼集経』の依用に関する概略

第一項 奈良期における『陀羅尼集経』の依用

次に、日本における『陀羅尼集経』の依用について概観していく。そもそも『陀羅尼集経』は、奈良時代にはすでに日本に伝わっていた経典である¹²。先学の研究によれば、『正倉院文書』には、『陀羅尼集経』を「笠山寺」・「内裏」・「紫微中台」・「外嶋院」・「玄昉」が奈良時代に所蔵していたこと、「内裏」・「紫微中台」は、『陀羅尼集経』一所収「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品一卷於大部卷第一¹³」との関連性がうかがわれる「大仏頂陀羅尼経」や¹⁴、卷四所収「十一面觀世音神呪経¹⁵」と異訳関係に相当するであろう「十一面神呪経」・「十一面神呪心経」等の所蔵者としても記されていることが掲げられている¹⁶。それゆえ、『陀羅尼集経』に関連する何らかの修法が行われていたことが予想される。

また、奈良時代における『陀羅尼集経』の依用に関しては、すでに三崎良周博士が論ぜられている。その要を概すると、天平勝宝五年(七五三)の『正倉院文書』には、この時代において唯一弁才天女の壇法が説かれるとされる顕教経典である『金光明最勝王経』と密教経典である『陀羅尼集経』が奉請されたことが記されていること、つづけて『正倉院文書』には、十一面悔過所に『陀羅尼集経』・『法華経』と玄奘訳『十一面神呪心経』を奉請している記載があることを示し、密教の修法とやや性格の異なる悔過法に、『陀羅尼集経』が用いられていることを指摘している。さらに、天平宝字八年(七六四)には、泊瀬(長谷)の上山寺悔過所に『陀羅尼集経』を奉請している記録を例証の一として挙げ、『陀羅尼集経』の内容の多面性が理解され、各方面に依用されていたことを指摘する¹⁷。

このように、先学の研究は、奈良時代にすでに『陀羅尼集経』が多岐にわたって活用されていたことを示唆している。しかし、三崎博士も指摘されているが、「密教の性格をもつて、いわゆる呪法とすることの理由は、十分に首肯されるが、一面、呪や呪法は、いわゆる古代的な宗教の通用性でもあり、この呪や呪法に関連するところのものを、少しの徴表を理由にして密教と判定することは、適切な理解ではない¹⁸」とあるように、顕教經典である『金光明最勝王経』や『法華経』と密教經典である『陀羅尼集経』とを区別することなく依用しているため、『陀羅尼集経』に関連する呪や呪法等は行われていたとしても、具体的記録は乏しく、その修法を密教修法として採り扱うことは妥当でない。

第二項 初期台密における『陀羅尼集経』の依用

台密において『陀羅尼集経』は、最澄の『内証仏法相承血脉譜』中「雜曼荼羅相承師師血脉譜」に本経の訳者である阿地瞿多の名が確認されるのが初出である。前述の『陀羅尼集経』の依用記録から、最澄は入唐前よりすでに『陀羅尼集経』に説かれる呪や呪法を行っていたことも考えられるが、その例証は無い。また、前章でも述べたが、最澄が帰国後に行った高雄灌頂に関連する書とされる『灌頂七日行事鈔』は、『陀羅尼集経』に説かれる「七日作壇法」が記された作法書であり、その内容は、永徽二年(六五二)に修された灌頂法の基と考えられる『陀羅尼集経』十二「灌頂普集会壇法」に説かれる壇法・画像法等が中心である。しかし、『灌頂七日行事鈔』には、安然以降としか考えられない記述がなされており、本書の内容的には最澄に結びつくが、その成立に最澄を直接的に結びつけることには問題があると考えられる。それでは、最澄に続く台密祖師の著作に『陀羅尼集経』について述べた書はあるのだろうか。

円仁は、『蘇悉地経疏』において地居天真言の典拠に『大日経』と共に『陀羅尼集経』を並べ記し¹⁹、円珍は、『菩提場経略義釈』において金銀を鍊り、及び銅器を熟し重ねて薬丸を盛る作法は『陀羅尼集経』十に説かれていることを明かす²⁰。このように、円仁・円珍は『陀羅尼集経』に説かれる文を引いているが、修法に関して記述することは無い。さらに、円仁は嘉祥三年(八五〇)に、一字仏頂輪王と関連する熾盛光仏頂を中尊とする熾盛光法を修し、円珍は菩提流志訳『一字仏頂輪王経』五卷、同『五仏頂三昧陀羅尼経』四卷と同本異訳である不空訳『菩提場所説一字頂輪王経』五卷の注釈書『菩提場経略義釈』五卷を著し、仁和三年(八八七)には一字仏頂輪王経業の年分度者を奏請する。このように両師は、台密における蘇悉地と密接な関係にある一字仏頂輪王に関する業績を遺している。換言すれば、その源流は、最澄の「雜曼荼羅相承師師血脉譜」に記された阿地瞿多・菩提流志の系譜の共通項である仏頂尊乃至一字金輪仏頂に出づると考えられる。円仁・円珍が、阿地瞿多訳『陀羅尼集経』に説かれる仏頂尊に拘わる修法等の影響を如何に受けていたかは今後考究の要があるが、両師ともに『陀羅尼集経』に基づいた修法を行ったとの明確な形跡(記録や資料等)は見当たらない。

円仁・円珍以後、台密を継承したとされる安然は、『八家秘録』において、『陀羅尼集経』十二巻を「蘇悉地灌頂本経法²¹」・「蘇悉地同類法²²」に配し、『陀羅尼集経』中に説かれる種々の修法を「薬師仏法²³」・「阿閼仏法²⁴」・「烏樞瑟摩法²⁵」等それぞれに分類し配置している。また、前章でも述べたが、安然は台密の教判を組織的に論述した著書の一である

『教時問答』四では、『陀羅尼集經』を次のように位置づけている。

謂、陀羅尼集經是出_二金剛大道場經_一、大明呪藏之少分。故可_レ言_二金剛界法_一。然、其經中明二十八道_一、可_レ言_二蘇悉地法_一。今、以_三行法相_二涉兩界_一、分為_二一藏_一。²⁶

安然是、『陀羅尼集經』は、金剛大道場經なるものより出づる大明呪藏の少分であるので、金剛の名があることから一往は金剛界法というのであろうが、『陀羅尼集經』中には安然自身が蘇悉地法の紀綱となすとする十八道が明示されているから、この經典にみえる修法は蘇悉地法であるとし、その行法は胎金両部に涉っていると説明している。『八家秘録』による『陀羅尼集經』の位置づけや『教時問答』にみえる『陀羅尼集經』に説かれる修法は蘇悉地法に分類されるとの記述から、台密においては、最澄よりはじまる『陀羅尼集經』所説の密教は、安然に至って蘇悉地と連関することが明示されるのである。

第四節 「釈迦四天王法」について

安然に至るまでの『陀羅尼集經』の依用に関して、その事例があることは概ね確認することができ、安然に至っても、『陀羅尼集經』を中心とした修法をたとえ実際に執り行っていたとしても、その具体的な例証は一つも見出せない。台密は、安然に至って教相・事相の綱格は完成されたといわれるが、安然以降は、いわゆる事相全盛期に突入し、事相を中心とした書が多く撰述される。代表的な例を挙げると、谷流の皇慶の『灌頂随要記』二巻、その弟子長宴が皇慶の口授に従い筆録したとされる『四十帖決』十五巻、鎌倉時代に至れば小川流の承澄の『阿婆縛抄』二二八巻、法曼流の相実の弟子静然の編著『行林抄』八二巻等である²⁷。これらの中に、『灌頂七日行事鈔』もその一つと考えられると思われるが、『陀羅尼集經』を中心とした修法やそれに関連する記録等を見つけることは可能なのだろうか。

実は、台密における四天王法の中で、『陀羅尼集經』所説の修法に関する逸話の存在が確認できる。本節では、これを検討したい。

第一項 『門葉記』『相実法印不伝此法事』について

仏眼信仰等で知られる慈鎮和尚慈円（一一五五―一二二五）が、幼少期に入寺した青蓮院は台密においても重要な寺院であるが、その始祖行玄大僧正から尊道親王までの歴代にわたる御修法・灌頂・勤行等の記録ならびに門主行状・所管寺院・門跡領・門跡系図等、十二世紀前半より十五世紀前半に至る約三百年間の青蓮院の諸記録を集大成した、尊円親王編とされる『門葉記』中の「相実法印不伝此法事」に、次のような記録が確認できる。（以下に、述べることを整理し、表にしたものを後ろに載せたので参照されたい。）

久安二年四月一日、依_二山上小乱_一、為_レ直_レ之、和尚、命_二小僧_一。於_二無動寺南山房_一令_レ勤_二修文殊法_一給。以_二覺算闍梨_一、於_二西塔釈迦堂_一令_レ修_二四天王法_一給。爰道才子

来云。覺才子所_二修行_一者、釈迦四天王法_云。欲_レ令_二奉修_一_云。不_レ知、今始聞_レ之。本

尊何。依_二何法_一修_レ之。先達誰等行_レ之哉。早可_レ妨_二余方_一。若尋_二得調度文書等_一、将来示_レ之。遠、明達律師。近、大原僧都被_レ行_レ之_云。両説始聞_レ之。然、大原私記

定有歟。未得_レ之、尋求可_二志施_一也。其後師資默止了。其後問_二覺闍梨_一云。以_レ何故云_二釈迦四天王法_一哉。

答云。無_二別事_一。釈迦四天王印明相具行候也。大原令_レ行給之由承_レ之云。其後依_レ無_二殊用事_一、又不_レ尋_二沙汰_一過了。然間近来一兩小僧等来欲_二受学_一。不_レ知_レ之由答。然間或才子、自_二懷中_一取_二出其記一帖_一令_レ覽_レ之。此即殊師、故宝浄房慶闍梨所_レ記本也。即披_二閱之_一処、祖師_{大原}依_二後三條院_一仰_一、於_二山房_{定林房}被_レ行時、助伴所_レ賜記也

云云。而其觀_二曼荼羅_一中召釈迦觀_レ之。古摩本尊段同清_二供之_一 彼覺闍梨ハ從季闍梨受此記云云。

(文カ) 父 師地藏房阿闍梨、件時、同助伴賜_二同記_一。……28

久安二年(一一四六)四月一日に、比叡山上で起こった小乱²⁹を直すために相実(一〇八八―一六五)が小僧に無動寺南山房にて文殊法を、また覚算阿闍梨に西塔釈迦堂にて四天王法を修法させた。その時、道才子がやって来て、「覚才子(覚算の弟子か)が修行されたのは釈迦四天王法であり、修法させようとしている……。道才子はこのことを知らず、初めて釈迦四天王法のことを聞き、その本尊は何か、何れの法に則った修法なのか、先達の誰がこの法を行じたのか、速やかにこの法が他方に知られるのを妨げるべきである、もしこの法の相伝に関する証文等を尋ねて得ることができれば、将来して示してほしい」というと、(覚算の弟子は)「古くは明達律師(八七七―九五五)、最近では大原僧都(長宴)が釈迦四天王法を修した」と答え、道才子は両説とも初めて聞くことで、「そうであるならば「大原私記」にこの法が有るといえるのだろうか、末に至るまでこの法を得ることを尋ね求めてその志を施すべしである」といった。その後、師資ともにそのままであった。さらにその後、覚算に、「どのような所以があつて、釈迦四天王法というのか」と問うと、覚算がそれについて答えていうに、「特別なことは無く、釈迦法に四天王の印明を相具して行じ、長宴もこれを修したので、この法を授かつた……。その後、特に用事も無かつたので、その沙汰を尋ねないままであつた。ところが、暫くして、最近二人の小僧等が来てこの法を受学しようと望んだ。そこで知らないと答えた。すると、一人の才子(覚算の弟子か)が懷中よりその記一帖を取り出して見せた。この記一帖が、すなわち故宝(または法)浄房慶闍梨(慶嚴か)が記された本であり、これを披いて閲覧すると、この記は祖師(長宴)が後三篠(条)院(一〇三四―一〇七三)の仰せによって、北谷定林房にて釈迦四天王法を行じた時に、慶闍梨が助伴して賜つた記であつた……。そして、その記には觀曼荼羅の中に釈迦を召してこれを觀じ、護摩の本尊段と同じく清供するとある。(覚算は季阿闍梨(勝基か)よりこの記を賜つた云云)地藏房阿闍梨(暹救か)もこの時に同じく助伴として同じ記を賜つた云云」と記されている。ここで注目すべきことは、相実も伝授されていない定林房(長宴)から宝浄房へと相伝されたという貴重な「釈迦四天王法」なる修法を覚算なる台密僧も認知し、しかもその弟子が行じたことである。

つづけて、相実の弟子政春の「師説集」の保元三年(一一五八)の記に、この記録に関連したことが述べている。

政春阿闍梨師説集云。

四天王法。

問。本尊何。

師云。不知之。随レ師伝受シタル事モナシ。若有二先達一、新記二抄物等一者、可レ被二将来一云。資申云。大原僧都被レ修之記等候。慶嚴・暹救等所レ注也。件記云。本尊积迦云。心何。

師云。不審事也。必以二积迦一可レ為二本尊一之道理、無レ之。陀羅尼集經・四天王經、必可レ具二积迦一。……³⁰

ここでいう四天王法の本尊は何なのかという問いに、師(相夷)は、「その法の本尊が何なのか知らず、師から伝受したこともなく、もし(この法を知る)先達がいて、新たに(四天王法に関する)書物等を記しているのであれば、将来を願いたい……。」という。それに対して資(政春か)は、「長宴が四天王法を修したその記等があり、それに慶嚴・暹救等が注を加えた件の記に、「本尊积迦云云」とある。その心意はどのようなことがあるのか」というと、師(相夷)はそれに対していうのは、「それは不審であり、必ず积迦を本尊としなくてはいけないという道理は無いが、(たしかに)『陀羅尼集經』や『四天王經』には必ず积迦を具すべきであると説かれている云云」と記されている。これは、「相夷法印不伝此法事」に関連する内容であり、相夷は、自身が伝受していない「积迦四天王法」について、それを修した長宴から宝浄房慶嚴・地藏房暹救が积迦を本尊とすることに關する注を記していることに對して不審を抱いている。この箇所では、相夷は四天王法の本尊を积迦と考える要因に、『陀羅尼集經』を挙げてゐる。『陀羅尼集經』十一「諸天等獻仏助成三昧法印呪品」では、四天王それぞれの印呪や像法が説かれている³¹。

四天王とは、仏教伝来以来、仏堂の内部、須弥壇の四方に造立され、それがおさめられた寺院として、古くは聖徳太子の誓願によって建立された四天王寺、法隆寺金堂等が挙げられる。そもそも、四天王とは、帝釈天に従い須弥山の中腹に住する持国天(東)・增長天(南)・広目天(西)・多聞天(北)の総称で、仏法を守護し国家を鎮護する天部の神である。古くは、顕教經典に分類されているが、護国三部經の一である『金光明最勝王經』「四天王護国品第十二」等に、その鎮国守護の功德が述べられ、四天王に限ったものだけではないが、天平四年(七三二)頃より『金光明最勝王經』の読經や陀羅尼の誦呪が行われるようになり、古より鎮国を主る尊格として重要な位置を占める³²。前述したように、『陀羅尼集經』も奈良時代より広範囲にわたって依用されているため、四天王に関する印呪等が説かれる『陀羅尼集經』は、四天王法を行う際に多大な影響を与えたと推察できる。しかし、『陀羅尼集經』十一「諸天等獻仏助成三昧法印呪品」には积迦を本尊とするような記述はみつけられない。『陀羅尼集經』において、积迦を中心とした作法が説かれるのは、卷一「大神力陀羅尼經积迦仏頂三昧陀羅尼品一卷於大部卷第一」所説の积迦仏頂に関する作法及び『陀羅尼集經』中最も重要な卷十二「灌頂普集会壇法」が挙げられる。相夷はこれを意識して、『陀羅尼集經』には必ず积迦を具すべしと述べているのだろうか。そして、『陀羅尼集經』と四天王法には如何なる拘わりがあるのだろうか。

第二項 法曼院藏『息心抄』「四天王法」について

相夷に関連する資料を探索すると、法曼院藏『息心抄』六巻という書がある。その書六巻全体の内容は以下の通りである。なお、奥書については、それぞれの巻の途中にそれぞれの説ごとに記されているため、項目に付随させて書写年代に關する奥書をそれぞれ示し

た³³。

法曼院藏『息心抄』六卷（以下『息心抄』）

1 [上品上生]

（奥書）・建久五年二月十七日。以大縁房律師御本於来迎院三昧堂奉書寫了

金剛弟子最寂

・建久四年五月十七日。於_二觀音堂_一以_二大縁房律師御本_一書寫了 金剛仏子最寂

校点了 蓮契

・建久四年五月十四日。於_二来迎院_一以_二大縁房御本_一書_レ之 釈最寂

交点了 蓮契

・建久五年二月十一日。於来迎院三昧堂以大縁坊律師御本書寫了 沙門最寂

建久六年四月八日。於_二楞嚴院青龍房南庇_一移点一交了 仏子蓮契

・建久四年五月二十四日。書寫了 蓮寂

・建久四年十月八日。於_二護摩堂_一以_二大縁房律師御本_一書寫了 金剛弟子最寂

交点了 最寂

2 [灌頂成就法]

（奥書）・建久六年四月二日。於_二来迎院東廊_一以_二大縁房御本_一依_二本成房御命_一書_レ之。

釈最寂

交点了 最寂 釈最寂

・建久五年八月十五日。於_二来迎院三昧堂_一以_二大縁房律師御本_一終書寫之功矣

沙門最寂

同六年四月十日。交点了 最寂

・建久五年閏八月朔日。於_二来迎院三昧堂_一以_二大縁房律師御本_一依_二本成房仰_一書

_二寫_一之 沙門最寂

同六年四月十二日。於觀音堂廊移点交了 最寂

3 [歡喜天]

（奥書）・建久四年四月十一日。移点一交了 蓮契

4 [光明供][内作業灌頂][大仏頂壇][不動本誓竝四大明王]

（奥書）・建久五年閏八月九日。依_二本成房仰_一以_二大縁房律師御本_一書寫了 沙門最寂

交点了 最寂

・建久六年四月八日。於_二楞嚴院青龍房南廂_一移点一交了 蓮契

・建久四年三月二十七日。於_二来迎院三昧堂_一以_二大縁坊律師_{勝基}自筆本_一書_二寫_一之

了 金剛仏子最寂

同四月七日一交了 蓮契

5 [祈雨法][四天王][金輪事]

（奥書）・建久六年四月二十九日。以_二大縁房法師御本_一書寫了

・建久六年四月二十二日。於_二来院三昧堂_一校点了 蓮寂

6 [上自仏界下至獄界梵漢二名双奉香菓等名在此卷]

（奥書）・建久六年二十四日。於_二来迎院三昧堂_一校点了 蓮寂

奥書によると、本書の由来について、建久四年（一一九三）から建久六年（一一九五）の間に、魚山大縁房勝基に伝わっていた諸説をまとめた本を、大原来迎院等にて最寂・蓮

契・蓮寂らが書写した旨が記されている。書写人物として記載される「最寂」・「蓮契」・「蓮寂」が如何なる人物であるかは不明であるが、大縁房は、久安四年（一一四八）に相実が司っていた房であり³⁴、本書の内題に「法曼和尚作」とあることから、『息心抄』は、相実に関連した相伝や、種々の事相解釈が各章ごとにまとめられた書であることが推察される³⁵。

この『息心抄』中の「四天王法」には、いくつかの語句の異同はみられるが、前述の『門葉記』『相実法印不伝此法事』と同文が記されている。

久安二年四月一日、依_二山上小乱_一、為_レ直_レ之、和尚、命_二小僧_一。於_二無動寺南山房_一令_レ勤_二修文殊法_一給。以_二覚算闍梨_一、於_二西塔釈迦堂_一令_レ修_二四天王法_一給。爰道才子来云。覚才子所_二修行_一者、釈迦四天王法_云。欲_レ奉_レ受_云。不_レ知、今始聞_レ之。本尊何。依_二何法_一修_レ之。先達誰等行_レ之哉。早可_レ訪_二余方_一。若_二尋_レ得_レ調度文書等_一、将来示_レ之。又云。遠者、明達律師。近、即大原僧都被_レ行_レ之_云。両説始聞_レ之。然、大原私記定有_レ歟。未_レ得_レ之、尋求可_二惠施_一也。其後師資黙止了。其後問_二覚闍梨_一云。以_レ何故云_二釈迦四天王法_一哉。

答云。無_二別事_一。釈迦四天王印明相具行候也。大原令_レ行給之由承_レ之_云。其後依_レ無_二殊用事_一、又不_レ尋_二沙汰_一過了。然間近来一兩小僧等来欲_二受学_一。如_レ先不_レ知之由答。然間我才子、自_二懷中_一取_二出其記一帖_一令_レ覽_レ之。此即舛師、故宝淨房慶闍梨所_レ記本也。即所_二披閱_一、祖師_{大原}依_二後三条院仰_一、於_二山房_{定林房}一被_レ行時、助伴所_レ賜記也_云。而其觀_二曼荼羅_一、中台釈迦、觀_レ之。古摩本尊壇同清_二供之一_一。彼覚闍梨、從基闍梨受此記_云。文師地藏房阿闍梨、件時、同助伴賜_二同記_一。……³⁶

『息心抄』では、この箇所が続いて、次のような文が述されている。

永承三年六月十九日記云。四天王惣印、師口授、陀羅尼集經第十一卷、有_レ之。經文有_二乱脱_一云。此外更無_二別沙汰_一。

依_レ之集經文、抄_レ之。

集經第一云。

金輪仏頂像法。

欲_レ画_二其像_一、取_二淨白製_玉云。徒類切。重衣也。若_二淨絹布_一。闊狹任_レ意。不_レ得_二截割_一。於_二

其製上_二画_二世尊像_一。身真金色著_二赤袈裟_一、戴_二七宝冠_一作_二遍身光_一、手作_二母陀羅_一、結_二跏趺_三坐_二七宝莊嚴蓮花座上_一。其花座下_二堅_二著_二金輪_一。其金輪下_二画_二作_二宝池_一、繞_二池四辺_一作_二鬱金花_一、及_二四天王各隨_レ方立。其下左辺、画_二作_二文殊師利菩薩_一。身、皆白色項背有_レ光。七宝瓔珞・宝冠・天衣、種種莊嚴乘_二於_二師子_一。右辺画_二作_二普賢菩薩_一。莊嚴如_レ前、乘_二於_二白象_一。於_二其師子・白象中間_一、画_二大般若菩薩之像_一。面有_二三目_一、莊嚴如_レ前、手把_二經匣_一端身而坐。於_二仏頂上空中_一、画_二作_二五色雲蓋_一。其蓋左右有_二淨居天_一、雨_二七宝花_一³⁷。

永承三年（一一〇四八）六月十九日の記に、「四天王惣印は、師の口授によると、『陀羅尼集經』十一所説の印相であるが、『陀羅尼集經』十一は字句や文意が通じにくい箇所がある。（巻十一には四天王の惣印以外に）とりわけ別に何かを述べているわけではないため、『陀羅尼集經』一の「金輪仏頂像法」を抜き書くとある。この抄文は、『陀羅尼集經』一「金輪

仏頂像法」と同文であり³⁸、中尊である釈迦仏頂の画像法が説かれ、釈迦仏頂の下に画かれた池の四辺に鬱金華、四天王を配置し、両辺に文殊・普賢、その間に般若菩薩を画く旨が説かれている。つまり、この記は、釈迦仏頂を中尊とする『陀羅尼集経』一「金輪仏頂像法」に、『陀羅尼集経』十一所説の四天王惣印を附随させているのである。すなわち、覚算が主張した「釈迦四天王印明相具行候也」を想起させる。さらに、永承三年（一〇四八）は、長宴が活躍していた時代でもあり、長宴から伝わったとされる「釈迦四天王法」とはこの記に書かれたことを指すのではないだろうか。『門葉記』「相実法印不伝此法事」にみえる長宴が後三条院の仰せによつて「釈迦四天王法」を修したのは、『阿婆縛抄』によると、延久二年（一〇七〇）のことであり、上述したように、慶嚴が記す以前に、すでに長宴が記していたことがわかる³⁹。また、ここにみえる師とは、四天王惣印の文は、皇慶（九七七一―一〇四九）口説・長宴記『四十帖決』「四天王^{九〇}」にみえる文と同一であるため、皇慶のことであろう。『四十帖決』には、「金輪仏頂像法」の引文は無いが、『四十帖決』に「永承三年（一〇四八）六月十九日」と『息心抄』の記と同日の口説が記されているため、「釈迦四天王法」が皇慶からの口説である可能性も考慮する必要がある⁴¹。

『息心抄』は、大縁房に伝わった書であり、相実が大縁房を主るのは、相実が「釈迦四天王法」の存在を知らなかった久安二年（一一四六）から二年後の久安四年（一一四八）に相当する。相実は、その二年の間にこの記を知り得たか、または大縁房に移つてから獲たのか、いずれにせよ『息心抄』に附されたこの記述は、相実が引用してまとめていると考えても何ら矛盾は無い。そして、永承三年（一〇四八）の記に、『陀羅尼集経』に関する修法が記されていることや「相実法印不伝此法事」の覚算に纏わる記述から、少なくともこの年代頃には『陀羅尼集経』所説の修法が執り行われていたと推察できる。

つづけて、この「永承三年（一〇四八）六月十九日の記」に引用される『陀羅尼集経』一「金輪仏頂像法」について、「私云（恐らく相実であろう）」としてその解釈が記されている。

私云。於_二其襲上_一画_二世尊像_一文。其世尊者、即今経教主积尊也。如_二三文云_一、一時在_二舍衛国祇樹給孤独園_一、与_二大阿羅漢五十人_一俱。摩訶迦葉_{乃至}羅睺羅等而為_二上首_一云。時仏世尊、知_二衆会心_一、即入_二火光三摩地_一、從_二於頂上_一放_二無量光_一照_二三千大千世界_一已、仏、以_二自手作_一仏頂印誦_二仏頂呪_一文。如_レ文者、指_二此世尊_一可_レ云_二大仏頂_一也。依_二此経_一大仏頂法、修_レ之。此即可_レ為_二一心_一也。若有_二是類_一者、必可_レ聞_二口伝_一耳。

戴_二七宝冠_一者、今尊忘仏也。仍螺髻上可_レ戴_レ之歟。更不_レ可_レ准_二例首陀会天身_一也。手作_二母陀羅_一者、是印也。恐是仏頂印歟。不_レ云_レ持_レ輪_{更問}。常非_二金輪仏頂像_一也。

其花座下堅著_二金剛輪_一者、是立平不_レ可_レ臥歟。

其輪下宝池四辺作_二鬱花_一、四天王随_レ方立_云、故祖師御意、在_レ之云。仍下卷四天王印明、用_レ之給歟。若然者、文殊・普賢・般若菩薩等、觀曼荼羅時、尤至要也。慶記、

不_レ注_二此旨_一。若、師口不_レ聞歟_{更問}……⁴²

相実は、「金輪仏頂像法」の中尊は积尊であると、その証明に『陀羅尼集経』一「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品一卷於大部卷第一」の文を引き、「金輪仏頂像法」は（釈迦仏頂を中尊とした）大仏頂法であると述べ、それに准じて「金輪仏頂像法」に説かれる文文句を解説している。そして、「金剛輪の下に画いた宝の池の四辺に鬱金花と四天王を

配置する」という文から、故祖師（長宴）は、四天王法の中尊に釈迦仏頂を配し、そこに『陀羅尼集経』十一所説の四天王の印明を用いられたのかと推測しているが、もしそうであるならば、この画像法に説かれる文殊・普賢・般若菩薩等こそ非常に重要であるのに、宝浄房慶嚴の記にはこの旨が書かれておらず、慶嚴は長宴の口伝を正確に聞いていないのではないかと不審を抱いている。相実は、「永承三年（一〇四八）六月十九日の記」にみえる修法が長宴の説であることを認めつつも、慶嚴の記に不備があると疑っていることから、『息心抄』に引かれるこの文は、長宴が後三条院の仰せによって、北谷定林房にて「釈迦四天王法」を行じた際に、慶嚴が助伴として賜った記であると理解できる。

また、相実は『陀羅尼集経』一「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品一卷於大部卷第一」に説かれるのは大仏頂法であると述べている。先学によると、「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品一卷於大部卷第一」は、般刺蜜帝訳『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経』〔首楞嚴経〕・失訳『大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都攝一切呪王陀羅尼経大威徳最勝金輪三昧呪品第一』〔大仏頂別行法〕などの大仏頂に連関する経典と異訳関係にあるようで⁴³、相実が引く『陀羅尼集経』の文は『大仏頂別行法』の経文と同趣意である。相実はこれによって大仏頂法と判じたのだろうか。

『陀羅尼集経』

一時仏、在_二舍衛国祇樹給孤独園_一、与_二大阿羅漢五千人_一俱。摩訶迦葉・優嚧毘羅迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舍利弗・大目犍連・難陀・阿尼嚧駄・阿若憍陳如・阿難陀・羅睺羅等而為_二上首_一……（中略）……時仏世尊、知_二会衆心_一、即入_二火光三摩地_一、從_二於頂上_一放_二無量光_一、照_二三千大千世界_一已、仏、以_二自手_一作_二仏頂印_一、誦_二仏頂呪_一⁴⁴。

『大仏頂別行法』

一時仏、在_二舍衛国祇樹給孤独園_一、与_二大阿羅漢五千人_一俱。摩訶迦葉・優樓頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舍利弗・大目犍連・難陀・阿菟樓駄・劫賓那・阿若憍陳如・阿難・羅睺羅等而為_二上首_一……（中略）……爾時世尊、知_二其会衆心_一生_二狐疑_一、即入_二火光三昧_一、從_二於頂上_一放_二大光明_一、照_二於三千大千世界_一已、仏自作_二仏頂印_一⁴⁵。

他方、『四十帖決』「仏頂決」の寛徳三年二月二十日説では、『陀羅尼集経』について次のように述べている。

又、釈迦、是仏頂之主也。一切仏頂、以_二釈迦_一為主耳。……（中略）……故陀羅尼集経、在_二仏頂之中_一。其陀羅尼、是肉髻光中演説大陀羅尼也。即是仏頂光明陀羅尼也⁴⁶。

釈迦は、仏頂の主であり、あらゆる仏頂は釈迦が主であり、『陀羅尼集経』は仏頂に関する法が説かれ、所説の陀羅尼は、釈迦の肉髻の光の中に演説せる仏頂光明陀羅尼であると説いている。これは、『陀羅尼集経』一に説かれる内容であり、それに準じて『陀羅尼集経』を仏頂に関する法を説く経典と設定している⁴⁷。そして、『四十帖決』「大仏頂^三」の永承二年（一〇四七）三月十九日の説には、次のような記述がある。

問。大仏頂者何。

答。是五仏頂総真言也。而以_二一字仏頂_一為主耳⁴⁸。

大仏頂は、五仏頂の総真言であり、五仏頂の主は一字仏頂であると説く。『陀羅尼集経』では、五仏頂の一である帝殊囉施（光聚）仏頂や金輪仏頂が登場するが、相実はこの意を汲んで「仏、以_二自手_一作_二仏頂印_一誦_二仏頂呪_一」とある仏頂呪を大仏頂と判じて大仏頂法と述べているとも考えられる。いずれにせよ、この時代に長宴の記を依拠として『陀羅尼

集経』所説の釈迦仏頂を中尊とする作法や画像法を主軸に、四天王惣印を附随させて行ずる修法が記され、執り行われていたことは確かである。

ところで、「相実法印不伝此法事」や『息心抄』の中に、「遠(者)、明達律師。近、(即)大原僧都被_レ行_レ之」と、釈迦を中尊とする四天王法として、明達(八七七―九五五)が行じた修法が記されている。『息心抄』に述べられている記録を次に示す。

律師伝云。天慶三年正月二日、為_レ降_二伏東西_一、東ハ將、西ハ純兵乱_一、於_二延曆寺四王院_一率_二二十五口伴僧_一奉_レ修_二四天王法_一也。同年八月二十九日、於_二四王院_一率_二二十四口伴僧_一不_レ断七日、奉_レ修_二四天王法_一^{4,9}。

明達律師の伝に、「天慶三年(九四〇)正月二日に、東(平将門の乱)西(藤原純友の乱)を降伏するために、東塔四王院にて十五口の伴僧が四天王法を修し、同年八月二十九日に、四王院にて十四口の僧が七日の間四天王法を修した」とあり、明達律師が修した四天王法に関する記事が示されているが、『陀羅尼集経』に関する内容は見当たらない。そのため、明達律師が何を依拠として釈迦を中尊とする四天王法を修したのかは不明である。

この四天王法の中尊を釈迦とする理由の解釈には、『門葉記』や『息心抄』では胎藏曼荼羅を依拠とする説も述べられている。例えば、『門葉記』所収の政春の「師説集」保元三年(一一五八)の記には、「釈迦所説経法、依_二胎藏_一修之時、以_二初門_一觀_二說法道場_一也。依_二此意_一以_二釈迦_一為_二本尊_一歟^{5,0}。」と、胎藏の釈迦に関することが述べられ、つづけて「明達律師勤行不可証事」には、相実が「永承記明白」として「如_二祖師御時_一懸_二台_一曼荼羅_一可_レ修_レ之。仍釈迦院尊尤便也^{5,1}。」とあり、祖師(長宴か)が胎藏曼荼羅の釈迦院を拠所として四天王法を修したことが示されている。さらに、以下の一文が記されている。

以_二彼_一 (院カ)可_レ想_二給孤獨園_一耳。然此界釈迦并四天等印明、可_レ用_レ之也。若又欲_レ図_二

曼荼羅_一、今此如_二金輪壇_一図_レ之。具如_二經文_一。此時、今経仏・菩薩・天等印明 (可カ)

(用カ) (可カ) 耳。雖_レ非_二師口_一道理可_レ然。只吉 (可カ) 斟酌^{5,2}。

胎藏界の釈迦と『陀羅尼集経』一所説の「金輪仏頂像法」とを結びつける記述がなされ、よく吟味する必要があるが、師からの口授の修法ではなくても道理は述べた通りであることが記述されている。この記述の通り解釈すると、長宴は独自の考えで「釈迦四天王法」を修したか、相実がそのようにみなしたのかと理解できる。また、釈迦を中尊とする修法は胎藏系に属する考えが、長宴に始まるのであれば、『灌頂七日行事鈔』の成立時期を類推する傍証の一と成り得る。何故ならば、前章でも述べたが、天仁二年(一一〇九)勝陽房葉雋撰『破邪弁正記』に依ると、『灌頂七日行事鈔』は、「胎藏灌頂行事鈔」と題して、『大日経』・『一行記』・『蘇悉地経』・『陀羅尼集経』等によってその行儀を明かし、釈迦仏頂を中尊とし、『陀羅尼集経』所説の「七日作壇法」を基盤とする胎藏系の灌頂書として扱われているからである。

ところで、『破邪弁正記』によると、『灌頂七日行事鈔』は『破邪弁正記』の著述年代である天仁二年(一一〇九)には、すでに比叡山中に流布されていたことが記されている^{5,3}。それにもかかわらず、『破邪弁正記』成立以後の在世である相実は、『陀羅尼集経』を基底

とした釈迦仏頂を中尊とする胎藏系の灌頂書『灌頂七日行事鈔』について、触れていないばかりか、久安二年（一一四六）に初めて『陀羅尼集経』を駆使する釈迦仏頂を中尊とする「釈迦四天王法」を知るのである。このすれ違いは何に起因するのだろうか。この年代においては、『陀羅尼集経』を参照した修法の多くは流布されていなかったのだろうか。台密の流派間の相承と深く関係するのだろうか。かかる疑問解明には、さらに検討を要する。

他方、『息心抄』には、問答形式で「釈迦四天王法」に関する見識を述べ、特に『陀羅尼集経』所説の壇法に関する問答が展開されている。本論文では、修法が行われたのかどうかに焦点を当てているので、「釈迦四天王法」の具体的な内容に関しては割愛したい。

第五節 結言

本章では、台密における安然以降の『陀羅尼集経』を中心とした修法を実際に執り行つたかどうか、その例証の探索を試みた。その結果、長宴が修したとされる釈迦四天王法が、『陀羅尼集経』一所説の「金輪仏頂像法」と巻十一に説かれる四天王の惣印を基にした修法であることが確認された。また、「釈迦四天王法」の中では、この修法の中尊である釈迦仏頂と胎藏曼荼羅に画かれた釈迦如来とをいみじくも合致させているようにみえる。換言すれば、『陀羅尼集経』を胎藏系に位置づけて考えている。この観点から、『息心抄』にみえる「釈迦四天王法」は、『灌頂七日行事鈔』の成立過程を示す貴重な資料の一と考えられる^{5.4}。

〈本章中「釈迦四天王法」を取り巻く長宴・相実に関連する年表〉

天慶三年（九四〇）正月二日

法性房明達、東（平将門の乱）西（藤原純友の乱）

を降伏するために、東塔四王院にて十五口の伴僧と共に四天王法を修す。

天慶三年（九四〇）八月二十九日

明達、四王院にて十四口の僧と共に七日間四天王法を修す。

万寿年中（一一二四～一一二七）

皇慶、丹波池上に住居す。

長元年中（一一二八～一一三六）

皇慶口説・長宴記『四十帖決』筆録開始？または、

長和五年（一一一六）筆録開始か？

寛徳二年（一一四五）十月二十五日

皇慶・長宴、叡山北谷桂林房に帰山。

永承三年（一一四八）六月十九日

（長宴）『陀羅尼集経』一「金輪仏頂像法」、巻十一所説の四天王惣印に基づく「釈迦四天王法」に関する事柄を記す。

永承四年（一一四九）七月二十六日

皇慶、示寂。世寿七三歳。長宴、皇慶入寂直前まで伝法せらる。

康平八年／治暦元年（一一六五）

長宴、権律師補任。

治暦三年（一一六七）十一月

長宴、元慶寺別当補任。

延久二年（一一七〇）十二月

長宴、後三条院の仰せにより、伴僧八口と共に四天王法修法。宝浄房慶嚴、「永承三年（一一四八）六

月十九日の記」を書写。地蔵房暹救も同様に助伴として同記を賜る。

承保元年（二〇七四）

長宴、律師補任。

承保三年（二〇七六）

長宴、少僧都補任。

永保元年（二〇八一） 四月二日

長宴、示寂。世寿六六歳。

永保元年（二〇八一）

相夷、誕生。

天仁二年（二一〇九）

葉雋、『破邪弁正記』著述。

久安二年（二一四六） 三月十九日

寺門僧によつて延命院一乗坊焼亡。久安二年の乱。

久安二年（二一四六） 四月一日

相夷は、小僧に無動寺南山房にて文殊法を、覚算阿闍梨に西塔釈迦堂にて四天王法を修法させる。

久安二年（二一四六）

相夷、覚算より「釈迦四天王法」の所以を知る。覚算はこれより以前に、勝基より「永承三年（二〇四八）六月十九日の記」を書写する。

久安四年（二一四八）

相夷、魚山大縁房を主る。

永万元年（二一六五） 七月七日

相夷、示寂。世寿八五歳。 55

《註》

1 阿地瞿多の伝記については、『仏説陀羅尼集経翻訳序』の他にも、北宋贊寧（九一九—一〇〇一）撰『宋高僧伝』「唐西京慧日寺無極高伝」（『大正』五〇・七一八頁中）等が挙げられる。阿地瞿多の伝記に関しては、鎌田茂雄『中国仏教史』六（東京大学出版会、一九九九）七二〇頁、林敏『大仏頂別行法』の基礎的研究」（『仙石山論集』三、二〇〇六）等に詳しい。

2 高德の沙門有り。厥れ阿地瞿多と号す。是れ中天竺の人なり。（『大正』十八・七八五頁上。）

3 法師慧を聴ること群を超えたり。徳邁は人を過ぐ。弱冠に道を慕い、五竺を歴て友を尋ねる。低心躍歩にして法要を諳る。故に能く五明に精練し、諸部に妙通す。意に西域の法水を運び、東夏の渴仰を潤わすことを欲す。身を判ずる許陰難なり。務めて弘道の心存す。山巖を跋めども疲れず。沙流を涉れども倦れること無し。尊経を頂戴して、斯の漢の地に向かう。永徽二年の正月、長安に屈り。勅を奉じて慈門寺に住す。（『大正』十八・七八五頁上。）

4 但だ法師、珠を含み未だ吐かず。人、珍を懐いて別すること莫し。雅辯して既に方に宝有るを知るを宣ぶ^云。故に能く衆の疑を決し、言は皆理に当る。然れば則ち、経律論の業を伝える者一に非ず。唯此の法門未だ斯の土に興らず。所以に丁寧^云に三請して方に壇法を許す。三月上旬に、慧日寺浮図院内に赴き、法師自ら普集会壇を作す。大乘琮等一十六人なり。爰に英公・鄂公等一十二人、壇供を助成するに及ぶ。同じく願う。皇基永固なり。常に万国に臨む。庶類同じく沾す。皆大益を成す。其の中に靈瑞あり。繁を恐れて述せず。余、此の法に逢うことを慶ぶ。忻躍に勝えず。躬ら経を翻し悌ふ所を詣でて広本を翻す。屢値事闇なり。陳請うに及ばず。幻質の遷謝、大利を失うことを恐る。（『大正』十八・七八五頁上。）

5 便ち法師を慧日寺に請い、宣して梵本を訳し、且く要抄を翻すること一十二卷なり。興国の洪基を堅て、隆民の秘宝を存するか。四年三月十四日起首従り、永徽五年歳甲寅に次る四月十五日に至り畢んぬ。以後、頻頻に勅して法師を追い入内せしめ、邂逅の間、復校するに暇無し。此の経、金剛大道場経に出づる大明呪藏分の少分なり。今此の略抄の詳定することを擬勘す。奏して天下に流通し、普く聞こしめんことを請う。（『大正』十八・七八五頁上。）

- 6 『大正』五五・五六二頁下、五九九頁上。
- 7 『大正』五五・八六三頁上、九二九頁中。
- 8 『教時諍』（『大正』七五・三五九頁下）、『教時問答』（『大正』七五・四四一頁上）。
- 9 夫れ明呪とは、梵に毘睨陀羅必得家と云う。毘睨とは訳せば明呪と為し、陀羅とは是れ持、必得家とは是れ蔵なり。応に持明呪蔵と云うべし。然るに相承けて此れ呪蔵と云う。梵本は、十万頌有り。唐に訳すれば、三百卷を成すべし。現今求覓するも、多くは失い全きもの少なし。……（『大正』五一・六頁下。）
- 10 「金剛大道場経」並びに「大明呪蔵」に関する研究に関しては、佐々木大樹『陀羅尼集経』所収の仏頂系経軌の考察」（『智山学報』五三、二〇〇四）において各種先行研究がまとめられているため、それを参照した。また同氏『陀羅尼集経』初期密教の諸尊・陀羅尼を統合する経典」（高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫『初期密教』（春秋社、二〇一三）五八頁）に、『陀羅尼集経』四十一面觀世音神呪経」は、八十年前の耶舍崛多訳『十一面觀世音神呪経』（『大正』二十）と、また卷十一「功德天法」は、二三〇年前の曇無讖訳『金光明経』「功德天品」（『大正』十六）とも訳語が似ていて、『陀羅尼集経』のすべてが梵本からの直訳ではなく、ときに既存の漢訳が転用された可能性があることが指摘されている。そのため、『陀羅尼集経』に説かれる全内容が中インドの密教であるとはいえないだろう。
- 11 『大正』五五・五六二頁下。
- 12 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』（奈良朝現在一切経疏目録）（東洋文庫、一九三〇）では、『大日本古文書』七・七五にも、天平九年（七三七）に「陀羅尼集経欠一・四・五・六・七」が記されていることが指摘されている。
- 13 『大正』十八・七八五頁中。
- 14 佐々木大樹『陀羅尼集経』所収の仏頂系経軌の考察」（『智山学報』五三、二〇〇四）参照。
- 15 『大正』十八・八一二頁中。
- 16 堀池春峰「奈良時代仏教の密教的性格」（宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教Ⅰ」（法蔵館、一九九四）参照。
- 17 三崎良周「奈良時代の密教における諸問題」（宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教Ⅰ」（法蔵館、一九九四）参照。
- 18 三崎良周「奈良時代の密教における諸問題」（宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教Ⅰ」（法蔵館、一九九四）参照。
- 19 『大正』六一・四二〇頁上。
- 20 『大正』六一・五六〇頁上。
- 21 『大正』五五・一一一四頁中。
- 22 『大正』五五・一一一六頁下。
- 23 『大正』五五・一一一七頁下。
- 24 『大正』五五・一一一七頁下。
- 25 『大正』五五・一一二七頁上。
- 26 謂く、陀羅尼集経は是れ金剛大道場経に出づる、大明呪蔵の少分なり。故に金剛界法と言うべし。然れども、其の経中に十八道を明かし、蘇悉地法と言うべし。今、行法は両界に相渉するを以て、分かちて一蔵と為す。（『大正』七五・四四一頁上。）
- 27 台密の概略については、木内堯央『天台密教の形成』（溪水社、一九八四）や、三崎良周『台密の理論

と実践』(創文社、一九九四)、同「天台の密教」(宮坂宥勝編『密教大系』第六卷「日本密教Ⅲ」(法藏館、一九九五))等に精しい。

28 久安二年四月一日、山上の小さき乱に依て、之を直さんが為に、和尚、小僧に命ず。無動寺南山房に於いて文殊法を勤修せしめ給え。覚闍梨を以て、西塔釈迦堂に於いて四天王法を修せしめ給え、と。爰に道才子来りて云く。覚才子が修行する所は、釈迦四天王法なり云。奉修せしめんと欲す云。知らず、今始めて之を聞く。本尊は何かん。何れの法に依て之を修せんや。先達は誰等が之を行ぜんや。早く余方を妨げるべし。若し調度文書等を尋ね得らば、将来して之を示せ。遠くは明達律師。近くは大原僧都が之を行ぜらる云。両説始めて之を聞く。然らば、大原の私記定んで有るか。末之を得んと、尋ね求めて志施すべきなり。其の後師資黙止了んぬ。其の後覚闍梨に問いて云く。何を以ての故に釈迦四天王法と云うや。

答えて云く。別の事無し。釈迦に四天王の印明を相具して行じ候なり。大原も行ぜしめ給えるの由に之を承く云。其の後殊なる用事無きに依て、又沙汰を尋ねず過了す。然る間近来一両の小僧等来りて受学せんと欲す。之を知らざるが由に答う。然る間或る才子、懐の中より其の記一帖を取り出して之を覽せしむ。此れ即ち殊師、故宝浄房慶闍梨の記する所の本なり。即ち之を被閱する処に、祖師大原後三篠院の仰せに依て、山房定持房に於いて行ぜらる時、同伴として賜う所の記なり云。而して其れ曼荼羅を觀ずる中に召す釈迦之を觀ず。古摩の本尊段同じく之を清供せり彼の覚闍梨は季闍梨従り此の記を受く云。云。父師地藏房阿闍梨、件の時、同じく同伴として同記を賜る。……『大正』四十二・五四三頁上。)

29 久安二年の乱「今(久安二年)年三月十九日。延命院一乗坊焼亡。是三井寺悪徒所為云。」(『天台座主記』一〇四・八九頁。)

30 政春阿闍梨の師説集に云く。
四天王法。
問う。本尊や何かん。

師云く。之を知らず。師に随つて伝受したる事もなし。若し先達有りて、新たに抄物等を記さば、將來せらるべし云。資申して云く。大原僧都が修せらるの記等し候。慶嚴・暹救等の注する所なり。件の記に云く。本尊釈迦云と。心や何かん。師云く。不審の事なり。必ず釈迦を以て本尊と為すべきの道理、之無し。陀羅尼集經・四天王經にも必ず釈迦を具すべし。……『大正』四十二・五四三頁中。)

31 『大正』十八・八七八頁中〜八七九頁上。
32 堀池春峰「奈良時代仏教の密教的性格」(宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教Ⅱ」(法藏館、一九九四))参照。

33 本論文では法曼院藏『息心抄』六巻を底本として使用、正教藏『息心抄』八巻を対校本として、判読が困難な文字や、内容に不備がある場合使用する。また、本書は建久年間の奥書の他に、それぞれの説の元となる奥書等も記されているが、本論文の主旨と異なるため、これを略す。

34 詮栄誌『相実大和尚伝』(『續天全』、史伝2・三六九頁上)参照。

35 たとえば、『息心抄』「四天王法」中の「釈迦四天王法」に関する箇所最後に、「保元四年(一一五九)正月二十七日。極楽寺阿闍梨無障字百寿記之」とあり、また別の巻の「灌頂成就法」にも、「大原末葉台嶺沙門実、字百寿記之」と、相実の記とされるものが述されている。この他にも相実の記したとされる文が散在している。

36 久安二年四月一日、山上の小さき乱に依て、之を直さんが為に、和尚、小僧に命ず。無動寺南山房に於いて文殊法を勤修せしめ給え。覚闍梨を以て、西塔釈迦堂に於いて四天王法を修せしめ給え、と。爰に道才子来りて云く。覚才子が修行する所は、釈迦四天王法なり云。受け奉らんと欲す云。知らず、

今始めて之を聞く。本尊は何かん。何れの法に依て之を修せんや。先達は誰等が之を行ぜんや。早く余方に訪れるべし。若し調度文書等を尋ね得らば、将来して之を示せ。又云く。遠くは、明達律師。近くは、即ち大原僧都が之を行ぜらる云。両説始めて之を聞く。然らば、大原の私記定んで有るか。未だ之を得ざるに、尋ね求めて恵施すべきなり。其の後師資黙止了んぬ。其の後覺闍梨に問いて云く。何を以ての故に釈迦四天王法と云うや。

答えて云く。別の事無し。釈迦に四天王の印明を相具して行じ候なり。大原も行ぜしめ給えるの由に之を承く云。其の後殊なる用事無きに依て、又沙汰を尋ねず過了ぬ。然る間近來一兩の小僧等來りて受学せんと欲す。先の如く之を知らざるが由に答う。然る間我が才子、懷の中より其の記一帖を取り出して之を覽ぜしむ。此れ即ち舛師、故宝淨房慶闍梨の記する所の本なり。即ち被閱する所の祖師大原後三条院の仰せに依て、山房定林房に於いて行ぜらる時、同伴として賜う所の記なり云。而して其れ曼荼羅を觀するは、中台の釈迦、之を觀す。古摩の本尊壇同じく之を清供せり彼の覺闍梨は基闍梨従り此の記を受く云。文師地藏房阿闍梨、件の時、同じく同伴として同記を賜る。(法曼院藏、建久年間写本。)

37 永承三年六月十九日の記に云く。四天王惣印、師の口授に、陀羅尼集經第十一卷、之に有り。經文に乱脱有り云。此の外に更に別の沙汰無し。

之に依て集經の文、之を抄す。

集經第一に云く。

金輪仏頂像法。
其の像を画かんと欲わば、淨白玉に云く、徒類切。重衣なり、若しは淨絹布を取れ。闊き狭きは意に任せよ。截り割くことを得ざれ。其の襲上に於いて世尊像を画け。身は真金色にして赤袈裟を著し、七宝冠を戴き遍身の光を作り、手に母陀羅を作して、七宝もて莊嚴せらるる蓮花座上に結跏趺坐せり。其の花座下に金輪を豎て著けよ。其の金輪の下に宝池を画作し、池の四辺に繞て鬱金花を作て、及び四天王各を方に随つて立てよ。其の下の左辺に、文殊師利菩薩を画作せよ。身は、皆白色にして項背に光有り。七宝の瓔珞・宝冠・天衣、種種莊嚴して師子に乘れり。右辺に普賢菩薩を画作せよ。莊嚴は前の如く、白象に乗ず。其の師子・白象の中間に於いて、大般若菩薩の像を画け。面に三目有りて、莊嚴は前の如く、手に經匣を把て端身にして坐せり。仏頂上の空中に於いて、五色の雲蓋を画作せよ。其の蓋の左右に淨居天有りて、七宝の花を雨せ。(法曼院藏、建久年間写本。)

38 『大正』十八・七九〇頁上〜中。

39 『阿婆縛抄』延久二年十一月二十一日丑刻後二條院御時。地震、及二数刻一、山洛無レ不二恐怖一。天文密奏。

陰陽勘文。兵革前瑞云。依レ之、公家以二同十二月三日庚寅一以二權律師長宴於二台嶽一被レ修二四天王法一。定林房
伴僧八口。……「延久二年十一月二十一日丑刻後三條院御時。地震、数刻に及び、山洛恐怖せざること無し。天文密奏。陰陽勘文。兵革前瑞云。之に依て、公家同十二月三日庚寅を以て權律師長宴を以て台嶽に於いて四天王法を修せらる。伴僧八口なり。……」(『大正』図九・四三三頁上。)

40 『大正』七五・八九一頁上。

41 皇慶の流と『陀羅尼集經』の依用に関連する資料に、觀智院金剛藏『陀羅尼集經』十卷が挙げられる。觀智院金剛藏『陀羅尼集經』十卷の延久四年(一〇七二)の奥書に記された樂音房教慶は皇慶の資、康和元年(一〇九九)の奥書に確認される宝泉房相覚は、皇慶の資蓮実房勝範の資定慶の資であり、本書は、彼らの訓点が記された書のようなものである。これに従えば、觀智院金剛藏『陀羅尼集經』十卷は、皇慶が『陀羅尼集經』を用いた伝法があった可能性を示す資料の一と考えられる。本書の概要は、『京都府古文書緊急調査報告 東寺觀智院金剛藏聖教の概要』(京都府立総合資料館編、一九八六)に精し

い。

42 私に云く。其の襲上に於いて世尊の像を画け^文と。其の世尊とは、即ち今の經の教主釈尊なり。文に云うが如く、一時に舍衛国祇樹給孤独園に在して、大阿羅漢五十人と俱なりき。摩訶迦葉^力・羅睺羅等をして上首と為す^云。時に仏世尊は、衆会の心を知り、即ち火光三摩地に入り、頂上従り無量の光を放ち、三千大千世界を照らし已て、仏は、自らの手を以て仏頂印を作りし仏頂呪を誦す^文と。文の如くならば、此の世尊を指して大仏頂と云うべきなり。此の經に依らば大仏頂の法、之を修せん。此れ即ち一心と為すべきなり。若し是に類すること有らば、必ず口伝を聞くべきのみ。

七宝冠を戴くとは、今の尊は応仏なり。仍て螺髻の上に之を戴くべきか。更に首陀会天の身に准例すべからざるなり。

手に母陀羅を作すとは、是れ印なり。恐らく是れ仏頂の印か。輪を持つと云わず^更。常には金輪仏頂の像に非ざるなり。

其の花座の下に金剛輪を豎て著くとは、是を立て平には臥すべからざるか。

其の輪の下の宝池の四辺に鬱花を作り、四天王を方に随つて立てる^云とは、故祖師の御意は之に在りと云うなり。仍て下卷の四天王の印明、之を用い給うか。若し然らば、文殊・普賢・般若菩薩等は、觀曼荼羅の時に、尤も至要なり。慶が記には、此の旨は注せず。若しは、師の口を聞かざるか^更……

(法曼院藏、建久年間写本。)

43 佐々木大樹『陀羅尼集経』所収の仏頂系経軌の考察』、『智山学报』五三、二〇〇四)、林敏『大仏頂別行法』の基礎的研究』、『仙石山論集』三、二〇〇六)等参照。

44 一時に仏、舍衛国祇樹給孤独園に在して、大阿羅漢五千人と俱なりき。摩訶迦葉・優曇毘羅迦葉・耶迦葉・那提迦葉・舍利弗・大目犍連・難陀・阿尼嚕駄・阿若憍陳如・阿難陀・羅睺羅等を上首と為す……(中略)……時に仏世尊、会の衆心を知り、即ち火光三摩地に入り、頂上従り無量光を放ち、三千大千世界を照らし已て、仏は、自らの手を以て仏頂印を作り、仏頂呪を誦す。『大正』十八・七八五頁中(下)。

45 一時に仏、舍衛国祇樹給孤独園に在して、大阿羅漢五千人と俱なりき。優樓頻螺迦葉・伽耶迦葉・那提迦葉・舍利弗・大目犍連・難陀・阿菟樓駄・劫賓那・阿若憍陳如・阿難・羅睺羅等を上首と為す……(中略)……爾の時世尊、其の会の衆心を知り狐疑を生じ、即ち火光三昧に入り、頂上従り大光明を放ち、三千大千世界を照らし已て、仏自ら仏頂印を作り。『大正』十九・一八〇頁上(中)。

46 又、釈迦、是れ仏頂の主なり。一切の仏頂は、釈迦を以て主と為すのみ。……(中略)……故に陀羅尼集経は、仏頂の中に在り。其の陀羅尼は、是れ肉髻の光の中に演説せる大陀羅尼なり。即ち是れ仏頂光明陀羅尼なり。『大正』七五・八七七頁中)。

47 『陀羅尼集経』爾時觀世音菩薩、起大慈悲、偏袒右肩、頂礼仏足、白仏言。世尊、我、曾過去於諸佛所、得陀羅尼、我今欲説。願仏聽許。爾時世尊、讚歎觀世音菩薩。善哉善哉。汝、大慈悲欲説神呪。今正是時。爾時觀世音菩薩、即現何耶揭哩婆身^{唐云馬頭}、説神呪時。即現呪神、映蔽於前。一切菩薩諸天神等所、現呪神、悉令不現。如下以磴石、蓋於井上。唯觀世音菩薩、一切持呪衆聖中王、獨顯自在。爾時世尊、起大慈悲、即於頂上肉髻相中、放五色光。遍照十方一切世界。於虛空中、遊旋如蓋。其光明中有菩薩。名帝殊囉施。結加趺坐、放大光明。身支節中各出火焰、口説神呪。多名名曰大仏頂呪、少者名為小仏頂呪。説如是等種種現一、并作二印法。帝殊囉施、説此呪等、現威神時、映蔽於前、何耶揭哩婆身、及呪神悉不復現。爾時觀世音菩薩、頂礼仏足、白仏言。世尊、奇哉希有。世尊威神。我、於一切持呪中、一王更無有上。世尊、慈悲頂上放光、光明中出帝殊囉施菩薩、滅我所現身及呪神、一無遺余。

更有二何法^一、能滅^二世尊帝殊囉施^一。爾時世尊、告^二觀世音菩薩^一。我、有二心呪^一。名曰^二金輪^一。最尊為^レ極。更無^二過者^一。惟仏与^レ仏乃能知^レ之。是呪、能滅^二帝殊囉施并呪等法^一。汝等応^二当^一一心受持生^二希有想^一。爾時世尊、即說^二金輪陀囉尼印^一。印如^二前所說^一。誦者・聽者、若能至心隨誦^二一遍^一、一經^二於耳^一、塵沙衆罪、若輕、若重悉皆消滅。無^二願不^レ果。速^二当^一成仏^一。此陀囉尼、悉能破^二壞一切諸法^一。更無^レ有^レ上。爾の時觀世音菩薩、大慈悲を起こし、偏へに右の肩を祖いで仏足を頂礼し、仏に白して言く、世尊よ、我、曾て過去の諸仏に於いて得る所の陀囉尼を我今説かんと欲う。願はくは仏聽許したまえ。爾の時世尊觀世音菩薩を讚歎したまわく、善いかな、善いかな、汝大慈悲をもて神呪を説かんと欲す。今正しく是れ時なり。爾の時觀世音菩薩、即ち何耶揭哩婆の身唐は馬頭と云うを現じて神呪を説きたまう時なり。即ち呪神を現じて前に映蔽す。一切の菩薩諸の天神等の現ずる所の呪神悉く現ぜざらしむ。磴石を以て井の上に蓋うが如し。唯だ觀世音菩薩一切の呪を持つる衆の聖中王独り自在を顯わす。爾の時に世尊、大慈悲を起して、即ち頂上の肉髻相の中に於いて、五色の光を放つ。遍く十方の一切の世界を照らしたまう。虚空の中に於いて遊旋すること蓋の如し。其の光明の中に菩薩有り。帝殊囉施と名づく。結加趺坐して大光明を放つ。身の支節の中より各火焰を出して、口に神呪を説きたまう。多なるをば名づけて大仏頂呪と曰い、少なるをば名づけて小仏頂呪と為す。是くの如き等種々の呪法を説き、並びに印法を作したまう。帝殊囉施は此の呪等を説き、威神を現じたまう時、前に映蔽せる何耶揭哩婆の身、及び呪神悉く復た現ぜざるなり。爾の時觀世音菩薩、仏足を頂礼し、仏に白して言く。世尊よ奇なるかな、希有なり。世尊威神まします。我れ一切の呪を持つる中に於いて王たり。更に上ること無し。世尊は慈悲をもて頂上より光を放ち、光明の中より帝殊囉施菩薩を出だして、我が現ずる所の身、及び呪神を滅して、一つも遺余なし。更に何の法有つてか能く世尊の帝殊囉施を滅せん。その時に世尊、觀世音菩薩に告げたまわく。我れに心呪有り。名づけて金輪と曰う。最尊にして極たり。更に過ぎたる者なし。惟だ仏と仏とのみ乃ち能く之を知りたまえり。是の呪、能く帝殊囉施并に呪等の法を滅す。汝等応さに一心に受持して希有なる想を生ずべし。その時世尊、即ち金輪の陀囉尼印を説きたまう。印は前の所説の如し。誦する者、聽く者、若し能く至心に隨いて一遍を誦し、一たび耳に経れば、塵沙の衆罪若しは輕、若しは重悉く皆消滅す。願として果たさざること無し。速やかに当に成仏すべし。此の陀囉尼悉く能く一切の諸法を破壊することを得。更に上ること無し。」〔大正〕十八・七九〇頁中〜下。）

48 問う。大仏頂とは何かん。

答う。是れ五仏頂の總真言なり。而るに一字仏頂を以て主と為すのみ。〔大正〕七五・八七八頁上。）
49 律師の伝に云く。天慶三年正月二日、東西東は將、西は純の兵乱を降伏せんが為に、延曆寺四王院に於いて十五口の伴僧を率いて四天王法を修し奉るなり。同年八月二十九日、四王院に於いて十四口の伴僧を率いて断ぜざること七日、四天王法を修し奉る。(法曼院藏、建久年間写本。)

50 釈迦所説の經法は、胎藏に依て修するの時、初門を以て説法の道場と觀するなり。此の意に依て釈迦を以て本尊と為すか。〔大正〕四十二・五四三頁中。）

51 祖師の御時の如く台曼茶羅を懸けて之を修すべし。仍て釈迦院尊尤も便なり。〔大正〕四十二・五四三頁下。『息心抄』に同文あり。）

52 彼の院を以て給孤獨園を想うべきのみ。然して此の界の釈迦并に四天等印明は、之を用いるべきなり。

若し又曼茶羅を因せんと欲えば、今此れ金輪壇の如く之を因せ。具には經文の如し。此の時、今經の仏・菩薩・天等の印明を用いるべきのみ。師の口に非ずと雖も道理然るべし。只吉く吉く斟酌せよ。

……〔大正〕四十二・五四三頁下。『息心抄』に同文あり。）

53 大師、親製^二両部灌頂行事鈔等十有余卷^一。其本、多分流^二布山院^一。両部灌頂行儀委悉更過^レ此乎。以^レ

是、応レ知、祖師所伝正是両部也。「大師は、親しく両部灌頂行事鈔等十有余卷を製す。其の本は、多く分かれたれて山院に流布す。両部灌頂の行儀（が）委悉なること更に此れに過ぎんや。是を以て、応に知るべし、祖師の所伝は正しく是れ両部なり、と。」（『天全』七・一九八頁上。）

54 なお、三崎博士は『台密の研究』（創文社、一九八八）五二―五三頁―五二―五四頁において、『陀羅尼集経』に関して述べている中で、安然が『八家秘録』において『陀羅尼集経』を蘇悉地灌頂の本経法として挙げた理由を次のように解析し、推測している。『陀羅尼集経』十二に、七日作壇から灌頂に至る作法が詳細に記されていること、『教時問答』四にいうように、『陀羅尼集経』を合行の経とみていたこと、さらに『大日経義釈』所説の七日作壇法も『陀羅尼集経』を参照していることなど、胎藏界の作壇法の多くは『陀羅尼集経』に負っている。これを受けて、蘇悉地の作壇を『陀羅尼集経』の中に求めたのではないかと。

いずれにしても、（三崎博士の研究例にもみられるように）巻十二については、安然がすでに『陀羅尼集経』と胎藏系の作法とを結びつけて考えているため、この認識が安然以後に新たに生まれたと定めることは難しい。しかし、今回の研究で示した「釈迦四天王法」にみられる『陀羅尼集経』の依用は、中世の台密において『陀羅尼集経』がどのように位置づけられ、認識されていたかを理解する上で一つの貴重な応用例と見做されよう。

55 使用した資料：『四十帖決』（『大正』七五）。『阿婆縛抄』（『明匠等略伝中』（『大正』四九・七四〇頁中）下）、『明匠等略伝下』（『大正』四九・七四七頁下―七四八頁上）。『門葉記』（『相実法印不伝此法事』（『大正』四二・五四三頁）。『僧綱補任』（四）（『仏全』一一三・一九一頁下、一九八頁下、二〇〇頁上）。『慈応和尚伝記』（『續天全』、史伝2・三二―三三頁）。『谷阿闍梨伝』（『續天全』、史伝2・三二―三六頁）。『相実大和尚伝』（『續天全』、史伝2・三六七頁）。『近世台宗高僧伝』（『相実贈大僧正伝』（『續天全』、史伝3・三二三―三三頁）。『近世天台僧宝伝資料』（『法曼院贈大僧正相実伝』（『續天全』、史伝3・四四―四二頁）。『天台座主記』一―四・八九頁。

第二部 『瑜祇經』における仏頂尊の位置づけについて

第一章 従来の『瑜祇經』研究における仏頂尊との関係について

第一節 序言

『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇經』(『瑜祇經』)は、金剛智訳とされる金剛界系經典の一であり、安然(八四一〜八九八?―九一五?)の『八家秘録』によると、『瑜祇經』は空海(七四一―八三五)、慧雲(七九八―八六九)、宗叡(八〇九―八八四)によって将来され¹、東密においてのみならず、台密においても、重要な經典の一つとして尊重されている。本經典の訳者について、三崎良周博士は、『瑜祇經』は唐の円照撰『貞元新定釈教目錄』(『貞元録』)に著録されていないことから、『貞元録』成立以後に編纂された一種の偽經と推定されている。したがって、本經典を安直に金剛智訳とするには問題があると認識しておく必要がある²。

台密において、『瑜祇經』に関する註解が最初に行われたのは、安然の『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇經修行法』(以下『瑜祇經疏』)が挙げられる。本書は、『瑜祇經疏』と略されるが、『瑜祇經』に基づく行法に関する註が述べられた書である。『瑜祇經疏』の冒頭には、「此瑜伽中有二十一品、有二十四法³。是金剛界蘇悉地法⁴。」と、『瑜祇經』は十二品で構成され、十四の行法が説かれた經典で、金剛界の蘇悉地法であると述べられる。また、安然は『瑜祇經』に対する評価を、『教時問答』四において、次のように述べている。

或可^レ言^二四藏^一。加^二瑜伽瑜祇秘密藏^一。謂、蘇悉地行^二二十八道^一、雖^レ異^二兩界^一、而立^二三部^一。同^二胎藏界^一、實是胎藏大中之悉地成就法也。今金剛頂瑜祇經、是^レ可^レ言^二兩部大法之肝心^一也。以^レ説^二兩界阿闍梨位行法^一故也。其中大悲胎藏頓証八字印明、即是大日經中阿闍梨真實智品印明、而明^二五部三十七尊法^一。實是金剛界中之悉地成就法也。

故与^二蘇悉地法^一相对。是為^二四藏^一⁴。

四藏(瑜伽瑜祇藏)は、「蘇悉地法については、胎藏界と同じように三部立てであり、したがって、この法は胎藏大法中の悉地成就法である。これに相對して、『瑜祇經』は兩部大法の肝心といふべきである。ここに説かれる「大悲胎藏頓証八字印明」は、『大日經』「阿闍梨真實智品第十六」の印明であるが、(金剛界)五部三十七尊法を明かすものであるため、金剛界中の悉地成就法であり、その観点から『瑜祇經』は蘇悉地法と相對する」と述べている。この内容と同様の主旨は、『瑜祇經疏』中に確認される。

このように、安然は『瑜祇經』を金剛界の蘇悉地法と定めている。第一部でも述べたように、蘇悉地は仏頂尊と密接な関係にあり、『蘇悉地經』の主尊は仏頂尊である。『瑜祇經』も金剛界の蘇悉地法と設定するのであれば、仏頂尊とも如何なる繋がりがあるのだろうか。

台密における『瑜祇經』に関する研究としては、三崎良周・水上文義両博士の重厚な各研究が挙げられる。しかし、この後、両博士の研究以外に、台密における本經を首題とした研究は見当たらない。本章では、両博士の研究を参考にして、『瑜祇經』に説かれる仏頂

尊に関する事柄（記述）を整理・検討し、問題点を抽出したい。

第二節 『瑜祇経』に説かれる仏頂尊について

『瑜祇経』は全十二品の経典であり、それを一覧すると次のようになる。
『瑜祇経』十二品⁵

- ① 序品第一
- ② 一切如来金剛最勝王義利堅固染愛王心品第二
- ③ 攝一切如来大阿闍梨位品第三
- ④ 金剛薩埵冒地心品第四
- ⑤ 愛染王品第五
- ⑥ 一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六
- ⑦ 一切如来大勝金剛心瑜伽成就品第七
- ⑧ 一切如来大勝金剛頂最勝真実大三昧耶品第八
- ⑨ 金剛吉祥大成就品第九
- ⑩ 一切如来内護摩金剛軌儀品第十
- ⑪ 金剛薩埵垂菩提心内作業灌頂悉地品第十一
- ⑫ 大金剛焰口降伏一切魔怨品第十二

この『瑜祇経』に説かれる仏頂尊の位置づけについては、三崎博士の緻密な研究がある⁶。『瑜祇経』の原文と、それに対応する三崎博士の見解を端的に示す。

まず、『瑜祇経』「一切如来金剛最勝義利堅固染愛王心品第二」に、次の記述が確認される。

時金剛界如来、告^二金剛手等^一言。金剛手、有^二真言^一、名^二一切如来金剛最勝王義利堅固染愛王心真言^一。於^二一切瑜伽中^一、最尊最勝速獲^二悉地^一。能令^三一切見者、皆生^二父母妻子之想^一。所^レ作之業、皆得^二成就^一。所^レ持諸余真言、若^レ仏頂部及諸如来部、蓮花部、金剛部、羯磨部等、皆能持^二罰彼等真言^一令^二速成就^一。⁷

ここでは、金剛界如来が、金剛手菩薩に、一切如来金剛最勝王義利堅固染愛王心真言を持ち、速やかに悉地を獲ることが説かれ、さらに所持する諸余（仏頂部及び如来部・蓮華部・金剛部・羯磨部等）の真言をも成就させる旨が述べられている。三崎博士は、ここで注目されることは、諸余の真言の初めに仏頂部を置いていることであり、それ故に『瑜祇経』が仏頂尊に係る密教の影響を受けていることを指摘している⁸。

次に、『瑜祇経』「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六」について、三崎博士は、表題に「一切仏頂」の語が冠されていることを指摘しているが、この品に関して詳説していない⁹。

そして、次に表す『瑜祇経』「金剛吉祥大成就品第九」では、一字仏頂輪王と仏眼部母との関係が示され、金剛薩埵所変の仏眼仏母より一字頂輪王が化作されたことが説かれる。

時金剛薩埵、对^二一切如来前^一、忽然現^二作一切仏母身^一、住^二大白蓮^一、身作^二白月暉^一、

兩目微笑、二羽^{手也}住^レ臍、如^レ入^二奢摩他^一。従^二一切支分^一、出^二生十儼識沙俱胝仏^一。

一一仏、皆作^レ礼^三敬本所^二出生^一。於^二刹那間^一、一時化^二作一字頂輪王^一、執^二輪印^一、

頂放^二光明^一、倨傲目視、現^二大神通^一、還來^下敬本所^二出生^一一切^二仏母真言^一。我所^レ説一切頂輪真言……¹⁰

三崎博士は、ここでは一字頂輪王の上に仏母を置き、仏眼の方を高くみているが、仏頂尊は仏母としての仏眼と並べられていることを指摘している¹¹。また、「金剛吉祥大成就品第九」において、仏眼部母から一字仏頂輪王が化作されることは、以下に示す菩提流志訳『一字仏頂輪王経』にみえる仏頂輪王呪と仏眼呪を並べて誦すという説から発展したと述べられている¹²。

『一字仏頂輪王経』一

若常誦^二是一字仏頂輪王呪^一時、每當^三先誦^二此仏眼呪^一……¹³。

『一字仏頂輪王経』二

如^レ斯作法、若不^二成就^一、則加^二一切頂輪王心呪^一、遍遍同誦。又不^二成就^一、復加^二仏眼呪等^一……¹⁴。

このように、三崎博士の指摘の通り、『瑜祇経』は仏頂尊に関連する密教の影響を受けて撰述されていることが理解できる。

第三節 『瑜祇経』「金剛吉祥大成就品第九」について

三崎博士は、終始一貫して『瑜祇経』と蘇悉地法とについて論じている。三崎博士は、『瑜祇経』は金剛界系の經典でありつつも、胎金合糅の傾向があるため、常に蘇悉地法との関係が問われる。とりわけ、『瑜祇経』中、「金剛吉祥大成就品第九」が最も重要視されるべきことを提言し、その理由を二つ挙げている¹⁵。一つは、前述の金剛薩埵から化作された仏母の身から、一字頂輪王が化作されること、もう一つは仏母が説く「大悲胎藏八字真言」即ち^{五字}阿尾囉吽欠吽紇哩^{三音}噯^一が説かれていることである。

この真言は、胎藏にいう五輪「阿尾囉吽欠」に、金剛界五仏中の三仏を合わせた真言であり、『瑜祇経』では、「若誦滿^二一千万遍^一、獲^二得大悲胎藏中一切法^一、一時頓証^レ」¹⁶と、この真言を誦さば、(金剛界道場において)大悲胎藏中の一切法を獲得すると説かれている。それ故に、この真言は胎金合糅を表す要素であると指摘する。

安然是、先に示した『教時問答』四では、「其中大悲胎藏頓証八字印明、即是大日経中阿闍梨真実智品印明、而明^二五部三十七尊法^一。実^レ是金剛界中之悉地成就法也¹⁷。」と記して、大悲胎藏八字印明は、『大日経』「阿闍梨真実智品第十六」の印明であり、それに加えて(金剛界)五部三十七尊の法を明かすものである¹⁸ので、この印明は金剛界中の悉地成就法であると述べ、これを理由の一つとして『瑜祇経』は蘇悉地法と相対すると解釈するのである。

また、『瑜祇経』「金剛吉祥大成就品第九」は、一字仏頂輪王と仏眼部母との関係性を説くが、これに関し、安然是、『瑜祇経疏』において、「仏眼法」・「大悲胎藏八字法」・「富貴虚空藏五字真言法(五大虚空藏法)」の三法と、「金剛吉祥成就一切明法(金剛吉祥七曜吉祥・佛母成就一切明)」・「妙吉祥破諸宿曜明法」の二法とに約し、この品について考説している¹⁹。中でも、三崎博士は「金剛吉祥成就一切明法」を採り上げ、『蘇悉地経』の三部の真言との関連について論じている。これは、『瑜祇経疏』冒頭の『蘇悉地経』と『瑜祇経』との対比において、安然是胎藏の妙成就法と設定している蘇悉地法の三部真言に三種悉地を配しており²⁰、三部真言は、胎金に亘る三種悉地真言ではないが、三種悉地真言を胎藏

蘇悉地の妙成就に設定していることに起因する。さらに、三崎博士は、安然の解釈を通して論を進める。

『蘇悉地経』「請問品第一」に、「此蘇悉地経、若有下持二誦余真言法一不成就上者、当レ令レ兼二持此経根本真言一、当二速成就^{2.1}。」と、もし他の真言法を持誦しても成就することがなければ、『蘇悉地経』の根本真言を持誦すれば速やかに成就することができると説かれていている。しかし、安然は、「若有三真言通成二就諸真言一者、三部真言、各能成二就当部余法一、非レ謂二余部^{2.2}。」と、『蘇悉地経』の（三部真言は、各々能く当部のあらゆる法を成就できるが、余部には通じないと述べる。さらに、『瑜祇経疏』には、次のように記されている。

若有下誦二余尊真言一不成就上者、当レ用二此経根本真言一。加二彼真言一而持二誦之一、決定成就^云。而下経中、不レ出二根本真言一。別有二毘盧舍那別行経一、出二蘇悉地真言及功課真言并三種悉地法^云。^{2.3}

安然は、『蘇悉地経』には、『蘇悉地経』の根本真言を持誦すれば、かならず成就する」とあるが、この経には根本真言は示されず、別に『毘盧舍那別行経』には「蘇悉地真言」と「功課真言」と「三種悉地法」が示されていることを指摘している。そして、次に示すように、「仏母法成就一切明」は、胎蔵の三部・金剛界の五部の秘法に通じて成就する法であり、（それに対して）蘇悉地教^{（マヤ）}の三部真言は、三部それぞれ各別に成就させるが、『蘇悉地経』は）胎金両部に通じるものではないと説明する。

故知、此仏母法成就一切明、通能成二就大悲胎蔵三部秘法・大金剛界五部秘法一。非レ如下蘇悉地教三部真言、各別成就、不レ通二諸部^{2.4}。

つづけて、「大悲胎蔵八字法」について、安然は次のように述べている。

此則大日経阿闍梨真実智品、以二八字一布二八处一、昇二大阿闍梨位一之法。…（中略）…今仏母尊、亦説二成就大悲胎蔵八字真言印契一。故知、此金剛頂、正説レ成二就大悲胎蔵一切阿闍梨行法一。無畏三蔵大日経義积、积二諸執金剛一中云。心王毘盧舍那、成二等正覚一。時一切心数、無レ不入二彼金剛界中一而成中法門眷属上。…（中略）…又守護經大悲胎蔵品説二三句法門一、同二大日経一。彼経、是金剛界五仏三十七尊八方天行法。而説二三句一為二胎蔵法一。故知、若非二金剛頂深秘旨一者、大悲胎蔵不レ可レ究^云。^{2.5}

ここでは、「大悲胎蔵八字法」は、『大日経』「阿闍梨真実智品第十六」所説の八字の布字法であり、（この金剛界法中の）仏母尊も、「大悲胎蔵八字真言印契」を説くので、この金剛頂法は、（金剛界中において）大悲胎蔵一切阿闍梨行法が説かれたものである、そして『大日経義积』や『守護国界主陀羅尼経』「大悲胎蔵出生品第三」等に金剛頂の深秘の旨を用いなければ、大悲胎蔵を究めることができないと示される。

また、「富貴虚空蔵五字真言法」の「成就富貴金剛虚空蔵鉤召明」即ち「**Om Vajrasattva**」^{2.6}については、「今此五大虚空蔵尊、即一切義成就輪蘇悉地法^{2.7}。」と述べられ、他と同様に蘇悉地法との関わりがあると示している。

三崎博士は、こうした安然の主張から、慈鎮和尚慈円の仏眼法や『毘盧遮那別行経』に関する知見等、台密の蘇悉地思想の展開が推進していくと考え、安然の『瑜祇経疏』の検討の必要性を説く^{2.8}。それ故に、台密において『瑜祇経』「金剛吉祥大成就品第九」は、一層重要な位置を占めると考えられる。

「大悲胎藏八字真言」については、三崎博士だけでなく、水上博士も着目し、多く論稿を割いている。水上博士は、先の『瑜祇経疏』の他に、同じく安然の撰著『金剛界大法対受記』七を挙げて、『大日経』「阿闍梨真実智品第十六」の八字布字と『瑜祇経』「大悲胎藏八字真言」との関係について触れる。

次八字印真言、是胎藏界都法大日阿闍梨、如前、先成薩埵、次成仏母、三部深密一時頓証、及為弟子授三部大教之法。故大日経阿闍梨真実智品、阿字布心、娑字布胸、吽字布額、次以阿阿尾羅吽欠字布身五処。彼八字中娑字、此八字中~~阿~~吽字、同蓮華部の種子也。攝大儀軌成三菩提品中初、以無所不至印真言為根本印真言。是彼經中大悲胎藏壇印真言也。

次以真実智品・布字品行法一名阿闍梨。今準義釈五種三昧耶中、第四三昧耶中、雖得大悲胎藏伝法灌頂、而若不入第五三昧耶中秘密曼荼羅而得中伝法灌頂上、則秘密智、不生。其秘密壇伝法灌頂、即是真実品・布字品之行法也。彼真実智品、唯有下布八字法上無印・真言。今此經中明白説之。故知、金剛界中兼説胎藏極密究竟之法²。

安然是、ここで『大日経』「阿闍梨真実智品第十六」の布字法即ち「阿・娑・吽・阿・尾・羅・吽・欠」中の娑字は（金剛界の）蓮華部の種子~~阿~~字に通じるものである。『大日経』「阿闍梨真実智品第十六」は八字を布す行法しか示していないが、『瑜祇経』では印・真言を説いている。それ故に、金剛界中に兼ねて胎藏極密究竟の法が説かれている」と述べ、『瑜祇経疏』に示された八字真言を両部の阿闍梨位真言とした理由を記している。

このように、水上博士は、安然が胎・金・蘇の三部立てである台密の性格をより鮮明にし、密教を組織的に構成するための論拠の一つとして『瑜祇経』を用いたと論じている。そして水上博士は、『大日経』「阿闍梨真実智品第十六」の八字真言、『瑜祇経』の「大悲胎藏頓証八字真言」に拘わる伝承と³、安然以後に亘る東台密各々の伝承の詳説とその展開等について言及され、精細且つ緻密な研究がなされている³¹。

第四節 結言

本章では、『瑜祇経』における仏頂尊とその周辺に関する三崎博士と水上博士の先行研究例を紹介した。それら研究の主旨は、台密の伝承に大きく拘わる『瑜祇経』「金剛吉祥大成就品第九」に説かれる仏頂尊と仏眼尊との関係、そして「大悲胎藏八字真言」の伝承関係におかれているようである。三崎博士は、『瑜祇経』に説かれる仏頂尊に関する事項について、本経が仏頂尊に係る密教の影響を受けていることを指摘し、仏頂尊の名がみつげられる各諸品を挙げて、一往触れてはいるが、それぞれの諸品についての詳細な説明はなしでいなく、あくまでも台密において最重要である「金剛吉祥大成就品第九」の研究解析が中心である。それ故に、『瑜祇経』に説かれる仏頂尊に関する事項、それに纏わる台密における伝承等まだ研究すべき余地は多いと考えられる。とくに、仏頂に拘わる「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六」については、三崎博士は表題に仏頂の名が冠されていることを指摘するのみで、その由縁等詳細は触れていない³²。

そこで、次章より『瑜祇経』所説の仏頂尊に関する理解を深めるため、その端緒として「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六」に関し、研究を進めたい。

《註》

1 『大正』五五・一一一六頁上。

2 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）一三七頁〜一三八頁。

3 此の瑜伽中に十二品有り、十四法有り。是れ金剛界蘇悉地法なり。〔『大正』六一・四八五頁上。〕

4 或は四蔵と言ふべし。瑜伽瑜祇密蔵を加う。謂く、蘇悉地の十八道を行ずることは、両界と異なる
と雖も、而も三部を立つること胎蔵界に同じく、實に是れ胎蔵大法中の悉地成就の法なり。今の金剛
頂瑜祇経は、是れ兩部大法の肝心と言ふべきなり。兩界阿闍梨位行法を説くを以ての故なり。其の中
の大悲胎蔵頓証八字印明は、即ち是れ大日経中の阿闍梨真實智品の印明なるも、而して五部三十七尊
法を明かす。實に是れ金剛界中の悉地成就法なり。故に蘇悉地法と相對す。是れを四蔵と為す。〔大
正』七五・四四一頁上。〕

5 『大正』十八・二五三頁下〜二六九頁下。

6 三崎良周『台密の研究』「仏頂系の密教」、「蘇悉地の源流と展開」（創文社、一九八八）参照。

7 時に金剛界如来は、金剛手等に告げて言く。金剛手よ、真言有り、一切如来金剛最勝王義利堅固染愛
王心真言と名づく。一切の瑜伽中に於いて、最尊最勝にして速やかに悉地を獲。能く一切の見る者を
して、皆父母妻子の想を生ぜしむ。作る所の業、皆成就を得。持する所の諸余の真言、若しは仏頂部
及び諸如来部、蓮花部、金剛部、羯磨部等、皆能く彼等の真言を持罰すること速やかに成就せしむ。
〔『大正』十八・二五五頁下。〕

8 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）一三八頁、五〇八頁。

9 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）五〇八頁、五三四頁参照。

10 時に金剛薩埵は、一切の如来の前に対して、忽然として一切の仏母身を現作し、大白蓮に住し、身は
白き月の暉を作し、兩目微笑にし、二羽（手）臍に住すること、奢摩他に入るが如くす。一切の支分
従り、十儼説沙俱胝仏を出生す。一一の仏は、皆本出生する所を礼して敬うことを作す。刹那の間に
於いて、一時に一字仏頂輪王を化作し、輪印を執り、頂より光明を放ち、偃り傲る目をもて視、大神
通を現し、還り来りて本出生する所の一切仏母の真言を礼し敬う。我説く所の一切頂輪真言……〔大
正』十八・二六〇頁上。〕

11 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）一二五頁〜一二六頁、五〇八頁、五三四頁参照。

12 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）一四〇頁参照。

13 若し常には是の一字仏頂輪王呪を誦する時、毎に当に先ず此の仏眼呪を誦すべし。〔『大正』十八・二二
七頁中。〕

14 斯くの如き作法もて、若し成就せざれば、則ち一切頂輪王心呪を加えて、遍遍に同じく誦せよ。又成
就せざれば、復た仏眼呪等を加えよ。〔『大正』十八・二三四頁下。〕

15 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）五〇八頁参照。

16 *a vi ra huṃ kham huṃ hr̥iḥ āḥ* 〔『大正』十八・二六三頁中。〕

17 若し誦すること一千満遍に満つれば、大悲胎蔵中の一切法を獲得し、一時に頓証す。〔『大正』十八・
二六三頁中。〕

18 其の中の大悲胎蔵頓証八字印明は、即ち是れ大日経中の阿闍梨真實智品の印明なるも、而して五部三
十七尊法を明かす。實に是れ金剛界中の悉地成就法なり。〔『大正』七五・四四一頁上。〕

19 『大正』六一・四九二頁上参照。

20 『大正』六一・四八五頁中。

21 此の蘇悉地経は、若し余の真言法を持誦するも成就せざること有らば、当に此の経の根本真言を兼持

せしむべし、当に速やかに成就すべし。『大正』十八・六六三頁下。）

22 若し真言に通じて諸の真言を成就すること有らば、三部真言は、各能く当部の余法を成就するも、余部と謂うに非ず。『大正』六一・四九三頁上。）

23 若し余尊真言を誦するも成就せざること有らば、当に此の経の根本真言を用いるべし。彼の真言を加えて之を持誦さば、決定成就す云。而して下経中には、根本真言を出さず。別に毘盧舍那別行経有りて、蘇悉地真言及び功課真言并に三種悉地法を出だす云。『大正』六一・四九三頁上。）

24 故に知んぬ、此の仏母法成就一切明は、通じて能く大悲胎藏三部秘法・大金剛界五部秘法を成就す。蘇悉地教の三部真言は、各別に成就するも、諸部に通ぜざるが如きに非ず。『大正』六一・四九三頁中。）

25 此れ則ち大日経阿闍梨真実智品の、八字を以て八処を布し、大阿闍梨位に昇るの法なり。：（中略）：今仏母尊は、亦た成就大悲胎藏八字真言印契を説く。故に知んぬ、此の金剛頂は、正しく大悲胎藏一切阿闍梨行法を成就せるを説く。無畏三藏大日経義釈の、諸執金剛を釈する中に云く。心王の毘盧舍那は、等正覚を成ず。時に一切の心数は、彼の金剛界中に入りて法門眷属を成ぜざること無し、と。：（中略）：又守護経大悲胎藏品に三句の法門を説くこと、大日経に同じ。彼の経は、是れ金剛界五仏三十七尊八方天行法なり。而して三句を説き胎藏法と為す。故に知んぬ、若し金剛頂深秘の旨に非ざれば、大悲胎藏も究むべからず云。『大正』六一・四九四頁下〜四九五頁上。）

26 『大正』六一・四九六頁中。

27 今此の五大虚空藏尊は、即ち一切義成就輪の蘇悉地法なり。『大正』六一・四九六頁中〜下。）

28 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）五二九〜五三七頁参照。慈円に関しては、五三七頁〜五六三頁に詳しい。

29 次に八字印真言、是れ胎藏界都法大日阿闍梨は、前の如く、先ず薩埵を成じ、次に仏母を成じ、三部深密一時に頓証し、及び弟子の為に三部大教の法を伝授す。故に大日経阿闍梨真実智品に、**𑖀**阿字を心に布し、**𑖀**娑字を胸に布し、**𑖀**吽字を額に布し、次に**𑖀**阿**𑖀**尾**𑖀**羅**𑖀**吽**𑖀**欠字を以て身の五処に布す。彼の八字中の**𑖀**娑字は、此の八字中の**𑖀**吽字と、同じく蓮華部の種子なり。攝大儀軌成三菩提品中の初に、無所不至印真言を以て根本印真言と為す。是れ彼の経中の大悲胎藏壇印真言なり。

次に真実智品・布字品の行法を以て阿闍梨と名づく。今義釈に進じて五種三昧耶中、第四三昧耶の中に、大悲胎藏伝法灌頂を得ると雖も、若し第五三昧耶中の秘密曼荼羅に入りて伝法灌頂を得ざれば、則ち秘密智は、生ぜず。其の秘密壇伝法灌頂とは、即ち是れ真実智品・布字品の行法なり。彼の真実智品は、唯だ八字を布す法有りて印・真言無し。今此の経中に明白に之を説く。故に知んぬ、金剛界中に兼ねて胎藏極密究竟の法を説くことを。『大正』七五・一八八頁下。）

30 水上文義『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）四三六頁：『瑜祇経』の「大悲胎藏頓証八字真言」は、安然以来、台密では胎藏阿闍梨位真言あるいは両部に通ずる大阿闍梨位の真言とされ、さらに慈鎮和尚慈円に至ってタラ字を加えて九字に改変された真言が宣揚されるなど、いくつかの問題を含んで伝承された」と指摘し、水上博士はこの真言の台東密における伝承と、相互の展開について論じる。

31 水上文義『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）「第三篇 台密の教相と事相」内「第四章 台密における『瑜祇経』の解釈と伝承」参照。また、同『日本天台教学論 台密・神祇・古活字』（春秋社、二〇一七）では、葉上流と関連した論究がなされている。

32 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）五〇八頁、五三四頁参照。

第二章 『瑜祇經』所説の「壞二乗心」について

第一節 序言

安然の著作『教時問答』四の四蔵（瑜伽瑜祇蔵）には、「蘇悉地法については、胎蔵界と同じように三部立てであり、この法は胎蔵大法中の悉地成就法であるという。これに相對して、『瑜祇經』は兩部大法の肝心といい、本經中に説かれる「大悲胎蔵頓証八字印明」は、『大日經』「阿闍梨真實智品第十六」の印明であるが、金剛界五部三十七尊法を明かすものであるため、金剛界中の悉地成就法であり、その故に蘇悉地法と相對する¹」と述べられている。四蔵の中心となるのは、『瑜祇經』であり、この經は金剛界における蘇悉地法であると解釈している。さらに、安然の述作として扱われる『金剛峰樓閣一切瑜伽瑜祇經修行法』（『瑜祇經疏』冒頭にも、「此瑜伽中…（中略）…是金剛界蘇悉地法²」と同様の記述がみられる。

三蔵の中心となる『蘇悉地經』は主尊が仏頂尊である。『教時問答』では五蔵に分類される『陀羅尼集經』においても、卷一・二において仏頂尊に関する作法が説かれ、更に卷十二では仏頂尊を主尊とする灌頂法が説かれる。一方、金剛界の蘇悉地法と称される『瑜祇經』中にも、仏頂尊に関連する記述が随所にみられ、『瑜祇經』では仏頂尊がどのように捉えられているのか、『瑜祇經疏』を述べた安然や台密諸師はどのように解釈したのか考証する必要があるだろう。

本章では、『瑜祇經疏』の中でも品題に仏頂尊の名がみられるものの、未だ研究されていない「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六（四攝行品）」に着目し、これが台密の中で如何に解釈され、扱われているかを中心に論を進める。また、安然以降の台東密の諸師の関連する章疏類についての探求結果を述べる³。

第二節 『瑜祇經』「四攝行品」について

『瑜祇經』は、前述したように、空海撰『真言宗所學經律論目錄』（『三学録』）において金剛界系に分類されるように、その内容は金剛界の如来が金剛手菩薩を対告衆として説く經典である。本經は、一經十二品より成る。この十二品の所説中に仏頂尊に関連する事由が確認できる。検めてその端を述べれば、「一切如来金剛最勝義利堅固愛染王心品第二」に説かれる諸余の真言に對應する諸尊に、「如来部」・「蓮華部」・「金剛部」・「宝部」・「羯磨部」の金剛界五部に加えて「仏頂部」を設けていること⁴、「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六」（「四攝行品」）の品題に仏頂の名が冠されていること、台密で重視される「大悲胎蔵八字真言」や、仏頂尊の効能と關係の深い仏眼仏母について説かれる「金剛吉祥大成就品第九」等である⁵。

『瑜祇經』「四攝行品」の全文は以下の通りである。

爾時金剛手、復説一切処無不相應真言曰。

唵嚩日囉^{一合} 薩怛嚩^{二合} 惹吽^引 鑿斛

復白レ仏言。世尊、此四行攝法。於一切処一切事、世間染愛及世間一切法^一、皆生^二

四攝行想^一、起^二慈^三・悲^四・喜^五・捨^六(住)等^一。但、於^二一切事^三處^四、皆生^二此四攝行法^一、於^二一切声聞・獨覺乘中^一、常起^二此等四行^一、誦^二四攝真言^一、結^二四種鉤印^一。所謂四種鉤、以^レ眼起^二慈於一切^一、以^レ眼起^二悲於一切^一、以^レ眼起^二喜於一切^一、以^レ眼起^二捨於一切^一。真言行者、常起^二四種心^一。但、作^二世間一切事^一無^レ違、速証^二無上菩提^一、現生於^二一切法^一、証^レ得平等無^二二無染無淨無違無礙身^一。常住^二金剛薩埵三昧^一、以^二此四攝法^一、広作^レ利^二樂一切有情^一。但、於^二一切事^三處^四、生^二無違相^一、用^二此四種眼法^一。常於^二一切時^一、起^二壞^三二乘心^一。誦^二此壞^三二乘心真言^一曰。

唵摩訶引野怛那^二咄日囉^三薩怛囉^四薩囉達磨尾戍駄吽

常誦^二此真言^一、於^二一切時^一、觀^二察自心^一、壞^二一切執著^一、觀^二一切法本來清淨^一。由^レ此福德增長、於^二現生^一獲^二得一切法清淨金剛乘金剛性^一。增^二長一切福德^一、一切如來常所^二加護^一。一切金剛常以^二破業^一、令^下於^二現生^一証^中大金剛位^上。6。

この「四攝行品」の要を示せば、金剛手菩薩が、「一切処無不相応真言」を呪し、四攝行(慈悲喜捨の四無量心)の想を起こし、四種鉤を結び、一切の有情に利益と安樂を与える四攝の行法を説く、そして一切時において「壞二乘心」を起こし、「壞二乘心真言」を誦することによって、福德增長、如来加護等の利益を得、現世において大金剛位を証することができる。このように、「四攝行品」では、「四攝行」と「壞二乘心」が中心に述べられている。仏頂尊に関しては、それが品題に冠されているにもかかわらず、仏頂尊に関連する行法や、その名さえも本文中では確認できなかった。それでは、仏頂尊を重要視する台密では、この品は如何に解釈されているのだろうか。

第三節 安然撰『瑜祇經疏』「四攝行品」疏について

『瑜祇經』は、『八家秘録』によれば、「空海・慧運・宗叡」によって日本に将来されたとされる。安然は、この『瑜祇經』に焦点を当てて初めて台密における見解を『瑜祇經疏』として具体的に著した。そのため、台密の中で、『瑜祇經疏』の位置づけは高いと考えられる。その『瑜祇經疏』中の「四攝行品」に対する註解を紹介する。

第一項 「摩訶那囊」

安然は、まず「四攝行品」の經文を引き、そして「初真言云」として、「四攝行」の呪について述べる。

一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品説。爾時金剛手、復説^二一切処無不相応真言^一云。白^レ仏言。世尊、此四行攝法。於^二一切処一切事、世間染愛及世間一切法^一、皆生^二四攝行想^一、起^二慈^三・悲^四・喜^五・捨^六住等^一。於^二二乘中^一常起^二四攝行^一、誦^二四攝真言^一結^二四種鉤印^一。所謂四種鉤、以^レ眼起^二慈悲喜捨於一切^一、常於^二一切時^一起^二壞^三二乘心^一。誦^二此壞^三二乘心真言^一云。

初真言云。薩怛縛^二咄^三此云有情 即金剛薩埵 此是鉤引縛等。於^二此金剛薩埵心中^一故、以^二惹吽

鑿斛^一為^二真言^一。即是鉤索鎖鈴四金剛真言^一。7。

さらに「後真言云。摩訶那囊^一」^{此云大乘亦云大壞}薩縛達摩尼怛弟^一」^{此云一切法清淨⁸}として「壞二乘心」について述べる。「四攝行品」の中では、この「壞二乘心」は最も長い稿が割かれてい

る。安然是「壞二乘心」の呪を「摩訶那曩（大乘又は大壞）」・「薩縛達摩尼菟弟（一切法清淨）」の二つに分けて説を陳べる。

「摩訶那曩」については、次に示す通りである。

大乘者、教王經百八名中、文殊名「大乘」。略出經、云「摩訶衍那」。故教王經云。金剛利大乘、金剛鉤大器、妙吉金剛深、金剛慧我體。略出經云。金剛利摩訶衍那、金剛藏摩訶器仗、文殊師利金剛甚深。

金剛覺我禮壞者、亦是文殊劍密号。故理趣品云。文殊以「自劍」揮「斫一切如来」。不空云。智増菩薩、用「四種文殊般若劍」、断「四種成仏智能取障礙」。故文殊現「揮」斫「四仏臂」也云。

又金剛頂云。文殊、以「自劍」揮「斫一切如来右臂」。疏云。文殊、以「智慧劍」揮「斫一切在纏如来厭離菩提心之右臂」也云。

即与「此經」、以「四行攝」壞「二乘心」上、其義同也⁹。

「摩訶那曩」を大乘と訳し、不空訳『金剛頂一切如来真実攝大乘現証大教王經』（『現証大教王經』）の、「金剛利大乘 金剛劍仗器 妙吉金剛染 我礼「金剛慧」¹⁰。」や、金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦經』（『略出經』）に、「我今敬「礼金剛利、摩訶衍那、摩訶器仗、文殊師利、金剛藏、金剛甚深、金剛覺」¹¹。」とあることから、安然是これらに則つて大乘とは文殊菩薩のこととし、金剛界系の經典に説かれる文殊菩薩の異名や性質からその解釈を展開する。

つづけて、安然是「金剛覺我禮壞」とは、文殊劍の別号であり、その根拠として、不空訳『大樂金剛不空真実三摩耶經』（『理趣經』）では、文殊菩薩は自らの劍で一切如来を揮斫すると説き、その釈である不空述『大樂不空真実三昧耶經般若波羅蜜多理趣釈』（『理趣釈』）では、智増の菩薩は、四種の成仏智や認識するもの・されるもの共々その障礙を断ずるので、文殊菩薩は四仏の臂を揮斫するという箇所を引く。

「金剛覺」は、前の『略出經』に出る語であるが、『理趣釈』に、「覺悟有「四種」。所謂、声聞覺悟・緣覺覺悟・菩薩覺悟・如来覺悟。覺悟名句、雖「同浅深有」異。自利・利他資糧、小大不同¹²。」と、その意は声聞・緣覺・菩薩・仏のすべての悟りであると示されている。つまり、金剛覺とは二乗の悟りを指すのではなく、すべてを網羅する最上の悟りであるとされる。

一切如来を揮斫するとは、『理趣經』・『理趣釈』にその意が解されている。

『理趣經』

時文殊師利童真、欲「三重顯」明此義「故、熙怡微笑、以「自劍」揮「斫一切如来」已、説「此般若波羅蜜多最勝心」¹³。

『理趣釈』

時婆伽梵一切無戲論如来者、是文殊師利菩薩之異名。…（中略）…一切有情無始輪迴。与「四種識」積「集無量虚妄煩惱」、則為「凡夫」、在「凡夫位」名為「識」。預「聖流」至「如来地」名為「智」。以「四智菩提」、对「治四種妄識」。妄識既除、則成「熟法智」。若妄「執法」、則成「法執病」。是故、智増菩薩、用「四種文殊師利般若波羅蜜劍」、断「四種成仏智、能取所取障礙」。是故、文殊師利、現「揮」斫「四仏臂」也¹⁴。

つまり、四種の妄識（貪・瞋・痴・一切法）に関する無量なる虚妄や煩惱が積み集まれば凡夫となり、凡夫の位（十信の位）にいることは識であり、聖流によって三界内の見惑

を断ずることによって如来地に到達することは智である。四種の菩提によって、四種の妄識を対治し、妄識を除き尽くせば、転じて欲界内の四諦の道理を認識する法智は熟する。もし、迷いの心によって諸法に実体があると執着すれば、二乗のように法に囚われてしまう。是の故に、智増の菩薩は、四種（空・無相・無願・一切法智清浄）の剣をもって四種の菩提、四種の妄識を断ずる。これによって一切如来（の仮相）を揮斫すると述べられてゐる。すなわち、安然是、この箇所を「無戲論如来という異名を持つ文殊菩薩が、四種の剣を揮つて分別し戲論をなす一切如来の仮の相・悟りを断ずる」ことの説明に引用したと理解される。

安然是「金剛頂云」として、文殊菩薩が自らの剣をもつて一切如来の右臂を揮斫すると説く『理趣経』や『理趣釈』と同趣意を述している『現証大教王経』取意の文をさらに引く。

時彼曼殊室利大菩薩身、從^二世尊心^一下、依^二一切如来右月輪^一而住、復請^二教令^一。時世尊、入^二一切如来智慧三昧耶^一。名^二金剛三摩地^一。断^二一切如来結使^一三昧耶。尽無余有情界断^二一切苦^一、受^二一切安樂悅意^一故、乃至、得^二一切如来随順音声慧円滿成就^一故、則彼金剛劍授^二与曼殊室利大菩薩摩訶薩双手^一。則一切如来、以^二金剛名^一号^二金剛慧^一。金剛慧灌頂時、金剛慧菩薩摩訶薩、以^二金剛劍^一揮斫¹⁵。

文殊菩薩は、一切如来の結使を断ずる三昧耶に入る。これは、無余涅槃を境地とする有情界の一切の苦を断除し、一切の安樂を与えるためであり、または一切の如来が衆生の思うところに応じた（声や音は実体がなく空であると悟る）智慧を（諸の有情に）成就させる（最上の悉地を得させる）ために、（大日如来は）金剛なる慧剣を文殊菩薩の双手に授与し、文殊菩薩に金剛慧という名を与える金剛名灌頂を授けた。文殊菩薩は、金剛なる慧剣を揮つて斫したところに説かれる。つづけて、安然是「疏云」として、円仁の『金剛頂大教王経疏』（『金剛頂経疏』）にも触れ、文殊菩薩は智慧の剣を揮つて一切有情の纏垢の中に在る如来の厭離菩提心の右臂を斫すと『金剛頂経疏』¹⁶の取意を説明する。

また、安然是『金剛界对受記』に、「厭離心者真言者大障也。故厭離此心也。∴（中略）∴慧和上云。厭離心者二乗心也¹⁷。」厭離心は真言行者にとって大障であり、安慧和上（出拠不明）の厭離心とは二乗心であるという説を記している。安然是、この解釈を『瑜祇経疏』に反映させて、文殊は二乗心を揮斫する意を有していると推察できる。

そして、『瑜祇経』に説かれる「四行攝を以て二乗の心を壊す」と、文殊菩薩が自剣を以て揮斫することと、同義であるとし、文殊の四種の慧剣と四攝行とが同義であることを導いている。安然是、『瑜祇経』所説の四攝行は、四無量心観であり、その慈悲喜捨に貪瞋痴等の煩惱とそれを揮斫する慧剣（空・無相・無願・一切法清浄）とを相応させているのである。

第二項 「薩縛達摩尼秣弟」

次に、安然是「薩縛達摩尼秣弟（一切法清浄）」について以下のように述べる。

一切法清浄者、是觀音密号。故理趣品云。得自性清浄法性如来者、是觀自在如来異名。

此仏名^二無量寿^一。若於^二淨妙国土^一現成^二仏身^一。五濁世界為^二觀自在菩薩^一。復説。世間一切欲瞋清浄者、此金剛法。一切垢罪清浄者、此金剛利。一切法有情清浄者、此金

剛因。一切智智般若清淨者、此金剛語云。

又大日經五種三昧道中第四菩薩三昧道説。度二第七地性空彼岸一、世称二觀自在一者、則是三乘共行十地中第七地、是二乘地。菩薩、至レ此多墮二沈空一、為レ濟二沈空一出仮利生。世人称二觀自在一。是諸出仮菩薩通名。此亦与二此觀法清淨、壞二乘心一其義大同云。

又妙法蓮花三昧門、以二薩字一為二種子一。是亦觀自在之種子。天親論説。蓮花有二三義一。一出水義。謂、出二乘泥濁水一故。一開敷義。謂、坐二如來大衆中一處二蓮花臺一同二舍那一。故彼中、開三頭一之義。亦与二此中壞二乘心一亦大同也18。

一切法清淨とは、觀自在菩薩の密号であり、その根拠となる經疏を順に挙げる。

まず、『理趣經』¹⁹（『理趣積』）において、『理趣經』に出づる得自性清淨法性如來とは、觀自在如來の異名であり、無量寿とも名づけられ、淨妙国土では仏身となり、五濁世界では、觀自在菩薩（菩薩身）になると説明する。また、世間のあらゆる貪・瞋が清淨であることは金剛法、あらゆる垢・罪が清淨であることは、金剛利、あらゆる法・有情が清淨であることは金剛因、あらゆる智智・般若が清淨であることは金剛語であると説く。前半部は、無量寿如來と觀自在菩薩は同体であり、世間・出世間において示現する姿が違ふと捉えているが、密教においては無量寿と觀音との関係は無量寿を体とすれば、觀音は衆生攝化の用であるとされる²⁰。ここでは、無量寿について触れることは無いが、五濁の世界の衆生を救い、一切法を清淨にすることを意味しているのだろう。そして、「復説」とつづけて『理趣積』の文を引くが、その原文は次に示す箇所である。

説二一切法平等觀自在智印一、出二生般若理趣一。説下四種不レ染二一切煩惱及隨煩惱一三摩地法上。所謂、世間一切欲清淨故、則一切瞋清淨。此則金剛法菩薩三摩地。所謂、世間一切垢清淨故、則一切罪清淨。此則金剛利菩薩三摩地。所謂、一切法清淨故、則一切有情清淨。此即金剛因菩薩三摩地。所謂、世間一切智智清淨、則般若波羅蜜多清淨。此即金剛語菩薩三摩地。由瑜伽者、得レ受二四種清淨菩薩三摩地一、於二世間一悲願、

生二於六趣一、不レ被二一切煩惱染汚一、猶如蓮華一。以二此三摩地一能淨二諸雜染一²¹。

一切法を平等として如実に自在に觀察することのできる智を表現すること、すなわちあらゆる煩惱やそれに付随して起こる煩惱に染まらない四種の三摩地を説く。それは、貪・瞋、垢・罪、法・有情、智智・般若が清淨であることをそれぞれ法・利・因・語の四菩薩に配した三摩地であり、それを修行する者がこの四種の三摩地を得れば、世間において大悲・行願を起こして、界内六趣に生まれていても、煩惱によって心が汚れるようにはならず、それは蓮華が汚泥に染まらないように清淨であるようなものであると記される。『理趣積』においての説主は、五濁世界に身を現じた觀自在菩薩である。しかし、この引文だけでは何を以て「壞二乘心一」と関わるのかがよくわからない。

次に、『大日經』²²所説の五種三昧道の第四菩薩三昧道を挙げる。この箇所は、台密における根本思想である円密一致思想を論ずる上でも頻出する箇所であり、安然においても『教時間答』等にもそのことについて触れていることで世に知られている²³。

『瑜祇經疏』では、八地の菩薩についての文の取意が依用されている。この箇所は、『大日經義積』²⁴（または『大日經疏』）の解釈を用いて述べており、『大日經義積』に説かれる「第七地において、性空の彼岸に達することを、觀自在と称する」とは、三乘共の十地の第七地（已弃地）は二乗であり、菩薩は、この第七地に至ると空に執着することにより、

進んで求める悟りも無く、教化する衆生も無いと考え、沈空の難に陥ってしまったものを救うために仮の世に出ていき、その人々を導くのであり、そのような人は観自在と称され、観自在とは仮の世界に出ていく菩薩のことをいうと述べる。ここでは、観自在とはどのようなことを指すのかを述べており、観自在なる菩薩、乃至観自在菩薩は二乗の境地から出だすために、仮の世界に現れて衆生の救済を行うと説明している。そして、このような考えと「壞二乗心」とが同義であると述べている。つまり、「壞二乗心」の一部を表す一切法清浄が観音であるということは、観自在菩薩によつて二乗の境界を出離させることに繋がる。このことが「壞二乗心」であると解されるだろう。

さらに妙法蓮華三昧門を取り上げ、薩字を種字となし、これは観自在の種字であるとする。妙法蓮華三昧門は、「本覚讚」で知られる不空訳『妙法蓮華三昧秘密三摩耶経』(『蓮華三昧経』)を想起させられるが、ここでは『瑜祇経疏』にみられる内容と一致するような取意の文をみつけることはできない。水上博士によれば、蓮華三昧の語は、『大日経義积』中、七箇所に出るようで、その内の一つである前の菩薩三味道には、「即皆現之而為説法」⁵。是故、世間見³如⁴是事迹¹故、号²為³観自在者¹。是初入²蓮華三昧¹之異名也⁵。観自在とは蓮華三昧の異名である²とあり、『大日経義积』「住心品」疏では、「観音、对²蓮華三昧門¹増益方便²」⁶。観音は蓮華三昧門に対する増益の方便であることが記されている²。また、『大日経疏』にのみ確認できる箇所には、以下の文がみつげられる。

以²此普眼¹而観²衆生¹故、名²観自在者¹。入²此三昧¹已、從²其心¹出²種種光¹、光中現²是法門真言¹也。薩嚩怛他竭多 嚩路吉多 迦嚩尼(悲)麼也 囉囉囉 吽…(中略) …或以²初薩字¹為²體。 ……²8

観自在なる者が修する普眼三昧の真言中の、初めの薩の字を体となすことが記されており、妙法蓮華三昧門は、『大日経疏』・『大日経義积』に則っていることが検めて理解される。さらにここでは、蓮華と観音との関係を重視していることも掴める。

つづけて、「天親論に説く」として、四種声聞授記の説で知られる菩提流支(異訳に勒那摩提)『妙法蓮華経優波提舍』²9、『法華論』の妙法蓮華の出水義・開敷義の取意を挙げ、蓮華に関する解釈をする。蓮華の花は、泥水から水上に出ていくように、二乗の汚濁水から出離するから出水義といい、如来が大衆(大乘を信じる)のできない怯弱なものの中で、蓮華の上に坐すことは、(信心を生じさせるために、如来の清浄で妙なる法身を示すことは)大日如来と同じであり、これは『法華玄義』等という開三頭一に当たるとしている。つまり、安然是『法華論』所説の蓮華とは、声聞・縁覚といった二乗を出離し、大乘へ向かわせる、法華の法門のことであるとし、それは、蓮華三昧、すなわち法華三昧の異名でもある観自在と同等であると解釈している。

さらに、安然是、これらの解釈と「壞二乗心」とは同義であると述べる。ここで示した「壞二乗心」に関して、安然是、前の「摩訶那囊」では、金剛頂経や『八家秘録』中では般若法に分類される理趣釈等の密教経軌を中心に解釈を行い、「壞二乗心」の「壞」を揮釈に相当させ、文殊が二乗乃至は二乗になろうとする有情にとつての悟りの苦を断じ出世間の断苦与樂を明かすも、特に二乗の智慧を揮釈することを重要視する。

それに対して、安然是「薩縛達摩尼疏弟」において、密教経軌だけでなく、天台大師智顛の『法華玄義』や、伝教大師最澄の『守護国界章』等において、多岐にわたって依用される『法華論』を用いた顕教的な解釈や、円密一致思想と関連性の強い五種三味道の解釈

を取り入れ、二乗の心を出離させる意味として記している。そして、「摩訶那囊」・「薩縛達摩尼秣弟」は、共に「壞二乗心」であることを述べる。

第四節 「四攝行品」の本尊について

さて、『瑜祇經疏』中では、「四攝行」や「壞二乗心」の法の本尊は、「四攝行品」の経題に示された一切仏頂遍照最上王であるとされる。この後に胎藏大日の引用をもって四攝行を解説するため、大日所変の仏頂尊であることに変わりはないが、「四攝行品」に限り、「此法以一切仏頂最上遍照王^一為^二本尊^一。……³⁰」と、本尊は一切仏頂遍照最上王と定めているのである。「四攝行品」では、仏頂尊に関連する作法や思想は経中には登場せず、これは安然独自の思想であるといえる。また、『瑜祇經』・『瑜祇經疏』では「壞二乗心真言」については触れられているが、その印相に関する記述は無い。何を以て仏頂尊を本尊と設定したのであろうか。

『瑜祇經』所説の仏頂尊の主たる特徴としては、有名な「金剛吉祥大成就品第九」所説の仏頂尊と仏眼部母との関係が挙げられる。

時金剛薩埵、对一切如来前、忽然現作一切仏母身、住大白蓮、身作白月暉、
兩目微笑、二羽住^{手也}臍、如入奢摩他。從一切支分、出生十儼沙俱胝仏^一。

一一仏、皆作^レ礼^三敬本所^二出生^一。於^二剎那間^一、一時化^二作^一字頂輪王^一、執^二輪印^一、
頂放^二光明^一、倨傲目視、現^二大神通^一、還來^レ礼^下敬本所^二出生^一一切仏母真言^上。我所^レ
説一切頂輪真言……³¹

ここでは、金剛薩埵所變の仏眼仏母より一字頂輪王を化作されたことが説かれ、この説が台密において仏眼仏母を重要視化させていくが、一字頂輪王の上に仏母を置き、仏頂尊は仏母としての仏眼と並べられるが、仏眼の方を高くみているのである³²。

「壞二乗心」とは、『瑜祇經疏』によれば、文殊菩薩と觀自在菩薩との力用を表したものである。しかし、その語義は少しく違う。文殊に関しては、当然樂を与えるといった利他的思想はあれども、『理趣釈』に「智増菩薩」とあるように、一切如来を揮斫するといった自行に対する側面が強く表されている。それに関連して、仏頂尊はどのようなものであっても破壊をなす性質を有しているとされる。例を挙げると、『陀羅尼集經』一に次の記述が確認される。

爾時觀世音菩薩、起^二大悲^一、偏袒^二右肩^一頂^二礼^一仏足、白^レ仏言。世尊、我曾過去
於^二諸仏^一所^レ得陀羅尼、我今欲^レ説。願^レ仏聽許。爾時世尊、讚^二歎觀世音菩薩^一。善哉
善哉。汝、大慈悲欲^レ説^二神呪^一。今正是時。爾時觀世音菩薩、即現^二何耶揭哩婆身^一。唐云
馬頭、説^二神呪^一時。即現^二呪神^一映^二蔽於前^一。一切菩薩諸天神等所^レ現呪神、悉令^レ不^レ
現。如下以^二磴石^一蓋^中於井上^上。唯觀世音菩薩、一切持^レ呪衆聖中王、獨顯^二自在^一。爾
時世尊、起^二大悲^一、即於^二頂上肉髻相中^一、放^二五色光^一。遍照^二十方一切世界^一。於
^二虛空中^一遊旋如^レ蓋。其光明中有^二菩薩^一。名^二帝殊囉施^一。結加趺坐、放^二大光明^一。
身支節中各出^二火焰^一、口説^二神呪^一。多名名曰^二大仏頂呪^一、少者名為^二小仏頂呪^一。説
^二如^レ是等種種呪法^一、并作^二印法^一。帝殊囉施、説^二此呪等^一、現^二威神^一時、映^二蔽於前^一。
^一何耶揭哩婆身、及呪神悉不^二復現^一。爾時觀世音菩薩、頂^二礼^一仏足、白^レ仏言。世尊、

奇哉希有。世尊威神。我、於一切持呪中一王。更無有上。世尊、慈悲頂上放光、光明中出帝殊囉施菩薩^一、滅我所現身及呪神^一、一無遺余^一。更有何法^一、能滅世尊帝殊囉施^一。爾時世尊、告觀世音菩薩^一。我、有二心呪^一。名曰金輪^一。最尊為極。更無過者^一。惟仏与仏乃能知之^一。是呪、能滅帝殊囉施并呪等法^一。汝等応一心受持生希有想^一。爾時世尊、即説金輪陀囉尼印^一。印如前所説^一。誦者・聴者、若能至心随誦一遍^一、一經於耳^一、塵沙衆罪、若輕、若重悉皆消滅。無願不果。速当成仏^一。此陀囉尼、悉能破壞一切諸法^一。更無有上^三。

觀世音菩薩が（両辺に文殊・普賢を侍らせた）世尊（釈迦如来）から許しを得て、馬頭の威神力を現して一切の菩薩、諸の天神等の神呪を悉く滅す。すると世尊が、頂上の肉髻から五色の光を放つて、（五仏頂の一とされる）帝殊囉施菩薩を現ずる。帝殊囉施が、大仏頂呪と小仏頂呪を説くと、馬頭の威神力は滅してしまふ。そして、觀世音菩薩は、世尊に帝殊囉施を滅することのできる法はあるのかと訊ねた。すると世尊は、頂上の肉髻から頭現した帝殊囉施をも滅する最勝な金輪呪を説き、この呪は一切諸法を破壊すると説かれてゐる。ここでは、觀音が釈迦如来の対告者として登場しているのであるが、馬頭の威神力をも滅するという破壊性が示されている。この性質は、先の文殊の記述にみえる揮斫に相應するのではないかと推察できる。

觀自在菩薩においては、七地沈空の難の救済や、衆生攝化といった悲増の菩薩の側面を強く意識していると考えられ、慈母の義をなす部母との関連がうかがえる。また、文殊の異名は「金剛慧」、觀音の異名は「金剛眼」であり、無見頂相を表す仏頂尊と仏眼部母との関係が連想される。つまり、『瑜祇經』において重要な、仏頂尊と仏眼部母との関係を意識して、安然是文殊と部母としての觀音との関係を「壞二乗心」に見出そうとしたのではないかと推察する。しかし、他の品においても、仏頂尊と仏眼部母の関連が確認できるかどうか検討する必要がある。「四攝行品」では、「金剛吉祥大成就品第九」にみられるような仏頂尊と仏眼部母の優位性のような具体的な記述は確認できず、あくまでも文殊と觀音とは双一として並べられているのみである。

「四攝行品」を一度整理すると、「四攝行法」をなすことよって「壞二乗心」を起すわけで、換言すれば、一切仏頂遍照最上王が文殊菩薩と觀世音菩薩を示現させるとも解釈することができる。

安然是、『教時問答』で、「於其心上第一重中一亦為三部^一。心觀阿字一是如来部、仏地萬德、或安頂上一。胸觀娑字一是蓮華部、大悲滋榮、或安頂左一。額觀吽字一是金剛部金剛、或安頂右^三」⁴と、頂上に如来部・頂左に蓮華部・頂右に金剛部を配するといった仏頂尊の化仏を三尊であらわすという独自の解釈を行っている³。⁵しかし、ここで述べられるのは、胎藏三部の仏・蓮・金であり、『瑜祇經』を三部五部に通じる經典とは見做していても、直接的に文殊・觀音について述べているわけではないため、ここでの疑問の解消には至らない。

そもそも、『理趣經』や金剛頂經では、觀音と文殊は西方無量壽如来の周圍に配される菩薩であり、当然相互関係は存在している。しかし、そのどちらの経軌においても、仏頂尊を本尊として考えていない。それでは、仏頂尊を本尊とし、文殊と觀音とを並べて説く経軌は存するのだろうか。

胎藏曼荼羅では、東部に文殊院、北部に觀音院、その間に仏頂尊を配置している釈迦院

と描かれており、仏頂尊を文殊・観音がはさんでいるような構図になっている。前述したように、安然の『教時問答』では、真言秘密藏を五種に分類しており、『瑜祇経』は両部大法の肝心、また金剛界の蘇悉地法として四藏に分類されており、さらに五藏では、雑秘密藏として胎藏・金剛両界に渉る經典として『陀羅尼集経』が挙げられている。『蘇悉地経』・『瑜祇経』・『陀羅尼集経』はともに、蘇悉地に関連すると考えられ、これら三經典に共通する語の一つに仏頂尊がある。『蘇悉地経』の本尊は仏頂尊であるが、教説主を執金剛、対告者を軍荼利菩薩と設定しており、文殊・観音との直接的な関係は見出せない。では、『陀羅尼集経』ではどうか。

まず『陀羅尼集経』一は、「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品」として釈迦仏頂に関する由縁や壇法、画像法等が説かれる。卷一に説かれる「仏頂法」中に次のように説かれている。

其仏右辺、作^二觀自在菩薩^一。右手屈^レ臂向^レ上把^二白拂^一、左手申^レ臂向^レ下把^二澡罐^一、其罐口中置^二於蓮華^一。其華端直、至^二菩薩頂^一臨^二於額前^一。其仏左辺、作^二金剛藏菩薩^一像^一。像右手屈^レ臂向^二肩上^一、手執^二白扨^一、左手掌中立^二金剛杵^一。其一端者從^二臂上^一向^レ外立著³⁶。

(中心に仏頂像を安置し、)右辺に觀自在菩薩、左辺に金剛藏菩薩を配置することが説かれる。金剛藏とは、金剛の胎児或いは金剛を懷妊しているという意味で、大智の子又は大智を具えているという意味である。『略出経』において智慧と関連性の強い金剛利菩薩の異名に、金剛藏菩薩が挙げられるため、文殊菩薩との関係性が想起されるが、仏頂像法では、金剛藏菩薩は南門の侍者、観音は北門の侍者と説かれており、胎藏界三部の意に近しく、『陀羅尼集経』一に説かれる金剛藏菩薩は、金剛薩埵を指すと考えられるため、文殊菩薩を指すのではない。

次に、卷一に説かれる「金輪仏頂像法」には、「左辺、画^二作文殊師利菩薩^一。身皆白色項背有^レ光。七宝瓔珞宝冠天衣種種莊嚴、乘^二於師子^一。右辺、画^二作普賢菩薩^一。……³⁷」と、左右に文殊・普賢を安置するとあり、いわゆる釈迦三尊を配置すると記されている。前の「仏頂法」に両辺に配置された菩薩と違いがあることは聊か問題があると思われるが、ともあれ、ここでは文殊はあっても観音を対に配していないのである。

卷十二では、大都会道場法壇という『灌頂七日用事鈔』に引用される七日作壇法の基盤となる壇法が説かれる。この壇法中に説かれる「十二肘壇法」・「十六肘壇法」では、胎藏曼荼羅と同型の配置を成している³⁸。また、「十六肘壇法」に説かれる曼荼羅は、金剛界四仏に関連する微妙声仏・阿弥陀仏・阿閼仏・宝相仏が四方に配置されており、ここに両界に相渉る様相の一端を確認することができる。しかし、前述の胎藏曼荼羅と同様、これが直接的な理由になることはない。

以上、安然が一切仏頂遍照最上王を本尊となす理由について考究を試みたが、「四攝行品」中だけでなく、安然が仏頂尊を本尊とする經典の中で特に重要視している經典『陀羅尼集経』内にも、件の確証をみつけるには至らなかつたため、さらに検討する必要があるだろう。

第五節 「壊二乗心」の印相について

前述の通り、『瑜祇経』には「壊二乗心真言」は説かれているが、その印相に関する記述は無い。また、『瑜祇経疏』においても、印相については触れられていない。『瑜祇経』、特に「壊二乗心」の印相に関する安然以降の台密諸師の註釈に注目し、少しく検討を試みたい。

まず、結論を先に述べると、「壊二乗心」の印相は、概して①金剛合掌②剣（刀）印③壊二乗心印の三つのグループに分類される。

①金剛合掌に当たるとはグループにおいては、いわゆる愛染王法として「壊二乗心」が用いられる。真寂親王（八八六―九二七）撰『瑜祇總行私記』には、「師口云。壊二乗、是淨三業也。用_二金剛合掌_一云₃。」と、壊二乗とは淨三業のことであり、金剛合掌を用いよという記述があり、以後の諸師等はこの文言を引くため、これが発端であると考えられる。「壊二乗心真言」の「薩縛達摩尼秣弟」を淨三業として捉えたと推察できる。「師口」は、宗叡又は神日（八六〇―九一六）とされるも、定まっていはいないようである⁴⁰。このグループに該当する記述のある書は以下の通りである。

・『瑜祇経西決』

私云。此品、愛染王為_二本尊_一。前後諸品成_二就四攝行四攝法_一。

真言曰。唵嚩日羅沙怛嚩弱吽鏤穀⁴¹

・『瑜祇経母捺羅』

印 用_二羯磨会四攝印_一。

壊二乗心真言 印 金剛合掌。

唵摩賀演曩嚩日羅薩怛縛薩縛達摩尾戌弟吽⁴²

・静然（一一一五四―）『行林抄』

師口云。壊二乗、是淨三業也。用_二金剛合掌契_一云₃。

・『四帖秘決』

根本印。先仏眼。次染愛。愛染。一字。四攝。壊二乗印明也⁴⁴。

・承澄『阿娑縛抄』

次、正念誦。大勝金剛。染愛。愛染_{未云}。已上_三真言在上。壊二乗。

四攝行。仏眼_文⁴⁵。

・『瑜祇経口決拔書』

壊二乗真言印、有_レ之。淨三業印是也⁴⁶。

・『瑜祇経聴聞抄』

壊二乗真言、印有也。淨三業印是也⁴⁷。

・頼瑜（一一二六―一三〇四）『瑜祇経拾古鈔』

法三記云。師口云。壊二乗是淨三業也。用_二金剛合掌契_一文₄⁴⁸。

・性心（一一八七―一三五七）『瑜祇秘要決』

問。此真言、用_二何印_一乎。

答。北院御製作瑜伽立印、両明共不_レ被_レ出_レ印。法三惣行記云。師口云。壊二乗是淨

三業也。用_二金剛合掌契_一云₃。此真言、薩縛達磨已下、淨三業真言也⁴⁹。

②剣（刀）印に当たるとはグループでは、いわゆる文殊剣として「壊二乗心」を用いる。ま

ず、皇慶口説・長宴（一〇一六―一〇八二）記『四十帖決』寛徳三年（一〇四六）四月淨住説「**五乘經**」^五では、「又壞二乗真言如文。即文殊印明也。其印一院文殊劍印。外縛二火

屈二上節」是山門所伝也。東寺伝云。左手、作レ拳当二胸前一、想三右手持二一茎蓮花一。右手、作二

刀印一。謂、左火・風並申、以レ空押二地・水甲一也。以三此刀印二右腕其上覆レ之右引遣。即想二蓮茎打截一云云^{5.0}。」とあるように、前半はいわゆる五字文殊の劍印であるとし、後半は東寺の伝に云くとして、右手を刀印にし、左手に蓮華を持つと觀想しそれを打ち切る事が記されている。東寺の伝については、何を典拠とするのか不明である。五字文殊を用いる例はこの箇所のみであるが、右手を刀印とする例は承徳二年（一〇九八）薬仁の記を基

とする『瑜祇經西決』の本文にも「壞二乗心印 不動刀印。以レ空捻二地水甲一火風舒端小垂。左手、拳置レ腰^{5.1}。」と記されている。ここでは、右手は刀印を作すが、東寺の伝とは違い、刀印は地に向け、左手は腰に置くことが述べられている。

また、同じく薬仁記を基とする『瑜祇經母捺羅』中に収められている建暦元年（一二二一）四月六日全宗書写とされる「壞二乗心印事」には、仏頂師が右手刀印の指を下にすると伝えて、静師の疏の文には「壞二乗心」の印相は文殊印であるとし、『瑜祇經疏』には文殊の慧劍でもって在纏真如の大日の右臂を切るとある。刀を下に向けるというのは纏垢を地に瞥えて、その地を切る意味があると述べ、つづけて前の東寺の伝について著している。

仏頂師説。以二右手刀印一指レ下文。

静師之疏文、釈二此印一文殊印也。件惠刀切二在纏真如大日右臂一文。

今此印指レ下此意歟。其故、纏、瞥レ地故也。

東寺、左手思レ持二蓮花一以二右手刀一切二蓮花茎一思也。蓮花、自二泥水一生、此切放ツ

相歟云云。

已上師奉三面授一。

快一記也

建暦元年四月六日奉二立印一了。即賜二此御本一翌日

書写了。

全宗^{5.2}

「仏頂師」は仏頂流祖の行嚴を指すと考えられ、それは③のグループに配される『法華別帖』や『了因決』に「聖昭闍梨伝^{5.3}」、「穴太云^{5.4}」として刀印の説明がなされていることからも裏付けられる。「静師」は、法曼流相実の資である『行林抄』を記した静然であると推測できるが、『行林抄』では、「壞二乗心」の印相は金剛合掌であることが述べられているので、その確証は無い。「件惠刀……」以降は安然の『瑜祇經疏』取意の文であろう。劍に関する印相の変遷はあるが、『瑜祇經疏』に説かれる文殊の義が踏襲されていることは確認できる。また、「壞二乗心印事」の面授の記として残されていることから、この契印が密印の一として考えられていたこともうかがえるだろう。

③壞二乗心印に当たるグループは、『法華經誦作法』に「壞二乗心」を用いる。この印相の初出は、承元四年（一二二〇）成立の『法華別帖』であり、「三昧阿闍梨云」とする「奉誦法華之時」にもそれを確認することができる。

次瑜祇經四攝印明

次壞二乗心印明可加⁴字⁵

『瑜祇經』所説の「四攝印明」と共に「壞二乗心印明」が次第に並べられており、観音の種字であるㄐ字を加える旨が説かれている。また、三味流と大きく関連する葉上流の資、了惠（一三三五）撰『了因決』「奉誦法花作法」では、『法華別帖』と同説が記され、『読誦法華經作法』では、「次壞二乗心印明^{普印}。但加ㄐ字⁵」⁶と、「普印」を用いることが説かれており、さらに真言にㄐ字を加えていることが確認される。さらに時代が降り、『長樂寺聖教類』所収大永八年（一五二八）比丘盛賢録「上書法花秘事 法曼院」では、「一。法華秘印、本・迹・経体云事。…（中略）…三味流、以レ之レ一大事習子細。…（中略）…迹門、壞二乗印也。明、壞二乗明也。但、明終加三沙字⁷。…」⁷とみられるように、「壞二乗心印」は、『法華經』迹門の秘印とされるようになる。ここにおいても、観音の種字を加えることが書かれており、『瑜祇經疏』所説の「薩縛達摩尼禰弟」の解釈がここに活用されていることが理解される。また、主に三味・葉上両流において「壞二乗心印」が伝わっているが、その相は定まっておらず、①・②と比較すると、明確にその印契について述べているものは無い。

第六節 結言

安然の『瑜祇經疏』「四攝行品」疏は、「壞二乗心」に関する記述が中心であり、「壞二乗心真言」にみられる「摩訶那囊」を文殊、「薩縛達摩尼禰弟」を観音に配当し、文殊の大智と観音の大悲とを合して「壞二乗心」であるとの解釈がなされる。この文殊と観音との関係は、台密の『瑜祇經』理解において重要視される仏頂尊と仏母としての仏眼との関係の類似性が想起させられる。しかしながら、「四攝行品」の中でその解釈が具体的にされることは無い。

そして、『瑜祇經』や『瑜祇經疏』には、「壞二乗心」の印相について説かれていないため、安然以降の台東密諸師の章疏類からその調査を行った結果、「壞二乗心印」は、それぞれの用途や目的から三つに大別することができた。①は愛染王法において用いられる金剛合掌、②は穴太流系の記述にみつけられることができる文殊剣としての扱われ方、③は三味・葉上両流系の「法華誦誦作法」にみられる観音のㄐ字を加える解釈である。②・③は、まさに『瑜祇經疏』における解釈から発展したことがうかがえる。①は、真寂の『瑜祇總行私記』からの記述引用が起点となる。

東密の性心作『瑜祇經秘要決』「品題目事」では、「一切仏頂最上遍照王、拳二人名⁸。勝義難摧等歎三法徳⁹。就レ人有三意¹⁰。一者金輪。二者金薩、即愛染明王也。…⁵」⁸として、「四攝行品」の品題にみえる一切仏頂最上遍照王には、二つの考え方があり、一は金輪仏頂、二は金剛薩埵（愛染明王）であると釈している。換言すれば、『瑜祇經疏』で設定する仏頂尊と、「四攝行品」の前の「愛染王品第五」、後の「一切如来大勝金剛心瑜伽成就品第七」とを合した愛染王法との両方の意が汲まれ、その結果、①く③にみえるような活用に繋がったと理解された。

《註》

1 『大正』七五・四四一頁上。

2 『大正』六一・四八五頁上。

3 『瑜祇経』についての研究は、前章で述べたように、三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）、水上文義『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）、同『日本天台教学論―台密・神祇・古活字―』（春秋社、二〇一七）等が挙げられ、特に仏頂尊との関連については三崎博士の研究に詳しい。

4 『大正』十八・二五五頁下。

5 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）一三八頁参照。

6 爾の時金剛手は、復た一切処無不相応真言を説いて曰く。

唵嚩日囉^二 薩怛嚩^三 惹吽引^四 鑿斛

復た仏に白して言く。世尊よ、此れ四行攝の法なり。一切処一切事、世間の染愛及び世間の一切法に於いて、皆四攝行の想を生じて、慈・悲・喜・捨（の住）等を起こす。但、一切の事処に於いて、皆此の四攝行法を生ずとは、一切声聞・独覺乘中に於いて、常に此れ等四行を起こして、四攝の真言を誦し、四種鉤印を結べ。所謂四種鉤とは、眼を以て慈を一切に起こし、眼を以て悲を一切に起こし、眼を以て喜を一切に起こし、眼を以て捨を一切に起こすなり。真言行者は、常に四種心を起こせ。但、世間の一切事を作すこと違ふこと無ければ、速やかに無上菩提を証して、現生に一切の法に於いて、平等無二無染無淨無違無礙身を証得せよ。常に金剛薩埵三昧に住して、此の四攝の法を以て、広く一切有情を利樂することを作せ。但、一切事処に於いて、無違の相を生じて、此の四種眼法を用いよ。常に一切の時に於いて、壞二乘心を起こす。此の壞二乘心真言を誦して曰く。

唵摩訶引^一 野怛那^二 嚩日囉^三 薩怛嚩^四 薩嚩達磨尾成駄吽

常に此の真言を誦して、一切の時に於いて、自心を觀察し、一切の執着を壞し、一切の法は本来清淨なるを觀ぜよ。此れに由て福德増長し、現生に於いて一切法清淨金剛乘金剛性を獲得せん。一切の福德を増長して、一切の如来に常に加護せられん。一切の金剛常に破業するを以て、現生に於いて大金剛位処を証せしめん。『大正』十八・二五七頁中（下）。

7 一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品に説く。爾の時金剛手は、復た一切処無不相応真言を説く^云。仏に白して言く。世尊よ、此れ四行攝の法なり。一切処一切事、世間の染愛及世間の一切法に於いて、皆四攝行の想を生じて、慈・悲・喜・捨住等を起こす。二乗中に於いて常に四攝行を起こして、四攝の真言を誦し、四種鉤印を結べ。所謂四種鉤とは、眼を以て慈悲喜捨を一切に起こし、常に一切の時に於いて壞二乗の心を起こす。此の壞二乗心真言を誦して曰く^云と。

初の真言に云く。薩怛縛^二 惹吽引^三 鑿斛^四 此れ有情と云う。即ち金剛薩埵なり。此れは是れ鉤引縛等なり。此れ金剛薩埵の心中に於いての故に、惹吽鑿斛を以て真言の体と為す。即ち是れ鉤索鎖鈴四金剛真言なり。『大正』六一・四八八頁下（四八九頁上）。

8 後の真言に云く。摩訶那囊^{此れ大乘と云い、亦た大壞と云う} 薩嚩達摩尼^{此れ一切法清淨と云う} 毘^{此れ一切法清淨と云う}。『大正』六一・四八九頁上）。

9 大乘とは、教王経百八名の中に、文殊を大乘と名づく。略出経に、摩訶衍那と云う。故に教王経に云く。金剛利と大乘と、金剛鉤と大器と、妙吉と金剛深と、金剛慧を我が体となすと。略出経に云く。金剛利摩訶衍那、金剛藏摩訶器仗、文殊師利金剛甚深と。

金剛覺^{我禮壞とは、亦た是れ文殊劍の密号なり}。故に理趣品に云く。文殊は自らの劍を以て一切の如来を揮斫すと。不空釈に云く。智増の菩薩は、四種の文殊般若劍を用いて、四種の成仏智、能取（執）（所取（執））の障礙を断ず。故に文殊は四仏の臂を揮斫することを現するなり^云と。

又金剛頂に云く。文殊は、自らの劍を以て一切如来の右臂を揮斫すと。疏に云く。文殊は、智慧劍を以て一切の在纏如来の厭離菩提心の右臂を揮斫するなり^云と。

即ち、此の経の、四行攝を以て二乗の心を壞すと、其の義同じなり。『大正』六一・四八九頁上）。

10 金剛利と大乘と、金剛劍と仗器と、妙吉と金剛染とを我金剛慧を礼す。〔大正〕十八・二二六頁中。）

11 我今金剛利と、摩訶衍那と、摩訶器仗と、文殊師利と、金剛藏と、金剛甚深と、金剛覺とを敬礼す。〔大正〕十八・二四二頁上。）

『六卷略出經』

我今敬_レ礼金剛利_一

摩訶衍那、大乘器

摩訶器仗、鎮_レ摧魔_一

文殊師利、慧猛利

金剛藏、法弁無_レ窮

金剛甚深、梵音美

金剛劍、身住_レ仏掌_一

智慧神力妙吉祥

金剛覺、分_レ斷習氣_一

般若、揮破授_レ灌頂_一

「我今金剛利を敬礼す。摩訶衍那は、大乘器。摩訶器仗は、魔を鎮め摧く。文殊師利は、慧猛利なり。

金剛藏は、法弁すること窮まり無し。金剛甚深は、梵音美し。金剛劍は、身を仏掌に住す。智慧神力なる妙吉祥。金剛覺は、習気を分断す。般若は、揮破して灌頂を授く。」〔續大全〕、密教2・九九頁下。）

12 覺悟に四種有り。所謂、声聞覺悟・緣覺覺悟・菩薩覺悟・如来覺悟なり。覺悟の名句は、同じと雖も淺深に異なり有り。自利・利他の資糧は、小大不同なり。〔大正〕十九・六一三頁下。）

13 時に文殊師利童真は、重ねて此の義を顕明にせんと欲するが故に、熙怡微笑して、自劍を以て一切如来を揮斫し已て、此の般若波羅蜜多最勝心を説かん。〔大正〕八・七八五頁上。）

14 時に薄伽梵一切無戲論如来とは、是れ文殊師利菩薩の異名なり。〔中略〕：一切有情は無始より輪廻す。四種識に与て無量虚妄煩惱を積集すれば、則ち凡夫と為りて、凡夫位に在るを名づけて識と為す。聖流に預て如来地に至るを名づけて智と為す。四智の菩提を以て、四種の妄識を対治す。妄識既に除れば、則ち法智は成熟す。若し法を妄執さは、則ち法執の病と成る。是の故に、智増の菩薩は、四種の文殊師利般若波羅蜜劍を用いて、四種の成仏の智、能取所取の障礙を断ず。是の故に、文殊師利は、四仏の臂を揮斫することを現するなり。〔大正〕十九・六一三頁上、下。）

15 時に彼の曼殊室利大菩薩身は、世尊の心従り下りて、一切如来の右の月輪に依て住して、復た教令を請う。時に世尊は、一切如来の智慧三昧耶に入る。金剛三摩地と名づく。一切如来の結使を断ずる三昧耶なり。尽く無余の有情界の一切の苦を断じ、一切の安樂悦意を受けしむるが故に、乃至、一切如来の随順音声の慧を円満成就することを得る故に、則ち彼の金剛劍を曼殊室利大菩薩摩訶薩の双手に授与したまう。則ち一切如来は、金剛名を以て金剛慧と号す。金剛慧に灌頂したまう時に、金剛慧菩薩摩訶薩は、金剛劍を以て揮斫す。〔大正〕十八・二二一頁中、下。）

16 巴仁撰『金剛頂經疏』「文殊師利、是一切仏無上之惠。〔中略〕：又以_レ妙音_一開_レ悟_一一切_一故、云_レ我名_レ微妙音_一也。別本云。我是仏所有者、抛_レ仏之惠及妙音義_一。旧本云。我是諸仏語者、偏取_レ妙音義_一也。後二句、寄_レ証智_一而歎_レ智身_一。有著之惠、不_レ可_レ獲得_一。但無礙之惠所_レ契會_一也。举_レ五陰初_一、令_レ知_レ四陰_一故云_レ色也。五陰是法喻。如_レ五指_一。五陰和合、而名為_レ人。猶如_レ拳指_一。凡夫起_レ人執_一、二乘起_レ法執_一。乃至、等覺有_レ微妙細執_一。今此三摩地惠、離_レ此等執_一。由_レ是無著惠_一、応_レ得_レ妙智身_一。故、云_レ由_レ惠無_レ色故、音声而可_レ得_一。所_レ言音声、即文殊名。举_レ名頭_レ身也。「文殊師利は、是れ一切仏の無上の惠なり。〔中略〕：又妙音を以て一切を開悟するが故に、我微妙音と名くと云うなり。別本云く。我は是れ仏の所有とは、仏の惠及び妙音との義に抛るなり。旧本に云く。我は是れ諸仏の語とは、偏に妙音の義を取るなり。後の二句は、証智に寄せて智身を歎す。有著の惠は、獲得すべからず。但だ無礙の惠のみ契會する所なり。五陰の初めを挙げて、四陰を知らしむるが故に色と云うなり。五陰は是れ法喻なり。五指の如し。五陰和合すること、名づけて人と為す。猶拳指の如し。」

凡夫は人執を起こし、二乗は法執を起こす。乃至、等覺にて微細の執有り。今此の三摩地の惠は、此れ等の執を離る。是の無著の惠に由つて、応に妙智身を得べし。故に、惠には色無きに由るが故に、音声に而も得べきなりと云う。言う所の音声とは、即ち文殊の名なり。名を挙げて身を顕すなり。」(『大正』六一・六八頁上〜七〇頁下。)

17 厭離心とは眞言者の大障なり。故に厭離とは此れ心なり。…(中略)…慧和上に云く。厭離心とは二乗心なり。(『大正』七五・一一九頁上。)

18 一切法清淨とは、是れ観音の密号なり。故に理趣品に云く。得自性清淨法性如来とは、是れ観自在如来の異名なり。此の仏無量寿と名づく。若しは淨妙国土に於いて現じて仏身を成ず。五濁世界では観自在菩薩と為す。復た説く。世間一切の欲瞋清淨とは、此れ金剛法。一切の垢罪清淨とは、此れ金剛利。一切法有情清淨とは、此れ金剛因。一切智智般若清淨とは、此れ金剛語と云。

又大日經の五種三昧道中の第四菩薩三昧道に説く。第七地性空彼岸を度すことを、世に観自在と称するとは、則ち是れ三乗共行十地中の第七地、是れ二乗なり。菩薩は、此れに至つて多く沈空に墮するを、沈空を濟う為に出仮利生す。世の人は観自在と称す。是れ諸もろの出仮菩薩に通ずる名なり。此れ亦た此の観法清淨と、壞二乗心と其の義大同なり云。

又妙法蓮華三昧門では、薩字を以て種子と為す。是れ亦た観自在の種子なり。天親論に説く。蓮華に二義有り。一は出水義。謂く、二乗の泥濁の水より出づるが故なり。二は開敷義。謂く、如来大衆の中に坐し、蓮花臺に処するは舍那と同じなり。故に彼の中の、開三頭一の義なり。亦た此の中の壞二乗心と亦た大同なり。(『大正』十八・四八九頁上〜中。)

19 ここでは『理趣品』に云く「とあるが、ここに引かれる文は『理趣積』の方が適當である。また、『菩提心義抄』五においても『理趣積』云。(『大正』七五・五五二頁中。)」以下同文を引用している。

20 鈴関有俊「弥陀と観音とに就て」(『智山学报』十一、一九三七)等参照。

21 一切法平等観自在智印を説いて、般若理趣を出生す。四種の一切煩惱及び随煩惱に染まらざる三摩地の法を説く。所謂、世間一切の欲清淨なるが故に、則ち一切の瞋清淨なり。此れ則ち金剛法菩薩三摩地なり。所謂、世間一切の垢清淨なるが故に、則ち一切の罪清淨なり。此れ則ち金剛利菩薩三摩地なり。所謂、一切法清淨なるが故に、則ち一切の有情清淨なり。此れ即ち金剛因菩薩三摩地なり。所謂、世間一切智智清淨、則ち般若波羅蜜多清淨なり。此れ即ち金剛語菩薩三摩地なり。由に瑜伽者は、四種の清淨なる菩薩三摩地を受することを得れば、世間に於いて悲願して、六趣に生ずれども、一切煩惱染汚を被らず。猶お蓮華の如し。此の三摩地を以て能く諸の雑染を淨す。(『大正』十九・六一二頁上。)

22 『大正』十八・九頁下。

23 五種三昧道は、『大日經』「具縁品」に説かれる一切の三昧道を仏・菩薩・縁覺・声聞・世間の五つに分類したもの。これについて、台密では、円仁が『金剛頂經疏』において独自の解釈を行い注視される。すなわち「正明經」中に、「初めに随他立を明かし、後には随自立を弁す。随他立と言うは、眞言教に於いて総じて五種三昧耶教有り…」と述べ、随自立を述べる箇所において、「後に随自立を弁すれば、唯だ如来の自意に随つて之を説く。故に随自と云う。…(中略)…是の故に大興善寺阿闍梨に云く、若し眞言に就いて教を立つれば、応に一大円教と云うべし。如来の演ぶる所は眞言秘密道に非ざること無きが故に、と。」として、随他立とは五種三昧道であり、随自立は、この五種三昧道それぞれに区別することは無いという教えであると、これは大興善寺の元政阿闍梨が説いた一大円教であるという。大久保良峻『最澄の思想と天台密教』(法蔵館、二〇一五)三四九頁〜三五二頁)等参照。

24 『續天全』密教1・一七六頁上〜一七七頁上。

25 即ち皆之を現じて説法を為す。是の故に、世間の是くの如きの事迹を見る故に、号して観自在なる者と為す。是れ初めて蓮華三昧に入るの異名なり。〔續天全〕、密教1・一七六頁下。〕

26 観音は、蓮華三昧門に対する増益の方便なり。〔續天全〕、密教1・一五頁上。〕

27 水上文義『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）二〇七頁〜二二〇頁参照。

28 此の普眼を以て衆生を観するが故に、観自在なる者と名づく。此の三昧に入り已て、其の心従り種種の光を出だして、光中には是の法門の真言を現するなり。「薩嚩怛他竭多 嚩路吉多 迦嚩尼（悲） 麼也 囉囉囉 吽」：（中略）：或いは初めの薩字を以て体と為す。〔大正〕三九・六八一頁中。〕

29 『法華論』（『大正』二六・三頁上）取意。

30 此の法は、一切仏頂最上遍照王を以て本尊と為す。……〔大正〕十八・四八九頁上〜中。〕

31 時に金剛薩埵は、一切の如来の前に対して、忽然として一切の仏母身を現作し、大白蓮に住し、身は白き月の暉を作し、両目微笑にし、二羽（手）臍に住すること、奢摩他に入るが如くす。一切の支分従り、十儼識沙俱胝仏を出生す。一一の仏は、皆本出生する所を礼して敬うことを作す。刹那の間に於いて、一時に一字仏頂輪王を化作し、輪印を執り、頂より光明を放ち、偃り傲る目をもて視、大神通を現し、還り来りて本出生する所の一切仏母の真言を礼し敬う。我説く所の一切頂輪真言……〔大正〕十八・二六〇頁上。〕

32 三崎良周『台密の研究』（創文社、一九八八）一二五頁〜一二六頁、五三四頁参照。

33 爾の時観世音菩薩、大慈悲を起し、偏へに右の肩を祖いで仏足を頂礼し、仏に白して言く、世尊よ、我、曾て過去の諸仏に於いて得る所の陀羅尼を我今説かんと欲う。願はくは仏聴許したまえ。爾の時世尊観世音菩薩を讚歎したまわく、善いかな、善いかな、汝大慈悲をもて神呪を説かんと欲す。今正しく是れ時なり。爾の時観世音菩薩、即ち何耶揭哩婆の身唐に馬頭と云うを現じて神呪を説きたまう時なり。即ち呪神を現じて前に映蔽す。一切の菩薩諸の天神等の現する所の呪神悉く現ぜざらしむ。磴石を以て井の上に蓋うが如し。唯だ観世音菩薩一切の呪を持する衆の聖中王独り自在を顕わす。爾の時に世尊、大慈悲を起して、即ち頂上の肉髻相の中に於いて、五色の光を放つ。遍く十方の一切の世界を照らしたまう。虚空の中に於いて遊旋すること蓋の如し。其の光明の中に菩薩有り。帝殊囉施と名づく。結加趺坐して大光明を放つ。身の支節の中より各火焰を出して、口に神呪を説きたまう。多なるをば名づけて大仏頂呪と曰い、少なるをば名づけて小仏頂呪と為す。是くの如き等種々の呪法を説き、並びに印法を作したまう。帝殊囉施は此の呪等を説き、威神を現じたまう時、前に映蔽せる何耶揭哩婆の身、及び呪神悉く復た現ぜざるなり。爾の時観世音菩薩、仏足を頂礼し、仏に白して言く。世尊よ奇なるかな、希有なり。世尊威神まします。我れ一切の呪を持する中に於いて王たり。更に上有ること無し。世尊は慈悲をもて頂上より光を放ち、光明の中より帝殊囉施菩薩を出だして、我が現する所の身、及び呪神を滅して、一つも遺余なし。更に何の法有つてか能く世尊の帝殊囉施を滅せん。その時に世尊、観世音菩薩に告げたまわく、我れに心呪有り。名づけて金輪と曰う。最尊にして極たり。更に過ぎたる者なし。惟だ仏と仏とのみ乃ち能く之を知りたまえり。是の呪、能く帝殊囉施并に呪等の法を滅す。汝等応さに一心に受持して希有なる想を生ずべし。その時世尊、即ち金輪の陀嚩尼印を説きたまう。印は前の所説の如し。誦する者、聴く者、若し能く至心に随いて一遍を誦し、一たび耳に経れば、塵沙の衆罪若しは軽、若しは重悉く皆消滅す。願として果たさざること無し。速やかに當に成仏すべし。此の陀羅尼悉く能く一切の諸法を破壊することを得。更に上有ること無し。〔大正〕十八・七九〇頁中〜下。〕

34 其の心上第一重中に於いて亦た三部を為す。心に阿字を觀する是れ如来部は、仏地方徳にして、或いは頂上に安ず。胸に娑字を觀する是れ蓮華部は、大悲滋榮にして、或いは頂の左に安ず。額に吽字を

観ずる是れ金剛部金剛は、或いは頂右に安ずる。〔大正〕七五・四二九頁中。）

35 寺本亮晋「台密の蓮華部について」〔印度学仏教学研究〕五九一、二〇一〇。）

36 其の仏の右辺に、観自在菩薩を作る。右手は臂を屈して上に向けて白拂を把り、左手は臂を伸ばして下に向けて澡罐を把り、其の罐口の中に蓮華を置く。其の華端直にして、菩薩の頂に至り額前を臨む。

其の仏の左辺に、金剛蔵菩薩像を作り、像の右手は臂を屈して肩に向けて、手に白払を執り、左手の掌中に金剛杵を立てる。其の一端は臂の上従り外に向けて立て著ける。〔大正〕十八・七八五頁下（七八六頁上。）

37 左辺には、文殊師利菩薩を画作す。身は皆白色にして項背に光有り。七宝瓔珞宝冠天衣を種種に莊嚴し、師子に乗る。右辺には、普賢菩薩を画作す。……〔大正〕十八・七九〇頁上（中。）

38 石田尚豊『曼荼羅の研究』（東京美術刊、一九七五）に、胎藏圖像の仏頂尊、諸尊の図形は『陀羅尼集経』や『一字仏頂輪王経』によつてゐるとし、特に『一字仏頂輪王経』は、胎藏圖像仏頂尊のすべてにわたつて完全に符合していると述べられている。

39 師口に云く。壞二乗は是れ浄三業なり。金剛合掌を用いよ云。〔大正〕六一・五〇五頁上。）


40 『仏書解説大辞典』にて、小田慈舟氏は、『大正』底本である高山寺蔵写本には、師とは無動寺相応とあるが、宗叡又は神日であると推定しているが、三崎博士『台密の理論と実践』一〇四頁。）は、確証は無いとしている。

41 私に云く。此の品は、愛染王を本尊と為す。前後の諸品四攝行四攝法もて成就す。真言に曰く。唵嚩

日羅沙怛嚩弱吽鑊穀（青蓮院吉水蔵、嘉曆三年写本。）

42 印 羯磨会四攝印を用う。壞二乗心真言 印 金剛合掌

唵摩賀演曩嚩日羅薩怛縛薩縛達摩尾戌弟吽（青蓮院吉水蔵、嘉曆三年写本。）

43  師の口に云く。壞二乗とは、是れ浄三業なり。金剛合掌契を用う云。〔大正〕七六・四〇一頁上。）

44 根本印。先、仏眼。次、染愛。愛染。一字。四攝。壞二乗印明なり。〔續大全〕、密教3・三三二頁下。）

45 次、正念誦。大勝金剛。染愛。愛染本に云。已上三真言上に在り。壞二乗。四攝行。仏眼。〔大正〕四九・三〇七頁上。）

46 壞二乗真言印、之に有り。浄三業印是れなり。〔續大全〕、密教2・二四六頁下。）

47 壞二乗真言に、印有るなり。浄三業印是れなり。〔續大全〕、密教2・三〇八頁上。）

48 法三記に云く。師口に云く。壞二乗は是れ浄三業なり。金剛合掌契を用う云。〔日藏〕三三、密教部章疏八・三八頁下。）

49 問う。此の真言は、何の印を用うるや。答う。北院御製作の瑜伽立印、両明共に印を出されず。法三惣行記に云く。師口に云く。壞二乗は是れ浄三業なり。金剛合掌契を用う云。此の真言は、薩嚩達磨已下、浄三業真言なり。〔真全〕五・一一四頁下。）

50 又壞二乗真言文の如し。即ち、文殊の印明なり。其の印、一院の文殊劍印、外縛して二火を上節に屈せよ。是れ山門所伝なり

東寺伝に云く。左手は、拳を少し胸前に当て、左手に一茎の蓮花を持つと想え。右手は刀印を作せ。謂く、左の火・風を並べ申て、空を以て地・水の甲を押すなり。此の刀印を以て右の腕を其の上にし、之を覆いて右に引き遣り、即ち蓮茎を打ち截ると想え云。〔大正〕七五・九四三頁中（下。）

51 壞二乗心印 不動刀印。空を以て地・水の甲を捻じて火・風を舒べ端を小さく垂れよ。左手は、拳にして腰に置き。（青蓮院吉水蔵、嘉曆三年写本。）

52 仏頂師の説。右手刀印を以て下を指せ^文。静師の疏文は、此の印を釈するに文殊印なり^文。件の惠刀もて在纏真如の大日の右臂を切れ^文。今此の印の下を指せは此の意か。其の故に、纏は、地に譬える故なり。東寺には、左手に蓮花を持つと思いて右手の刀を以て蓮華の茎を切ると思ふなり^文。蓮花は泥水自ら生ずるために、此れを切り放つ相か^云。已上師、面授し奉る。快^一記なり。建曆元年四月六日に立印し奉り了ぬ。即ち此の御本を賜りて翌日に書写し了ぬ。全宗（青蓮院吉水藏、嘉暦三年写本。）

53 『續天全』、密教3・二五八頁上。

54 『大正』七七・一五六頁下。

55 次、瑜祇經四攝印明

次、壞二乗心印明^{可加^キ字}（『續天全』、密教3・二五七頁上^中。）

56 『大正』七七・一五六頁下。

57 一。法華秘印、本・迹・経体と云う事。…（中略）…三昧流は、之を以て一大事の習の子細とす。…

（中略）…迹門は、壞二乗印なり。明は、壞二乗明なり。但し、明終わりに沙字を加う。…（『群

馬泉史 資料編5 中世1』五〇九頁上^下。）

58 一切仏頂最上遍照王とは、人名を挙ぐ。勝義難摧等は法徳を歎ず。人に就いて二意有り。一は金輪。

二は金薩、即ち愛染明王なり。…（『真全』五・一〇七頁上。）

第三章 青蓮院吉水藏『瑜祇經母捺羅』『𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄𑖅私記』『瑜祇經西決』について

第一節 序言

『瑜祇經』は、金剛智詔（異説あり）とされる金剛界系經典の一であり、五大院安然の撰述である『八家秘録』によると、『瑜祇經』は弘法大師空海、慧雲、宗叡によって将来され¹、台東密どちらにおいても重要な經典の一つとして位置づけられている。

本經の注釈書としては、東密における『一切如来大勝金剛頂最勝真実三昧耶品次第観念』と、真寂親王（八八六―九二七）撰『瑜祇總行私記』が最初に挙げられ、次いで台東における安然の『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇經修行法』（以下『瑜祇經疏』）が挙げられる。

中世に至ると、東密においては、実運撰『𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄𑖅秘決』二卷、道範撰『𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄𑖅口決』五卷、性心撰『瑜祇秘要決』十二卷、頼瑜撰『瑜祇經拾古鈔』三卷等が知られている。台東においては、聖一国師円爾弁円（二二〇二―二二八〇）秘書『瑜祇經見聞』一卷、応長二年（一三二二）頃成立と考えられる『瑜祇經口決拔書』八卷（尾欠）、澄豪の講述口決を弟子が書き留めたものとされる『瑜祇經聴聞抄』三卷等が伝わっているが、まだ多くは活字化が進んでいない。

台東において『瑜祇經』は、仏頂尊、仏眼仏母を主と考えている「金剛吉祥大成就品第九」の中で説かれる「大悲胎藏頓証八字真言」に関することが重要視され、なかでも慈鎮和尚慈円（一一五五―一二二五）のいわゆる仏眼信仰は、周知の通り密教教学上多くの研究対象になっている²。慈円が幼少期に入寺した青蓮院の吉水藏聖教は、現存する最古の密教聖教とされ、平安時代中期に谷阿闍梨皇慶の時代に成立し、青蓮院初代門跡行玄のときに現在の姿に整えられたとされる³。この吉水藏に収められた『瑜祇經』に関する書物は大変価値が高いと考えられているが、未だその内容の詳細検討はあまりなされていない⁴。

吉水藏聖教類をまとめた『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』によれば、『瑜祇經』に関連するであろう書は第五十四箱に収蔵されており、十九の書目が確認できる。

前章では、『瑜祇經』一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六（四攝行品）に説かれる「壊二乗心」について考究し、その中で安然の『瑜祇經疏』以降の東台密諸師の章疏類から「壊二乗心」の印相について探求を行った。これら章疏類中に、青蓮院吉水藏『瑜祇經母捺羅』には、「壊二乗心印事」と題したこの印相の何らかの伝承に関する切紙様の書面が内包されている。そのため、本書が如何なる書なのか考察する必要があると考えられる。そこで、筆者はまず『瑜祇經』に関連する青蓮院吉水藏の聖教類の中から『瑜祇經母捺羅』と、それと同時代に書写されたものと考えられる『𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄𑖅私記』、『瑜祇經西決』の三本について整理・解析を試みた。

第二節 青蓮院吉水藏『瑜祇經母捺羅』『𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄𑖅私記』奥書について

青蓮院吉水藏『瑜祇經母捺羅』『𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄𑖅私記』『瑜祇經西決』の奥書がどのようなものか、諸先生方の先行研究を踏まえ、内容等の再確認と解析を推し進めたい⁵。

三本の内、『瑜祇経母捺羅』『**ウツサヤノ**私記』は、一冊にまとめられた合綴本である。この二書合綴本の奥書は、全て『瑜祇経母捺羅』内のみ確認することができ、『**ウツサヤノ私記**』には奥書は記されていない。『瑜祇経母捺羅』奥書を示すと次の通りである。

- ・天仁二年六月二十三日、於^二因幡州高庭浦上清冷院^一記^レ之。比丘薬仁矣。
- ・書本云。安元三年^{丁酉}七月二十七日、於^二鎮西肥前州今津誓願寺^一、以^二如房弟子(采カ)玄語房本伝領之人、花蔵房之本^一為^二書本^一云。
- ・治承四年^{庚子}十一月三日、於^二備前州日応山瑜伽寺^一、以^二件鎮西之本^一不意之外書了。
- 或修行者之持本也云。
- ・嘉暦三年三月二日、以^二伯州基好自筆本^一書了。件正本、在^二岡崎^一耳^六。

基好

まず、一つ目の奥書には、天仁二年(一一〇九)に因幡州高庭(莊)浦上清冷院(現鳥取県鳥取市付近。詳細不明。)にて薬仁が記したとある。また、二つ目の奥書には、この書本は安元三年(一一七七)鎮西肥(筑)前州今津誓願寺(現福岡県福岡市)にて如房の弟子玄語房に伝わる本と花蔵房の本による書本であることが記されている。さらに、三つ目の奥書には、治承四年(一一八〇)に備前州日応山瑜伽寺で、偶然にも修行者が所持していた本が前の鎮西での書本で、それを基好が書写したとある。そして、四つ目の奥書に、現存するこの写本は、嘉暦三年(一一三二)伯州の基好の自筆の本を(青蓮院付近の)岡崎で書写した旨が述べられている。

薬仁については、実導仁空(一一三〇九―一三三八)談『伝法要決鈔』⁷や東密の『十八道口決』⁸等に、「叡山の長寿房(または坊)薬仁」というその名を確認できる。薬仁の名は、智泉流の血脈にも列ねられており⁹、さらに、『伝教大師全集』所収『合壇灌頂記』の奥書に、「有人云。本書、祖山長寿房薬仁、依^二谷之合行記^一而撰^レ之。……¹⁰」と記され、薬仁がこの『合壇灌頂記』を、谷流の「合行記」なる書に基づいて撰著したとあり、薬仁が谷流の法脈に属される密教僧であったことが理解される¹¹。また、『瑜祇経母捺羅』・『**ウツサヤノ私記**』共に表題に「長寿房」と題されていることから、薬仁により記された内容であることが強調される。

二つ目の奥書にみえる今津誓願寺は、葉上房栄西が、九州に渡った時に滞留した地として知られる。『誓願寺縁起』によれば、安元元年(一一七五)十月には、すでにこの地に在ったようである¹²。また、三・四つ目の奥書にみえる基好とは、栄西の密教の師の一人であり、栄西が誓願寺に留まっていた年と照らし合わせると、二つ目の奥書は、人物が記されていないが、栄西によるものであると考えられる。安元三年(一一七七)に、如房の弟子玄語房が如何なる人物かは不明であるが、栄西が薬仁より伝わる本を書写したことが理解できる。

基好は、先学の研究によれば、大山寺の僧で、習禅房と称し、台密における覚超の系統の川流の念覚、皇慶の系統の穴太流の祖聖昭、また前述の同谷流の薬仁の法脈から鳥取の大山の兼慶などを通じて受法し、それを栄西に伝法した師である。また、慈円とも関係が深い人物である¹³。基好は、栄西の故郷でもあり、帰唐後の修行や伝法の拠点の一つであった岡山の日応山瑜伽寺(現日応寺)で、居合わせた修行者が所持していた本書を発見して、それを書写したとあり、現存本はこの本をさらに書写したもののようである。また、基好

は『瑜祇経』の特に、「大悲胎藏八字真言」に関する口伝や、仏眼法について造詣が深かったようで、『瑜祇経』に関する意識はこの奥書にも顕れている。

薬仁、基好、栄西の伝法に関しては、先学が指摘する『台密血脈譜』、尾張密藏院印信類「合行密印 谷建仁寺流血脈阿忍流」より、法脈上からもその繋がりを確認することができる。

『台密血脈譜』¹⁴

慈覚大師—安惠…(中略)…景雲—皇慶—勝範—覺嚴—敬誉—顕意—栄西

頼昭—薬仁—兼慶—基好—栄西

尾張密藏院印信類「合行密印 谷建仁寺流血脈阿忍流」¹⁵

弘法—真雅—源仁—益信—真寂—延勢—叡就—清助—寂昭—皇慶—頼昭—覺範—薬仁

—兼慶—基好—栄西…

第三節 『瑜祇経西決』奥書について

『瑜祇経西決』は前の二本と同様薬仁の記が元本であり、奥書には『瑜祇経西決』の由来が以下の通り記されている。

・ 承徳二年壬九月七日、依_レ難_レ背_二丁寧請_一、於_二備前州児嶋_一請_{諸カ}興寺_一、延暦寺比丘薬仁_レ記_レ之。願、以_二此良縁_一、期_レ為_二来浮生_一矣。

・ 治承四年_{庚子}四月下旬、於_二五条櫛ヶ_一書_了。

・ 書本_ハ、白川金剛勝院之僧三位闍梨_{圓長}之本也。但、去長寛年中、彼闍梨、為_二修行巡礼_一令_レ参_二伯大山_一。基好草室_三数月同宿、其間真言書等少少被_二書写_一了。其内

ノ書也。基好_カ其時書本_ハ、治承己亥年四月中、為_二伯耆在庁_一元安_一、大山騒動之

時、顕密聖教等尺数、為_二軍兵_一被_レ取_了。其内如_レ此書籍等失_了。仍重所_レ尋書也。

基好_カ書本_ハ、先年修行之時、於_二多武峰_一、以_二慶深嚴浄房本_一書_了。修行之趣如_レ

此_云。

・ 嘉暦三年三月三日、以_二伯州基好自筆本_一在岡崎書写_了。(花押)¹⁶

この『瑜祇経西決』の元本は、一つ目の奥書によると、前の合綴本の奥書に記された時代より少し遡った承徳二年(一〇九八)に、備前州児島の請(諸)興寺(現岡山県倉敷市木見。現在廃寺。)にて、薬仁が記したものとある。そして、二つ目の奥書には、治承四年(一一八〇)にその本を(後に詳述するが)京都の五条櫛笥にて書写したことが記されている。これに続けて、三つ目の奥書に、この書本は元々白川金剛勝院の円長阿闍梨の本であり、円長が長寛年中(一一六三—一一六四)に大山に修行・巡礼のため立ち寄った時、大山の基好がこの本を書き写した。しかし、この書本は、治承三年(一一七九)に伯耆の在庁官人である小鴨基康と大山との騒乱による兵火で、大山の聖教類と共に失われてしまった。そのため、基好は多武峰にて、慶深のもつ嚴浄房本を用いて書写した。現行本は、四つ目の奥書の嘉暦三年(一一三二八)にこの基好の書本を書写したものであると記されている。

二つ目の奥書にみえる、治承四年(一一八〇)の記述については、栄西はこの時期、今

津誓願寺に滞留していたため、基好に関する事柄と推測される。つまり、基好は大山騷動の後に、大山と青蓮院付近との往来の最中にこの書写を行ったのであろう。なお、「五条櫛笥」は、原典では「五条櫛ケ」となっており、『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』においても解読されていない。この地に関して、岡野浩二氏は、京都五条か奈良の五条であると考え、氏の論では奈良の五条と推測しているが、「櫛ケ」については触れていない¹⁷。そこで、筆者は「櫛ケ」について一考を投じたい。「櫛ケ」の「ケ」はそのままでは何を表しているのか分からないが、竹冠を省略したものであると推測すると、「櫛笥」という地名が浮ぶ。「櫛笥」は、青蓮院の寺誌『華頂要略』『門主伝』の中に、青蓮院近くを通る「櫛笥通」という「櫛笥」に因む地名を確認できる。したがって、ここにみえる五条は「五条櫛笥」を指すと考えられる。基好は、大山騷動の後、焼失した書本の再書写のため、大山と青蓮院付近を往来していたのであろうと考えたい。

三つ目の奥書に出る円長（藤原長実の孫）と慶深なる人物は、共に青蓮院と拘りがある僧である。そのことは、『慈鎮和尚年次記』・『慈鎮和尚伝別伝』にその両人の名が確認されること、『門葉記』中「法華法日記」や「熾盛光法」等では修法に列なる僧として両名が記されておることから理解できる¹⁸。

次に、大山騷動とは、当時、伯耆国を東西に二分するほどの力を有していた豪族の小鴨氏（小鴨基康）と村尾氏（紀成盛）らの勢力争いで、小鴨氏は、大山の中門院月光房に、村尾氏は南光院修（または習）禅房を頼みにしていた。大山はその戦乱に巻き込まれたようである。当時、村尾氏方と同であった基好も、伯耆在庁官人小鴨基康らによって攻撃されたのである¹⁹。基好に関する伝記類は少なく、この奥書は、基好という人物を知る貴重な資料の一である。しかし、『瑜祇経西決』の奥書として扱うには聊か問題が存する。

三つ目の奥書では、この書本の由来を、長寛年中（一一六三～一一六四）に基好が円長阿闍梨の本を書写するも、治承三年（一一七九）における大山騷動によってその写本が失われた、そして、先年、修行の時、多武峰において書写したと記している。多武峰における書写は、文意から大山騷動によって失われた後（一一七九以後）であると考えられる。そうなる、基好は大山騷動後、多武峰と二つ目の奥書の治承四年（一一八〇）の五条櫛笥との二箇所でのこの本を書写したことになる。その場合、どちらかの箇所に「復」や「重」等の記述があつて然るべきであろうし、消失した箇所を補うような記述があるべきであろう。

さらに、『瑜祇経西決』の奥書の中、三つ目の奥書にのみを送り仮名が付され、他とは異なった文体であり、違和感を覚える。後にも触れるが、『瑜祇経母捺羅』『瑜祇経私記』『瑜祇経西決』の三本は、それぞれに欠損箇所があり、それは相互に関連する内容であり、これら三本を並べて解読することで、完全なものなのかどうか定かではないが、お互いを補填することができる。換言すれば、この三つ目の奥書の本来の所在については、他の二本の何れかに該当する可能性も視野に入れておく必要がある。そう考えられる理由のひととして、次の『瑜祇経母捺羅』の文中にみえる以下の記述が挙げられる。

虚空藏菩薩明曰 弱入 用宝菩薩印也

金剛光菩薩明曰 吽 光菩薩印也

虚空旗菩薩明曰 鑊 幢菩薩印

虚空笑菩薩明曰 穀 笑菩薩印

已上、為_下鈎_二召一切有情_一令_レ入_二法界_一、以_レ索引_二至金剛場_一、以_レ鎖堅_二諸藏識_一、
以_レ鈴適_二悦彼性_一、令_中快樂_上故。

觀自在菩薩明曰 阿短 用法菩薩印

妙吉祥菩薩明曰 暗引 利菩薩印也

嘉曆三年三月三日、以_二岡崎本_一書寫了。

交了

右三帖師本各別也。令_レ復_二一帖_一耳²⁰。

『瑜祇經』「序品第一」に説かれる四大菩薩（觀自在・妙吉祥・転法輪・金剛言）の印明を述べる箇所において²¹、妙吉祥の後は欠けており、奥書にあるべき記述が次の丁に述されている。ここに記される奥書は、『瑜祇經母捺羅』・『瑜祇經西決』の最後の部分に述べられたものと同様、嘉曆三年（一二二八）の岡崎における書写であり、基好に関する記述はみられないが、他の二つの奥書と同時期であり、基好が関連する書写であるとみて良いだろう。それは、この箇所に、右の三帖の師の本はそれぞれ別であり、一帖に復元させたとも読める記述がなされており、三本の相互関連性を想起させるのである。何れにせよ、この三つ目の奥書を、『瑜祇經西決』の奥書と判断するには、疑問があり暫し検討を要する²²。

第四節 『瑜祇經母捺羅』『瑜祇總行私記』『瑜祇經西決』における一、二の問題

三本の書に共通する特徴は、それぞれ『瑜祇經』所説の修法を、印呪や壇法に焦点を当てた内容になっており、その解説に、真寂親王撰『瑜祇總行私記』の引文が多くみられることが挙げられる。『瑜祇總行私記』は、『瑜祇經』所説の諸印明・觀想文等を順次に述べ、師伝の口訣を記したもので、安然の『瑜祇經疏』と並ぶ古注釈本である²³。このように、『瑜祇經』に関連する修法に古注釈である『瑜祇總行私記』からの引用が多いことは、これら三本の書の基となる薬仁の記の書写年代である平安末において、『瑜祇經』に関する理論と実践があまり進展していなかったことが示唆される。一方、台密に関連するこれら三本に、東密系の注釈書が主として引かれていることは、両密の交流をうかがわせる一つの資料としてみることが出来る。しかしながら、三本の内容について、いくつかの不自然さがみえる。そのかかる問題を以下に掲示する。

奥書に関しては、前述の中で指摘したように、『瑜祇經母捺羅』には、奥書が途中に挿入され、また最後にもなされている。また、『瑜祇總行私記』には奥書がみられない。さらに、『瑜祇經西決』には、別の書からとみられる奥書が挿入されている可能性も考えられる。このように奥書には帰属に関わる疑問はあるが、これら三書が薬仁より基好、栄西に伝わったとされる書であることには疑いがないと思われる。

一方、これら三本の書を精読すると、それぞれに幾つかの欠損箇所や不適合な箇所がみつけれられる。しかし、これら三本を並べ内容を比較し判読すると、それぞれが密接に関連しあっていると考えられる。その当該例を詳細に示す。

『瑜祇經母捺羅』は、『瑜祇經』諸品それぞれに本尊を設定し、それに関する形像や諸品

所説の印呪を整理した構成からなる。以下は、その一例である。

・序品 以_二大日_一為_二本尊_一。三十七尊自_レ元本初普現所_レ成行法也。

金剛手菩薩明曰 吽 用、羯磨会薩菩薩印■

金剛王菩薩明曰 怛洛 用王菩薩印

金剛染菩薩明曰 纈哩 用愛菩薩印

金剛称菩薩明曰 惡入 用喜菩薩印

已上、四菩薩、為_二下動_一一切有情本性_一、令_レ染_二愛諸仏妙法_一、成_中就本有法身上_上故₂ 4。

・一切如来大勝金剛心瑜伽成就品第七

私云。此品、愛染王為_二本尊_一。明_二金剛薩埵五部通成就法_一也。

一字大勝心相応真言曰。

吽悉底 印五古印 外縛

私云。今上金剛部明妄論也。所謂○吽鑿怛洛紇哩惡瑟底_云。委可_レ問也。

一切如来大勝金剛頂最勝真実三昧耶品第八

私云。此品、大日為_二本尊_一。明_二五部通成就法_一也。

形像 復現_二身手_一具_二十二臂_一、持_二智拳・五峰金剛・蓮花・摩拏・羯磨・鉤・索・鎖・

鈴・智劍・法輪・十二大印_一。住_二千葉大白蓮花_一。身色、如_レ日。五髻光明。其

光、無_レ主遍_二十方_一。面門微咲_云。

大勝金剛頂大三昧耶真言曰。

唵摩賀縛日羅瑟拏灑吽怛洛纈利惡入吽

印相 内豎十度縛。忍・願屈如_レ頂。是名_二根本心_一。

成_二就最勝尊_一。金剛頂明曰 用羯磨会薩菩薩印

唵嚩日羅薩怛縛矩捨吽

成_二就金剛手_一。最勝摩尼曰 用羯磨会至菩薩印

唵嚩日羅羅怛曩矩捨怛洛

成_二就金剛手_一。蓮花最勝心 用羯磨会法菩薩印

唵嚩日羅達磨矩捨纈利

成_二就金剛手_一。巧業最勝心 用羯磨会業菩薩印

唵嚩日羅羯磨矩捨惡入

成_二就金剛鉤_一。最勝者能鉤 用羯磨会鉤菩薩印

唵嚩日羅娑怛挽矩捨弱

成_二就金剛索_一。最勝者能引 用羯磨会索菩薩印

唵嚩日羅羅怛曩播捨吽

成_二就金剛鎖_一。最勝者能縛 用羯磨会鎖菩薩印

唵嚩日羅跛納麼塞怖陀鑿

成_二就金剛鈴_一。最勝者令喜 用羯磨会鈴菩薩印

唵嚩日羅羯磨健陀穀

由_レ持_二八大明_一、能成_二百千事_一 2。5。

この『瑜祇経母捺羅』と合綴された『*धृष्ट*私記』には、次の一文がみられる。

一切如来内護摩金剛軌儀品第十

私云。此品、応レ明三三十七尊内護摩火法^一也。普涉説品可レ用レ之。本来支分等、可レ准^二瑜伽護摩軌^二也。若、五種護摩所^レ用可レ知レ之。一尊一行又准知耳。……²⁶

これは、『瑜祇経』「一切如来内護摩金剛軌儀品第十」所説の法について、「私云」と述べる箇所であるが、この文体は、先に示した『瑜祇経母捺羅』のそれと類似しているようにみえる。本来『*धृष्ट*私記』は、次に示すように「瑜祇都法次第」と題して『瑜祇経』を基にした修法が記された書である。しかし、その壇法が示されている途中に、突然前に示した文が組み込まれているのである。

瑜祇都法次第

凡此瑜祇惣有二十二品。開為二十四法^二或分三二生法^一。三部樞樞五智心府三部五部心觀速成矣。夫開十四法者、一者序品^以大日為尊。三十七尊同成悉地^二二者染愛王品^{染愛王為本尊。三十七尊同成悉地}三者大阿闍梨位品^{大日為本尊。五部三十七尊十三會皆成就}四者冒地品^{金剛薩埵為本尊。五部三十七尊十三會}

^{一切悉地皆成就}五者愛染品^{愛染王為本尊。五部通成就法也}六者四攝行品^{愛染王為本尊。応前後諸品四攝行成就}七者瑜伽成就品^{愛染王為本尊。五部通成就悉地也}八者大勝金剛品^{大日為本尊。十二臂也。是惣攝蘇悉地法也}九者大成就品。分為三三法^一。仏眼法・八字・五大虚空蔵法也。或通為一法^一。今開為三三法^一是十四法。初仏眼法^{仏眼為本尊。五部三部悉地也}十次大悲胎蔵八字法^{大日為本尊。大悲胎蔵中一切法。時頓証}十一後五

大虚空蔵法^{虚空蔵為本尊。一印十三・四印十七・五印三十七尊皆成就富貴虚空蔵法}十二者三十七尊内護摩法。十三者金剛薩埵内作業灌頂品。此品中雖^レ分三八法^一、同^二金剛薩埵内作灌頂・内護摩^一。所^レ成^二支分等^一明。仍不^レ可^レ分^レ之。任意業^二耳。十四者降伏一切魔怨品^{金剛業又為本尊。三十七尊同業又三摩地也}惣一經終始十二品一法、別壇行也。一品二品三四五六合行也。委細

可^レ尋^レ学^レ之。暫以^二大日^一為^二本尊^一。五部惣合^三画一經始終^一。唯以^二觀心^一為^二大旨^一。不^レ同^三通途之^一行法^一。為^二通途之行法^一為^二自誦持^一不^レ可^レ披露^一矣。先、莊^二嚴道場^一安^二置尊像等^一^{可問之}。次、加持香水灑淨身上等^{弁事明印。可尋之}。次、淨地。……²⁷

『瑜祇経母捺羅』における『瑜祇経』「一切如来内護摩金剛軌儀品第十」に関連する当該箇所は次の通りである。

金剛吉祥大成就品第九

私云。此品有三大法^一。一者仏眼。二者大悲胎蔵八字法。三者五大虚空蔵求富貴法也。或説、此品惣説^二仏眼法^一也。二別是仏眼加用也。更非^二別法^一云。

仏眼法

五部深密皆悉能成^二一時一齊証^一云。

時金剛薩埵、对^二一切如来前^一忽然現^二作一切仏母身^一、住^二大白蓮^一、身作^二白月暉^一、兩目微咲。二手住^レ臍如^レ入^二奢摩他^一。從^二一切支分^一出^二生十疑誑沙俱胝仏^一。一一仏皆作^レ礼敬^二本所^一出^二於^二刹那間^一、一時化^二作一字心頂輪^一。皆執^二輪印^一頂放^二光明^一、偈傲目視。現^二大神通^一、還來礼^二敬本所出生一切仏母^一言。我所^レ説一切頂輪真言、唯願尊者、与^二一切衆生^一作^二大成就^一。我今唯願、尊者作^二大吉祥^一、令^二其成就^一。爾時本所出生一切仏母金剛吉祥、顧^二視一切方所^一説^二根本明王^一。二手虚心合掌、二頭指屈

附三一中指上節二如二眼笑形一。二空各捻二忍・願中節又一亦如二眼笑形一。二小指復微開亦如二眼笑形一。是名二根本大印一。若以レ印拭二目及眉一、兼豎拭

金剛嬉喜菩薩印・已下八供養四攝光焰明 唵囉日羅二合羅細阿擬爾二合吽涸

金剛鬘鬘菩薩印 唵囉日羅二合摩隸阿擬爾二合怛囉咤

金剛歌歌菩薩印 唵囉日羅二合隸帝阿擬爾二合吽擬

金剛舞舞菩薩印 唵囉日羅二合涅唎二合諦阿擬爾二合吽紇哩二合唵

金剛香燒香菩薩印 唵囉日羅二合度閉二合阿擬爾二合吽惡

金剛花散花菩薩印 唵囉日羅二合浦洩閉二合阿擬爾二合吽唵

金剛灯灯菩薩印 唵囉日羅二合路計阿擬爾二合吽爾

金剛塗塗香菩薩印 唵囉日羅二合獻弟阿擬爾二合吽虐

金剛鈎鈎菩薩印 唵囉日羅二合句捨阿擬爾二合吽弱

金剛索索菩薩印 唵囉日羅二合播引捨阿擬爾二合吽吽

金剛鎖鎖菩薩印 唵囉日羅二合娑普二合吽阿擬爾二合吽釁

金剛鈴鈴菩薩印 唵囉日羅二合阿吹捨二合阿擬爾二合吽斛²

ここでは、『瑜祇經』「金剛吉祥大成就品第九」に関する見識が述べられ、「仏眼法」として説明がなされている。つづけて、内外の八供養菩薩・四攝菩薩の印明が列記されている。しかし、ここに見える内外の八供養菩薩・四攝菩薩に関する明呪は「一切如来内護摩金剛軌儀品第十」所説の内容であり、したがって前の『**धरासुख**私記』にみえる当該文は、本来ここに配置されるべき文であると考えられる。

また、次の『瑜祇經西決』においても、文脈の不具合な箇所が指摘される。

一切如来金剛最勝王義利堅固染愛王心品第二

私云。此品、染愛王為二本尊一。三十七尊同入二染愛三昧地一成就一切有情染愛悉地一云。

經曰。若真言行人、持二經三十万遍一、一切真言主及金剛界大曼荼羅王、皆悉集会。一時与二成就一速得二大金剛位乃至普賢菩薩位一云。

染愛王明曰。

唵引摩賀囉引誑囉日路瑟拏灑囉日羅薩怛囉二合弱吽鏤穀

印相曰。二手金剛拳、相二叉内一為レ縛。直豎二忍・願二針。相交即成レ染。印二心・額・

喉・頂一云。

攝一切如来大阿闍梨位品第三

私云。此品、大日為二本尊一。□三十七智惠得二悉地一。

大阿闍梨位明曰。

唵囉日羅素乞史摩摩賀引娑怛囉吽吽

印相 以二定・惠手一屈レ肘向レ上合掌与レ肩齊。各屈二戒・忍・方・願一入レ掌。或坐或

立皆成就。

金剛薩埵冒地心品第四

私云。此品、金剛薩埵為二本尊一。五部三十七尊三部十三会自覚本有三十七智悉地成就。

現生替二諸仏一救二度有情一故。以下能共二諸仏一同行願上於二一切法一平等薩埵。

真言曰。

唵囉日羅句捨冒地止多吽

唵囉日羅句捨冒地止多吽

印相 二手内相又、各以_二禪・智_一・力_二・進_一云。

一切瑜伽瑜祇經愛染王品第五

私云。此愛染王為_二本尊_一。三十七尊共入_二愛染_一摩地_一一切如来共成就。雜法悉地及五種成就法明_云。

愛染王一字心明曰。

吽 擣 枳 吽

短弱

印相 二手金剛縛、忍・願豎相合_二風如_一鈎形_一。檀・惠・禪・智豎合如_二五峰_一。是名

_二羯磨印_一云。

五種相応印 戒・方入_レ掌交禪・智相鈎結。檀・惠合如_レ針。忍・願豎相捻進・力各偃豎。是名_二寂災印_一。進・力捻_二忍・願_一四指頭普齊。是名_二增益印_一。進・力如_二蓮葉_一。印名_二敬愛印_一。進・力捻_二忍・願上節_一蹙_二三角_一。是名_二降伏印_一。進・力屈如_レ鈎。隨_レ誦而招召。是名_二鈎召印_一。

已上五種印同用_二一字心明前_一復加_二句_一之_一。

一切処瑜伽四攝法品第六

私云。此品、愛染王為_二本尊_一。前後諸品成就_二四攝行_一四攝法_一。

真言曰。

唵 嚩 日 羅 沙 怛 嚩 弱 吽 鑊 穀₂9

ここでは、『瑜祇經』一切如来金剛最勝王義利堅固染愛王心品第二_二から_一一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六_一まで『瑜祇經母捺羅』に該当する文が列記されている。ところが、『瑜祇經母捺羅』の中にこれらの諸品に相当する箇所が見出せないことから、これらの文は『瑜祇經母捺羅』の欠損した部分であると考えるのが妥当である。

また、『瑜祇經西決』は、『瑜祇經』所説の印について述べている書でもある。そして、次のように、それぞれの印の説明箇所に番号が付されているのが特徴的である。

一 阿闍梨行位印 二空_二火端_一付_レ之。

二 薩埵菩提心印 内縛、空・風如_二彈指_一如_二無所不至_一 又風端上節屈付_二説有_レ之。

三 四種鈎印 如_二金剛界羯磨会_一四攝_一

四 壞二乗心印 不動刀印、以_レ空捻_二地・水甲_一火・風舒_テ端小垂_ヨ。左手拳_{ニシテ}置_レ腰。

五 大勝心相応印 如_レ文五古印也。伝授時内縛又説_二外縛_一。……30

一方、『瑜祇經母捺羅』の中にも、以下に示すように、同様に印の説明箇所に番号が付された文が確認される。

二六 仏眼印 如_レ文_一云

二九 成金剛薩埵身印 如_レ文_一 五古印_外

胎藏八字印^{三十一} 如文 但釈迦鉢印者、定印ノ二空少立^レ不^レ付^二風^一。結^レ之心左右^二旋舞

セヨ。次虚合^テ当^レ心。

^{三十一} 五大虚空藏印

法界虚空藏印 二手外縛、二小二中二大相合立。

金剛虚空藏印 准^二前印^一。二頭指^ヲ改^テ二中指背^ニ当^テ不^レ相付^一。如^二五古印^一。

宝光虚空藏印 准^二前印^一。二頭如^二宝形^一。

蓮花虚空藏印 准^二前印^一。二頭指^ヲ如^二蓮葉^一云。

業用虚空藏印 准^二前印^一。二頭^二無明牙相^一又如^二十字^一云。

^{三十二} 金剛吉祥成就一切明印 如^二口決文^一云。

^{三十四} 破諸宿曜印 内縛。以^二二大指^一付^二二頭指^一。如^二無所不至印^一。但^二一大上節^一云少

屈立³。

以上の解析作業から、三書の相互補填性・密接な関連性がうかがえよう。

次に、『瑜祇経母捺羅』には、書の途中に「壊二乗心印事」として、切紙様の書面が収められている。その全文を以下に示す。

壊二乗心印事

仏頂師説。以^二右手刀印^一指^レ下^ヲ文。

静師之疏文^{スル}ニ此印^ヲ一^ニ文殊印也^文。件惠刀^ヲモテ^{キル}切^ニ在^ル纏真如ノ大日ノ右臂^ヲ一^ニ文。

今此印指^ハ下^ヲ此意歟。其故^ハ纏^ヲハ^レ譬^レ地^ニ故也。

東寺^ニハ^レ左手思^テ持^ト蓮花^ヲ一^ニ以^二右手ノ刀^一切^ニ蓮花茎^ヲ一^ニ思也^文。蓮花、自^二泥水^一生、

此^ヲ切放^ツ相歟^云。

已上師、奉^ニ面授^一。

快^一記也

建曆元年四月六日奉^ニ立印^一了。即賜^ニ此御本^一翌日

書了。

全宗³²

仏頂師（行嚴か）が右手刀印の指を下にすると伝えて、静師（静然か）の疏の文には「壊二乗心」の印相は文殊印であるとし、（安然撰『瑜祇経疏』には）文殊の慧剣でもって在纏真如の大日の右臂を切るとある。刀を下に向けるというのは纏垢を地に譬えて、その地を切る意味があると述べ、続けて東寺の伝（典拠不明）について著している。前章で述べたように、壊二乗心とは、『瑜祇経』「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六」に説かれる印呪で、その要を示せば、金剛手菩薩が、「一切処無不相応真言」を呪し、四攝行の想（慈悲喜捨の四無量心）を起こし、四種鉤を結び、一切の有情に利益と安楽を与える四攝の行法を説く、そして一切時において「壊二乗心」を起こし、「壊二乗心真言」を誦することによって、福德増長、如来加護等の利益を得、現世において大金剛位処を証することができる³³と説かれる品である³³。この壊二乗心は、経中に真言やその意は説かれていないが、印相については説かれていないため、台密において様々な解釈が生じる。ここにみえる「壊二乗心印事」も、その印相の伝承に関する貴重な資料の一と考えられる。

だろう。

「壊二乗心印事」は、「快一」なる僧が師の面授を記したものであり、その記は建暦元年（一二一一）四月に立印を終え、それを記したもので、それを全宗が翌日に書写したことが本文中に記されている。建暦元年（一二一一）は、基好が三本を記した治承年間よりも下った時代であり、基好はすでに寂していると考えられるため、『瑜祇経母捺羅』が嘉暦三年（一二二八）に書写されるまでに内包されたか、あるいはその時に書き足したのかと推察されるが、その詳細は不明である。

全宗とは、『門葉記』や『阿婆縛抄』にその名が列ねられており、「岡崎法印」とも称される台密僧である³⁴。また、慈円の口伝が記録された『四帖秘決』中にも、「全宗（阿）闍梨」とあり、その名を確認することができる³⁵。これらの事例から、全宗は青蓮院と、特に慈円と関係の深い人物であるといえる。

全宗の人物像を踏まえて、「快一」が如何なる人物か考証する。全宗や慈円と同時代の人物で、その名を探索すると、『門葉記』や『阿婆縛抄』に、全宗と共に快雅なる僧の名をみつけることができる³⁶。快雅は、台密十三流の功德流の祖なる人物であり、功德流とは三昧流の祖良祐より伝えられた派であり、三昧流は青蓮院の本所としても知られる。つまり、この面授は三昧流に関連する内容であることを想起させる。それは、以下に示す谷流の皇慶口説・長宴（一〇一六—一〇八一）記『四十帖決』寛徳三年（一〇四六）四月浄住説「**瑜**経五」に確認される。

又、壊二乗真言^{如文}。即、文殊印明也。其印、一院文殊劍印、外縛二火屈二上節^{是山門所伝也}。

東寺伝云。左手、作^レ拳当^二胸前^一、想^三右手持^二一茎蓮花^一。右手、作^二刀印^一。謂、左火・風並申、以^レ空押^二地・水甲^一也。以^二此刀印^一右腕其上、覆^レ之右引遣、即想^二蓮茎打截^一云³⁷。

前半はいわゆる五字文殊の劍印であるとし、後半は東寺の伝に云くとして、右手を刀印にし、左手に蓮華を持つと観想しそれを打ち切ることが記されており、「壊二乗心印事」は谷流の意を汲んでいるのである。また、『瑜祇経西決』には、「壊二乗心印 不動刀印、以^レ空捻^二地・水甲^一火・風舒端小垂。左手、拳置^レ腰³⁸。」と、「壊二乗心印事」にみえる仏頂師による伝承と同趣意の内容が示され、この仏頂師による伝承と基好との関連性もうかがわれる。この面授の記が何故『瑜祇経母捺羅』に収められているのか興味深い。

第五節 結言

『瑜祇経母捺羅』・『**瑜**経五』私記』合綴本、並びに『瑜祇経西決』は、共に長寿房葉仁の記であり、その書を基好・栄西が書写し、嘉暦三年（一二二八）に基好の書本とされるものを書写したものが現存の三本と考えられる。その全文を整理・解析し、本論文に資料として提示した。

『瑜祇経西決』に記された奥書によると、基好は治承三年（一一七九）の伯耆の国の戦乱に巻き込まれ、大山の聖教類と共に自ら書写した本も多く消失したが、その後多武峰に

て、再び書写した旨が記されている。そのためか、これら三本はそれぞれに欠損箇所がいくつかあり、奥書も諸本それぞれに対応したもののなかでどうか定かではなく、乱雑にまとまっている。しかし、これら三本に記された文を一同に集め展開し整合性を図ることで、すなわちパズルを解くが如く散見される内容を結び付け補填しあうことで、幾分かを修復することができ、その結果、今回はこれら三本の密接な相互関連性が理解された。

《註》

- 1 『大正』五五・一一一六頁上。
- 2 水上文義『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）四五二頁。
- 3 山本信吉『古典籍が語る―書物の文化史』（八木書店、二〇〇四）一七六頁。
- 4 水上文義『日本天台教学論―台密・神祇・古活字―』（春秋社、二〇一七）六四頁では、『瑜祇経母捺羅』『*ギギヤイ*私記』『瑜祇経西決』の三書について触れられているが、詳細内容について未検討である。
- 5 三本の奥書に関する先行研究は、岡野浩二「平安末期における天台僧の修行巡礼―青蓮院門跡吉水蔵聖教にみえる備前・因幡・伯耆―」（『倉敷の歴史』十九、二〇〇九）、水上文義『日本天台教学論 台密・神祇・古活字』（春秋社、二〇一七）が挙げられる。
- 6 ・天仁二年六月二十三日、因幡州高庭浦上清冷院に於いて之を記す。比丘葉仁。
・書き本に云く。安元三年^丁西七月二十七日、鎮西肥前州今津誓願寺に於いて、如如房の弟子玄語の房本伝領の人（本）、花蔵房の本を以て書き本と為す^云。
・治承四年^庚十一月三日、備前州日応山瑜伽寺に於いて、件の鎮西の本を以て不意の外書き了ぬ。或る修行者の持本なり^云。基好
・嘉暦三年三月二日、伯州^{基好}の自筆の本を以て書き了ぬ。件の正本は、岡崎に在るのみ。（青蓮院吉水蔵嘉暦三年写本。）
- 7 『天全』二一・二〇二頁上。
- 8 『大正』七九・七一頁下。
- 9 『密教大辞典（全・縮刷版）』（法蔵館、一九三二）付録三二頁。
- 10 有る人云く。本書は、祖山長寿房葉仁、谷の合行記に依て之を撰ず。……（『伝全』四・六三二頁。）

11 覚千の『自在金剛集』所収「密林目録」にみえる「合灌記」の識語に、「長意^{トシヤ}房葉仁記 山家灌頂私記也。古鈔に云く。山家大師の記にして長意^{トシヤ}房の記に非ず。長意^{トシヤ}房の記とは、谷合行記也と云えり。伝法要決には、葉仁意樂に任せて谷の合記に依て作る、と。合灌頂記は、基好・榮西等の流、之を用ふとあるによれば、葉仁の合記は別にあるか。恐らくは、今山灌私記は、葉仁の記を略するか。若し爾らば、山家の私記は失亡の葉仁の記を以て、山灌を行ずるに似たれども、葉仁の記も谷の合記によつて山灌の次第を記するなるべし」（『伝全』三四・三三八頁下〜三三九頁上。）とあり、『合壇灌頂記』の奥書に関する知見が述べられている。また、『合壇灌頂記』が、基好・榮西の流、即ち葉上流を用いていると述べているため、榮西が谷阿闍梨皇慶に対して深い関心があったことを鑑みても、検めて確認する必要がある。

12 多賀宗集『榮西』（吉川弘文館、一九六五）四五〜四六頁。

13 多賀宗集『榮西』（吉川弘文館、一九六五）二〇頁・二八一頁、水上文義『台密思想形成の研究』（春秋社、二〇〇八）四七〇頁、同『日本天台教学論 台密・神祇・古活字』（春秋社、二〇一七）六二頁、

岡野浩二「平安末期における天台僧の修行巡礼―青蓮院門跡吉水藏聖教にみえる備前・因幡・伯耆―」
『倉敷の歴史』十九、二〇〇九

14 多賀宗集『采西』（吉川弘文館、一九六五）三一頁。

15 水上文義『日本天台教学論 台密・神祇・古活字』（春秋社、二〇一七）六五頁。

16 ・承德二年壬九月七日、丁寧なる請に背き難きに依て、備前州児嶋諸興寺に於いて、延暦寺比丘栗仁之を記す。願わくば、此の良縁を以て、来たる浮生を為すことを期せん。

・治承四年庚子四月下旬、五条櫛ケに於いて書き了ぬ。

・書き本は、白川金剛勝院の僧三位闍梨豊長の本なり。但、去る長寛年中に、彼の闍梨は、修行巡礼の為に伯の大山に参ぜしむ。基好の草室に数月同宿し、其の間に真言書等を少少書写せられたぬ。其の内の書なり。基好が其の時書き本は、治承己亥四月中に、伯耆の在庁元安の為す、大山騒動の時に、顕密聖教等尽数は、軍兵の為に取られたぬ。其の内の此くの如き書籍等失い了ぬ。仍て重ねて尋ぬる所の書なり。基好が書き本は、先年修行の時に、多武峰に於いて、慶深嚴浄房の本を以て書き了ぬ。修行の趣此くの如し云。

・嘉暦三年三月三日、伯州基好の自筆の本岡崎に在りを以て書写し了ぬ。（青蓮院吉水藏、嘉暦三年写本。）

17 岡野浩二「平安末期における天台僧の修行巡礼―青蓮院門跡吉水藏聖教にみえる備前・因幡・伯耆―」
『倉敷の歴史』十九、二〇〇九。

18 円長の名を確認できる書物としては、『慈鎮和尚伝別伝』（『續天全』、史伝2・四〇七頁中）、『四帖秘決』（『續天全』、密教3・四一〇頁中、四一三頁上、四一八頁中）、『阿婆縛抄』（『熾盛光法本、伴僧真言』（『大正』図九・三八頁下）、「熾盛光法末、建久五年（一一九四）』（『大正』図九・四八頁下、四九頁上）、「五壇法日記、建久六年（一一九五）』（『大正』図九・三四七頁下）、「冥道供、貞応二年（一二二二）』（『大正』図九・五四七頁上）、「伝法灌頂日記下、建久七年（一一九六）』（『大正』図九・八四六頁下）、「伝法灌頂日記下、建永二年（一二〇七）』（『大正』図九・八四七頁上中）、「伝法灌頂日記下、貞応三年（一二二四）』（『大正』図九・八五〇頁上）、「許可略作法、私云注記』（『大正』図九・八七七頁下）、「安鎮法日記中）、「如法普賢延命法日記、建保五年（一二一七）記』（『大正』図九・八七七頁下）、「安鎮法日記集下、文治四年（一一八八）』（『大正』図九・九一六頁中、九二二頁上・下）、「門葉記』（『熾盛光法二』、建久五年（一一九四）』（『大正』図十一・四一九頁中）、「普賢延命法二』、建仁三年（一二〇三）』（『大正』図十一・六三八頁上）、「安鎮法三』、文治四年（一一八八）』（『大正』図十一・七一〇頁上・下、七一五頁中）、「五壇法四、建久六年（一一九五）』（『大正』図十一・七七七頁上）、「仏眼法一、建久六年（一一九五）』（『大正』図十一・七八〇頁上）、「勤行人、建久四年（一一九三）』（『大正』図十二・五九頁下）、「勤行人、建仁三年（一二〇三）』（『大正』図十二・六〇頁下）、「灌頂五、建久四年（一一九三）』（『大正』図十二・二二一頁下）、「雑決補九』（『大正』図十二・四一七頁下）、「勤行補六（五壇法、鳥瑟沙摩法、聖天）』（『大正』図十二・五七九頁上下、五八〇頁上）、「山務一』（『大正』図十二・五九五頁下、五九六頁中、五九七頁上、五九八頁中、五九八頁下、五九九頁中、六〇〇頁上中、六三四頁上）、「山務補五』（『大正』図十二・六六九頁上下、六七〇頁中、六七一頁上中下、六七三頁上）、「日吉権現知新記』（『天全』十二・一四一頁上）、「華頂要略』（『仏全』一一八・二二頁上、二五頁上）『校訂増補天台座主記』（一一二頁、一三四頁、一六六頁、一七三頁、二二九頁、二八八頁）が挙げられる。また、『門葉記』（『五壇法四』）には、「蓮実房僧正。三品（藤原）長輔子。相実法印弟子。『大正』図十一・七七七頁上）と円長の素性に関する端的な記述がある。円長については、岡野浩二「平安末期における天台僧の修行巡礼―青蓮院門跡吉水藏聖教にみえる備前・因幡・伯耆―」（『倉敷の歴史』十九、二〇〇九）に詳しい。

慶深の名が確認できる書物は、『慈鎮和尚年次記』(『續大全』、史伝2・四〇〇頁上)、『慈鎮和尚伝別伝』(『續大全』、史伝2・四〇四頁下)、『阿婆縛抄』(『大正』図八・八三六頁下)、『門葉記』(『法華法日記』、建保二年(一二二四)、『大正』図九・一二二頁中、一二四頁上下)、『熾盛光法』(建保二年(一二二四)、『大正』図十一・四三二頁中)、『五壇法』(承元四年(一二一〇)、『大正』図十一・七六三頁下)、『如法經四』(建保二年(一二二四)、『大正』図十一・一〇六三頁中)、『入出家受戒記』(仁安二年(一一六七)、『大正』図十一・六七頁下)、『門主行状』(建曆二年(一二二二)、『大正』図十二・二四三頁下)、『山務一』(安元三年(一一七七)、『大正』図十二・五九四頁下、五九六頁中)、『山務補五』(『大正』図十二・六六九頁下)、『校訂増補天台座主記』(一四〇頁、一五八頁)がある。なお、『一心三觀行法抄』(『續大全』、口決1)の撰者の名も同じ慶深であるが、別人である。

19 『伯耆国大山寺縁起』(『統群書類従』二八上、釈家部・一九七〜二一六頁)、久野修義『重源と栄西』(山川出版社、二〇一一)参照。

20 虚空藏菩薩明曰 弱入 宝菩薩印を用いる也

金剛光菩薩明曰 吽 光菩薩印也

虚空旗菩薩明曰 鏝 幢菩薩印

虚空笑菩薩明曰 穀 笑菩薩印

已上、一切有情を鈎召して法界に入れしめ、索を以て金剛場に引至し、鎖を以て諸の藏識を繋ぎ、鈴を以て彼の性を適悦して、快樂とならしめんが為の故なり。

嘉暦三年三月三日、岡崎本を以て書写し了ぬ。 交了

21 『大正』十八・二五四頁中下参照。

22 岡野浩二『平安末期における天台僧の修行巡礼―青蓮院門跡吉水藏聖教にみえる備前・因幡・伯耆―』(『倉敷の歴史』十九、二〇〇九)では、『瑜祇経西決』の二つ目・三つ目の奥書の年代が逆転している可能性があることを示唆している。

23 『仏書解説大辞典』八六頁。なお、『師伝』は、『仏書解説大辞典』にて、小田慈舟氏は、『大正蔵』底本である高山寺蔵写本には、師とは無動寺相応とあるが、宗叡又は神日(八六〇―九一六)であると推定しているが、三崎良周博士(『台密の理論と実践』(創文社、一九九四)一〇四頁)は、確証はないとしており、定まっていはいないようである。

24 序品 大日を以て本尊と為す。三十七尊は元自り本初普現にて成ずる所の行法なり。

金剛手菩薩明曰 吽 用、
羯磨会薩菩薩印

金剛王菩薩明曰 恒洛 二合
用王菩薩印

金剛染菩薩明曰 纈哩 二合
用愛菩薩印

金剛称菩薩明曰 惡入 用喜菩薩印

已上、四菩薩は、一切有情の本性を動かし、諸仏の妙法を染愛せしめて、本有の法身を成就せんことを為の故なり。(青蓮院吉水蔵、嘉暦三年写本。)

25 一切如来大勝金剛心瑜伽成就品第七

私に云く。此の品は、愛染王を本尊と為す。金剛薩埵五部通成就法を明かすなり。

一字大勝心相応真言に曰く。

吽悉底 印五古印 外縛

私に云く。今上の金剛部明は妄論なり。所謂〇吽鏝恒洛纈哩惡瑟底^云。委しく問うべし。

一切如来大勝金剛頂最勝真実三昧耶品第八

私に云く。此の品は、大日を本尊と為す。五部通成就法を明かすなり。

形像 復た身手を現するに十二臂を具え、智拳・五峰金剛・蓮花・摩拏・羯磨・鉤・索・鎖・鈴・智劍・法輪・十二大印を持す。千葉の大白蓮花に住す。身の色は、日の如し。五髻光明あり。其の光は、主無くして十方に遍す。面門微笑す云。

大勝金剛頂大三昧耶真言に曰く。

唵摩賀縛日羅瑟拏灑吽怛洛纒利惡入吽

印相 内に豎て十度縛せ。忍・願屈して頂の如し。是れ根本心と名づく。

最勝尊を成就す。金剛頂明に曰く。羯磨会菩薩印を用いよ

唵嚩日羅薩怛縛矩捨怛

金剛手を成就す。最勝摩尼に曰く。羯磨会宝菩薩印を用いよ

唵嚩日羅羅怛曩矩捨怛洛

金剛手を成就す。蓮花最勝心。羯磨会法菩薩印を用いよ

唵嚩日羅達磨矩捨纒利

金剛手を成就す。巧業最勝心。羯磨会業菩薩印を用いよ

唵嚩日羅羯磨矩捨惡入

金剛鉤を成就す。最勝者能鉤。羯磨会鉤菩薩印を用いよ

唵嚩日羅娑怛挽矩捨弱

金剛索を成就す。最勝者能引。羯磨会索菩薩印を用いよ

唵嚩日羅羅怛曩播捨吽

金剛鎖を成就す。最勝者能縛。羯磨会鎖菩薩印を用いよ

唵嚩日羅跛納麼塞怖陀鏤

金剛鈴を成就す。最勝者令喜。羯磨会鈴菩薩印を用いよ

唵嚩日羅羯磨健陀穀

八大明を持するに由て、能く百千事を成ず。(青蓮院吉水蔵、嘉曆三年写本。)

26 一切如来内護摩金剛軌儀品第十

私に云く。此の品は、応に三十七尊内護摩火法を明かすべし。普涉説品之を用いるべし。本来支分等は、瑜伽護摩軌に准ずるべし。若しは、五種護摩を用いる所は之を知るべし。一尊一行又准知するのみ。……(青蓮院吉水蔵、嘉曆三年写本。)

27 瑜祇都法次第凡そ此れ瑜祇とは惣じて十二品有り。開くに十四法を為し或いは二生法に分ける。三部

樞鍵五智心府三部五部心觀を速やかに成ず。夫れ開十四法とは、一には序品大日を以て尊と為す。三十七尊同じく悉地を成ず二には染愛王品染愛王を本尊と為す。三十七尊同じく悉地を成ず三には大阿闍梨位品大日を本尊と為す。五部三十七、三部十二会皆成就す四には冒地品金剛薩埵を本尊と為す。五部二十七尊三部十三会一切の悉地皆成就す五には染染品染染王を本尊と為す。五部通成就悉地なり六には四攝行品愛染王を本尊と為す。応に前後諸品四攝行を成就すべし七には瑜伽成就品愛染王を本尊と為す。五部通成就悉地なり八には大勝金剛

品大日を本尊と為す。十二臂なり。是れ惣じて蘇悉地法に攝する九には大成就品。分ちて三法と為す。仏眼法・八字・五大虚空藏法なり。或いは通じて一法と為す。今開きて三法と為して是れ十四法なり。初めは仏眼法仏眼を本尊と為す。五部三部悉地なり十には次の大悲胎藏八字法大日を本尊と為す。大悲胎藏中一切法、一時に頓誑す十一には後の五大虚空藏法虚空藏を本尊と為す。一印十三、四印十七、五印二十七尊皆成就する當尊虚空藏法なり十二には三十七尊内護摩法。十三には金剛薩埵内作業灌頂品。此の品中に八法に分かつと雖も、金剛薩埵内作灌頂・内護摩と同じなり。支分等を成

ずる所を明かす。仍て之を分けるべからず。意業に任せるのみ。十四には降伏一切魔怨品金剛藥叉を本尊と為す

す。三十七尊裏之三摩地と同じなり惣じて一經の終始十二品の一一の法は、別壇の行なり。一品二品三四五六は合行なり。委細は之を学びて尋ねるべし。

暫く大日を以て本尊と為す。五部惣じて一經始終を合画す。唯だ觀心を以て大旨と為す。通途の行法と同じからず。通途の行法を為すに、自ら誦持を為して披露すべからず。

先、道場を莊嚴し尊像等を安置す之を問うべし。

次、加持香水灑淨身上等弁事明印。之を尋ぬるべし。

次、淨地。……(青蓮院吉水藏、嘉曆三年写本。)

28 金剛吉祥大成就品第九

私に云く。此品に三大法有り。一には仏眼。二には大悲胎藏八字法。三には五大虚空藏求富貴法なり。或る説に、此品は惣じて仏眼法を説くなり。二別して是の仏眼加え用うるなり。更に別法にあらざ云。

仏眼法

五部深密皆悉く能く一時に成じ齊しく証す云。

時に金剛薩埵、一切如来の前に対して忽然として一切の仏母身を現作し、大白蓮に住して、身は白月の暉を作し、両目は微笑なり。二手は臍に住して奢摩他に入るが如し。一切の支分従り十疑誡沙俱胝の仏を出生す。一一の仏は皆礼を作して本出す所を敬う。刹那の間に於いて、一時に一字心頂輪を化作す。皆輪印を執り頂より光明を放ち、倨傲の目をもて視る。大神通を現して、還り来たつて本所出生の一切仏母を礼して敬いて言く。我が説く所の一切頂輪真言は、唯だ願くば尊者よ、一切衆生に与えて大成就を作したまえ。我れ今唯だ願わくば、尊者が吉祥を作し、其れをして成就せしめたまえ。爾の時本所出生の一切の仏母金剛吉祥、一切の方所を顧み視て根本明王を説く。二手虚心合掌し、二頭指を屈して二中指の上節に附して眼笑形の如くせよ。二空もて各忍・願(文)の中節又を捻ずること亦た眼笑形の如くせよ。二小指復た微かに開き亦た眼笑形の如くせよ。是を根本大印と名づく。若し印を以て目及び眉を拭い、兼ねて豎に拭う

金剛嬉 喜菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 羅 細 阿 擬 儻 二合 吽 洎

金剛鬘 鬘菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 摩 隸 阿 擬 儻 二合 怛 囉 咤

金剛歌 歌菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 隸 帝 阿 擬 儻 二合 吽 儼

金剛舞 舞菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 涅 唵 二合 諦 阿 擬 儻 二合 吽 紇 哩 二合 咤

金剛香 燒香菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 度 閉 二合 阿 擬 儻 二合 吽 患

金剛花 散花菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 浦 洪 閉 二合 阿 擬 儻 二合 吽 唵

金剛灯 灯菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 路 計 阿 擬 儻 二合 吽 儻

金剛塗 塗香菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 獻 弟 阿 擬 儻 二合 吽 虐

金剛鉤 鉤菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 句 捨 阿 擬 儻 二合 吽 弱

金剛索 索菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 播 引 捨 阿 擬 儻 二合 吽 吽

金剛鎖 鎖菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 娑 普 二合 咤 阿 擬 儻 二合 吽 鏤

金剛鈴 鈴菩薩印 唵 囉 日 囉 二合 阿 吠 捨 二合 阿 擬 儻 二合 吽 斛 (青蓮院吉水藏、嘉曆三年写本。)

29 一切如来金剛最勝王義利堅固染愛王心品第二

私に云く。此の品は、染愛王を本尊と為す。三十七尊同じく染愛三昧地に入りて一切有情染愛悉地を成就す云。

經に曰く。若し真言行人、經三十万遍を持さば、一切真言主及び金剛界大曼荼羅王皆悉く集会す。一時に成就を与え、速やかに大金剛位乃至普賢菩薩位を得ん云。

染愛王明に曰く。

唵^引摩賀囉^引誡囉日路瑟拏灑囉日羅薩怛囉^{二合}弱吽鏝穀

印相に曰く。二手金剛拳にして、内を相又して縛を為す。直く忍・願を豎て針にす。相交わりて即ち染を成ず。心・額・喉・頂に印ずる^云。

攝一切如来大阿闍梨位品第三

私に云く。此の品は、大日を本尊と為す。□三十七智恵もて悉地を得。

大阿闍梨位明に曰く。

唵^入日羅素乞史摩摩賀^引娑怛囉吽

印相 定・恵手を以て肘を屈して上に向けて合掌と肩と齊し。各戒・忍・方・願を屈し掌に入れる。或いは坐、或いは立ちて皆成就す。

金剛薩埵冒地心品第四

私に云く。此の品は、金剛薩埵を本尊と為す。五部三十七尊、三部十三会、自覚本有三十七智悉地成就す。現生して諸仏に替つて有情を救度するが故に。能く諸仏と共に同じく行願するを以て一切法に於いて平等なる薩埵なり。

真言に曰く。

唵囉日羅句捨冒地止多吽

印相 二手内を相又して各禪・智を以て進・力を捻ずる^云。

一切瑜伽瑜祇經愛染王品第五

私に云く。此れは、愛染王を本尊と為す。三十七尊共に愛染三摩地に入り、一切如来共成就す。雜法悉地及び五種成就法を明かす^云。

愛染王一字心明に曰く。

吽撻枳吽^{短弱}

印相 二手金剛縛にし、忍・願を豎て、相い合して二風鉤形の如し。檀・恵・禪・智を豎て合すること五峰の如し。是れを羯磨印と名づく^云。

五種相応印 戒・方掌に入れて交え、禪・智相い鉤して結べ。檀・恵は合して針の如くせよ。忍・願を豎て相い捻じ、進・力各偃せ豎てよ。是れを寂災印と名づく。進・力もて忍・願を捻じ、四指の頭を普べ齊しくせよ。是れを増益印名づく。進・力もて蓮葉の如くせよ。印をば敬愛印と名づく。進・力もて忍・願の上節を捻じ、三角に蹙めよ。是れを降伏印と名づく。進・力を屈して鉤の如くせよ。誦に随つて招召せよ。是れを鉤召印と名づく。

已上、五種印は同じく一字心明の前に用いる。復之を加句せよ。

一切処瑜伽四攝法品第六

私に云く。此の品は、愛染王を本尊と為す。前後の諸品は四攝行四攝法をもて成就す。

真言に曰く。

唵囉日羅沙怛囉弱吽鏝穀（青蓮院吉水藏、嘉曆二年写本。）

30 阿闍梨行位印 二空を火端に之を付せ。

薩埵菩提心印 内縛にし、空・風彈指の如くし無所不至の如くせよ 又風端の上節を屈し付すに説之有り。

三
四種鈎印 金剛界羯磨会四攝の如し。

四
壞二乗心印 不動刀印にし、空を以て地・水甲を捻じ火・風舒て端小しく垂れよ。左手は拳にして腰に置け。

五
大勝心相応印 文の如く五古印なり。伝授の時は内縛又外縛を説く……(青蓮院吉水藏、嘉曆三年写本。)

3 1 二一八
仏眼印 文の如し 云々

二一九
成 金剛薩埵身印 文の如し 五古印外

三十一
胎藏八字印 文の如し 但釈迦鉢印とは定印の二空少しく立てて二風に付けず。之を結びて心左右に旋舞

せよ。次に虚合して心に当てよ。

三十二
五大虚空藏印

法界虚空藏印 二手外縛にし、二小・二中・二大相合せ立てよ。

金剛虚空藏印 前印に准ず。二頭指を改めて二中指の背に当て相付けず。五古印の如くせよ。

宝光虚空藏印 前印に准ず。二頭宝形の如くせよ。

蓮花虚空藏印 前印に准ず。二頭指蓮葉の如くせよ 云々。

業用虚空藏印 前印に准ず。二頭・二無明牙にし相叉すること十字の如くせよ 云々。

三十三
金剛吉祥成就一切明印 口決文の如し 云々。

三十四
破諸宿曜印 内縛。二大指を以て二頭指に付け。無所不至印の如し。但し二大の上節 云々 少しく屈し

立てよ。(青蓮院吉水藏、嘉曆三年写本。)

32 壞二乗心印事

仏頂師の説。右手刀印を以て下を指せ 云々。静師の疏文は、此の印を釈するに文殊印なり 云々。件の惠刀もて在纏真如の大日の右臂を切れ 云々。今此の印の下を指せは此の意か。其の故に、纏は、地に譬える故なり。東寺には、左手に蓮花を持つと思いて右手の刀を以て蓮華の茎を切ると思ふなり 云々。蓮花は泥水自ら生ずるために、此れを切り放つ相か 云々。已上師、面授し奉る。快記なり。建暦元年四月六日に立印し奉り了ぬ。即ち此の御本を賜りて翌日に書写し了ぬ。全宗(青蓮院吉水藏、嘉曆三年写本。)

33 『大正』十八・二五七頁中〜下。

34 『阿婆縛抄』「法華法日記、建保二年(一一二四)」「大正」図九・一一二頁中、「伝法灌頂日記下、

建保六年(一一二八)」「大正」図九・八四七頁中、「伝法灌頂日記下、承久二年(一一三〇)」「大

正」図九・八四八頁上、「如法普賢延命法日記、承久四年(一一三二)」「大正」図九・八七八頁上、

『門葉記』「熾盛光法二、承元四年(一一二〇)七月」「大正」図十一・四二八頁下、四二九頁中、「熾

盛光法二、承元四年(一一二〇)十月」「大正」図十一・四三〇頁上、「熾盛光法二、建暦元年(一

一一二一)」「大正」図十一・四三三頁中下、「熾盛光法二、建暦二年(一一二二)正月」「大正」図十

一・四三三頁下〜四三二頁上、「熾盛光法二、建暦二年(一一二二)八月」「大正」図十一・四三一

頁上)、「熾盛光法二、建曆三年(一一二三)」「大正」図十一・四三二頁上)、「熾盛光法二、建保二年(一一二四)」「大正」図十一・四三三頁中)、「熾盛光法二、建保七年(一一二九)」「大正」図十一・四三三頁下)、「七仏薬師法二、建曆二年(一一二二)」「大正」図十一・五三七頁中、五三九頁下)、「普賢延命法二、承元四年(一一二〇)」「大正」図十一・六四一頁上)、「仏眼法二、建曆三年(一一二三)」「大正」図十一・八〇五頁上)、「尊勝陀羅尼供養一、建曆三年(一一二三)」「大正」図十一・九三二頁中)、「如法経四、建保二年(一一二四)」「大正」図十一・一〇六三頁中、一〇六四頁上中)、「山務一、建曆三年(一一二三)」「大正」図十二・六〇〇頁下)、「山務補五、建曆三年(一一二三)」「大正」図十二・六七二頁中)。

35 『續大全』、密教3・四〇五頁上下、四〇八頁下、四一〇頁下。

36 『門葉記』「熾盛光法二、承元四年(一一二〇)七月」「大正」図十一・四二八頁下)、「熾盛光法二、承元四年(一一二〇)十月」「大正」図十一・四三〇頁上)、「熾盛光法二、建曆二年(一一二二)正月」「大正」図十一・四三〇頁下)、「熾盛光法二、建曆二年(一一二二)八月」「大正」図十一・四三二頁上)、「熾盛光法二、建曆三年(一一二三)」「大正」図十一・四三三頁中)、「七仏薬師法二、建曆二年(一一二二)」「大正」図十一・五三七頁中)、「普賢延命法二、承元四年(一一二〇)」「大正」図十一・六四一頁上)、「仏眼法二、建曆三年(一一二三)」「大正」図十一・八〇五頁上)、「尊勝陀羅尼供養一、建曆三年(一一二三)」「大正」図十一・九三二頁中)、「如法経四、建保二年(一一二四)」「大正」図九・一一二頁中)、「伝法灌頂日記下、建保六年(一一二八)」「大正」図九・八四七頁中)、「如法普賢延命法日記、承元四年(一一二二)」「大正」図九・八七八頁上)。

37 又、壞二乗真言文の如し。 即ち、文殊の印明なり。其の印、一院の文殊剣印、外縛して二火を上節に屈せよ。是れ山門所伝なり

東寺伝に云く。左手は、拳を作し胸前に当て、右(左)手に一茎の蓮花を持つと想え。右手は、刀印を作せ。謂く、左の火・風を並べ申て、空を以て地・水の甲を押すなり。此の刀印を以て右の腕を其の上にし、之を覆いて右に引き遣り、即ち蓮茎を打ち截ると想え云。『大正』七五・九四三頁中(下)。

38 壞二乗心印四 不動刀印にし、空を以て地・水甲を捻じ火・風舒て端小しく垂れよ。左手、拳にして腰に置き。(青蓮院吉水藏、嘉暦三年写本。)

《翻刻資料》

◇凡例

一、本資料は、青蓮院吉水蔵『瑜祇経母捺羅』・『**𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄**私記』合綴本、『瑜祇経西決』計三書について、天台宗典編纂所蔵のマイクロフィルムからの複製版に基づいて翻刻したものである。

二、本資料には対校本は存在しないが、多く引用される大正蔵所収『瑜祇経』、『瑜祇總行私記』を引文箇所の註に採用した。

大正蔵所収『瑜祇経』↓大瑜

大正蔵所収『瑜祇總行私記』↓大總

資料の本文にみられない引文中の語に関しては、「**𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄**」を使用。

三、本翻刻は原則として新漢字を使用した。

四、返り点・句読点は私に付した。

五、異体字や略字、俗字等は基本的に現行の正字に改めた。

峯↓峰、**𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄**↓隸など

六、判読不能の文字は、□で示した。

七、底本の書誌的概要は、以下のとおりである。

○『瑜祇経母捺羅』・『**𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄**私記』合綴本

〔架蔵番号〕青蓮院門跡吉水蔵聖教目録 第五四箱―十八

〔書名〕瑜祇経母捺羅・**𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄**私記 一冊

〔書写年代等〕鎌倉時代嘉暦三年写、紙撚綴装、後缺、楮紙、縦二八・二糎、横一九・九糎、十九紙、無界、共紙原表紙、訓点ナシ

〔外題〕(1)瑜祇経母捺羅 長寿房

(2) **𑖀𑖄𑖡𑖅𑖄**私記 長寿房

〔内題〕(1)瑜祇母捺羅 (2)瑜祇都法次第

〔尾題〕(1)瑜祇経母捺羅一卷 (2)ナシ

○『瑜祇経西決』

〔架蔵番号〕青蓮院門跡吉水蔵聖教目録 第五四箱―十九

〔書名〕瑜祇経 西決

〔書写年代等〕鎌倉時代嘉暦三年写、紙撚綴装、楮紙、縦二八・二糎、横二〇・二糎、一紙、無界、共紙原表紙、墨点（仮名、返点、嘉暦三年頃）

〔表紙〕（外題左上）瑜 西決

〔外題〕瑜祇経 西決

〔内題〕瑜祇経

〔尾題〕都法次第

※奥書は、本文資料中にこれを記す。

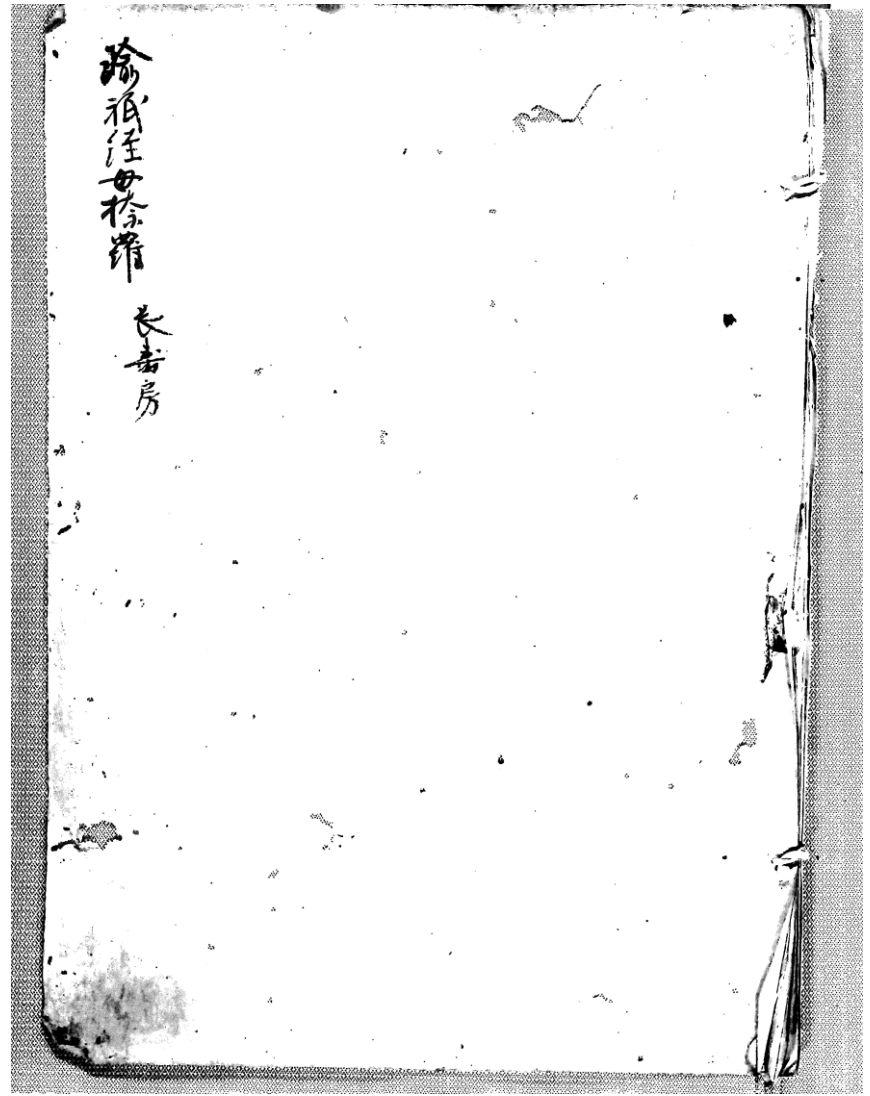
※翻刻にあたっては、青蓮院門跡、天台宗典編纂所の各位に各別なるご高配を賜った。ここに衷心より御礼申し上げます。

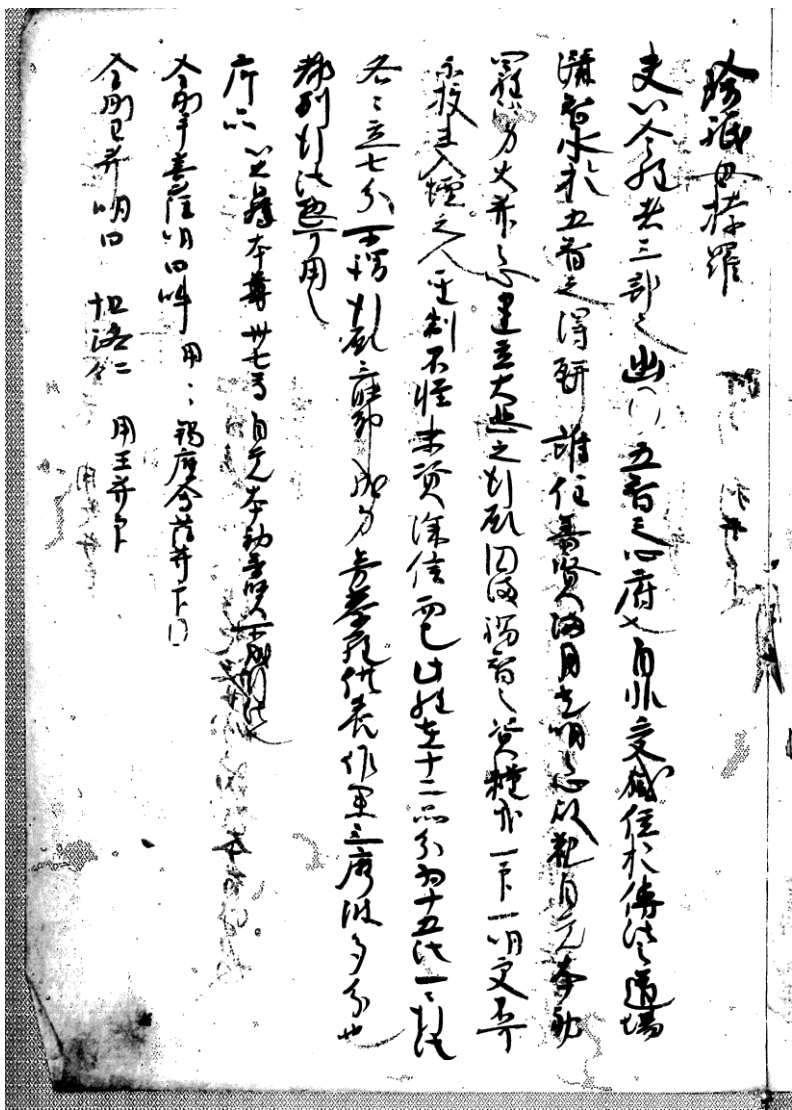
『瑜祇經母捺羅』・『私記』合綴本

『瑜祇經母捺羅』

(青連院吉水藏、嘉曆三年写本)

瑜祇經母捺羅 長壽房





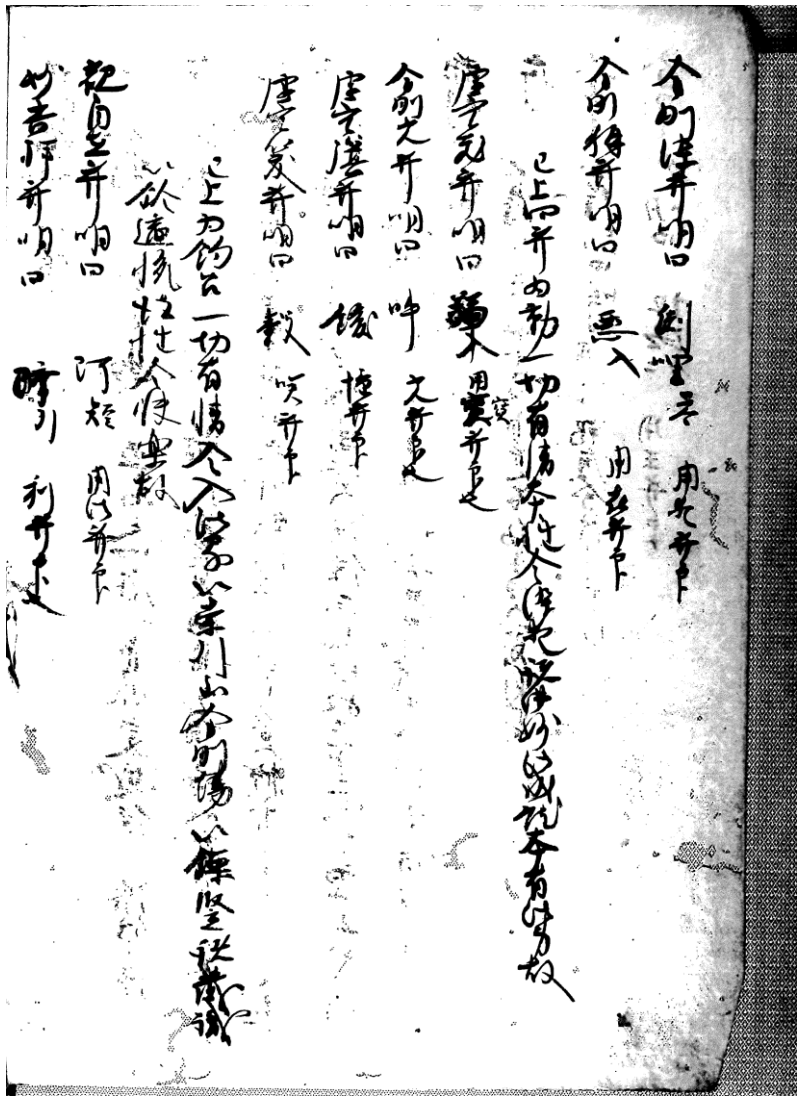
瑜祇經母捺羅

夫以今經者、三部之出口五智之心府也。自非_レ受_二職位_一。於_二法法之道場_一灑_二智水於五智之得瓶_一。誰住_二普賢滿月光明之心殿_一。觀_二自_レ元本初四種法身(大)火菩提之心_一。建_二立大悲之行願_一圓滿福智之資糧_一哉。一印一明更不_レ可_三示_二授未入壇之人_一。聖制不輕未資深信而已。此經在_二三十二品_一分為_二二十五法_一。一一行法各各立_二七分_一。所謂行願・三昧耶・成身・曼荼羅・供養・作業・三摩波多分也。別行法惣可_レ用_レ之。

序品 以_二大日_一為_二本尊_一。三十七尊自_レ元本初普現所_レ成行法也。

金剛手菩薩明曰。 吽 用。 羯磨會薩菩薩印口

金剛王菩薩明曰。 怛洛_二合_一 用王菩薩印



金剛染菩薩明曰。 纈哩^二合 用愛菩薩印

金剛稱菩薩明曰。 惡入 用喜菩薩印

已上四菩薩、為^下動^二一切有情本性^一、^三令^レ染^二愛諸仏妙法^一、成^中就^本有^法身上^故。 1

虚空藏菩薩明曰。 弱入 用宝菩薩印也

金剛光菩薩明曰。 吽 光菩薩印也

虚空旗菩薩明曰。 鑿 幢菩薩印

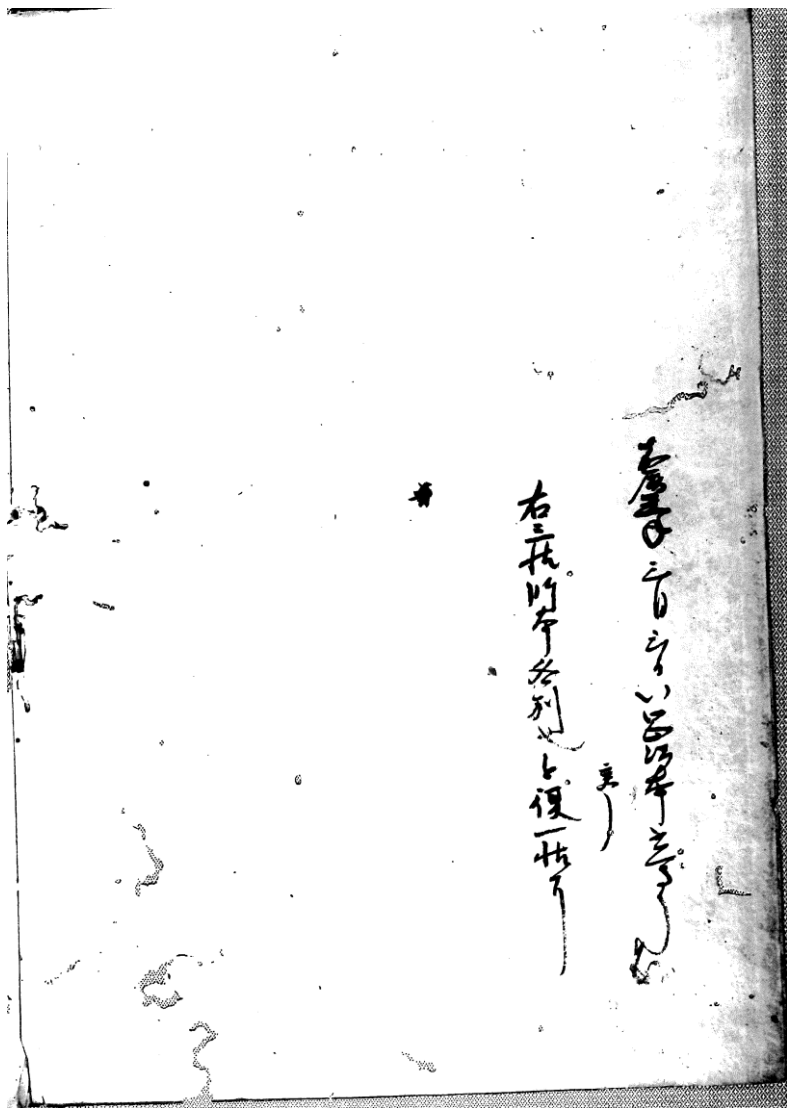
虚空笑菩薩明曰。 穀 笑菩薩印

已上、為^下鉤^二召^一一切有情^一、令^レ入^二法界^一、以^レ索引^三至金剛場^一、以^レ鎖堅^二諸藏識^一、
以^レ鈴適^二悦彼性^一、令^中快樂^上故。 2

觀自在菩薩明曰。 阿短 用法菩薩印

妙吉祥菩薩明曰。 暗引 利菩薩印也

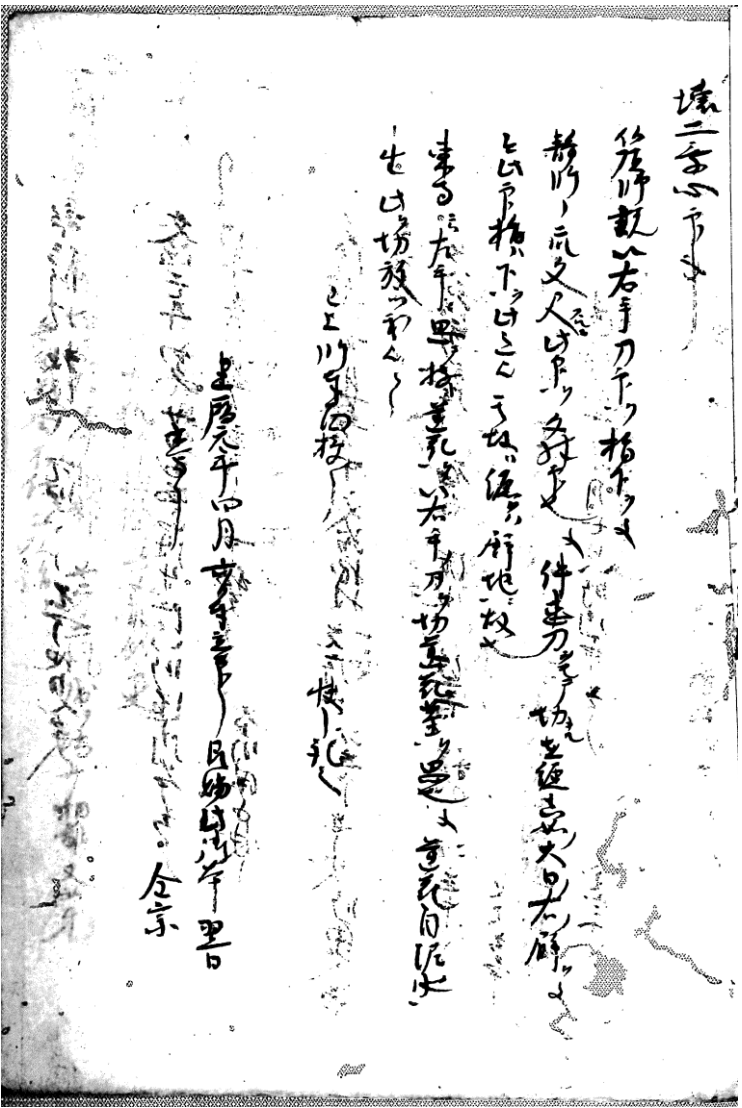
(後缺力)



(二三八)
嘉曆三年三月三日。以岡崎本一書写了。

右三帖師本各別也。令復一帖耳。

交了



壞二乘心印事

仏頂師説。以ニ右手刀印ヲ一指レ下ヲ文。

静師之疏文スルニ此印ヲ一文殊印也文。件惠刀ヲモテ切キルニ在纏真如ノ大日ノ右臂ヲ一文。

今此印指ハレ下ヲ此意歟。其故ハ纏ヲ譬レ地ニ故也。

東寺ニハ左手思テ持ト蓮花ヲ以ニ右手ノ刀ヲ一切蓮花茎ヲ一思也文。蓮花自ニ泥水ニ生此ヲ切放ツ相歟云。

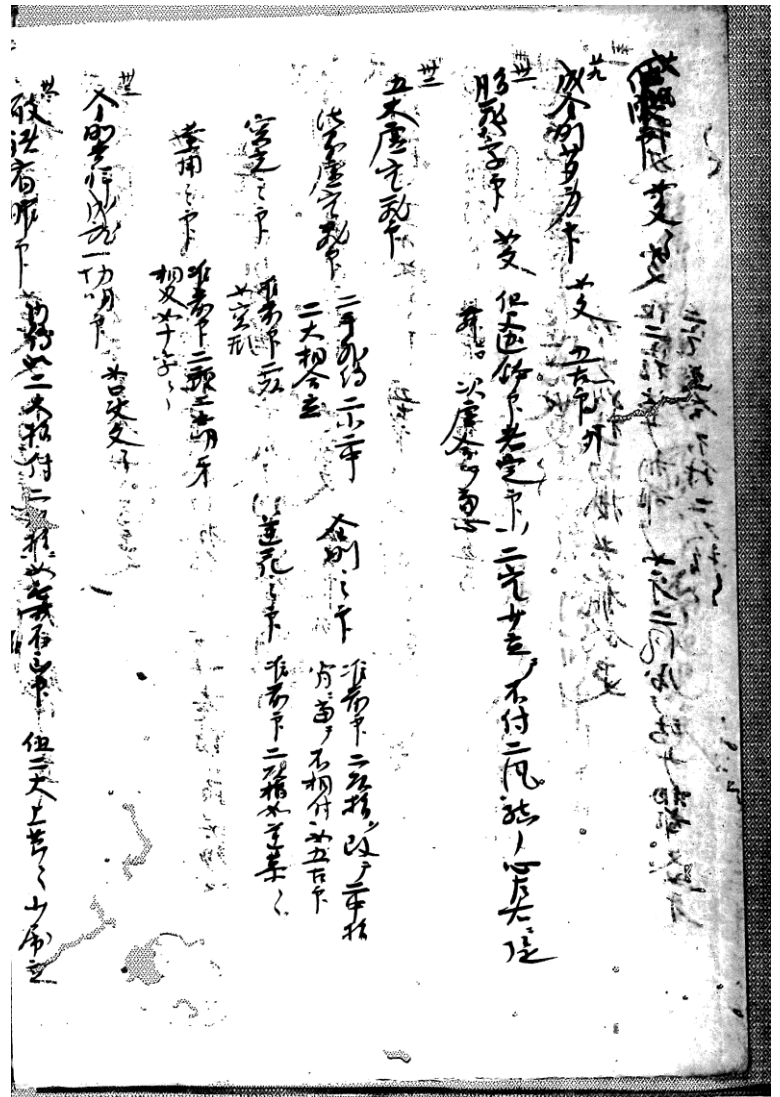
已上師奉ニ面授一。

快一記也

(二二二)
建曆元年四月六日奉ニ立印一了。即賜ニ此御本一翌日

書写了。

全宗



(前缺カ)

二十八
 仏眼印 如文 云

二十九
 成金剛薩埵身印 如文 五古印 外

三十一
 胎藏八字印 如文 但釈迦鉢印者、定印ノ二空少立テ不レ付ニ風一。結レ之心左右ニ旋舞セヨ。
 次虚合テ当レ心。

三十二
 五大虚空蔵印

法界虚空蔵印 二手外縛、二小二中二大相合立。

金剛虚空蔵印 准ニ前印一。二頭指ヲ改テ二中指背ニ当テ不ニ相付一。如ニ五古印一。

宝光虚空蔵印 准ニ前印一。二頭如ニ宝形一。

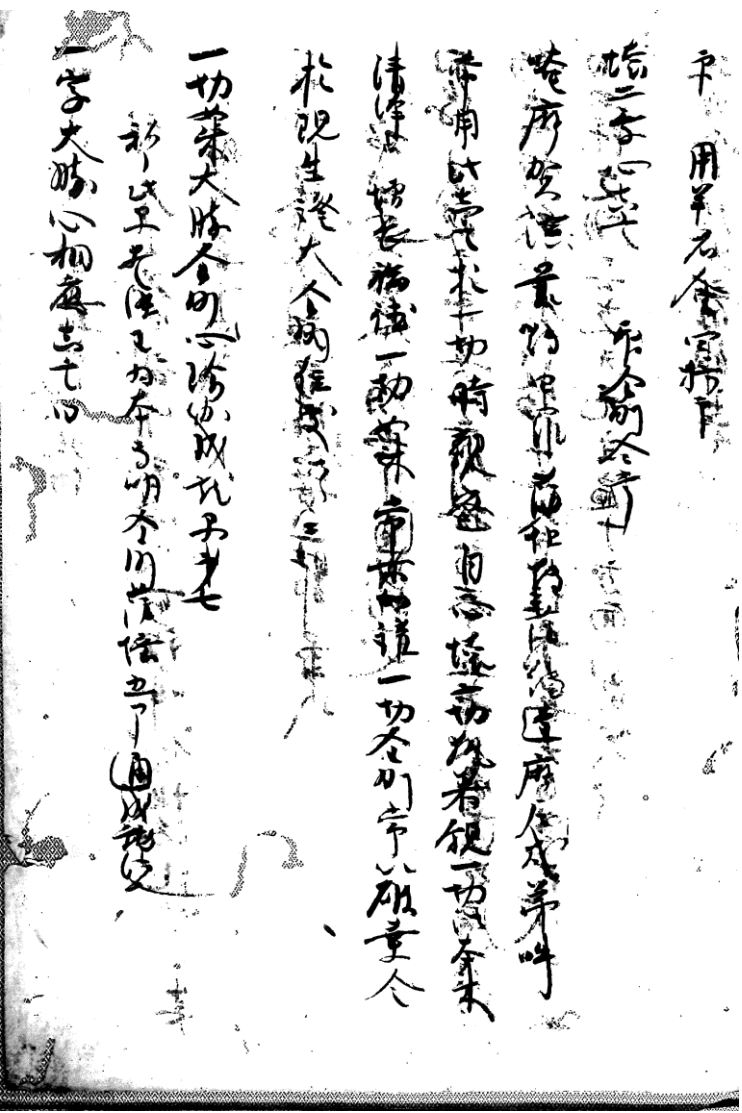
蓮花虚空蔵印 准ニ前印一。二頭指如ニ蓮葉一云。

業用虚空蔵印 准ニ前印一。二頭ニ無明牙相又如ニ十字一云。

三十三
 金剛吉祥成就一切明印 如ニ口決文一云。

三十四
 破諸宿曜印 内縛。以ニ二大指一付ニ二頭指一。如ニ無所不至印一。但ニ二大上節云少屈立。

(後
缺
力)



印 用^二羯磨会四攝印^一

壞^二乘心真言 印 金剛合掌

唵摩賀演曩嚩日羅薩怛縛薩縛達摩尾戌弟吽^{(五)(六)(七)(八)(九)(一〇)(一一)(一二)(一三)}

常用^(一四) 此真言^(一五)、於^二一切時^一、觀^二察自心^一、壞^二一切執著^一、觀^二一切法本來清淨^一○

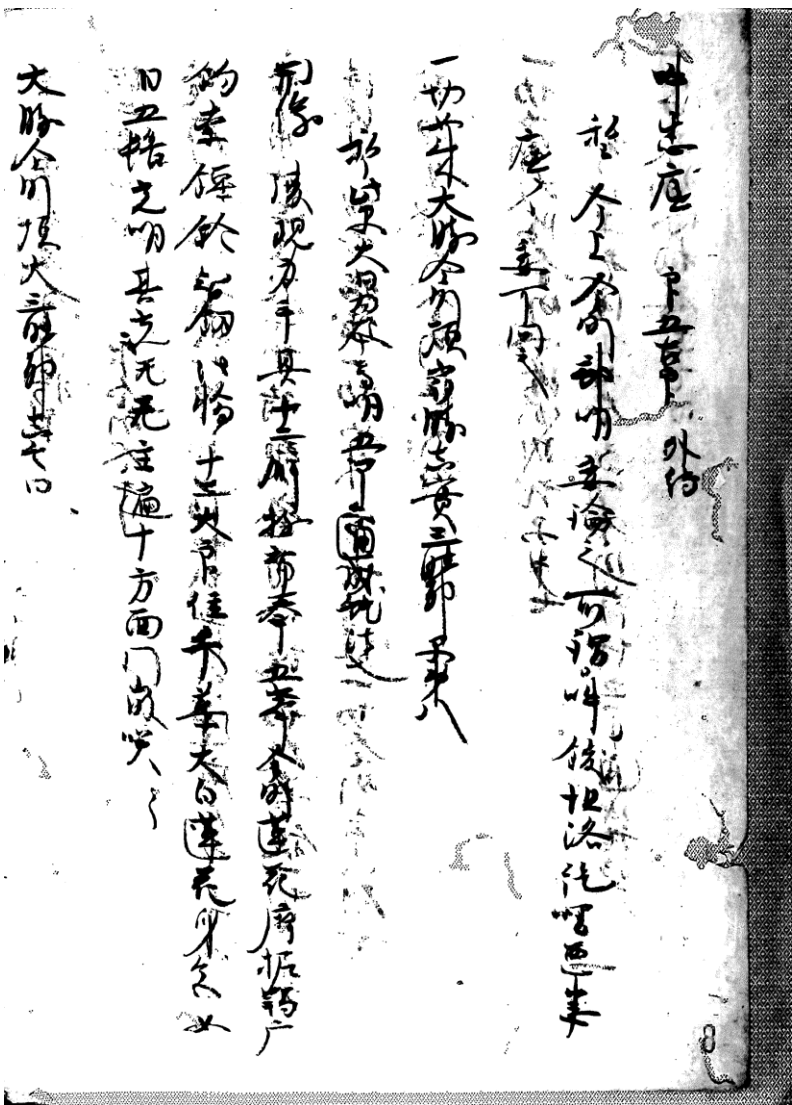
增^(一六) 長 福德^(一七)、一切如來常所^二加護^一。一切金剛常以^レ破^レ業、令^下於^二現生^一証^中大金剛位

上^二処^一云。 3

一切如來大勝金剛心瑜伽成就品第七

私云。此品、愛染王為^二本尊^一。明^二金剛薩埵五部通成就法^一也。

一字大勝心相應真言曰。



吽悉底 ^(二七) 4 印五古印 5 外縛

私云。今上金剛部明妄論也。所謂○吽鑿怛洛紇哩惡瑟底 ^云。委可レ問也。

一切如來大勝金剛頂最勝真実三昧耶品第八
私云。此品、大日為二本尊一。明二五部通成就法一也。

形像 復現二身手一具 ^(二八) 二十二臂一。持二智拳一 ^(二九)。五峰金剛・蓮花 ^(三〇)・摩拏 ^(三一)・羯磨・鉤・

索・鎖・鈴・智劍・法輪・十二大印一。住二千葉大白蓮花一。身色如レ日五髻光明。

其光無 ^(三二) 無 ^(三三) 主遍二十方一。面門微 ^(三四) 咲 ^云。6

大勝金剛頂大三昧耶真言曰。

唵摩賀縛日羅瑟扼灑呬怛洛 灑利惡入呬
 下相 內豎十度縛。忍・願屈如頂。是名根本心。幾之勝引
 明摩日羅 達磨 矩 捨惡入 1
 唵摩日羅 羯磨 矩 捨惡入 6
 成二就金剛手一。最勝者能鉤。 17
 唵摩日羅 娑 怛挽 矩 捨弱 1
 成二就金剛索一。最勝者能引。 19

唵摩賀 縛日羅瑟扼灑呬怛洛 灑利惡入呬 7

印相 內豎十度縛。忍・願屈如頂。是名根本心。 8

成二就最勝尊一。金剛頂明曰。 9 用羯磨会薩菩薩印

唵摩日羅薩怛縛 矩 捨呬 10

成二就金剛手一。最勝摩尼曰。 11 用羯磨会至菩薩印

唵摩日羅 羅 怛曩 矩 捨怛洛 12

成二就金剛手一。蓮花最勝心。 13 用羯磨会法菩薩印

唵摩日羅 達磨 矩 捨灑利 14

成二就金剛手一。巧業最勝心。 15 用羯磨会業菩薩印

唵摩日羅 羯磨 矩 捨惡入 16

成二就金剛鉤一。最勝者能鉤。 17 用羯磨会鉤菩薩印

唵摩日羅 娑 怛挽 矩 捨弱 18

成二就金剛索一。最勝者能引。 19 用羯磨会索菩薩印

唵縛日羅^(五二) 羅^(五三) 但曩^(五四) 播捨^(五五) 吽^(五六) 2 0

成^(五七) 二就金剛鎖^(五八) 一。最勝者能縛。 2 1 用羯磨會鎖菩薩印

唵縛日羅^(五九) 跋^(六〇) 納^(六一) 麼^(六二) 塞^(六三) 怖^(六四) 咤^(六五) 鑿^(六六) 2 2

此印明、即同大安立一切曼拏羅。自身一切支悉成諸仏聚。無比不思議。更無過
 上味。 29
 次四攝明 用四攝印

成二就金剛鈴一。最勝者令喜。 23 用羯磨會鈴菩薩印

唵嚩日羅 羯磨 健 吃穀 24

由レ持二八大明一、能成二百千事。 25

次金剛劍。密語曰 用羯磨會利菩薩印。 唵縛日羅 娑怛嚩底 引乞史拏吽 26

能壞二無智城一。能生二諸仏惠一

印同二妙吉祥一。羯磨三昧耶 27

次金剛輪。密語曰。 唵嚩日羅 斫羯羅吽 弱吽鑊斛弱 吽 28

二手金剛拳。檀惠与進力一。四度互鉤結。若真言行者不レ作二曼茶羅一、但持二

此印明、即同大安立一切曼拏羅。自身一切支悉成諸仏聚。無比不思議。更無過

上味。 29

次四攝明 用四攝印

唵薩嚩怛他 誡壹句勢叫弱為
 唵薩嚩怛他 誡多播勢叫弱為
 唵薩嚩怛他 誡多 塞怖鉢叫解
 唵薩嚩怛他 誡多 塞怖鉢叫解
 以善從者明善下 唵薩嚩怛他 誡多 塞怖鉢叫解
 法五瑜伽觀
 今則去作大成說子第九
 形以子有三法一者伊眼二者文迦胎藏三者三眼五火
 者秘求信未代也此以子也記伊眼之二別是伊眼加用
 亦別代

唵薩嚩怛他 誡黨 句勢叫弱 3 0

唵薩嚩怛他 誡多 播勢叫弱 3 1

唵薩嚩怛他 誡多 塞怖鉢叫解 3 2

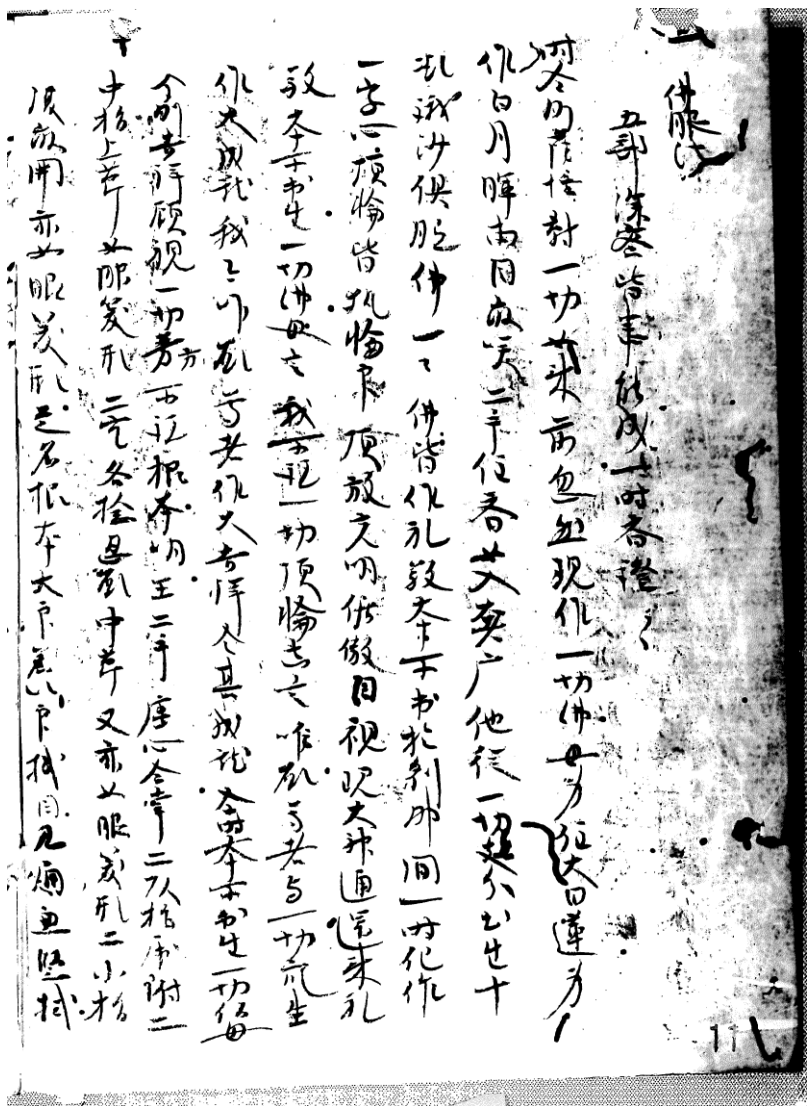
唵薩嚩怛他 誡多 阿吠捨叫解 3 3

次普供養明 普印 唵薩嚩怛他 惹曳弱叫解 3 4

次五瑜伽觀 如文

金剛吉祥大成就品第九

私云。此品、有三大法。一者伊眼、二者大悲胎藏八字法、三者五大虛空藏求富貴法也。或說「此品」惣說「伊眼法」也。二別是伊眼加用也。更非「別法」云。



仏眼法

五部深密皆悉能成二一時一齊証云。

時金剛薩埵、對二一切如來前一忽然現二作一切仏母身一。住二大日蓮一身作二白月暉一兩目微

咲。(八九) 二手住レ臍如レ入二奢摩他一。從二一切支分一出二生十疑一。誡沙俱胝仏。(九一) 一仏、皆

作レ禮敬二本所一出。(九二) 於二剎那間一一時化二作一字心頂輪一。(九三) 皆執二輪印一頂放二光明一。

倨傲目視。現二大神通一。還來禮二敬本所出生一切仏母一言。我所レ說一切頂輪真言。唯願

尊者與二一切衆生一作二大成就一。我今、唯願尊者作二大吉祥一令二其成就一。爾時本所出生一

切仏母金剛吉祥、顧二視一切方所一說二根本明王一。(九七) 3 二手虛心合掌。二頭指屈附二中指

上節一如二眼笑形一。(九八) 二空各捻二忍・願中節一又一亦如二眼笑形一。(九九) 二小指復微開亦如二眼笑

形一。是名二根本大印一。若以レ印拭二目及眉一。兼レ豎拭三6

(後缺力)

金剛燈 喜菩薩印
 已下八供養四攝光焰明
 唵 嚩日 羅 二合 羅 細阿 擬 爾 二合 吽 泗 3 7
 金剛鬘 鬘菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 摩 隸 阿 擬 爾 二合 怛 囉 咤 3 8
 金剛歌 歌菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 隸 帝阿 擬 爾 二合 吽 儼 3 9
 金剛舞 舞菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 涅 嚩 二合 諦 阿 擬 爾 二合 吽 紇 哩 二合 咤 4 0
 金剛香 燒香菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 度 閉 二合 阿 擬 爾 二合 吽 惡 4 1
 金剛花 散花菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 浦 洪閉 二合 阿 擬 爾 二合 吽 唵 4 2
 金剛燈 燈菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 路 計 阿 擬 爾 二合 吽 爾 4 3
 金剛塗 塗香菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 獻 弟 阿 擬 爾 二合 吽 虐 4 4
 金剛鈎 鈎菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 句 捨 阿 擬 爾 二合 吽 弱 4 5

金剛燈 喜菩薩印
 已下八供養四攝光焰明
 唵 嚩日 羅 二合 羅 細阿 擬 爾 二合 吽 泗 3 7
 金剛鬘 鬘菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 摩 隸 阿 擬 爾 二合 怛 囉 咤 3 8
 金剛歌 歌菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 隸 帝阿 擬 爾 二合 吽 儼 3 9
 金剛舞 舞菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 涅 嚩 二合 諦 阿 擬 爾 二合 吽 紇 哩 二合 咤 4 0
 金剛香 燒香菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 度 閉 二合 阿 擬 爾 二合 吽 惡 4 1
 金剛花 散花菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 浦 洪閉 二合 阿 擬 爾 二合 吽 唵 4 2
 金剛燈 燈菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 路 計 阿 擬 爾 二合 吽 爾 4 3
 金剛塗 塗香菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 獻 弟 阿 擬 爾 二合 吽 虐 4 4
 金剛鈎 鈎菩薩印
 唵 嚩日 羅 二合 句 捨 阿 擬 爾 二合 吽 弱 4 5

吉祥為二口舌一 喜戲為二鼻端一

金剛觀自在 以成二面(二五)手(二五)臂一

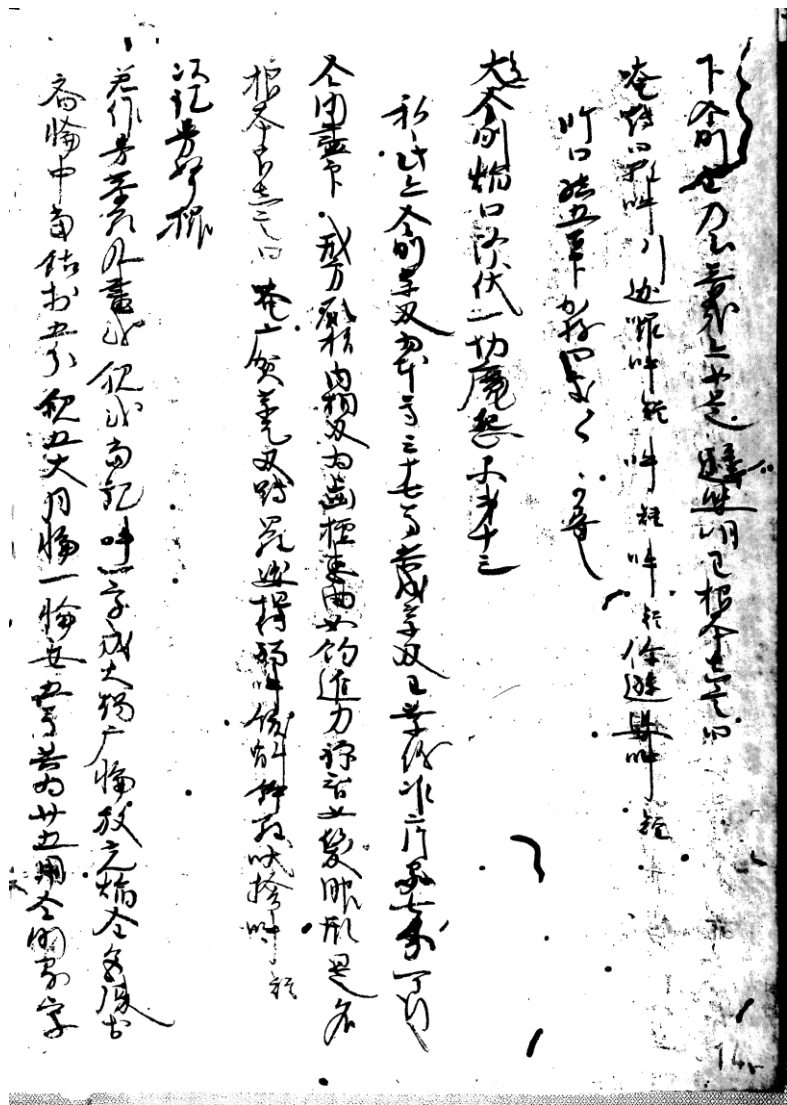
三世不動尊 以為二兩膝脚一

心為二遍照尊一 膺成二虛空眼一

虛空宝為レ冠 相好金剛日

以二此十五尊一 共為二(二五九)一仏身一

如三世月團円一 仏性亦如レ月
 從レ初作二成就一 乃至 得二悉地一
 心心不二間斷一 成二就十五尊一
 是即極深 密 (一六二) 菩提密言 曰 (一六二) 五古印
 唵嚩日 羅 (一六三) 沒駄吽 身如仏形嚩日 羅 (一六四) 吽 (一六五) 成金剛身 斫訖 羅 (一六六) 二合 金剛輪座 多囉斫訖 芻 (一六七) 二合多羅
 為二目 渤哩二合句 胝 (一六八) 毘俱胝為心 曼殊室 利 (一六九) 二合 耶 (一七〇) 吉祥為口舌 嚩日 羅 (一七一) 二合 邏 底纈哩二合
 吽 (一七二) 喜戲為鼻端 悉怛 隸 (一七四) 二合 路枳 也 (一七五) 金剛觀自在兩手臂 左 羅 吽 (一七七) 三世不動為兩膝脚 鏤 (一七八) 心上成大王 欠
 室 哩 (一七九) 膺成虛空眼 阿迦捨 摩 (一八〇) 隸 (一八一) 虛空室為相好面上相好也 帝惹吽 5 1
 金剛薩埵 心 密言曰。 (一八二) 五 古印 (一八三) 吽 (一八四)
 二。三十七尊降三世內護摩法
 先住二菩提大印一已羯磨四印作二加持一。以成三三大大誓身二兩臂青色薩埵儀。然後入二忿
 怒王業一。二羽 抽 (一八五) 擲金剛杵一至レ空却下承薩埵。復次三旋二金剛舞一至レ空却



下金剛王。乃至善哉亦如是。 5 2 遜婆明王根本真言曰。

唵 嚩 日 羅 吽 引 迦 羅 吽 短 吽 短 吽 短 爾 遜 婆 吽 短 5 3

師口、結三五古印一加持四処云 5 4 可尋之。

大金剛焰口降伏一切魔怨品第十二 (二五)

私云。此亦金剛藥叉為二本尊。三十七尊共成藥叉王業儀。准序品七分可行之。

金剛盡印 戒・方・願指。 (一九五) 內相又為齒。檀・惠 (一九六) 曲如鉤。進・力・禪・智如 (一九七)

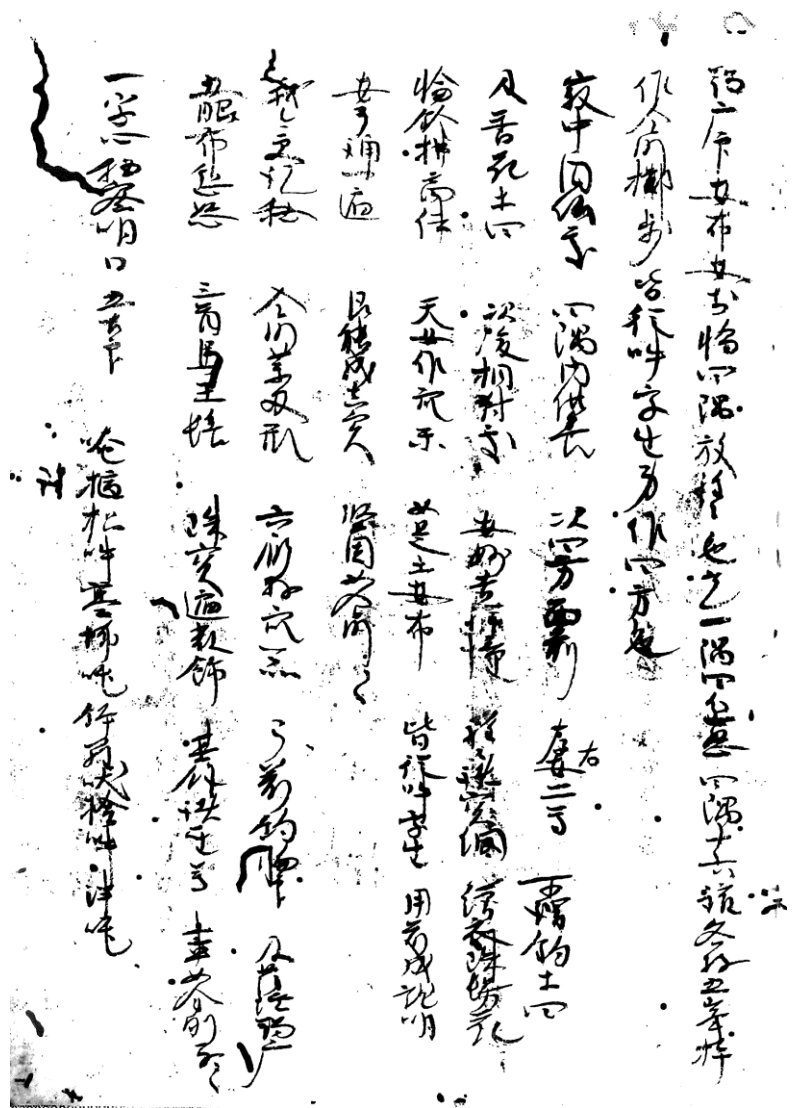
笑眼形。是名根本印。 5 5 真言曰。

唵 摩 賀 藥 乞 叉 嚩 日 羅 娑 怛 縛 弱 吽 鑊 斛 鉢 羅 吠 捨 吽 短 5 6

次說曼拏羅

若作曼荼羅及畫或觀成。當觀吽一字成二大羯磨輪。放光焰金色。復於齊輪 (二〇〇)

中_一。當_二鈷_三於五分_一。觀_二五大月輪_一。一輪安_二五尊_一。共為_二二十五_一。用_二金剛界



羯磨印^一安布。安於^二輪四隅^一放^二種種色光^一。一隅四忿怒。四隅十六護。各持^二五峰杵^一。作^二金剛擲步^一。皆從^二吽字^一生。身作^二四方色^一。

最中円仏処 四隅内供養 次四方面前 左右安^二二尊^一 所謂^二鉤等四^一 及香^二花等^一 (三〇)

四 復^二相对处^一 安^二妙吉祥幢^一 種種^二諸宝網^一 繪衣^二珠鬘^一 花^二輪鈴^一 拈商佉 天女
 作^二衆樂^一 如^レ是等安布 皆從^二吽字^一生 用^二前成就明^一 安了誦^二一遍^一 即能成^二
 真実^一 堅固如^二金剛^一 云 5 7

我今更説^レ秘 金剛藥叉形 六臂持^二衆器^一 弓箭^二鉤輪印^一 及薩埵^二羯磨^一 五眼布忿
 怒 三首馬王髻 珠寶遍嚴飾 其余諸聖尊 画如^二金剛界^一 5 8

一字心秘密明曰。 五古印 唵 (二四) 囉 (二五) 拞 (二六) 塞 (二七) 怖 (二八) 咤 (二九) 鉢 (三〇) 呌 (三一) 泮 (三二) 咤 (三三) 5 9

今時上天菩薩及法身是也。今則其菩薩此中依位行也。

右件法身行位第一依位。其法身行位。其法身行位。其法身行位。

法身行位一卷

天仁子方母之國勝別。其法身行位。其法身行位。其法身行位。

其法身行位。其法身行位。其法身行位。其法身行位。

其法身行位。其法身行位。其法身行位。其法身行位。

其法身行位。其法身行位。其法身行位。其法身行位。

金 剛十六大菩薩及諸忿怒金剛等。皆悉礼レ仏依ニ住位^(三三)一云。 60

右件諸品行法皆可レ依ニ金剛界一。或少分依ニ悉地ニ可レ行レ之。具闡ニ師說一而已。

瑜祇經母捺羅一卷

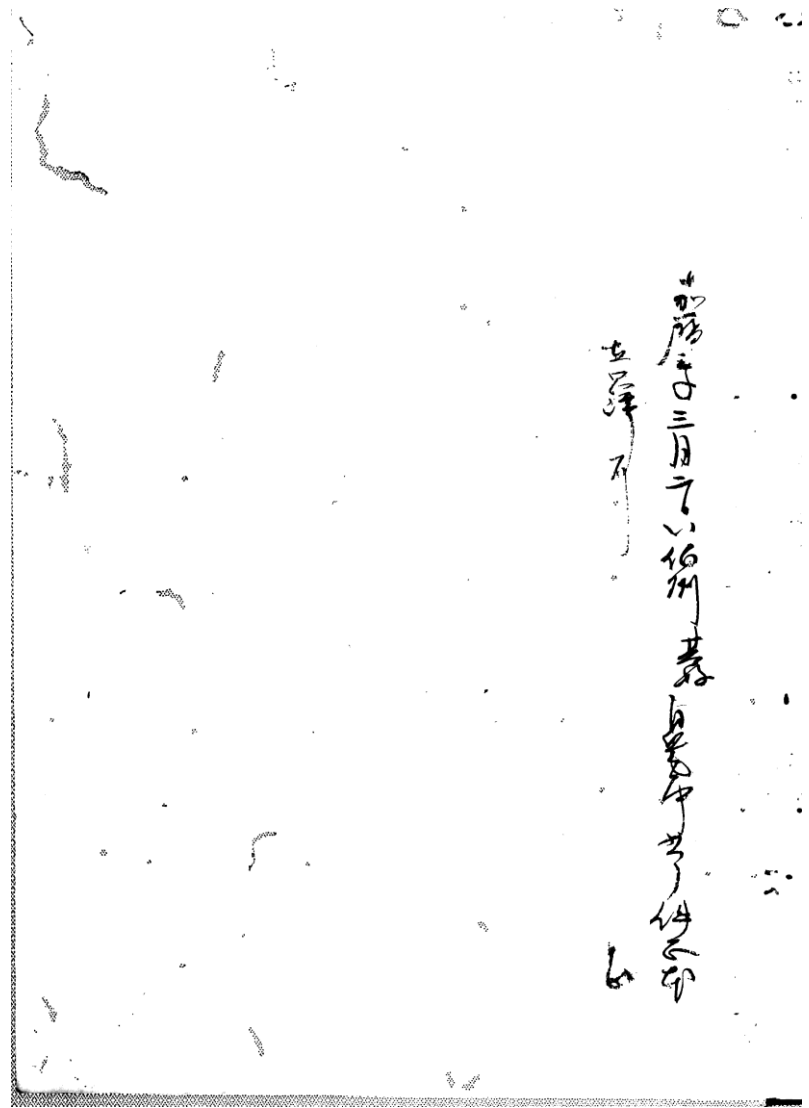
天仁二年六月二十三日於^(一一〇九)因幡州高庭浦上清冷院^(一一〇九)記レ之。比丘藥仁矣。

書本云。安元三年^(一一七七)丁酉七月二十七日於^(一一七七)鎮西肥前州今津誓願寺^(一一七七)以^(一一七七)如如房弟子玄語房本

伝領之^(本九)人花藏房之本^(本九)為^(本九)書本^(本九)一云。

治承四年^(一一八〇)庚子十一月三日於^(一一八〇)備前州日応山瑜伽寺^(一一八〇)以^(一一八〇)一件鎮西之本^(一一八〇)不意之外書了。或修

行者之持本也^(云)。 基好



(二三八)
嘉曆三年三月二日以伯州_{基好}自筆本一書了。件正本在岡崎一耳。

《註》

- (一) 大瑜・開頭鉤召彼愚童
- (二) 大瑜・就↓熟
- (三) 大瑜・為↓欲
- (四) 大瑜・識↓識
- (五) 大瑜・演↓野怛、大總・演↓引野
- (六) 大瑜・曩↓那_二合
- (七) 大瑜・羅↓囉_二合、大總_二合
- (八) 大瑜・大總・縛↓縛_二合
- (九) 大瑜・大總・縛↓縛
- (一〇) 大瑜・大總・摩↓磨
- (一一) 大總・戌↓秣
- (一二) 大瑜・弟↓馱
- (一三) 大總・引
- (一四) 大瑜・用↓誦
- (一五) 大總・処
- (一六) 大總_二一切
- (一七) 大瑜・吽悉底↓吽引蘇悉地、大總・吽悉底↓吽引悉弟
- (一八) 大瑜・印復持、大總・印復
- (一九) 大瑜・山
- (二〇) 大瑜・花↓華
- (二一) 大瑜・大總・拈↓尼
- (二二) 大瑜・大總・身
- (二三) 大瑜・大總・無ナシ
- (二四) 大瑜・大總・咲↓笑
- (二五) 大瑜・大總・賀↓訶
- (二六) 大瑜・大總・縛↓縛
- (二七) 大瑜・羅↓囉_二合、大總・羅↓囉_二合
- (二八) 大瑜・大總_二合
- (二九) 大總_二引
- (三〇) 大瑜・大總・洛↓略_二合
- (三一) 大瑜・利↓哩、大總・纈利↓紇理_二合
- (三二) 大瑜・惡入↓噫、大總・惡入↓惡
- (三三) 大瑜_二引
- (三四) 大瑜・羅↓囉_二合、大總・羅↓囉_二合
- (三五) 大瑜・縛↓縛_二合、大總・縛↓縛
- (三六) 大瑜・大總・矩↓句
- (三七) 大總・捨↓舍
- (三八) 大總_二引
- (三九) 大瑜・大總・羅↓囉_二合

- (四〇) 大總・羅↓囉
- (四一) 大瑜・曩↓那_{二合}
- (四二) 大瑜・大總・矩↓句
- (四三) 大瑜・大總・洛↓略_{二合}
- (四四) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (四五) 大瑜・矩捨纈利↓句舍訖哩_{二合}、大總・矩捨纈利↓句捨訖哩_{二合}
- (四六) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (四七) 大瑜・矩捨惡入↓句舍噁入聲、大總・矩捨惡入↓句捨惡
- (四八) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (四九) 大瑜・大總・娑怛挽↓薩怛鑊
- (五〇) 大瑜・矩捨弱↓句捨惹入聲、大總・矩捨弱↓俱舍弱
- (五一) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・二合
- (五二) 大瑜・羅怛曩↓囉怛那_{二合}、大總・二合
- (五三) 大瑜・二合、大總・播捨吽↓跋引舍吽
- (五四) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・二合
- (五五) 大瑜・大總・跋↓鉢
- (五六) 大瑜・二合、大總・麼↓摩
- (五七) 大瑜・塞怖↓娑破_{二合}、大總・塞怖↓娑普_{二合}
- (五八) 大瑜・令↓能
- (五九) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・二合
- (六〇) 大瑜・健咤毅↓欠咤斛、大總・健咤毅↓健齶斛
- (六一) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・二合
- (六二) 大瑜・大總・娑怛囉↓薩怛囉_{二合}
- (六三) 大瑜・底引乞史拏吽↓底訖叉拏_{三合}吽引、大總・底引乞史拏吽↓底乞瑟拏_{三合}吽
- (六四) 大瑜・惠↓慧
- (六五) 大瑜・羅↓囉_{二合}
- (六六) 大瑜・斫羯羅↓斫訖囉_{二合}、大總・二合
- (六七) 大瑜・大總引
- (六八) 大瑜・大總・弱吽↓惹吽引
- (六九) 大瑜・大總・弱ナシ
- (七〇) 大總引
- (七一) 大瑜・手↓羽
- (七二) 大瑜・大總・惠↓慧
- (七三) 大瑜・大總・是名彼密印
- (七四) 大瑜・茶↓拏
- (七五) 大瑜・曼↓漫
- (七六) 大瑜・大總引
- (七七) 大瑜・黨↓擔、大總・誡黨↓藥耽
- (七八) 大瑜・句勢吽弱_弱↓句始吽引惹入聲、大總・句勢吽弱_弱↓俱舍吽弱
- (七九) 大瑜・大總引

- (八〇) 大瑜：播勢^素吽^引↓播舍^引吽^引、大總：誡多播勢^素吽^引↓藥多^引跋^引舍^引吽^引
- (八一) 大瑜・大總^引
- (八二) 大瑜^引、大總^引↓藥多
- (八三) 大瑜：塞怖^鎖吽^鎖鏝^鎖↓娑普^引致^引吽^引鏝、大總：塞怖^鎖吽^鎖鏝^鎖↓娑普^引咤^引吽^引鏝
- (八四) 大瑜^引
- (八五) 大瑜^引、大總^引↓藥多
- (八六) 大瑜：阿吠捨^鈴吽^鈴斛^鈴↓尾舍^引吽^引斛、大總：阿吠捨^鈴吽^鈴斛^鈴↓阿吠舍^引吽^引斛
- (八七) 大瑜：布惹曳弱^入吽^入穀^入↓布惹惹^入吽^引鏝^入穀、大總：布惹曳弱^入吽^入穀^入↓布惹惹^入吽^引鏝^入斛
- (八八) 大瑜：日↓白
- (八九) 大瑜：咲↓笑
- (九〇) 大瑜：手↓羽
- (九一) 大瑜：疑↓擬
- (九二) 大瑜：生
- (九三) 大瑜：心ナシ
- (九四) 大瑜：王
- (九五) 大瑜：皆ナシ
- (九六) 大瑜：真
- (九七) 大瑜：日
- (九八) 大瑜・大總：又↓文
- (九九) 大總：亦ナシ
- (一〇〇) 大瑜^引
- (一〇一) 大瑜・大總：羅↓囉
- (一〇二) 大瑜・大總：羅↓邏
- (一〇三) 大瑜・大總：擬↓擬
- (一〇四) 大瑜：涸↓鵠
- (一〇五) 大瑜^引
- (一〇六) 大瑜・大總：羅↓囉
- (一〇七) 大瑜：隸↓隸、大總：摩隸↓麼隸
- (一〇八) 大瑜・大總：擬↓擬
- (一〇九) 大瑜^二、大總：怛囉^二↓吽怛囉^二
- (一一〇) 大瑜^引
- (一一一) 大瑜・大總：羅↓囉
- (一一二) 大瑜・大總：隸↓擬
- (一一三) 大瑜・大總：擬↓擬
- (一一四) 大瑜^入、大總^入
- (一一五) 大瑜^引
- (一一六) 大瑜：羅^二↓囉^二、大總：羅^二↓囉^二
- (一一七) 大瑜：喋↓哩
- (一一八) 大瑜：諦↓帝
- (一一九) 大瑜・大總：擬↓擬

- (二一〇) 大瑜・大總・紇↓訖
(二二一) 大瑜・^{二合}ナシ
(二二二) ^引大瑜
(二二三) 大瑜・大總・羅↓囉
(二二四) 大瑜・閉↓^問
(二二五) 大瑜・大總・擬↓擬
(二二六) 大瑜・惡↓噫
(二二七) ^引大瑜
(二二八) 大瑜・羅↓囉
(二二九) 大瑜・浦洪閉↓補瑟波、大總・浦洪閉↓補洪閉
(二三〇) 大瑜・大總・擬↓擬
(三三一) ^引大瑜
(三三二) 大瑜・大總・羅↓囉
(三三三) 大瑜・大總・擬↓擬
(三四) 大瑜・爾↓禰^{入声}、大總・爾↓禰
(三五) ^引大瑜
(三三六) 大瑜・大總・羅↓囉
(三三七) 大瑜・獻弟↓嘑馱、大總・獻弟↓譏弟
(三八) 大瑜・大總・擬↓擬
(三九) ^引大瑜
(四〇) 大瑜・羅↓囉
(四一) 大瑜・大總・擬↓擬
(四二) ^{入声}大瑜
(四三) ^引大瑜
(四四) 大瑜・羅↓囉
(四五) 大總・^引ナシ
(四六) 大瑜・大總・擬↓擬
(四七) ^引大瑜
(四八) 大瑜・羅↓囉
(四九) 大瑜・大總・擬↓擬
(五〇) ^引大瑜
(五一) 大瑜・羅↓囉
(五二) 大瑜・阿吠捨^{二合}↓吠舍、大總・阿ナシ
(五三) 大瑜・大總・擬↓擬
(五四) 大瑜・秘↓密
(五五) 大瑜・輪↓論
(五六) 大瑜・座↓虛
(五七) 大瑜・身↓耳
(五八) 大瑜・両手↓定慧
(五九) 大瑜・為↓成

- (二六〇) 大瑜…得↓成
- (二六一) 大瑜…真言者当知金剛薩埵心
- (二六二) 大瑜…五古印ナシ
- (二六三) 大瑜…二合
- (二六四) 大瑜…唵嚩日羅沒駄吽身如仏形嚩日羅ナシ、大瑜…二合
- (二六五) 大瑜…成金剛身ナシ
- (二六六) 大瑜…羅↓囉、金剛輪座ナシ
- (二六七) 大瑜…多羅為二百ナシ
- (二六八) 大瑜…毘俱胝為心ナシ
- (二六九) 大瑜…利↓哩
- (二七〇) 大瑜…耶↓曳、吉祥為口舌ナシ
- (二七一) 大瑜…大總…羅↓囉
- (二七二) 大瑜…邏底纒哩↓攞細囉唎、大總…邏底纒哩↓邏底囉唎
- (二七三) 大瑜…喜戲為鼻端ナシ
- (二七四) 大瑜…隸↓哩
- (二七五) 大瑜…金剛觀自在両手臂ナシ
- (二七六) 大瑜…羅↓囉
- (二七七) 大瑜…三世不動為面膝脚ナシ
- (二七八) 大瑜…心上成大王ナシ
- (二七九) 大瑜…臍成虚空眼ナシ、大瑜…二合
- (二八〇) 大瑜…摩隸↓麼囉、大瑜…摩隸↓磨引隸
- (二八一) 大瑜…虚空室為相好面上相好也ナシ
- (二八二) 大瑜…一字
- (二八三) 大瑜…五古印ナシ
- (二八四) 大瑜…引
- (二八五) 大瑜…抽↓掙
- (二八六) 大瑜…大總…羅↓囉二合
- (二八七) 大瑜…迦羅↓羯囉、大瑜…迦羅↓羯囉二合
- (二八八) 大瑜…短↓短声、大瑜…短ナシ
- (二八九) 大瑜…短↓短声、大瑜…短ナシ
- (二九〇) 大瑜…短↓短声、大瑜…短ナシ
- (二九一) 大瑜…大總…爾↓顛
- (二九二) 大瑜…二合
- (二九三) 大瑜…短↓短声、大瑜…吽吽
- (二九四) 大瑜…古印↓股契
- (二九五) 大瑜…大瑜…忍
- (二九六) 大瑜…大瑜…惠↓慧
- (二九七) 大瑜…大瑜…及
- (二九八) 大瑜…由
- (二九九) 大瑜…大瑜…引

- (二〇〇) 大瑜・大總二合
 (二〇一) 大瑜二合・羅二合・大總二合・羅二合
 (二〇二) 大瑜・大總二合・娑怛縛二合・薩怛嚩二合
 (二〇三) 大瑜二合・大總二合・日捨反二合
 (二〇四) 大瑜二合・引二合
 (二〇五) 大瑜二合・大總二合・引二合
 (二〇六) 大瑜二合・鉢羅二合・跋囉二合・大總二合・鉢羅二合・跋囉二合
 (二〇七) 大總二合・短ナシ二合
 (二〇八) 大瑜二合・齊二合・臍二合
 (二〇九) 大瑜二合・鈇二合・股二合
 (二一〇) 大瑜二合・花二合・華二合
 (二一一) 大瑜二合・復二合・次後二合
 (二一二) 大瑜二合・花二合・華二合
 (二一三) 大瑜二合・劍二合
 (二一四) 大瑜二合・大總二合・咤二合
 (二一五) 大瑜二合・塞怖二合・娑破二合・大總二合・塞怖二合・娑泮二合
 (二一六) 大瑜二合・羅二合・囉二合・大總二合・羅二合・囉二合
 (二一七) 大總二合・捨二合・舍野二合
 (二一八) 大瑜二合・大總二合・泮二合・癸二合
 (二一九) 大瑜二合・引二合
 (二二〇) 大瑜二合・金剛二合・大衆二合
 (二二一) 大瑜二合・位ナシ二合

《引文箇所》

- 1 『大正』十八・二五四頁中。『瑜祇經』。
- 2 『大正』十八・二五四頁下。『瑜祇經』。
- 3 『大正』十八・二五七頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇五頁上。『瑜祇總行私記』。
- 4 『大正』十八・二五七頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇五頁中。『瑜祇總行私記』。
- 5 『大正』六一・五〇五頁中。『瑜祇總行私記』取意。
- 6 『大正』十八・二五八頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇六頁上。『瑜祇總行私記』。
- 7 『大正』十八・二五八頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇六頁上。『瑜祇總行私記』。
- 8 『大正』六一・五〇六頁中。『瑜祇總行私記』。
- 9 『大正』十八・二五八頁下。『瑜祇經』。
- 10 『大正』十八・二五八頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇六頁中。『瑜祇總行私記』。
- 11 『大正』十八・二五八頁下。『瑜祇經』。
- 12 『大正』十八・二五八頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇六頁下。『瑜祇總行私記』。
- 13 『大正』十八・二五八頁下。『瑜祇經』。
- 14 『大正』十八・二五八頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇六頁下。『瑜祇總行私記』。
- 15 『大正』十八・二五八頁下。『瑜祇經』。

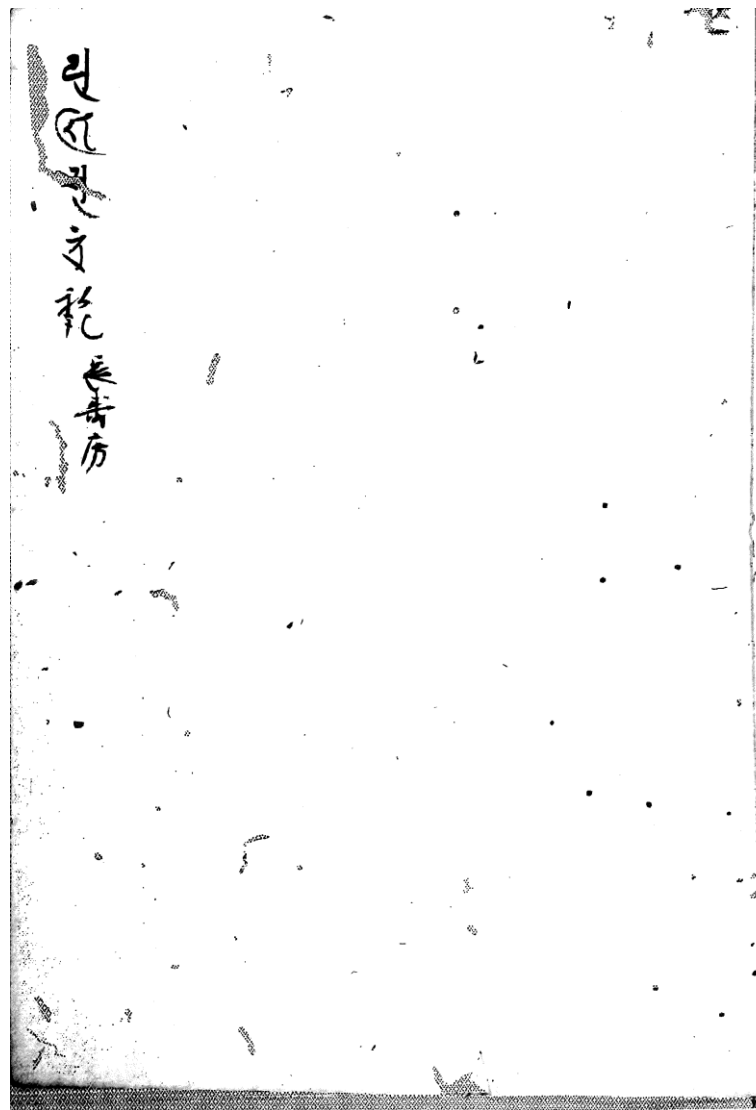
- 56 『大正』十八・二六八頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五一頁中下。『瑜祇總行私記』。
- 57 『大正』十八・二六九頁上。『瑜祇經』。
- 58 『大正』十八・二六九頁中。『瑜祇經』。
- 59 『大正』十八・二六九頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五一頁下。『瑜祇總行私記』。
- 60 『大正』十八・二六九頁下。『瑜祇經』。

『瑜祇經母捺羅』・『𑖀𑖄𑖆𑖇𑖈私記』合綴本

『𑖀𑖄𑖆𑖇𑖈私記』

(青連院吉水藏、嘉曆三年写本)

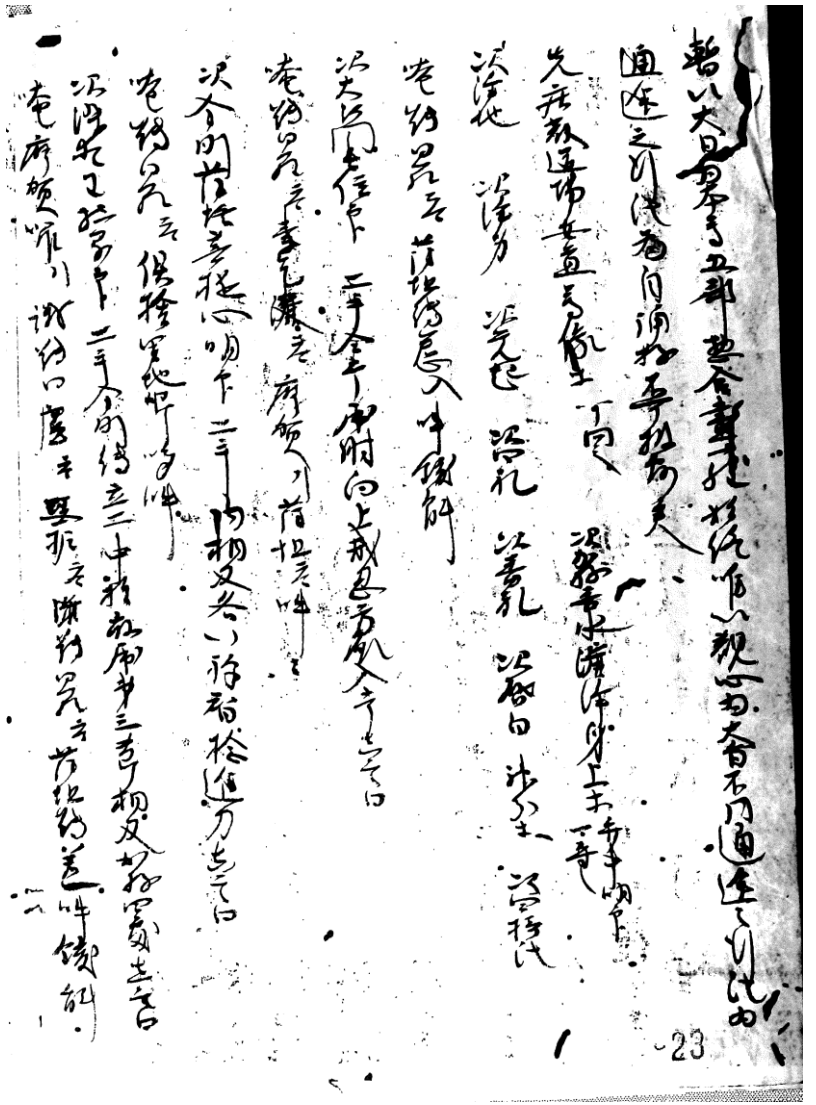
長壽房私記



凡此瑜祇惣有二十二品。開為二十四法。或分三二生法。三部樞樞五智心府三部五部心觀
 速成矣。夫開十四法者。一者序品。以大日為尊。三十七尊同成悉地。二者染愛王品。染愛王為本尊。三十七尊同成悉地
 三者大阿闍梨位品。大日為本尊。五部三十七。三部十三會皆成就。四者冒地品。金剛薩埵為本尊。五部三十七尊。三部十三會一切
 悉地皆成就。五者愛染品。愛染王為本尊。五部通成就法也。六者四攝行品。愛染王為本尊。應前後諸品四攝行成就。七者瑜伽成就
 品。愛染王為本尊。五部通成就悉地也。八者大勝金剛品。大日為本尊。十二臂也。是惣攝蘇悉地法也。九者大成就品。分為二
 三法。一。仏眼法。八字。五大虛空藏法也。或通為二一法。今開為三三法。一。是十四法。初仏
 眼法。仏眼為本尊。五部三部悉地也。十次大悲胎藏八字法。大日為本尊。大悲胎藏中一切法一時頓証。十一後五大虛空藏法
 虛空藏為本尊。一印十三。四印十七。五印三十七尊皆成就富貴虛空藏法。十二者三十七尊內護摩法。十三者金剛薩埵
 內作業灌頂品。此品中雖分三八法。同二金剛薩埵內作灌頂。內護摩。所成二支分等。一明。
 仍不レ可レ分レ之。任意業一耳。十四者降伏一切魔怨品。金剛藥叉為本尊。三十七尊同藥叉三摩地也。惣一經
 終始十二品。一法別壇行也。一品二品三四五六合行也。委細可レ尋二學之一。

瑜祇都法次第

凡此瑜祇惣有二十二品。開為二十四法。或分三二生法。三部樞樞五智心府三部五部心觀
 速成矣。夫開十四法者。一者序品。以大日為尊。三十七尊同成悉地。二者染愛王品。染愛王為本尊。三十七尊同成悉地
 三者大阿闍梨位品。大日為本尊。五部三十七。三部十三會皆成就。四者冒地品。金剛薩埵為本尊。五部三十七尊。三部十三會一切
 悉地皆成就。五者愛染品。愛染王為本尊。五部通成就法也。六者四攝行品。愛染王為本尊。應前後諸品四攝行成就。七者瑜伽成就
 品。愛染王為本尊。五部通成就悉地也。八者大勝金剛品。大日為本尊。十二臂也。是惣攝蘇悉地法也。九者大成就品。分為二
 三法。一。仏眼法。八字。五大虛空藏法也。或通為二一法。今開為三三法。一。是十四法。初仏
 眼法。仏眼為本尊。五部三部悉地也。十次大悲胎藏八字法。大日為本尊。大悲胎藏中一切法一時頓証。十一後五大虛空藏法
 虛空藏為本尊。一印十三。四印十七。五印三十七尊皆成就富貴虛空藏法。十二者三十七尊內護摩法。十三者金剛薩埵
 內作業灌頂品。此品中雖分三八法。同二金剛薩埵內作灌頂。內護摩。所成二支分等。一明。
 仍不レ可レ分レ之。任意業一耳。十四者降伏一切魔怨品。金剛藥叉為本尊。三十七尊同藥叉三摩地也。惣一經
 終始十二品。一法別壇行也。一品二品三四五六合行也。委細可レ尋二學之一。



暫以^二大日^一為^二本尊^一。五部惣合^二一畫^一一經始終^一。唯以^二觀心^一為^二大旨^一。不^レ同^二通途^一之行^一。為^二通途^一之行法^一。為^二自誦持^一不^レ可^二披露^一矣。

先莊^二嚴道場^一安置尊像等^一 可問之

次加持香水灑淨身上等 并奉明印可尋之

次淨地

次淨身

次定起

次四礼

次普礼

次啓白 神分等

次四攝法

唵 嚩 日 羅 ^二合 ^一 薩 怛 縛 惹 ^入 吽 釁 斛 1

次大阿闍梨位印 ^二合 ^一 二手合掌屈^レ肘向^レ上 ^五 戒・忍・方・願入^レ掌。 2 真言曰。

唵 嚩 日 羅 ^二合 ^一 素 乞 灑 ^二合 ^一 摩 賀 ^引 薩 怛 ^二合 ^一 吽 吽 3

次金剛薩埵菩提心明印 ^二合 ^一 一手內相又各以^二禪・智・捨・進・力^一。 4 真言曰。

唵 囉 日 囉 俱 捨 冒 地 唧 哆 吽 5

次染愛王結界印 二 手金剛縛立 二 中指微屈。第三節相叉加持四處。真言曰。

唵 摩 賀 囉 引 誑 囉 日 盧 瑟 拏 灑 囉 日 囉 薩 怛 囉 惹 吽 釁 斛 7

次觀自在生障。時會中忽有二障者。一、不從空生、亦不下從地生^{他方}而來、亦不從
 地出生^(三三)、忽然而現。諸菩薩、各如下醉人^(三三)不知中^(三三)所從來^(三三)一處上。時薄伽梵、面門
 微笑、告^(三三)金剛手及諸菩薩等^(三三)。此障從何而來。從一切衆生本有障無始無覺中
 來。本有俱生障、自我所生障。無始無二初際^(三三)本有俱本輪。時障者、忽然現^(三三)身作^(三三)金剛
 薩埵形^(三三)。於^(三三)頂上^(三三)現^(三三)金剛輪^(三三)、於^(三三)足下^(三三)現^(三三)金剛輪^(三三)、兩手中各現^(三三)金剛輪
 一、又於^(三三)心上^(三三)現^(三三)金剛輪^(三三)。遍身放^(三三)光照^(三三)觸會中諸大菩薩^(三三)。時金剛手白言。遍照
 薄伽梵、我今欲^(三三)說^(三三)速滅^(三三)自生障^(三三)金剛頂法^(三三)。唯願許^(三三)我解說^(三三)。時金剛手、承^(三三)佛聖
 旨^(三三)而說^(三三)真言^(三三)曰。 9 五古印 10
 卍^(三八) 悉底^(三八) 可問之 11
 爾時觀^(三八)一切諸法^(三八)本來清淨^(三八)誦^(三八)壞^(三八)二乘心明^(三八)曰。 金剛合掌 12

次愛染王護身印 外五古 卍引咤枳 卍 卷 入 8

次觀自在生障。時會中忽有二障者。一、不從空生、亦不下從地生^{他方}而來、亦不從

地出生^(三三)、忽然而現。諸菩薩、各如下醉人^(三三)不知中^(三三)所從來^(三三)一處上。時薄伽梵、面門

微笑、告^(三三)金剛手及諸菩薩等^(三三)。此障從何而來。從一切衆生本有障無始無覺中

來。本有俱生障、自我所生障。無始無二初際^(三三)本有俱本輪。時障者、忽然現^(三三)身作^(三三)金剛

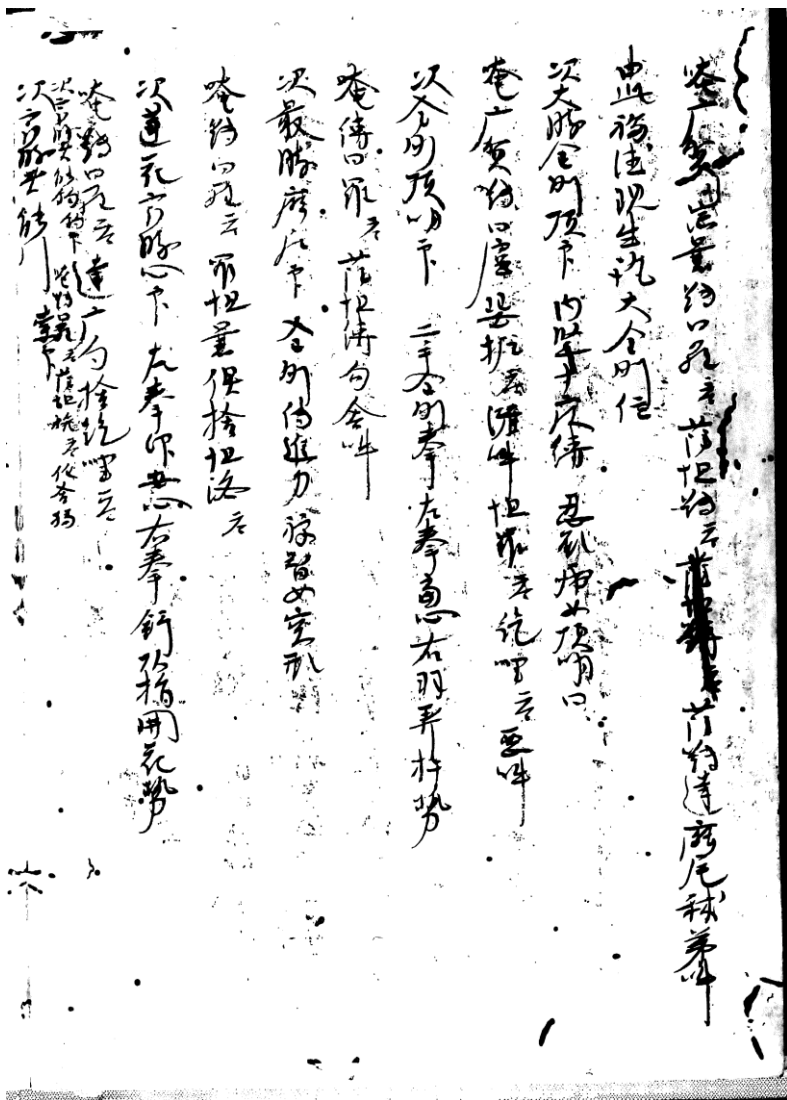
薩埵形^(三三)。於^(三三)頂上^(三三)現^(三三)金剛輪^(三三)、於^(三三)足下^(三三)現^(三三)金剛輪^(三三)、兩手中各現^(三三)金剛輪

一、又於^(三三)心上^(三三)現^(三三)金剛輪^(三三)。遍身放^(三三)光照^(三三)觸會中諸大菩薩^(三三)。時金剛手白言。遍照

薄伽梵、我今欲^(三三)說^(三三)速滅^(三三)自生障^(三三)金剛頂法^(三三)。唯願許^(三三)我解說^(三三)。時金剛手、承^(三三)佛聖

旨^(三三)而說^(三三)真言^(三三)曰。 9 五古印 10
 卍^(三八) 悉底^(三八) 可問之 11

爾時觀^(三八)一切諸法^(三八)本來清淨^(三八)誦^(三八)壞^(三八)二乘心明^(三八)曰。 金剛合掌 12



唵摩 賀(三九) 引 演 曩 縛日 羅(四〇) 二合 薩 怛 縛(四一) 二合 薩 縛 達 磨 尾 祇 弟 呬(四二) 1 3

由レ此福德現生証二大金剛位一。

次大勝金剛頂印 內 豎 二 十 度 一 縛。 忍・願 屈 如 頂。 14 明 曰。

唵摩 賀(四四) 縛日 盧 瑟 拏(四五) 二合 灑 吽 怛 羅(四六) 二合 紇 哩(四七) 二合 惡 吽(四八) 1 5

次金剛頂明印 二 手 金 剛 拳。 左 拳 当 心 右 羽 弄(五二) 杵 勢(五三)。 1 6

唵 縛 日 羅(五五) 二合 薩 怛 縛 句 舍 吽(五七) 1 7

次最勝摩尼印 金 剛 縛。 進・力・禪・智 如 三 宝 形。 1 8

唵 縛 日 羅(五八) 二合 羅 怛 曩(五九) 俱 捨 怛 洛(六〇) 二合 1 9

次蓮華最勝心印 左 拳 印 安 心 右 拳 舒 頭 指 一 開 花 勢。 2 0

唵 縛 日 羅(六四) 二合 達 磨 句 捨 紇 哩(六六) 二合 1

次最勝者能鉤 鉤 印

唵 縛 日 羅(六七) 二合 薩 怛 挽(六八) 二合 俱 舍 弱(六九) 2

次最勝者能引 索 印 2 3

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次最勝者能縛

次金剛劍印

次金剛劍印

次心地道場

具慈悲一流注乳滿遍輪圍山

無量由旬龜背上想

夜 三字。為須弥仙。山頂想。二。A. S. K. S. S. 等五字。為五峰樓閣。閣內想

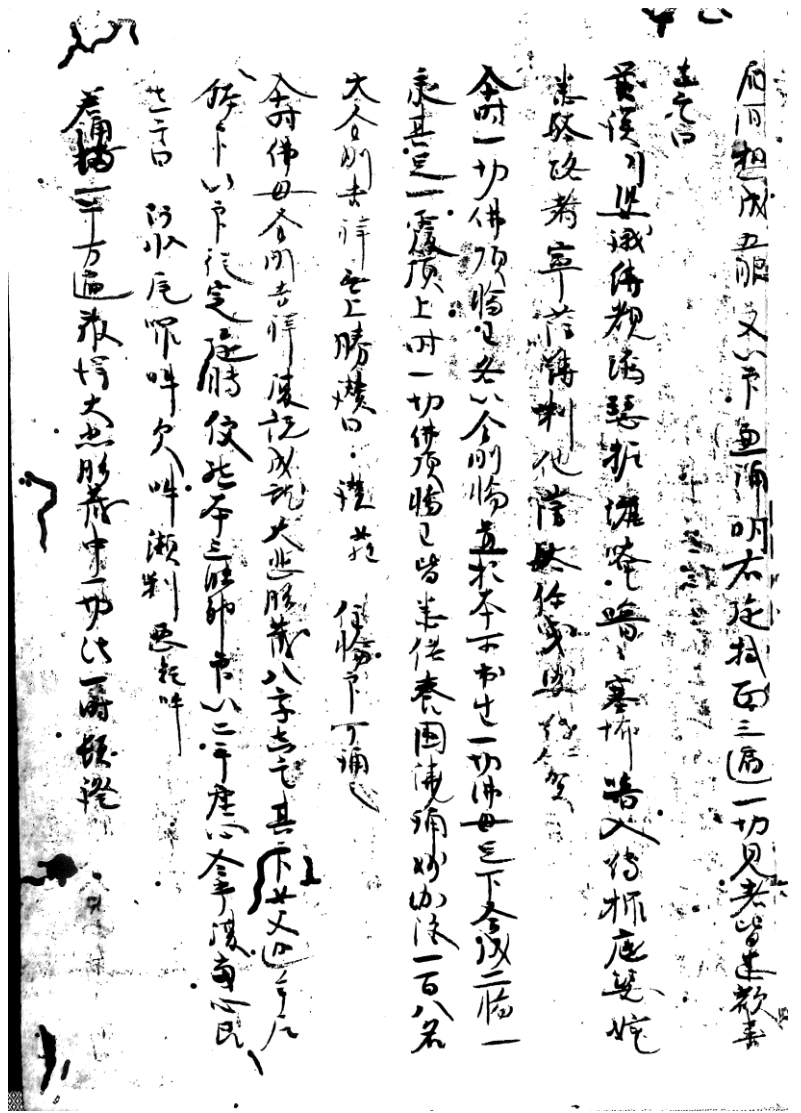
四重階道。周匝懸雜繪綵珠網花鬘。而為莊嚴。復用種種雜寶鈴鐸。映蔽日月。復其外無量劫波樹行列。復諸天美妙音聲歌詠樂音諸阿修羅莫呼落伽王等以金剛舞之所娛樂。是名金剛界自在大三昧耶自覺本初大菩提心普賢滿月不壞金剛光明心殿。與自性所成眷屬金剛手等十六大菩薩及四攝行天女使金剛內外八供養金剛天女使。如次圍遶心王毘盧舍那。以諸大悲行願圓滿。有情福智資糧之所成就。以五智光照常住三世無有暫息云云。

次金剛輪印明 輪壇印

唵 嚩 日 羅 斫 羯 羅 呬 吽 惹 吽 引 鑊 斛 弱 吽 引 1 3

次振鈴 次四攝明印 四字印

(後缺力)



眉間想成五眼。又以印兼誦明。右旋拭面三遍。一切見者皆悉歡喜。3 真言曰。
余時一切佛及諸聖。各以一切佛。遍於本下。生一切佛。且下。各以二指。一
其甚。是一。覆。原。上。時。一切佛。及。諸。聖。皆。悉。供。養。團。圓。誦。妙。法。一。百。八。名。
大。合。別。去。詳。上。勝。熾。口。禮。花。佛。悔。下。下。痛。

余時一切佛及諸聖。各以一切佛。遍於本下。生一切佛。且下。各以二指。一
其甚。是一。覆。原。上。時。一切佛。及。諸。聖。皆。悉。供。養。團。圓。誦。妙。法。一。百。八。名。
大。合。別。去。詳。上。勝。熾。口。禮。花。佛。悔。下。下。痛。

余時一切佛及諸聖。各以一切佛。遍於本下。生一切佛。且下。各以二指。一
其甚。是一。覆。原。上。時。一切佛。及。諸。聖。皆。悉。供。養。團。圓。誦。妙。法。一。百。八。名。
大。合。別。去。詳。上。勝。熾。口。禮。花。佛。悔。下。下。痛。

眉間想成五眼。又以印兼誦明。右旋拭面三遍。一切見者皆悉歡喜。3 真言曰。

曩謨引婆識縛觀瀉瑟拏灑唵嚕嚕塞怖普入囉擺底瑟姪悉駄路者寧薩嚩

喇他薩 馱爾曳娑嚩 賀 3 3

爾時一切仏頂輪王、各以金剛輪置於本所出生一切仏母足下。合成三輪。一承

其足。一覆頂上。時一切仏頂輪王、皆悉供養圍遶。誦妙伽陀一百八名。大

無上勝讚。曰。 3 4

讚如經 住輪印。可誦之。

爾時仏母金剛吉祥、復說成就大悲胎藏八字真言。3 其印如釈迦牟尼鉢印。以印

從定。旋転便結二本三昧耶印。以一手。虛心合掌。復当心。3 即真言曰。

阿入引尾囉吽欠吽纈喇惡紇吽

若誦滿二千萬遍。獲得大悲胎藏中一切法一時頓証。 3 7

此書若別行者依此儀卷今此抄本以兼做主成(大日)有字可
 奈波記成此儀卷今則摩光恭的(五字)明下既青鶴(廣部
 且私全等)針 止名(代)子(意)元(三)戶(通)南(六)次(改)進(力)三(針)
 是名(今)剛(虛)空(花)漫(進)力(變)爪(是)為(實)光(虛)空(動)又(用)進(力)
 十(蓮)華(瓦)名(蓮)花(虛)空(戒)方(進)力(相)又(是)名(華)南(虛)空(戒)
 止(名) 領(料)世(終)領(利)意(結)

師曰。若別行者、依二或供養会或持誦次第儀等二可レ修レ之。大日為二本尊一耳。

爾時復說二成就富貴金剛虛空藏鉤召五字明 印一。 3 毘首羯磨三 昧耶。忍・願合

峰如レ針。是名二法界虛空藏一。三 □ 印(味密) 當知一。次改二進・力一如三 鉗一。是名

二金剛虛空藏一。復 次 進・力如二宝形一。是為二宝光虛空藏一。又屈二進・力一如二蓮葉

一。即 名二蓮花虛空藏一。戒・方・進・力互相叉。是名二業用虛空藏一。 3 真言曰。

鑠吽怛 洛 纈 喇 惡 短 4 0

次說曼拏羅

註云。於二一円明中二等二自身量一 画レ之。於二一円中二更分為レ五。於二中円一 画二

白色虛空藏一。左手執レ鉤右手持レ宝。前円中 画二黃色虛空藏一。左手持レ 劍 右執二

宝金剛一。右円中 画二青色虛空藏一。左執レ鉤右持二三弁宝一放二大光明一。於二後円中

一 画二赤色虛空藏一。如レ前左持レ鉤右持二大紅蓮 花一。左円中 画二黑紫色虛空藏

一。如_レ前左持_レ鉤右持_二宝羯磨_一。是名_二五大虚空藏求富貴法_一。4 若画_二此像_一、於_二青
 色或金色絹上_一画_レ之。其菩薩衣服首冠瓔珞皆依_二本色_一、各_二半_一跏坐。画_二此像
 一已对_二於壇前_一。無_レ間_(三)二時方_一但誦_二五字明_一一千万遍_一。即得_二富貴成就_云已上_二4_一爾
 時復說_二金剛吉祥成就一切明_一。4 其印相_二明_一金剛掌以_二檀_一・惠_(三)一内相鉤。戒・方
 双屈入_レ掌。忍・願相合如_レ峰。屈_二進_一・力_一各捻_二忍_一・願上節_一。以_二禪_一・智_一各捻_二忍_一・
 願初文_一。是名_(三)二金剛吉祥印_一。4 真言曰_(三)師云。七曜成就明也。

此印一切明... 摩訶般若波羅蜜... 此印一切明... 摩訶般若波羅蜜... 此印一切明... 摩訶般若波羅蜜...

此印一切明... 摩訶般若波羅蜜... 此印一切明... 摩訶般若波羅蜜... 此印一切明... 摩訶般若波羅蜜...

此印一切明... 摩訶般若波羅蜜... 此印一切明... 摩訶般若波羅蜜... 此印一切明... 摩訶般若波羅蜜...



唵嚩日囉室哩 引摩訶室哩 阿彌底也室哩 素摩室哩 引盡識

引囉迦室哩 母陀室哩 沒羅賀娑破底室哩 戌羯囉室哩 引舍

儻始者 羅始制 帝室哩 引摩賀三摩 曳室哩 引娑嚩賀 4 5

復說二妙吉祥破諸宿曜明 4 6 內縛痛二指節 一。並逼豎二空 一。是名二破七曜一切

不祥印 一。 4 真言曰。

唵 引薩嚩怛囉 三摩 曳室哩 曳娑嚩賀 4 8

當下觀二妙吉祥 一而作中降伏事上。結印誦三百遍 一不 一久即成就。 4 9

成就一切明印 持二本所出生一切仏母 一。復於二頂上 一放二百千道雜色光明 一。於二一光

中 一出生無量金剛杵 一。勇健熾盛於二足下 一亦然。 5 其印以二定惠手 一作不動刀

印 一。以二刀刃 一互插二掌中 一即成。 5 1 結印安於左脇 一誦真言一百八遍 一。 5 2 真言曰。

唵 唵 引唵 唵 烏 唵 烏 置 知置知 唵 烏 唵 烏 唵 烏 嚩日囉 娑 怛 儻 弱

吽 鑊 斛 纈 哩 郝 吽 泮 唵 吽 5 3

時諸仏頂輪王各各還來。入二薩埵仏母 一 一毛孔中 一忽然不 一現。時大衆會一時寂然。 5 4

(後
缺
力)

此印之形如月輪之狀
 其法以手平置於地
 以二指相合而為一
 其間空處即為印之
 形也
 此印之功用能治一切
 鬼神之病
 凡有鬼神之病者
 宜以此印咒之
 其病即愈
 此印之形如月輪之狀
 其法以手平置於地
 以二指相合而為一
 其間空處即為印之
 形也
 此印之功用能治一切
 鬼神之病
 凡有鬼神之病者
 宜以此印咒之
 其病即愈

一切如来内護摩金剛軌儀品第十

私云。此品、応レ明「三十七尊内護摩火法」也。普涉説品可レ用レ之。本来支分等可レ准二
 瑜伽護摩軌一也。若五種護摩所用可レ知レ之。一尊一行又准知耳。

可レ想。身処「月輪」而当レ作「觀念」。以三妄執百六十心一名レ因。五障為レ業。此因業

為レ柴。三十七智為「大菩提心」。月輪円明為レ焰。口炉壇炉共法界為レ量云云真言声而為
 レ燃。以二印契形一而為「焰形」。遍「虚空界」。以二等覺等一擲二口炉中一。作「諸成就」。

永為レ調「伏煩惱賊及一切鬼神」故作「是護摩」。増「長三昧」云。 5 5

先大日 智拳印 5 6

唵 嚩日 羅(二八三) 馱(二八四) 都 阿 擬 爾(二八六) 合 鑠(二八七) 5 7

阿闍 觸地印 5 8

唵 嚩日 羅(二八八) 阿 芻 毘 也 阿 擬 爾 吽(二九二) 5 9

宝生 施願印 6 0

唵 嚩日 羅 羅 怛 曩 三 婆 嚩 阿 擬 爾 怛 洛(二九九) 6 1

無量寿 西方花印 6 2

唵 (一〇) (一)
囉日 (一〇) (二)
路 (三〇) (三)
計濕囉 (一〇) (四)
惹阿 (一〇) (五)
擬 (一〇) (六)
爾
紇哩
6 3

不空成就 無畏印 6 4
 唵 嚩 日 囉 阿 慕 伽 悉 帝 阿 擬 儼 惡 入 5
 金剛波羅蜜 觸地印 6 6
 唵 薩 埵 嚩 日 囉 阿 擬 儼 二 合 吽 7
 宝波羅蜜 施願印 6 8
 唵 囉 怛 曩 嚩 日 哩 阿 擬 儼 二 合 怛 羅 二 合 9
 法波羅蜜 西方花印 7 0
 唵 達 磨 嚩 日 哩 阿 擬 儼 紇 哩 二 合 7 1
 業波羅蜜 前無畏印 7 2
 唵 羯 磨 嚩 日 哩 阿 擬 儼 二 合 惡 7 3
 金剛薩埵 羯磨会薩菩薩印
 唵 嚩 日 囉 薩 怛 嚩 二 合 阿 擬 儼 二 合 吽 惡 7 4
 金剛王 王菩薩印
 嚩 日 囉 惹 阿 擬 儼 二 合 吽 弱 次 洛 反 7 5

金剛染 染菩薩印

唵 囉 誡 阿 擬 爾 卍 洵 7 6

金剛称 喜菩薩印

唵 囉 沙 度 阿 擬 爾 卍 洵 7 7

金剛宝威光 宝菩薩印

唵 囉 怛 曩 阿 擬 爾 卍 唵 7 8

金剛光明威 光菩薩印

唵 囉 帝 惹 阿 擬 爾 卍 暗 7 9

金剛幢大軍 幢菩薩印
 今別誦天 冥并下
 今別誦是 冥并下
 今別誦利刀 利并下
 今別誦物袋 目并下
 今別誦吉 珍并下
 今別誦何死 毒并下
 今別誦何富无 道并下
 今別誦怖長教 牙并下
 今別誦空持毒 卷并下
 今別誦是云 殊勝所撰作云 咄咄其
 今別誦是云 聖少引 殊勝所撰作云
 今別誦是云 過广 殊勝所撰作云
 今別誦是云 屈乞 殊勝所撰作云
 今別誦是云 修規 殊勝所撰作云
 今別誦是云 世廣 殊勝所撰作云
 今別誦是云 夏以 殊勝所撰作云
 今別誦是云 已更 殊勝所撰作云
 今別誦是云 善及 殊勝所撰作云
 今別誦是云 散地 殊勝所撰作云

金剛幢大軍 幢菩薩印

唵嚩日 羅 (二四〇) 髻 都阿 擬 爾 (二四二) 怛 洛 (二四三) 引 (二四四) 8 0

金剛咲 咲菩薩印

唵嚩日 羅 (二四四) 賀 沙 引 阿 擬 爾 (二四六) 洵 (二四七) 8 1

蓮花自在王 法菩薩印

唵嚩日 羅 (二四八) 達 磨 引 阿 擬 爾 (二五〇) 紇 哩 (二五一) 2 8

金剛猛利刀 利菩薩印

唵嚩日 羅 (二五二) 底 乞 史 拏 二合 阿 擬 爾 (二五四) 二合 咩 淡 (二五五) 3 8

金剛轉輪者 因菩薩印

唵嚩日 羅 (二五八) 係 靚 阿 擬 爾 (二六〇) 二合 咩 給 (二六一) 4 8

金剛語言 語菩薩印

唵嚩日 羅 (二六二) 婆 灑 引 阿 擬 爾 (二六四) 二合 咩 藍 (二六五) 5 8

羯磨金剛藏 業菩薩印

唵嘑日 羅 (二六五) 二合 羯磨阿 擬 爾 (二六六) 二合 吽劍 8 6

金剛甲冑光 護菩薩印

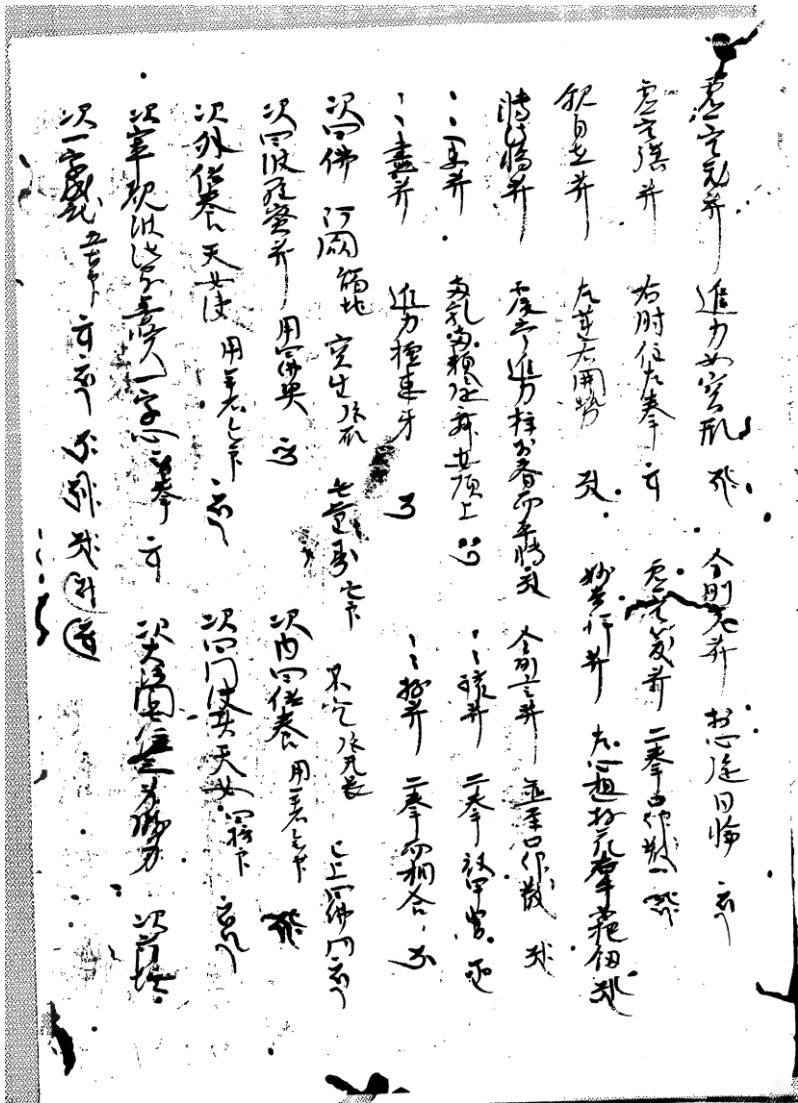
唵嘑日 羅 (二六七) 二合 羅 乞 (二六八) 又 阿 擬 爾 (二七〇) 二合 吽 舍 (二七一) 8 7

金剛怖畏噉 牙菩薩印

唵嘑日 羅 (二七三) 二合 藥乞又 (二七四) 阿 擬 爾 (二七五) 二合 吽 (二七六) 引 吽 短 8 8

金剛密持尊 拳菩薩印

唵嘑日 羅 (二七五) 二合 散地阿 擬 爾 (二七六) 二合 吽 鏤 8 9



虛空藏菩薩 進・力如二宝形一。 90

金剛光菩薩 於レ心旋二日輪一。 91

虛空旗菩薩 右肘住二左拳一。 92

虛空笑菩薩 二拳口仰散。 93

觀自在菩薩 左蓮右開勢。 94

妙吉祥菩薩 左心想レ持レ花。右手如レ把レ劍。 95

轉法輪菩薩 覆レ拳進・力拄二於 齊一而平轉。 96

金剛 言 菩薩 並至レ口仰散。 97

金剛業菩薩 兩乳兩頰旋舞安二頂上一。 98

金剛護菩薩 二拳被甲冑。 99

金剛尽菩薩 進・力・檀・惠牙。 100

金剛持菩薩 二拳而相合。 101

次四仏 阿閼 觸地 宝生 施願 無量寿 定印 不空 施無畏。 已上四仏門。

次四波羅蜜菩薩 用二四仏契一。

次內四供養 用二羯磨会印一。

次外供養天女使 用二羯磨会印一。

次四門使者天女 四攝印。

次率觀波法界普賢一字心 智拳。

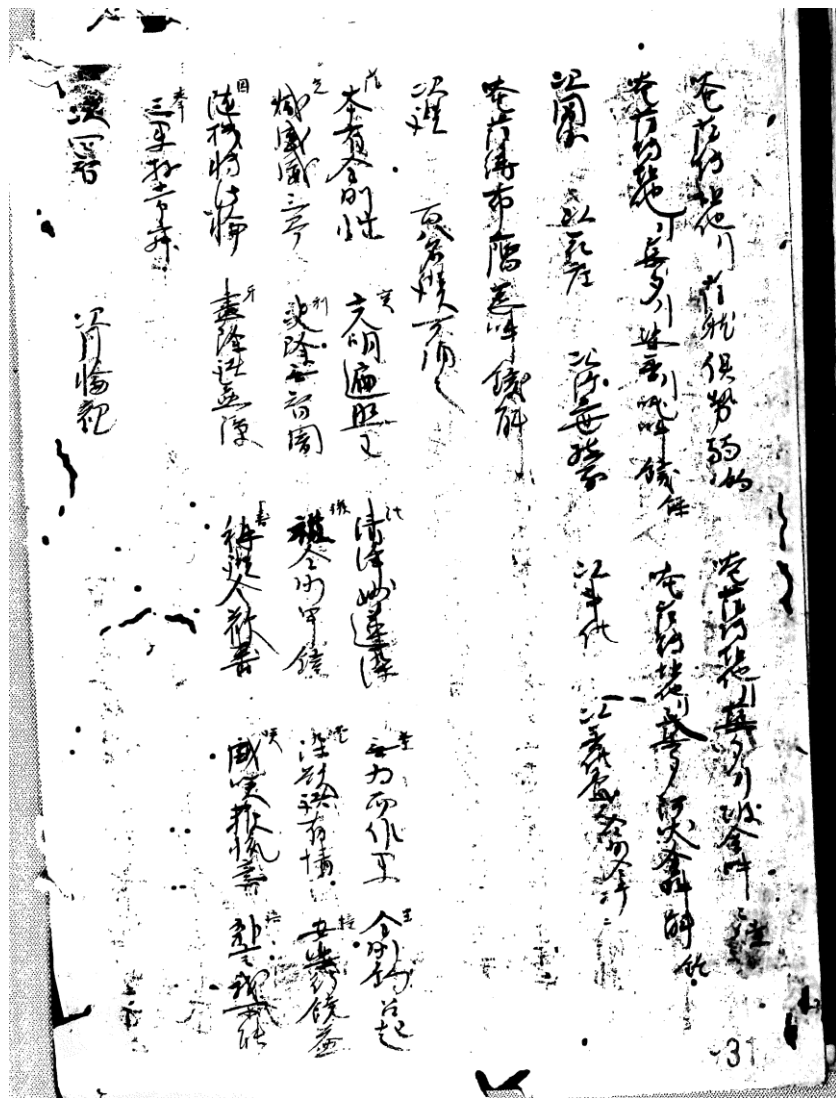


次大阿闍梨位三身勝身

次薩埵

次一字成就 五古印





唵薩嚩怛他引 薩 耽 俱 勢 弱 鈎 102

唵薩嚩怛他引 藥 多 引 跋 舍 吽 索 103

唵薩嚩怛他引 藥 多 引 娑 普 引 咤 吽 鑿 鎖 104

唵薩嚩怛他引 藥 多 阿 吠 舍 吽 斛 鈴 105

次闍伽

次花座

次降三世結界

次事供

次普供養 金剛合掌

唵薩 縛 布 齊 惹 吽 鑿 斛 106

次讚 百八名讚可誦之。

本有 金剛性 光明遍照王 清淨妙蓮染 無為而作業 金剛鉤召起 熾盛威三界

一 決 除無智闇 被 金剛甲鎧 染欲諸有情 安樂行 饒 益 隨 機 轉 二 法 輪 一 尽

除^二諸蓋障^一
次四智
次月輪觀

稱讚令^二歡喜^一
戲^咲
咲^(三〇)
獲^(三〇)
悦意^二
離言我所^レ能^語
三業持^二常寂^一
107

前所起前所起... 大月輪中法界體性無分別智... 輪中在... 字... 變... 成... 法界率觀婆... 率觀婆變成... 毘盧遮那... 一身四面... 智拳印... 為... 令... 衆生現... 証... 一切如來... 本有金剛性放... 光照... 四方四箇... 字每... 方現起隨... 方字如... 月輪... 字變... 如... 次東西南北... 成... 五古寶珠蓮花羯磨... 各變成... 阿闍婆生阿彌陀不空成就... 今此四... 仏為... 令... 衆生修... 行諸仏大悲行願... 放... 隨... 方光... 照... 大日四邊... 各現... 字... 一字光如... 二月輪... 變成... 各... 三昧耶身... 次變成... 四波羅蜜菩薩... 又大日如來放... 光照... 四方四智... 月輪四邊... 為... 令... 衆生動... 本有性... 成... 就法身上... 東方大円鏡智所... 變阿闍婆四邊前左... 右復現... 字... 成... 各各... 三昧耶身... 變成... 薩王愛喜四菩薩... 又為... 令... 衆生入... 法界宮... 堅... 牢諸藏識... 南方平等性智所... 變寶生仏前左右復現... 字... 成... 三摩耶身... 變... 三寶光幢咲四菩薩... 為... 令... 衆生成... 就菩提... 入... 中如如智上... 西方妙觀察智所... 現阿彌陀仏四邊現... 字...

〈内側に書かれた文章〉

可_二觀想_一。前所_レ觀_二法界内_一。明_二大月輪中法界體性無分別智_一。輪中在_二字_一。變_二成_二法界率觀婆_一。率觀婆變成_二毘盧遮那_一。一身四面_二手智拳印_一。為_レ令_三衆生現_三証_一一切如來_一。本有金剛性放_レ光照_二四方四箇_一。字每_レ方現起隨_レ方字如_二月輪_一。字變_二如_二次東西南北_一。成_二五古寶珠蓮花羯磨_一。各變成_二阿闍婆生阿彌陀不空成就_一。今此四_一仏為_レ令_三衆生修_三行諸仏大悲行願_一。放_レ隨_レ方光_二照_二大日四邊_一。各現_二字_一。一字光如_二月輪_一。變成_二各_二三昧耶身_一。次變成_二四波羅蜜菩薩_一。又大日如來放_レ光照_二四方四智_一月輪四邊_一。為_レ令_下衆生動_二本有性_一。成_中就法身上_上。東方大円鏡智所_レ變阿闍婆四邊前左_一右復現_二字_一。成_二各各_二三昧耶身_一。變成_二薩王愛喜四菩薩_一。又為_レ令_下衆生入_二法界宮_一。堅_中牢諸藏識_一。南方平等性智所_レ變寶生仏前左右復現_二字_一。成_二三摩耶身_一。變_二三寶光幢咲四菩薩_一。為_レ令_下衆生成_二就菩提_一。入_中如如智上_上。西方妙觀察智所_レ現阿彌陀仏四邊現_二字_一。

此我二字成三勢力及成以利用語可并為不克生成說亦通用此等
 為欲生飛中 悔自之故心方成下作有下見不克成也信宜遠理心下也
 成府邪力及成苦坑牙奉困使本佛為今亦生致發并中迴遊顯印放
 之且內心渴飛字將成娘榜秋奔內供在天女使為今克生現行建得成
 此因內大日教之照中乞渴以云字將成香坑坑遠外供養天女使為今克生
 同以以家所也心化文寫釋發是照口中現云字將成約幸輝故印形并其
 隨方可放光明內外通徹唯一大月輪五部三十七月涉入更手因難相
 所不能不橫心月輪也乃至一切有情心正心字及現文之矣

經本業明下 不用印字下
 今明手并左拳其腰側右羽把擲云 今明手三拳其抱胸逆方約松不
 今明手并左拳其腰側右羽把擲云 今明手三拳其抱胸逆方約松不
 今明手并左拳其腰側右羽把擲云 今明手三拳其抱胸逆方約松不

升飛 四字。成三摩耶身。變成法利因語四菩薩。為令三衆生成三就三身遍周法界

一為欲三生死中得自在一故。北方成所作智所現不空成就四邊現字。成三昧耶身。變成業護牙拳一圍遶本仏。為令三衆生顯發如來神通遊戲。四仏放光照二內院四隅。字轉成嬉鬢歌舞內供養天女使。為令三衆生諸行速得成就

圓滿。大日放光照二中院四隅。現字轉成香花灯塗外供養天女使。為令三衆生同至法界阿迦尼咤宮。四仏放光照二四門中。現字轉成三鉤索鎖鈴四攝菩薩。如此隨方所放光明內外通徹。唯一大月輪五部三十七月涉入更互円融相即不縱不橫心月輪也。乃至一切有情心王心所變現更無異云。

次說本業明印

或不用印。定印。可誦之云。

金剛手菩薩 左拳安腰側 右羽把擲。

金剛王菩薩 以二拳一交抱胸。進・力鉤以招。

金剛染菩薩 二拳如射法。

金剛稱菩薩 當心作彈指。



111



110



109



108

《註》

- (一) 大瑜・羅↓囉
- (二) 大瑜・大總・縛↓縛二合
- (三) 大瑜・入ナシ
- (四) 大瑜・引
- (五) 大瑜・大總・二手合掌屈肘向上↓其印以定慧手。屈肘向上合掌。与肩齊。
- (六) 大瑜・大總・各屈
- (七) 大瑜・戒忍方願↓戒方忍願
- (八) 大瑜・引
- (九) 大瑜・羅↓囉
- (一〇) 大瑜・素乞灑二合摩賀引↓素訖叉麼三合□□
- (一一) 大瑜・怛囉二合、大總・薩怛囉二合
- (一二) 大瑜・手↓羽
- (一三) 大瑜・引
- (一四) 大瑜・羅↓囉
- (一五) 大瑜・俱捨冒地啣↓句舍沒馱涅
- (一六) 大總・哆吽↓多引吽引
- (一七) 大總・二手↓師口云
- (一八) 大總・二ナシ
- (一九) 大總・許
- (二〇) 大瑜・賀↓訶引
- (二一) 大瑜・引ナシ、大總・囉引↓囉引
- (二二) 大瑜・盧↓囉、大總・盧↓囉
- (二三) 大瑜・灑↓沙
- (二四) 大瑜・羅↓囉
- (二五) 大瑜・二合
- (二六) 大瑜・引
- (二七) 大瑜・大總・引
- (二八) 大瑜・引
- (二九) 大瑜・引
- (三〇) 大瑜・入↓入入聲
- (三一) 大瑜・者ナシ
- (三二) 大瑜・大總・生ナシ
- (三三) 大瑜・人ナシ
- (三四) 大瑜・大總・咲↓笑
- (三五) 大瑜・大總・於ナシ
- (三六) 大瑜・大總・速滅↓此
- (三七) 大瑜・真言曰↓頌曰、大總・真言曰↓偈言
- (三八) 大瑜・吽悉底↓吽引蘇悉地、大總・吽悉底↓吽引悉弟
- (三九) 大瑜・賀↓訶

- (四〇) 大瑜：演曩↓野怛那_{二合}、大總：演曩↓野曩
- (四一) 大瑜：羅↓囉
- (四二) 大瑜：秬弟↓戍馱
- (四三) 大總_{二引}
- (四四) 大瑜：賀↓訶_引、大總：賀↓訶
- (四五) 大瑜：盧↓囉_{二合}、大總：盧↓囉_{二合}
- (四六) 大總_{二引}
- (四七) 大瑜：大總：羅↓囉
- (四八) 大瑜：惡吽↓噫吽_引
- (四九) 大總：手ナシ
- (五〇) 大總：左拳↓止羽
- (五一) 大總：右↓觀
- (五二) 大總：如
- (五三) 大總：杵↓跋折羅
- (五四) 大總：縛↓縛
- (五五) 大瑜：羅↓囉
- (五六) 大瑜：縛↓縛_{二合}、大總：縛↓縛
- (五七) 大瑜：舍吽↓捨吽_引
- (五八) 大瑜：大總：羅↓囉
- (五九) 大總：羅↓囉
- (六〇) 大瑜：曩↓那_{二合}
- (六一) 大瑜：大總：俱↓句
- (六二) 大瑜：大總：洛↓略
- (六三) 大總：左拳印安心右拳舒頭指開花勢↓左拳想執持蓮花莖以右拳頭指大指如開敷花囊之勢
- (六四) 大瑜：大總：羅↓囉
- (六五) 大瑜：捨↓舍
- (六六) 大總：紇↓唵
- (六七) 大瑜：大總：羅↓囉
- (六八) 大瑜：挽_{二合}↓鏝、大總：挽_{二合}↓鏝_{二合}
- (六九) 大瑜：俱舍弱↓句捨巷_{入声}
- (七〇) 大瑜：羅↓囉
- (七一) 大瑜：羅↓囉
- (七二) 大瑜：曩↓那
- (七三) 大瑜：跋舍↓播捨、大總：跋舍↓跋_引舍
- (七四) 大瑜：羅↓囉
- (七五) 大瑜：跋納磨↓鉢納麼_{二合}、大總：跋納磨↓鉢納麼_{二合}
- (七六) 大瑜：塞怖↓娑破_{二合}、大總：塞怖↓娑普_{二合}
- (七七) 大瑜：羅↓囉
- (七八) 大瑜：健↓欠
- (七九) 大總：咤↓𪔐

- (八〇) 大總…左拳↓用左
(八一) 大總…右拳↓以右
(八二) 大總…相↓想
(八三) 大總…三度ナシ
(八四) 大瑜…羅↓囉
(八五) 大瑜…乞瑟拏_{二合}吽↓訖叉拏_{三合}吽_引、大總…乞瑟拏_{二合}吽↓乞瑟拏_{三合}吽
(八六) 大瑜…羅↓囉_{二合}
(八七) 大瑜…羯羅↓訖囉
(八八) 大瑜…大總…_引
(八九) 大瑜…大總…弱ナシ
(九〇) 大瑜…_引ナシ
(九一) 大瑜…大總…_引ナシ
(九二) 大瑜…縛靺↓嚩底、大總…縛靺↓嚩靺
(九三) 大瑜…鴻瑟拏灑↓瑟拏_{二合}沙、大總…鴻瑟拏灑↓瑟拏_{二合}灑
(九四) 大瑜…塞怖普↓娑跛_{二合}嚩、大總…塞怖普↓娑普_{二合}嚩
(九五) 大瑜…大總…_{二合}
(九六) 大瑜…姪_{二合}↓咤_{二合}、大總…姪_{二合}
(九七) 大總…_引
(九八) 大瑜…者寧↓左拏、大總…者寧↓左寧
(九九) 大瑜…大總…唎他↓囉他_{二合}
(一〇〇) 大瑜…薩駄爾曳↓娑駄顛曳、大總…薩駄爾曳↓娑_引駄顛曳
(一〇一) 大瑜…賀↓訶_引
(一〇二) 大瑜…合↓各
(一〇三) 大總…起
(一〇四) 大瑜…手↓羽
(一〇五) 大總…復↓複
(一〇六) 大瑜…_{入引}ナシ
(一〇七) 大總…囉↓囉
(一〇八) 大總…_平
(一〇九) 大瑜…纈唎惡↓紇哩_{二合}噯、大總…纈唎惡↓紇哩_{二合}惡
(一一〇) 大瑜…大總…紇吽ナシ
(一一一) 大瑜…印↓王
(一一二) 大總…昧↓摩
(一一三) 大總…相
(一一四) 大瑜…鈷↓股
(一一五) 大瑜…大總…次↓改
(一一六) 大瑜…即↓印
(一一七) 大瑜…洛纈唎↓洛_{二合}纈唎_{二合}、大總…洛纈唎↓咯_{二合}紇哩_{二合}
(一一八) 大瑜…_短ナシ
(一一九) 大總…画↓觀

- (二一〇) 大總…画↓観
(二一一) 大總…画↓観
(二一二) 大瑜…劍↓鉤、大總…左手持劍↓左持鉤
(二一三) 大總…画↓観
(二一四) 大總…画↓観
(二一五) 大瑜…花↓華
(二一六) 大總…画↓観
(二一七) 大瑜…各ナシ
(二一八) 大瑜…半跏坐↓跏趺坐
(二一九) 大總…画↓観
(二二〇) 大瑜…間↓問
(二二一) 大瑜…明↓羽
(二二二) 大瑜…惠↓慧
(二二三) 大瑜…名ナシ
(二二四) 大瑜…_二合、大總…囉↓羅_二合
(二二五) 大瑜…大總…引↓_二合
(二二六) 大瑜…_二合、大總…訶↓賀_引
(二二七) 大瑜…_二合
(二二八) 大瑜…大總…阿引弥↓阿涅槃_{寧逸反}
(二二九) 大瑜…大總…_二合
(二三〇) 大瑜…大總…_二合
(三三一) 大瑜…大總…_二合
(三三二) 大瑜…大總…_二合
(三三三) 大瑜…大總…_二合
(三三四) 大瑜…大總…_二合
(三三五) 大瑜…大總…_二合
(三三六) 大瑜…大總…_二合
(三三七) 大瑜…大總…_二合
(三三八) 大瑜…大總…阿引弥↓阿涅槃_{寧逸反}
(三三九) 大瑜…大總…_二合
(三四〇) 大瑜…大總…_二合
(三四一) 大瑜…摩↓麼、大總…素摩↓素_引麼
(三四二) 大瑜…_引↓_二合、大總…哩_引↓哩_二合
(三四三) 大瑜…大總…盜_引誑↓阿_引儼
(三四四) 大總…囉↓羅
(三四五) 大瑜…大總…_二合
(三四六) 大瑜…母陀↓没駄_引、大總…母陀↓没駄
(三四七) 大瑜…大總…_二合
(三四八) 大瑜…羅賀↓囉賀_引、大總…羅賀↓羅_二合賀
(三四九) 大瑜…大總…破↓麼_二合
(三五〇) 大瑜…大總…_二合
(三五一) 大瑜…羯囉↓訖囉_二合、大總…戊羯囉↓伐訖囉
(三五二) 大瑜…大總…_引↓_二合
(三五三) 大瑜…大總…舍_引儼↓捨禰
(三五四) 大瑜…_二合、大總…者↓戰_二合
(三五五) 大瑜…羅↓囉
(三五六) 大瑜…大總…_二合
(三五七) 大瑜…大總…_引↓_二合
(三五八) 大瑜…_引
(三五九) 大瑜…大總…曳↓耶

- (二六〇) 大瑜・大總引↓二合
(二六一) 大瑜・大總二合
(二六二) 大瑜引
(二六三) 大瑜痛↓統
(二六四) 大瑜七↓宿
(二六五) 大瑜・大總引ナシ
(二六六) 大瑜二合、囉二合↓囉二合
(二六七) 大瑜去
(二六八) 大瑜・大總曳↓耶
(二六九) 大瑜・大總二合
(二七〇) 大瑜・大總二合
(二七一) 大瑜引
(二七二) 大瑜・大總惠↓慧
(二七三) 大瑜・大總尊
(二七四) 大瑜引咤引咤烏↓咤咤咤烏短聲、大總引咤引咤咤烏↓咤咤咤烏短合
(二七五) 大瑜咤烏ナシ、大總引合
(二七六) 大瑜置知置知↓置智置智、大總置知置知↓置智置智短引
(二七七) 大瑜咤烏咤烏咤烏咤烏↓咤烏短聲咤烏引咤烏咤烏、大總咤烏咤烏咤烏咤烏↓咤烏短咤烏引
咤烏短咤烏引
(二七八) 大瑜囉↓囉二合
(二七九) 大瑜・大總娑怛娑怛囉↓薩怛囉二合
(二八〇) 大瑜・大總弱↓惹
(二八一) 大瑜纈哩郝↓紇哩二合鶴、大總纈哩郝↓紇哩二合涸
(二八二) 大瑜引
(二八三) 大瑜囉↓囉
(二八四) 大瑜引
(二八五) 大瑜・大總都↓靚
(二八六) 大瑜擬↓擬
(二八七) 大瑜引
(二八八) 大瑜囉二合、大總囉二合
(二八九) 大瑜・大總乞
(二九〇) 大瑜・大總二合
(二九一) 大瑜・大總二合
(二九二) 大瑜擬↓擬
(二九三) 大瑜引
(二九四) 大瑜・大總囉囉二合囉
(二九五) 大瑜曩↓那二合、大總二合
(二九六) 大總三婆↓三去婆去
(二九七) 大瑜縛↓縛
(二九八) 大瑜擬↓擬

- (一九九) 大總・僮↓**頼**_{二合}
- (二〇〇) 大瑜・洛↓**咯**、大總・洛↓落_{二合}
- (二〇一) ^引大瑜
- (二〇二) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (二〇三) ^引大總
- (二〇四) 大瑜・大總・羅↓囉囉
- (二〇五) 大瑜・擬↓擬
- (二〇六) 大總・僮↓**頼**_{二合}
- (二〇七) 大瑜・羅↓囉_{二合}、^引大總_{二合}
- (二〇八) 大瑜・大總・慕↓謨
- (二〇九) 大瑜・悉帝ナシ、大總・帝↓弟
- (二一〇) 大瑜・擬↓擬
- (二一一) ^引大總_{二合}
- (二一二) 大瑜・惡入↓_{二合}噫、大總・入ナシ
- (二一三) 大總・羅↓哩
- (二一四) 大總・羅_{二合}↓**咯**
- (二一五) ^引大總_{二合}
- (二一六) 大總・_{二合}ナシ
- (二一七) 大瑜・羅↓囉
- (二一八) 大瑜・噶↓縛
- (二一九) 大瑜・擬↓擬
- (二二〇) ^引大瑜・大總_{二合}
- (二二一) 大瑜・惡↓噫
- (二二二) 大瑜・大總・噶↓唵噶
- (二二三) 大瑜・大總・羅↓囉
- (二二四) 大總・羅↓囉
- (二二五) 大瑜・大總・擬↓擬
- (二二六) 大瑜・_{次洛反}↓入声、大總・_{次洛反}↓日洛反
- (二二七) 大瑜・大總・羅↓囉
- (二二八) 大瑜・^引ナシ、大總・^引羅_引
- (二二九) 大瑜・大總・擬↓擬
- (三三〇) 大瑜・涸↓鵠
- (三三一) 大瑜・羅↓囉
- (三三二) 大瑜・大總・沙↓娑
- (三三三) 大瑜・大總・擬↓擬
- (三三四) 大瑜・大總・僮_短索入↓僮_{二合}吽索
- (三三五) 大瑜・大總・羅_{二合}↓囉_{二合}
- (三三六) 大瑜・大總・擬↓擬
- (三三七) 大瑜・大總・羅↓囉
- (三三八) 大瑜・大總・擬↓擬

- (二三九) ㄤ大瑜_引
- (二四〇) 大瑜・大總_引・羅_引↓囉
- (二四一) 大瑜_引・髻都_{平声}↓計都
- (二四二) 大瑜_引・大總_引・擬_引↓擬
- (二四三) 大瑜_引・洛_{二合}引↓嚙_{二合}引、大總_引・洛_{二合}引↓藍_{二合}
- (二四四) 大瑜_引・羅_引↓囉
- (二四五) 大瑜_引・大總_引・沙_引↓娑
- (二四六) 大瑜_引・大總_引・擬_引↓擬
- (二四七) 大瑜_引・潤_引↓鵠
- (二四八) 大瑜_引・大總_引・羅_引↓囉
- (二四九) 大瑜_引・磨_引↓摩
- (二五〇) 大瑜_引・大總_引・擬_引↓擬
- (二五一) 大瑜_引・紇哩_引↓纈喇、大總_引・紇哩_{二合}↓伛哩
- (二五二) 大瑜_引・大總_引・羅_引↓囉
- (二五三) 大瑜_引・大總_引・史_引↓又
- (二五四) 大瑜_引・大總_引・二合_引↓三合
- (二五五) 大瑜_引・大總_引・擬_引↓擬
- (二五六) 大總_引・二合_引ナシ
- (二五七) 大瑜_引・淡_引↓談
- (二五八) 大瑜_引・羅_引↓囉
- (二五九) 大瑜_引・係_引↓系
- (二六〇) 大瑜_引・大總_引・擬_引↓擬
- (二六一) 大瑜_引・羅_引↓囉
- (二六二) 大瑜_引・大總_引・婆灑_引↓婆灑
- (二六三) 大瑜_引・大總_引・擬_引↓擬
- (二六四) 大瑜_引・藍_引↓藍
- (二六五) 大瑜_引・羅_引↓囉
- (二六六) 大瑜_引・大總_引・擬_引↓擬
- (二六七) 大瑜_引・大總_引・羅_引↓囉
- (二六八) 大瑜_引・羅_引↓咯、大總_引・羅_引↓囉
- (二六九) ㄤ大瑜_引・二合_引、ㄤ大總_引・引
- (二七〇) 大瑜_引・大總_引・擬_引↓擬
- (二七一) 大瑜_引・大總_引・含_引↓憾
- (二七二) 大瑜_引・大總_引・羅_引↓囉
- (二七三) 大瑜_引・大總_引・擬_引↓擬
- (二七四) 大瑜_引・吡_引吡_短↓吡_引吡_引、大總_引・吡_引吡_短↓吡_引吡
- (二七五) 大瑜_引・羅_引↓囉
- (二七六) 大瑜_引・大總_引・擬_引↓擬
- (二七七) 大總_引・拄_引↓柱
- (二七八) 大總_引・齊_引↓臍

- (二七九) 大總…言↓語
 (二八〇) 大瑜…薩耽↓譏擔、大總…薩↓藥
 (二八一) 大瑜…俱勢↓句始吽_引、大總…勢↓舍吽
 (二八二) 大瑜…弱_餉↓惹_{入声}、大總…_餉ナシ
 (二八三) 大瑜…藥多_引↓譏多
 (二八四) 大瑜…跋舍↓播舍吽_引、大總…跋舍↓跋_引舍吽_引
 (二八五) 大瑜…大總…吽_索↓吽_引
 (二八六) 大瑜…藥↓譏
 (二八七) 大總…引ナシ
 (二八八) 大總…引↓引_{二音}
 (二八九) 大瑜…引_{二音}咤↓_{二音}致
 (二九〇) 大總…引
 (二九一) 大瑜…大總…鎖ナシ
 (二九二) 大總…引ナシ
 (二九三) 大瑜…藥多↓譏多_引
 (二九四) 大瑜…阿吠舍↓尾舍
 (二九五) 大瑜…大總…鈴ナシ
 (二九六) 大瑜…大總…縛↓嚙
 (二九七) 大瑜…齊ナシ
 (二九八) 大瑜…_{入声}
 (二九九) 大瑜…_引
 (三〇〇) 大瑜…本有↓大有
 (三〇一) 大瑜…饒↓余
 (三〇二) 大瑜…咲↓笑
 (三〇三) 大瑜…獲↓或
 (三〇四) 大總…**引**↓**飛**

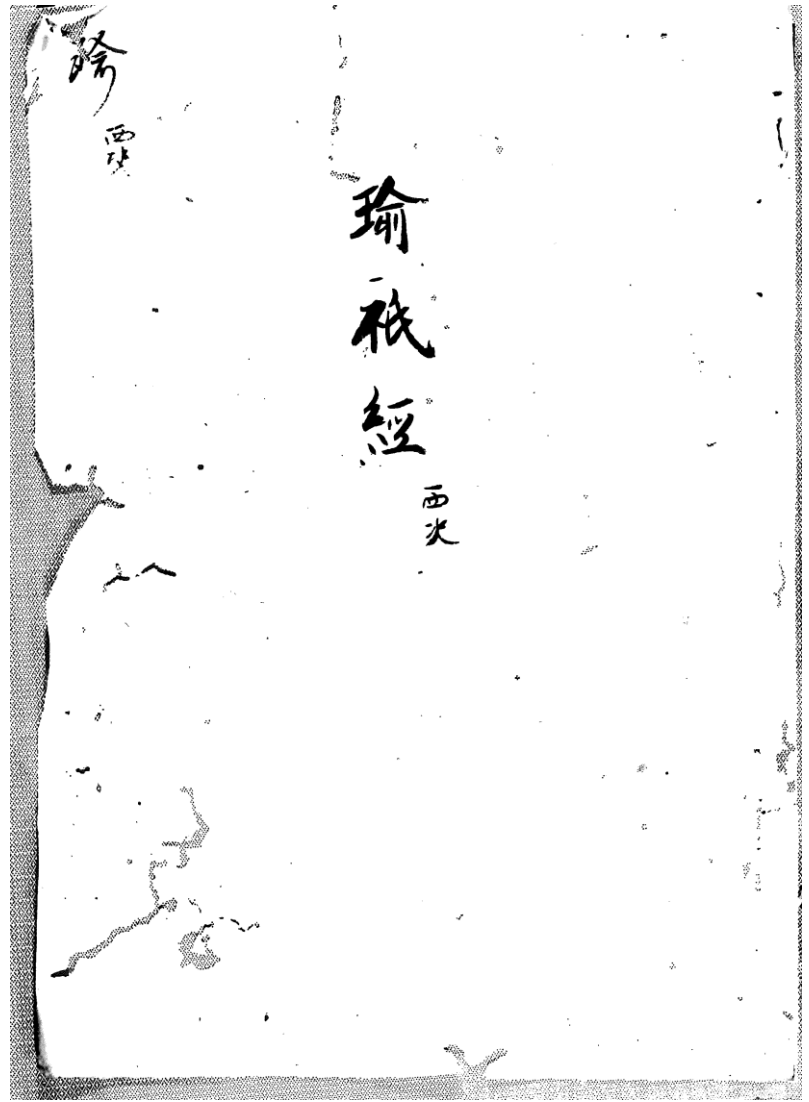
《引文箇所》

- 1 『大正』十八・二五七頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇五頁上。『瑜祇總行私記』。
 2 『大正』十八・二五六頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇四頁中。『瑜祇總行私記』。
 3 『大正』十八・二五六頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇四頁中。『瑜祇總行私記』。
 4 『大正』十八・二五六頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇四頁下。『瑜祇總行私記』。
 5 『大正』十八・二五六頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇四頁下。『瑜祇總行私記』。
 6 『大正』六一・五〇五頁下。『瑜祇總行私記』。
 7 『大正』十八・二五六頁上。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇五頁下。『瑜祇總行私記』。
 8 『大正』十八・二五七頁上。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇六頁上。『瑜祇總行私記』。
 9 『大正』十八・二五八頁上。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇五頁中。『瑜祇總行私記』。
 10 『大正』六一・五〇五頁中。『瑜祇總行私記』取意。
 11 『大正』十八・二五七頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇五頁中。『瑜祇總行私記』。

- 92 『大正』六一・五〇七頁中。『瑜祇總行私記』。
- 93 『大正』六一・五〇七頁中。『瑜祇總行私記』。
- 94 『大正』六一・五〇七頁中。『瑜祇總行私記』。
- 95 『大正』六一・五〇七頁中。『瑜祇總行私記』。
- 96 『大正』六一・五〇七頁中。『瑜祇總行私記』。
- 97 『大正』六一・五〇七頁下。『瑜祇總行私記』。
- 98 『大正』六一・五〇七頁下。『瑜祇總行私記』取意。
- 99 『大正』六一・五〇七頁下。『瑜祇總行私記』。
- 100 『大正』六一・五〇七頁下。『瑜祇總行私記』。
- 101 『大正』六一・五〇七頁下。『瑜祇總行私記』。
- 102 『大正』十八・二五九頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇七頁上。『瑜祇總行私記』。
- 103 『大正』十八・二五九頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇七頁上。『瑜祇總行私記』。
- 104 『大正』十八・二五九頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇七頁上。『瑜祇總行私記』。
- 105 『大正』十八・二五九頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇七頁上。『瑜祇總行私記』。
- 106 『大正』十八・二五九頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇八頁上。『瑜祇總行私記』。
- 107 『大正』十八・二五五頁中。『瑜祇經』。
- 108 『大正』六一・五〇七頁中。『瑜祇總行私記』。
- 109 『大正』六一・五〇七頁中。『瑜祇總行私記』。
- 110 『大正』六一・五〇七頁中。『瑜祇總行私記』。
- 111 『大正』六一・五〇七頁中。『瑜祇總行私記』。

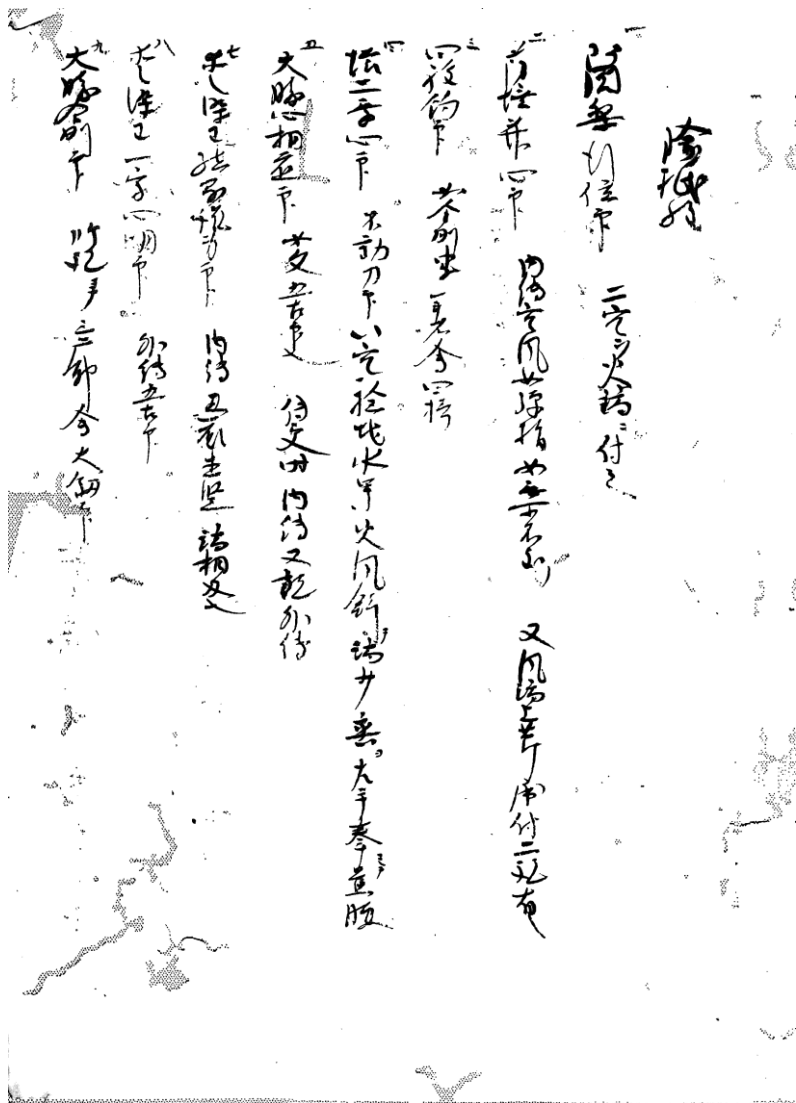
『瑜祇經西決』

(青連院吉水藏、嘉曆三年写本)



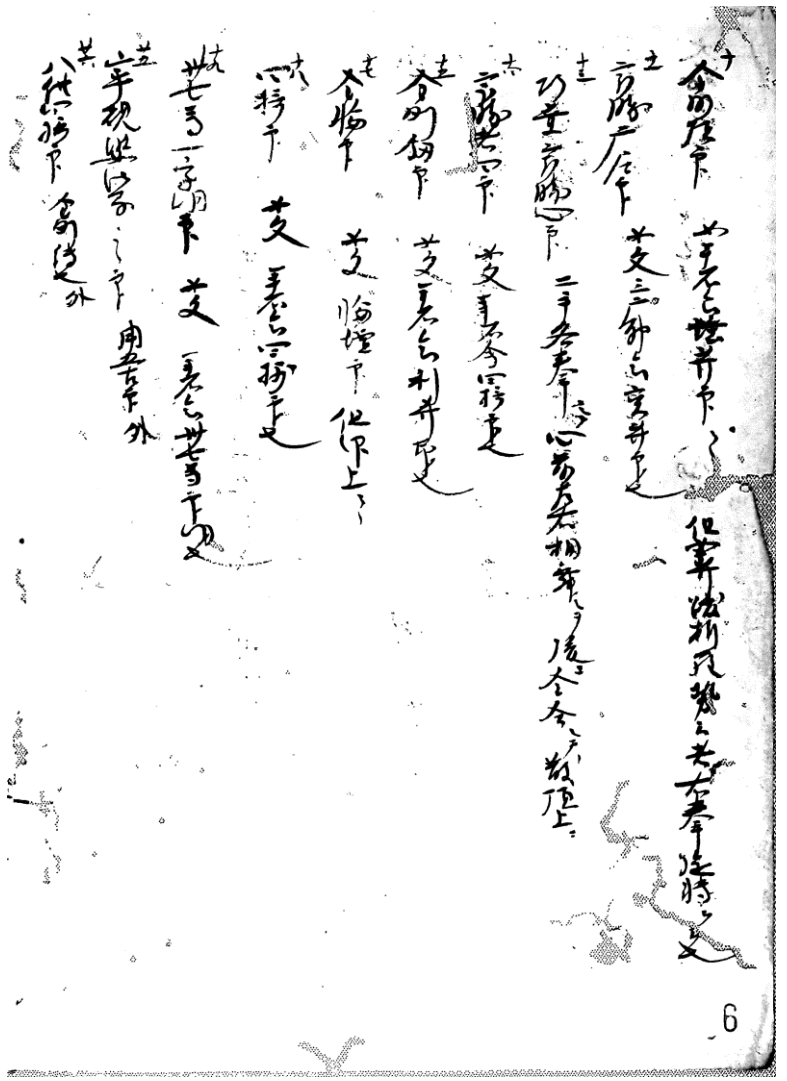
瑜祇經
西泠

瑜
西泠



瑜祇經

- 一 阿闍梨行位印 二空ヲ火端ニ付レ之。
- 二 薩埵菩提心印 内縛、空・風如ニ彈指一如ニ無所不至ノ一 又風端上節屈付ニ説有レ之。
- 三 四種鉤印 如ニ金剛界羯磨会四攝一。
- 四 壞二乘心印 不動刀印、以レ空捻ニ地・水甲一火・風舒テ端小垂ヨ。左手、拳ニシテ置レ腰。
- 五 大勝心相応印 如レ文五古印也。伝授時内縛又説ニ外縛一。
- 七 愛染王結界護身印 内縛、忍・願直豎端相叉也。
- 八 愛染王一字心明印 外縛五古印。
- 九 大勝金剛印 師説ヨリ三摩耶会大劍印。



十 金剛頂印 如二羯磨会埵菩薩印一云但如下弄二跋折羅一勢上云者。右拳旋轉云也。

十一 最勝摩尼印 如レ文三摩耶会宝菩薩印也。

十二 巧業最勝心印 一二手各拳ニシテ心前左右相舞シテ後ニ会合シテ散ニ頂上ニ一。

十三 最勝者四印 如レ文羯磨会四攝印也。

十四 金剛劍印 如レ文羯磨会利菩薩印也。

十五 金輪印 如レ文輪壇印。但印上云。

十六 四攝印 如レ文羯磨会四攝印也。

十七 三十七尊一字明印 如レ文羯磨会三十七尊印明也。

十八 率都婆法界云 印 用三五古印一。外。

十九 八供四攝印 金剛縛也。外。

(後缺力)

轉法輪菩薩明曰 暗 因菩薩印也。
 金剛言菩薩明曰 惡入 語菩薩印也。
 如如智一故。 1
 欲開一切有情本有性一故。 令下修一行万行一滿足上故。 令成成就大菩提一故。 入不動
 金剛業菩薩明曰 伊短 用業菩薩印一也。
 金剛護菩薩明曰 伊引 用護菩薩印一。
 金剛尽菩薩明曰 鄔 用牙菩薩印一。
 金剛持菩薩明曰 汚引 用拳菩薩印一。
 為令下一切有情成一如來三身一於三生死中一得自在樂上故。 2
 阿闍佉明曰。 吽 用觸地印一。

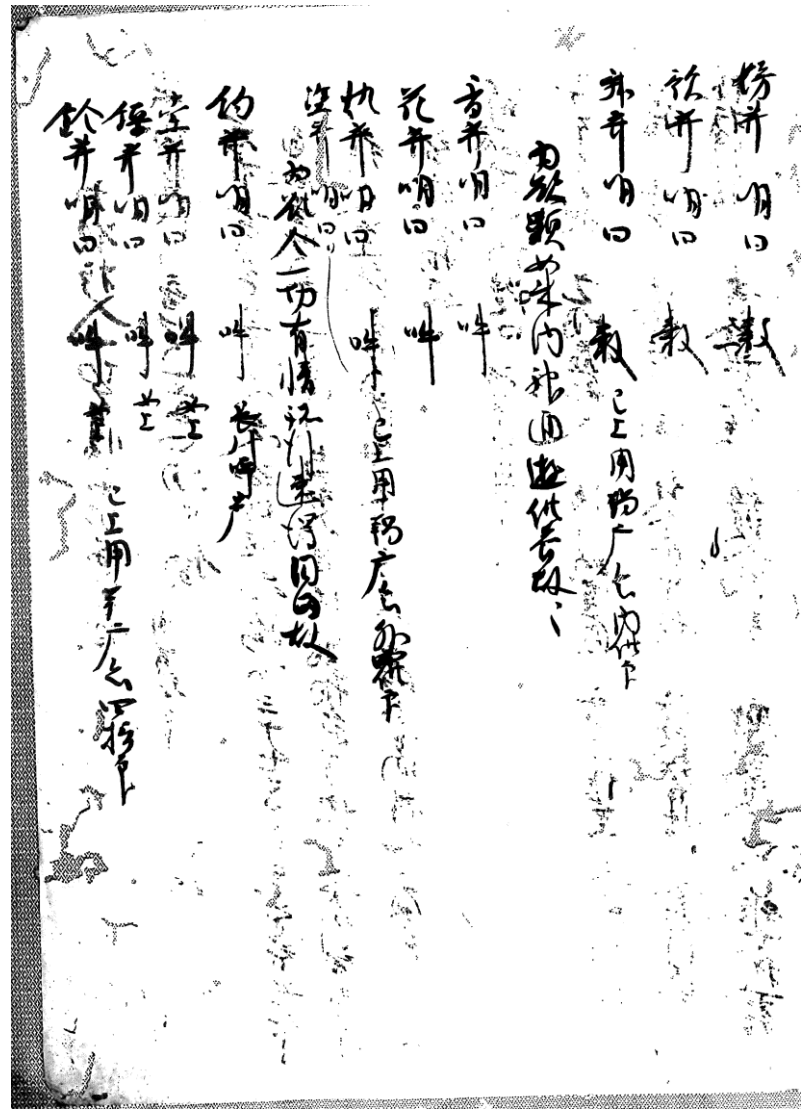
轉法輪菩薩明曰 暗 因菩薩印也。
 金剛言菩薩明曰 惡入 語菩薩印也。

如如智一故。 1
 欲開一切有情本有性一故。 令下修一行万行一滿足上故。 令成成就大菩提一故。 入不動

金剛業菩薩明曰 伊短 用業菩薩印一也。
 金剛護菩薩明曰 伊引 用護菩薩印一。
 金剛尽菩薩明曰 鄔 用牙菩薩印一。
 金剛持菩薩明曰 汚引 用拳菩薩印一。

為令下一切有情成一如來三身一於三生死中一得自在樂上故。 2
 阿闍佉明曰。 吽 用觸地印一。

寶生仏明曰。 吽 用^三與願印^一。
 阿彌陀明曰。 吽 用^二定印^一。
 不空成就明曰。 唵 用^二施無畏印^一。
 為^レ欲^レ現執一切草木本有^二金剛性^一故。
 今^レ所^レ波羅蜜明曰。 唵 用^二阿闍印^一。
 寶波羅蜜明曰。 唵 用^二寶生印^一。
 法波羅蜜明曰。 唵 用^二阿彌陀印^一。
 羯磨波羅蜜明曰。 唵 用^二不空成就印^一。
 為^レ欲^レ現^二証一切如來本有^二金剛性^一故。 3
 為^レ欲^レ下利^二益一切有情^一修^中慈悲行願^上故。 4
 嬉菩薩明曰。 穀



鬘菩薩明曰。 穀
 歌菩薩明曰。 穀
 舞菩薩明曰。 穀

已上用羯磨会内供印

為レ欲レ顯^(三)如来内神通遊供養一故云。 5

香菩薩明曰。 吽
 花菩薩明曰。 吽
 灯菩薩明曰。 吽
 塗菩薩明曰。 □
 為レ欲^(三)令一切有情諸行速得二円満一故。 6

已下用羯磨会外四供印

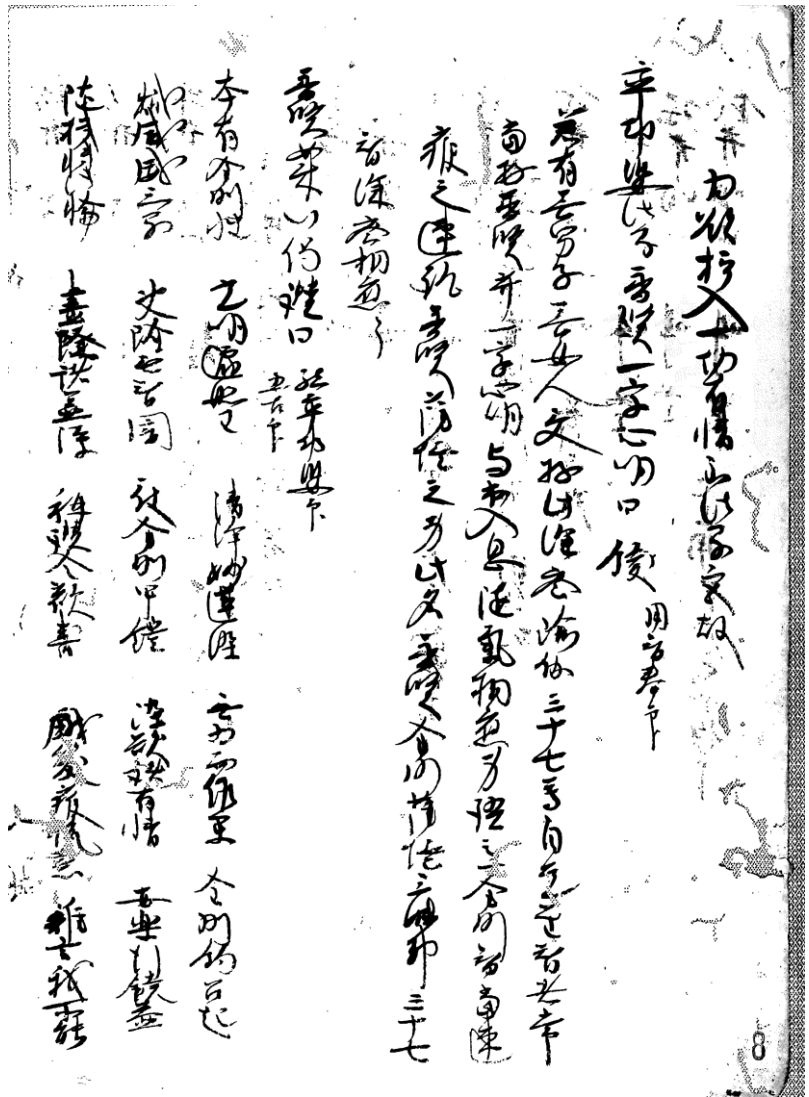
長引呼聲

如上

如上

如上

已上用羯磨会四攝印



為欲攝入一切有情至中法界宮上故。 7

率都婆法界普賢一字心明曰。 鑲 用智奉印

若有善男子善女人、受持此深密瑜伽、三十七尊自覺聖智者、常當下持普賢菩薩一字心明、与出入息随气相应、身语意金剛智、当速获之、速证中普贤菩萨垂之身上。

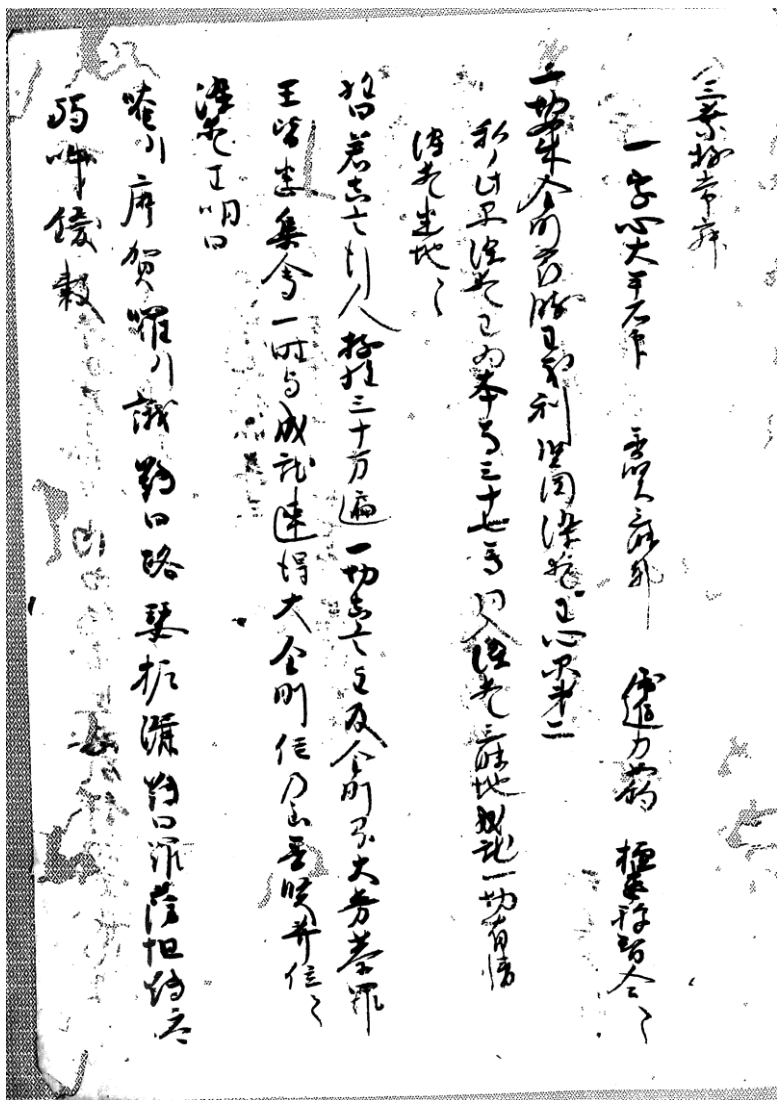
此名普贤金刚萨埵三昧耶三十七智深密相应云。 8

普贤如来以偈讚曰 結率都婆印。 五古印。

本有金剛性 光明遍照王 清淨妙蓮染 無為而作業 金剛鉤召起 熾盛威三界

決二除無智闇 一被二金剛甲鎧 一染二欲諸有情 一安樂行饒益 隨機轉三法輪 一尽除

二諸蓋障 一稱讚令二歡喜 一戲笑獲二悅意 一離言我所能



三業持^二常寂^一。 9

一字心大羯磨印 普賢三昧耶 屈進・力一如^レ鉤 檀・惠・禪・智合^云。 10

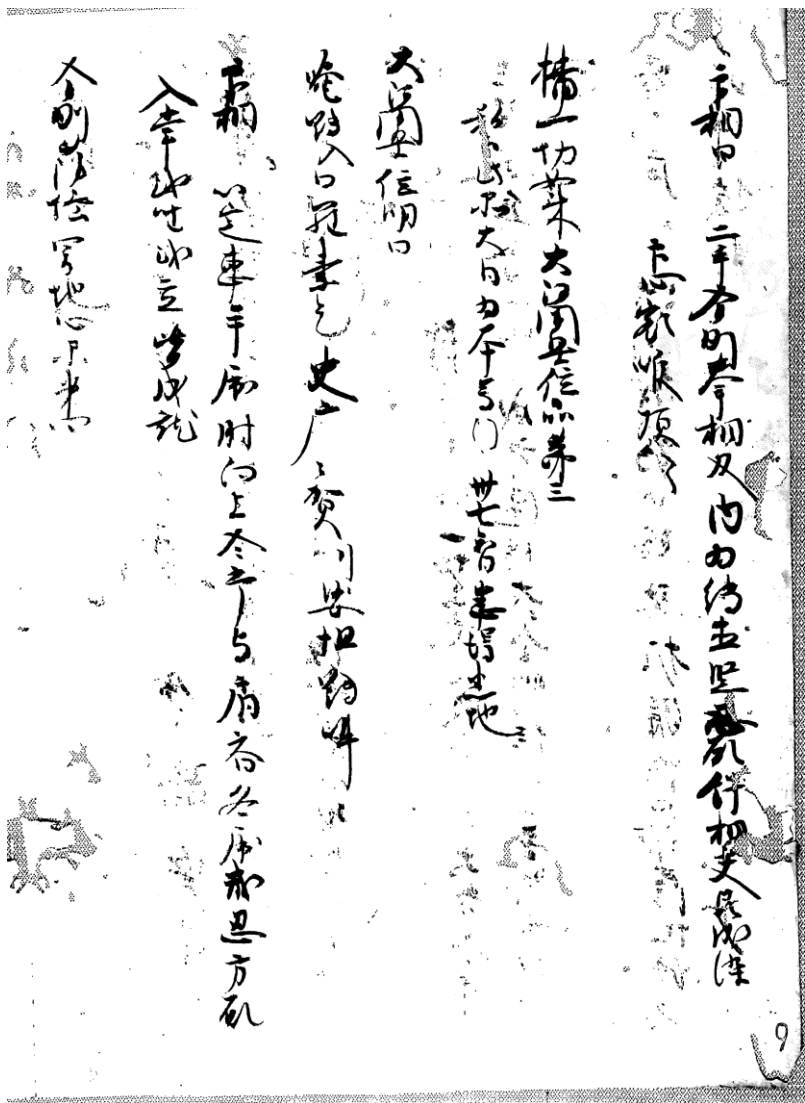
一切如来金剛最勝王義利堅固染愛王心品第二

私云。此品、染愛王為^二本尊^一。三十七尊同入^二染愛三昧地^一成就一切有情染愛悉地^云。

經曰。若真言行人、持^二經三十万遍^一、一切真言主及金剛界大曼荼羅王、皆悉集會。一時与^二成就^一速得^二大金剛位乃至普賢菩薩位^云。 11

染愛王明曰。

唵^云引摩賀囉^云引誡縛日路瑟拏^云灑^云縛日羅^云薩怛^云縛^云弱^云吽^云鑊^云穀^云 1 2



印相曰。二手金剛拳、相二又内一為縛。直豎三忍・願二針。相交即成レ染。印三心・額・喉・頂一云。 13

攝一切如來大阿闍梨位品第三

私云。此品、大日為三本尊一。□三十七智惠得二悉地一。

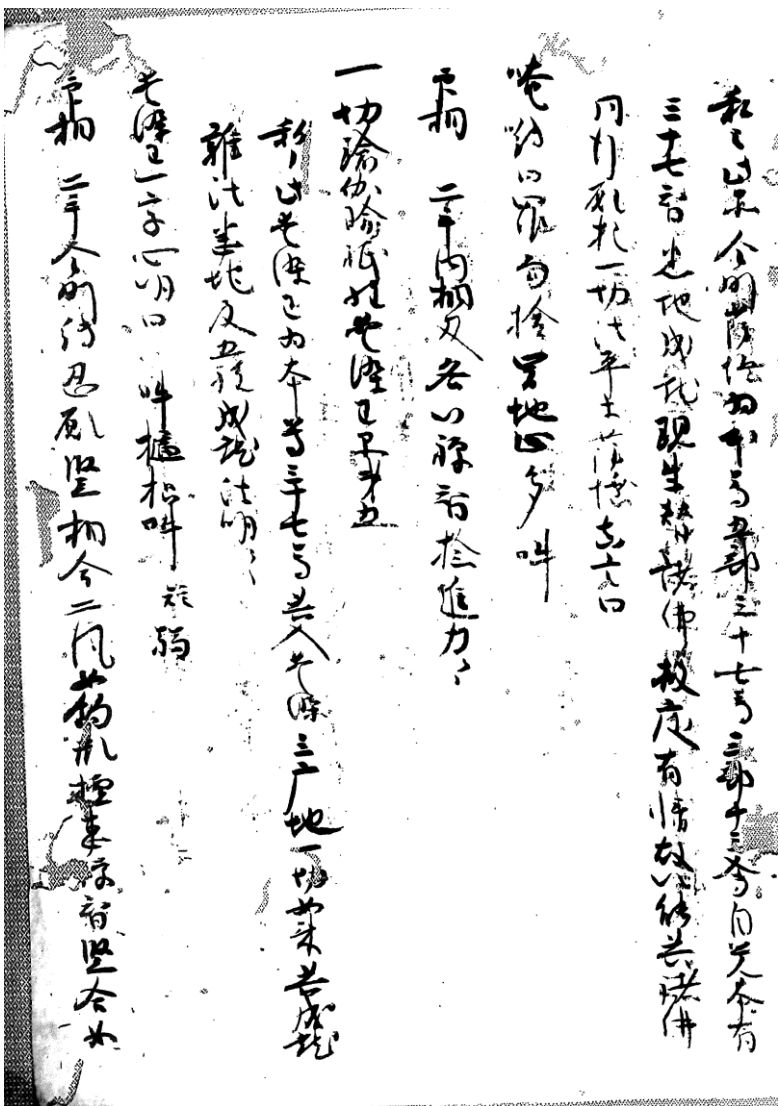
大阿闍梨位明曰。

唵^(二四) 嚩^(二五) 入日羅素乞史摩摩^(二六) 賀^(二七) 娑怛嚩吽吽 14

印相 以三定・惠^(二九) 手二屈レ肘向レ上合掌与レ肩齊。各屈二戒^(三〇)・忍・方・願二入レ掌。或

坐或立皆成就。 15

金剛薩埵冒地心品第四



私云。此品、金剛薩埵為二本尊^(一)。五部三十七尊三部十三會自覺本有三十七智悉地成就。現生替^(二)諸仏一救^(三)度有情^(四)故。以^(五)能共^(六)諸仏一行願於^(七)一切法^(八)平等薩埵。真言曰。

唵 嚩 日 羅 句 捨 冒 地 止 多 吽 1 6

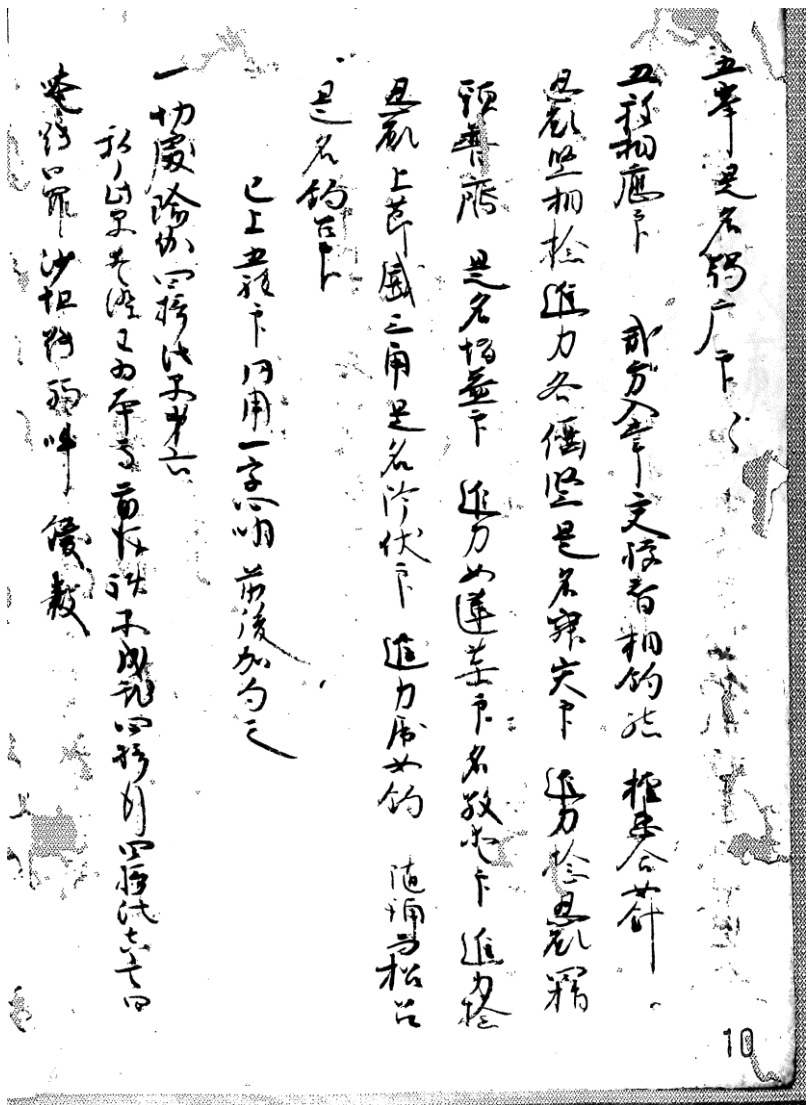
印相 二手內相叉、各以^(一)禪・智^(二)捨^(三)進^(四)・力^(五)云。 1 7

一切瑜伽瑜祇經愛染王品第五

私云。此愛染王為二本尊^(一)。三十七尊共入^(二)愛染^(三)三摩地^(四)一切如來共成就。雜法悉地及五種成就法明^(五)云。
愛染王一字心明曰。

吽 擣 枳 吽 短弱 1 8

印相 二手金剛縛、忍・願^(一)堅相合^(二)風如^(三)鉤形^(四)。檀・惠^(五)・禪・智^(六)堅合如^(七)



五峰^(二九)。是名^(三〇)羯磨印^(三一)云。 19

五種相應印 戒・方入^(三二)掌交禪・智相鉤結。檀・惠合如^(三三)針。忍・願^(三四)豎相捻進・力各偃豎。是名^(三五)寂災印^(三六)。進・力捻^(三七)忍・願^(三八)四指頭普齊。是名^(三九)增益印^(四〇)。進・力如^(四一)蓮葉^(四二)。印名^(四三)敬愛印^(四四)。進・力捻^(四五)忍・願^(四六)上節^(四七)蹙^(四八)三角^(四九)。是名^(五〇)降伏印^(五一)。進・力屈如^(五二)鉤。隨^(五三)誦而招召。是名^(五四)鉤召印^(五五)。 20

已上五種印同用^(五六)二字心明前^(五七)復加^(五八)三句之^(五九)。

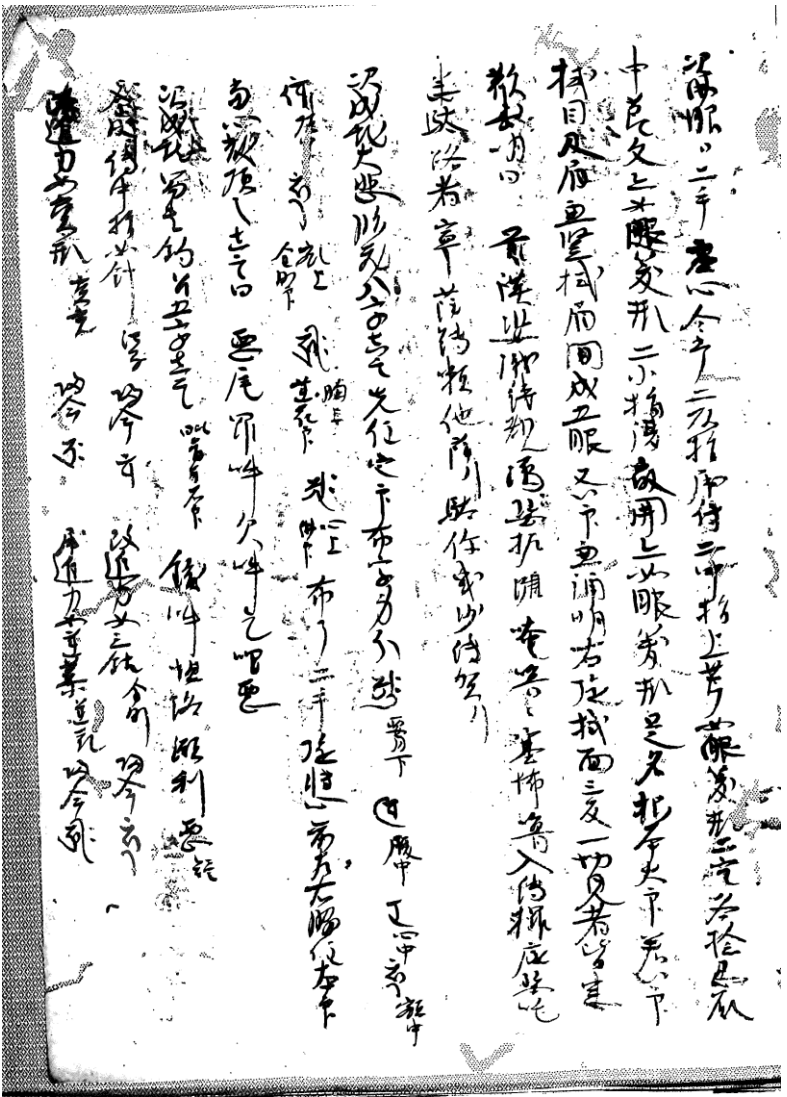
一切処瑜伽四攝法品第六

私云。此品、愛染王為^(六〇)二本尊^(六一)。前後諸品成^(六二)就四攝行四攝法^(六三)。

真言曰。

唵囉日羅^(六四)沙怛囉弱^(六五)吽鏝穀^(六六) 21









(後缺力)



次仏眼○二手虚心合掌。二頭指屈付三中指上節一。如二眼笑形一。一空各捨二忍・願中節文一。亦如二眼笑形一。二小指復微開。亦如二眼笑形一。是名二根本大印一。若以レ印拭二


目及眉一兼豎拭二眉間一。(四〇) 成二五眼一。又以レ印兼誦レ明右旋拭レ面三反。(四一) 一切見者皆悉歡喜。22 明日。


曩謨婆伽縛觀瀉瑟拏灑唵嚕嚕塞怖嚕入縛擺底瑟咤悉駄路者寧薩囉
(四二) (四三) (四四) (四五) (四六) (四七) (四八) (四九)
 囉他薩(五〇)引駄爾曳娑(五一)縛賀引(五二)3


次成就大悲胎藏八字真言。先住二定印一。布二字身分一。
額上。金剛印  胸前。蓮花印  心上。仏印  腰下。腹中  心中  額中  頂中  頂中 

一。24 真言曰。 惡尾羅吽欠吽乞哩惡 25

次成就富貴鉤召五字真言 毘首羯磨印 鏗吽怛洛 纈利惡短 26

金剛縛中指如レ針 27 法界 歸命 

改二進・力一如三鉢一。 28 金剛 歸命 

改二進・力一如三宝形一。 29 宝光 歸命 

屈
進・力
如蓮葉。

30

蓮
花

歸
命





以^二定・惠^(九三)手^一作^二刀印^一。以^二刀刃^一互插^二掌中^一即成。3⁶安^二左脇^一誦^レ明。真言曰。

唵^(九五)咤^(九六)咤^(九六)咤^(九六)鳥^(九七)置^(九七)智^(九八)引^(九八)置^(九八)智^(九八)引^(九八)咤^(九八)鳥^(九九)咤^(九九)鳥^(九九)咤^(九九)鳥^(九九)縛^(一〇〇)日^(一〇〇)羅^(一〇〇)娑^(一〇一)怛^(一〇一)舞^(一〇一)

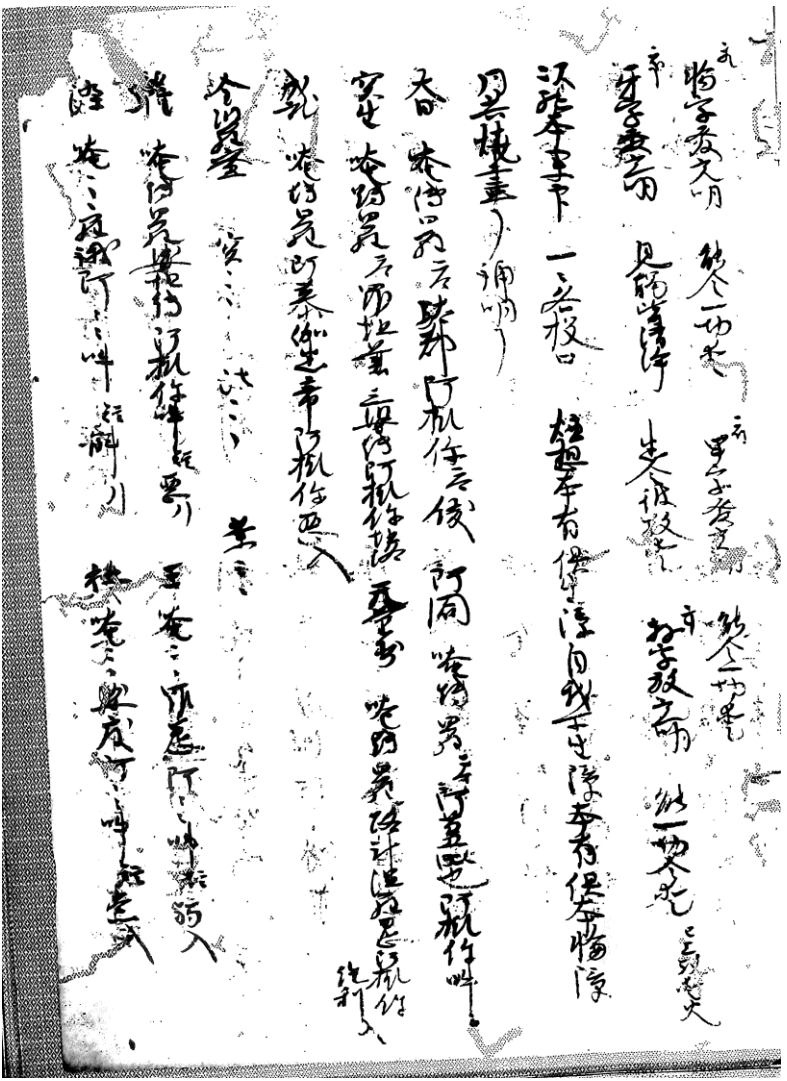
弱^(一〇二)咤^(一〇二)鑊^(一〇二)斛^(一〇二)纈^(一〇三)哩^(一〇三)郝^(一〇四)咤^(一〇四)悉^(一〇五)咤^(一〇五)咤^(一〇五) 3 7

(後缺力)

諸大有情衆能成_(三)長一切。諸執金剛手摧_(三)伏一切怨。一切明妃衆能敬_(三)愛一切。
鉤索鎖鈴四_(二)成_(二)鉤召事。乃至八供養還結_(二)彼業印。及誦_(二)焰光明_(二)能成_(二)自他願。
一切無_(レ)不_(レ)成。 4 2

端坐成_(二)月輪_(一)  觀_(二)水字_(二)光焰_(一) _(三)生_(四)身如_(二)仏形_(一) 此名_(二)扇底迦_(一)  因字_(二)金剛_(一)
句 發_(二)生猛利火_(一)

燒除衆不祥 不如字摩尼句 宝光淨三業 宝光壞諸業 清淨無塵句 結
 使皆清淨 業生拔諸有 寂靜無著言 一切所能作 得無礙染寂 大悲波
 羅蜜 印明同四仏 如來常所護 能生無等福 能寂三世厄 因字生金
 剛 遍此金剛火 能召諸金剛 攝伏為僕 從 鈎字生大鈎 十方一切
 仏 尽來為成就 悅字生歡喜 一切仏菩薩 三界世中天 人王等敬愛
 讚字生適悅 得正授三昧 自他生適悅 諸冤悉退散 如如生
 光明 威德隨諸天 增長自所求 熾然字發光 一切天主王 積梵及
 人趣 悉皆得隨順 生字雨諸宝 能召一切宝 喜字生音声 能
 長一切愛 已上增長火 清淨自在字 地獄諸有趣 悉淨如蓮花
 劍字放大光 照徹三界暗 能伏訥瑟吒 輪字化諸輪 能殺那羅延
 及龍金翅鳥 密字化諸電 打破諸修羅 及一切宿曜 已上破尽火



示 輪字發二光明一 能令二一切愛一 甲字發二光明一 能令二一切愛一 牙字發二光
 明一 見觸皆清淨 悉令二彼敬愛一 持字放二光明一 能一切令愛 已上敬愛火 43
 次結本業印 一一各投日。 爐想二本有俱生障・自我所生障・本有俱本輪障一。 同共燒二
 尽之一。 誦二明之一。

大日 唵 縛日 羅 二合 馱 都阿 擬 儻 二合 鑠 4 4

阿闍 唵 嚩日 羅 二合 阿 芻毘也阿 擬 儻 卍 4 5

宝生 唵 嚩日 羅 二合 羅 坦曩 三 婆縛阿 擬 儻 坦洛 4 6

無量寿 唵 嚩日 羅 路 計湿 羅 惹阿 擬 儻 紇利 入 4 7

成就 唵 嚩日 羅 阿 慕 伽 悉 帝阿 擬 儻 惡 入 4 8

金波羅蜜 宝波羅蜜 法波羅蜜 業波羅蜜

薩 唵 縛日 羅 娑 怛嚩阿 擬 儻 卍 短 惡 引 4 9

王 唵 縛日 羅 惹阿 擬 儻 卍 短 弱 入 5 0

染 唵 縛日 羅 誡阿 擬 儻 卍 短 斛 引 5 1

稱

唵

縛^(一七三)

日

羅^(一七三)

娑

度

阿

擬^(一七四)

爾

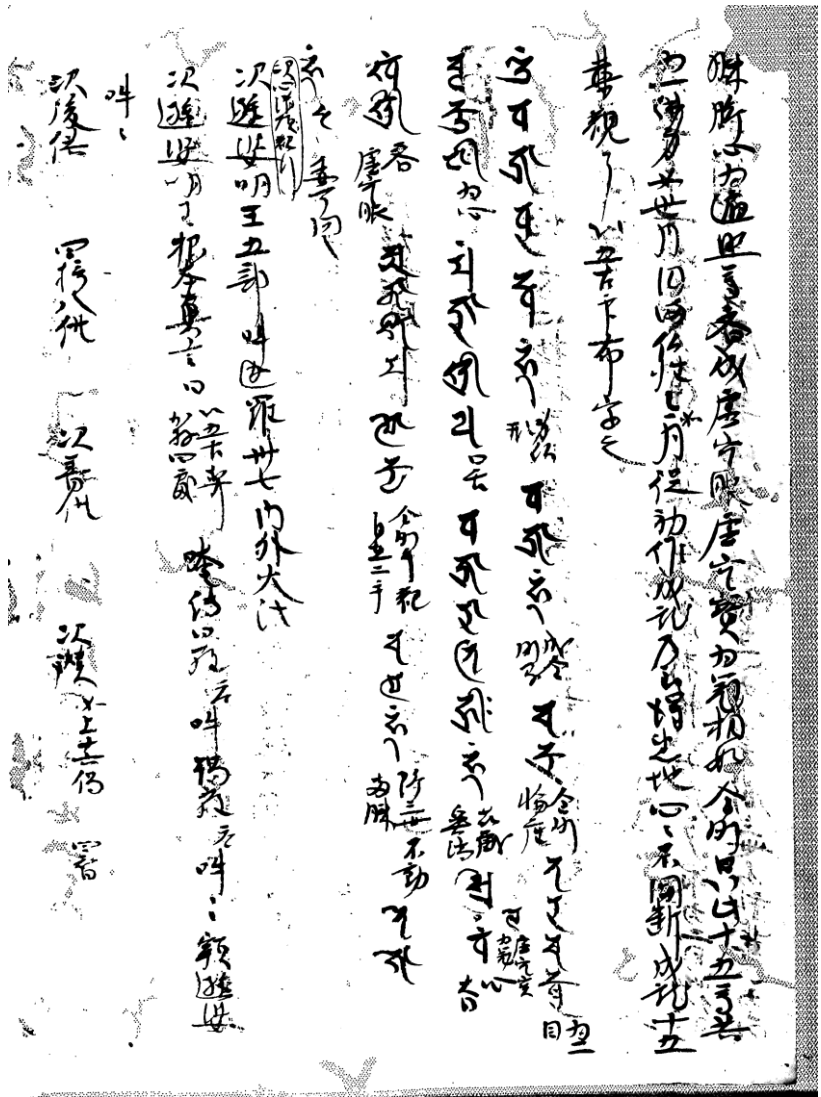
吽^(一七五)

索

入

5 2

牙 唵 縛 日 羅 菓 乞 叉 阿 擬 爾 吽 吽 短 6 3
 拳 唵 縛 日 羅 散 馱 阿 擬 爾 吽 鏤 6 4
 嬉 唵 縛 日 羅 擺 細 阿 擬 爾 穀 6 5
 鬘 唵 縛 日 羅 麼 隸 阿 擬 爾 怛 羅 吒 6 6
 歌 唵 縛 日 羅 擬 帝 阿 擬 爾 擬 翼 6 7
 舞 唵 縛 日 羅 乃 哩 底 曳 阿 擬 爾 訖 哩 吒 6 8
 香 唵 縛 日 羅 度 報 阿 擬 爾 惡 6 9
 花 唵 縛 日 羅 補 洪 波 阿 擬 爾 唵 6 0
 灯 唵 縛 日 羅 路 計 阿 擬 爾 爾 7 1
 塗 唵 縛 日 羅 獻 弟 阿 擬 爾 吽 虐 7 2
 鈎 唵 縛 日 羅 句 捨 阿 擬 爾 弱 7 3
 索 唵 縛 日 羅 幡 捨 阿 擬 爾 吽 7 4



膝脚一。心為二遍照尊一。臍成二虚空眼一。虚空宝為レ冠。相好金剛日。以二此十五尊一共

(二八二) 為二一仏身一。如二世月 円満一。(二八三) 仏性亦如レ月。從レ初作二成就一乃至 得二悉地一。(二八四)

心心不二間斷一。成二就十五尊一。79 觀了。以三五古印一布二字之一。

委可レ同レ之。

次心灌頂觀行

次遜婆明王五部吽迦羅三十七内外火法

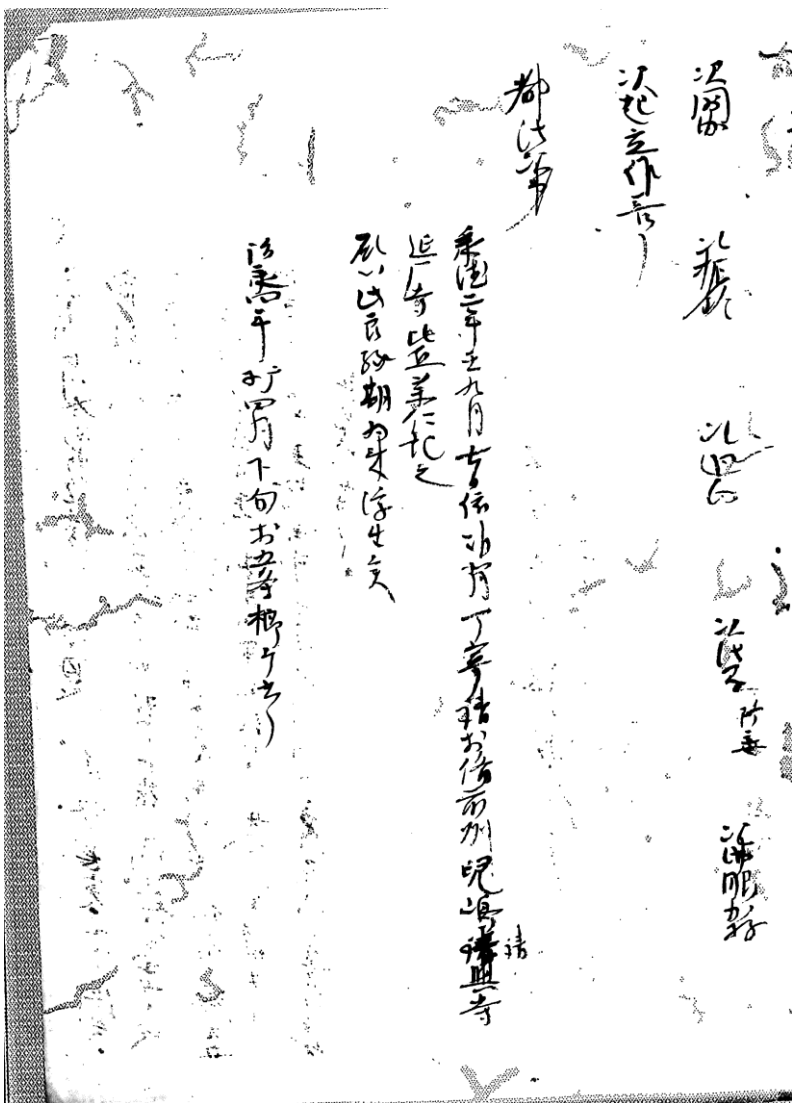
次遜婆明王根本真言曰。 以五古契加持四処

(二八五) 唵 縛 日羅 二合 (二八六) 吽 羯 羅 二合 (二八七) 吽 吽 頤 遜 婆 (二八九) 吽 吽 1

次後供 四攝八供

次普供

次讚如上 十六偈 四智



次關伽

次振鈴

次廻向

次法界降毒

次仏眼加持

次起立作善了

都法次第

(二〇九八)
 承徳二年壬九月七日。依レ難レ背二丁寧請一。於二備前州兒嶋請興寺一。延暦寺比丘藥

仁記レ之。

願以三此良縁一。期レ為二来浮生一矣。

(二一八〇)
 治承四年庚子四月下旬。於二五条櫛笥一書了。

《註》

- (一) 大瑜…不生
- (二) 大瑜…慈↓行大)
- (三) 大瑜…戲喜鬘歌舞等
- (四) 大瑜…大
- (五) 大瑜…或
- (六) 大瑜…引ナシ
- (七) 大瑜…賀↓訶引
- (八) 大瑜…引ナシ
- (九) 大瑜…路↓囉二合
- (一〇) 大瑜…二合
- (一一) 大瑜…灑↓沙
- (一二) 大瑜…羅↓囉二合
- (一三) 大瑜…弱吽鏤穀↓惹引吽引鏤斛引
- (一四) 大瑜…引
- (一五) 大瑜…大總…入ナシ
- (一六) 大瑜…大總…羅↓囉二合
- (一七) 大瑜…乞史摩↓訖叉麼三合、大總…史摩↓灑二合
- (一八) 大瑜…摩賀引娑怛嚩↓□□薩怛嚩二合、大總…娑怛嚩↓薩怛嚩二合
- (一九) 大瑜…大總…惠↓慧
- (二〇) 大瑜…戒忍方願↓戒方忍願
- (二一) 大瑜…引
- (二二) 大瑜…羅↓囉二合、大總…羅↓囉二合
- (二三) 大瑜…捨↓舍、大總…句↓俱
- (二四) 大瑜…冒地止多吽↓没駄涅哆吽引、大總…冒地止多吽↓冒地啣多引吽引
- (二五) 大瑜…手↓羽
- (二六) 大瑜…吽擿枳吽短弱↓吽引咤枳吽引惹入声、大總…吽擿枳吽短弱↓吽引咤枳吽惹入
- (二七) 大瑜…二風↓進力
- (二八) 大瑜…大總…惠↓慧与
- (二九) 大瑜…是ナシ
- (三〇) 大瑜…大總…惠↓慧
- (三一) 大瑜…大總…普↓並
- (三二) 大瑜…大總…名增益印↓布瑟置迦。母捺羅大印
- (三三) 大總…葉↓花
- (三四) 大瑜…大總…敬愛印↓伽路耶
- (三五) 大瑜…是名降伏印↓阿毘遮嚩迦。当用此密印、大總…是名降伏印↓阿毘遮嚩迦。当用此密契
- (三六) 大瑜…大總…是名鉤召印↓金剛央俱施
- (三七) 大瑜…羅↓囉二合、大總…羅↓囉二合
- (三八) 大瑜…大總…沙怛嚩↓薩怛嚩二合
- (三九) 大瑜…弱吽鏤穀↓惹引吽引鏤斛、大總…弱吽鏤穀↓惹入吽引鏤斛

- (四〇) 大總…想
- (四一) 大總…反↓遍
- (四二) 大瑜…縛靚↓嚙底、大總…縛↓嚙
- (四三) 大瑜…大總…**滂**ナシ
- (四四) 大瑜…灑↓_{二合}沙、大總…拈↓拈_{二合}
- (四五) 大瑜…塞怖↓娑跋_{二合}、大總…塞怖↓娑普_{二合}
- (四六) 大瑜…縛擻↓嚙_{二合}擻、大總…縛擻↓縛_{二合}擻
- (四七) 大瑜…大總…_{二合}
- (四八) 大瑜…引
- (四九) 大瑜…者寧↓左拈、大總…者寧↓左寧
- (五〇) 大瑜…**嚙**他↓囉他_{二合}、大總…**嚙**他↓囉他_{二合}
- (五一) 大瑜…薩_引馱_引爾↓娑馱_引顛、大總…薩_引馱_引爾↓娑_引馱_引顛_引
- (五二) 大瑜…縛_引賀_引↓縛_{二合}訶_引
- (五三) 大瑜…惡↓阿、大總…惡↓阿_引
- (五四) 大瑜…羅↓囉
- (五五) 大瑜…平
- (五六) 大瑜…乞哩惡↓紇哩_{二合}噁、大總…乞哩惡↓紇哩_{二合}惡
- (五七) 大總…洛↓**略**_{二合}
- (五八) 大瑜…**纈**利惡_短↓**纈**唎_{二合}惡、大總…**纈**利惡_短↓紇哩_{二合}惡_短
- (五九) 大瑜…**鈇**↓股
- (六〇) 大瑜…大總…**惠**↓慧
- (六一) 大總…相ナシ
- (六二) 大瑜…大總…願
- (六三) 大總…縛↓嚙
- (六四) 大瑜…**賀**↓訶
- (六五) 大瑜…大總…**弥**↓**涅**_{聲逸反}
- (六六) 大瑜…大總…_{二合}
- (六七) 大瑜…大總…_引_{二合}
- (六八) 大瑜…引
- (六九) 大瑜…**摩**↓**麼**
- (七〇) 大瑜…哩_引盍_引識_引羅迦哩↓哩_{二合}阿_引儼_引羅迦哩_{二合}、大總…哩_引盍_引識_引羅迦哩↓哩_{二合}阿_引儼_引羅迦哩_{二合}
- (七一) 大瑜…母陀室哩↓沒馱_引室哩_{二合}、大總…母陀室哩↓沒馱_引室哩_{二合}
- (七二) 大總…囉↓羅_{二合}
- (七三) 大瑜…引
- (七四) 大瑜…大總…**跛**↓**麼**_{二合}
- (七五) 大瑜…大總…_{二合}
- (七六) 大瑜…**羯**羅↓**訖**囉_{二合}、大總…**戎**羯羅↓**伐**訖囉
- (七七) 大瑜…大總…_引_{二合}
- (七八) 大瑜…大總…**舍**爾↓**捨**爾
- (七九) 大瑜…_{二合}、大總…**者**↓**戰**_{二合}

- (八〇) 大瑜・大總…囉始制_{二合}
- (八一) 大瑜・大總…_{二合}
- (八二) 大瑜…引
- (八三) 大瑜・大總…曳↓耶
- (八四) 大瑜・大總…利_引↓理_{二合}
- (八五) 大瑜…疇賀↓疇_{二合}賀_引、大總…疇賀↓疇_{二合}賀
- (八六) 大瑜…痛↓統
- (八七) 大瑜…七↓宿
- (八八) 大瑜・大總…事↓印
- (八九) 大總…去
- (九〇) 大瑜・大總…曳↓耶
- (九一) 大瑜・大總…_{二合}
- (九二) 大瑜…縛賀↓疇_{二合}賀_引、大總…縛賀↓疇_{二合}賀
- (九三) 大瑜・大總…惠↓慧
- (九四) 大瑜・大總…不動尊
- (九五) 大瑜…_{二合}↓短_聲、大總…_{二合}↓短_{二合}
- (九六) 大瑜…咤烏_短ナシ、大總…烏_短↓烏_引_{二合}
- (九七) 大瑜…置_短智_引置_短智_引↓置_短智_引置_短智_引
- (九八) 大瑜…咤烏咤烏咤烏咤烏↓咤烏_短、咤烏_引咤烏_引咤烏、大總…咤烏咤烏咤烏咤烏↓咤烏_短、咤烏_引咤烏_引咤烏_短
- 鳥_短咤烏_引
- (九九) 大總…縛↓疇
- (一〇〇) 大瑜・大總…囉↓囉_{二合}
- (一〇一) 大瑜・大總…娑怛舞↓薩怛疇_{二合}
- (一〇二) 大瑜・大總…弱↓惹
- (一〇三) 大瑜・大總…纈哩↓紇哩_{二合}
- (一〇四) 大瑜…郝↓鶴、大總…郝↓涸
- (一〇五) 大瑜・大總…悉↓泮
- (一〇六) 大瑜・大總…惠↓慧
- (一〇七) 大瑜…曲↓猶、大總…曲↓由
- (一〇八) 大總…縛↓疇
- (一〇九) 大瑜…囉↓囉_{二合}、大總…囉↓囉_{二合}
- (一一〇) 大瑜・大總…娑怛縛↓薩怛疇_{二合}
- (一一一) 大瑜…弱吽鏝斛↓弱_入吽_引鏝斛_引、大總…弱吽鏝斛↓弱_日吽_反鏝斛_引
- (一一二) 大瑜…鉢羅↓跛囉、大總…鉢羅↓跛羅_{二合}
- (一一三) 大總…短_{ナシ}
- (一一四) 大瑜…泮↓破、大總…_{二合}
- (一一五) 大瑜…囉_{二合}↓囉、大總…囉↓囉
- (一一六) 大瑜…舍野↓捨
- (一一七) 大瑜…引
- (一一八) 大瑜…次↓我

- (一九) 大瑜・因↓固
(二〇) 大瑜・遍↓逼
(二一) 大瑜・違↓速
(二二) 大瑜・焚↓燒
(二三) 大瑜・大↓火
(二四) 大瑜・生↓主
(二五) 大瑜・從↓使
(二六) 大瑜・悅↓說
(二七) 大瑜・正↓生
(二八) 大瑜・隨↓墮
(二九) 大瑜・字↓自
(三〇) 大瑜・趣↓越
(三一) 大瑜・有↓惡
(三二) 大瑜・花↓華
(三三) 大瑜・引
(三四) 大瑜・羅↓囉
(三五) 大瑜・馱都↓馱引靚、大總・馱都↓馱靚
(三六) 大瑜・擬↓擬
(三七) 大瑜・引
(三八) 大瑜・羅↓囉
(三九) 大瑜・大總・阿芻毘也↓阿乞芻_{二合}毘也_{二合}
(四〇) 大瑜・擬↓擬
(四一) 大瑜・引
(四二) 大總・縛↓縛
(四三) 大瑜・大總・羅↓囉
(四四) 大瑜・羅坦曩↓囉怛那_{二合}、大總・羅坦曩↓囉坦曩_{二合}
(四五) 大總・三婆縛↓三_去婆_去縛
(四六) 大瑜・擬↓擬
(四七) 大瑜・爾坦洛↓爾怛_略、大總・爾坦洛↓_顛爾_合怛_合落_合
(四八) 大瑜・引
(四九) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・_{二合}
(五〇) 大總・引
(五一) 大瑜・羅↓囉囉囉、大總・羅↓囉_{二合}囉囉
(五二) 大瑜・擬↓擬
(五三) 大瑜・爾紇利入↓爾紇哩、大總・爾紇利入↓_顛爾_合紇_合哩
(五四) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・_{二合}
(五五) 大瑜・大總・慕↓謨
(五六) 大瑜・悉帝ナシ、大總・帝↓弟
(五七) 大瑜・擬↓擬
(五八) 大瑜・爾惡入↓爾_{二合}惡、大總・爾惡入↓爾_{二合}惡

- (二五九) 大瑜・大總・縛↓噶
- (二六〇) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・二合
- (二六一) 大瑜・大總・娑怛噶↓薩怛縛_{二合}
- (二六二) 大瑜・擬爾↓擬爾_{二合}、大總・擬爾↓擬爾_{二合}
- (二六三) 大瑜・吽_{短惡引}↓吽惡、大總・吽_{短惡引}↓吽惡
- (二六四) 大瑜・大總・縛↓噶
- (二六五) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (二六六) 大瑜・大總・擬↓擬
- (二六七) 大瑜・爾吽_{短弱入}↓爾_{二合}吽弱_{入聲}、大總・爾吽_{短弱入}↓爾_{二合}吽弱_{日落反}
- (二六八) 大瑜・大總・縛↓噶
- (二六九) 大瑜・羅誡↓囉_{二合}囉誡、大總・羅誡↓囉_{二合}囉誡_引
- (二七〇) 大瑜・大總・擬↓擬
- (二七一) 大瑜・爾吽_{短斜引}↓爾_{二合}吽鵠、大總・爾吽_{短斜引}↓爾_{二合}吽涸
- (二七二) 大瑜・大總・縛↓噶
- (二七三) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・羅↓囉_{二合}
- (二七四) 大瑜・大總・擬↓擬
- (二七五) 大瑜・大總・爾吽_{短索入}↓爾_{二合}吽索
- (二七六) 大瑜・大總・縛↓噶
- (二七七) 大瑜・大總・羅羅↓囉_{二合}囉
- (二七八) 大瑜・大總・二合
- (二七九) 大瑜・大總・擬↓擬
- (二八〇) 大瑜・大總・爾吽_{短噎}↓爾_{二合}吽噎
- (二八一) 大瑜・大總・縛↓噶
- (二八二) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (二八三) 大瑜・大總・擬↓擬
- (二八四) 大瑜・爾吽暗↓爾_{二合}吽暗_引、大總・爾吽暗↓爾_{二合}吽暗
- (二八五) 大瑜・大總・縛↓噶
- (二八六) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (二八七) 大瑜・大總・平聲、大總・計都↓髻都
- (二八八) 大瑜・大總・擬↓擬
- (二八九) 大瑜・爾吽怛嚩↓爾_{二合}吽怛嚩_{二合}引、大總・爾吽怛嚩↓爾_{二合}吽怛嚩
- (二九〇) 大瑜・大總・縛↓噶
- (二九一) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・羅↓囉_{二合}
- (二九二) 大瑜・大總・計娑↓賀娑_引
- (二九三) 大瑜・擬爾吽郝↓擬爾_{二合}吽鵠、大總・擬爾吽郝↓擬爾_{二合}吽涸
- (二九四) 大瑜・大總・縛↓噶
- (二九五) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (二九六) 大瑜・磨↓摩、大總・磨↓磨_引
- (二九七) 大瑜・大總・擬↓儀
- (二九八) 大瑜・爾吽纈利_引↓爾_{二合}吽纈利_{二合}、大總・爾吽纈利_引↓爾_{二合}吽吃哩

- (一九九) 大瑜・大總・縛↓嘯
(二〇〇) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
(二〇一) 大瑜・大總・史拏↓又拏_{三合}
(二〇二) 大瑜・大總・擬儻↓擬儻_{二合}
(二〇三) 大總・談↓淡
(二〇四) 大瑜・大總・縛↓嘯
(二〇五) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・羅↓囉_{二合}
(二〇六) 大總・系↓係
(二〇七) 大瑜・大總・擬儻↓擬儻_{二合}
(二〇八) 大瑜・大總・縛↓嘯
(二〇九) 大瑜・羅婆↓囉_{二合}婆引、大總・羅婆↓囉_{二合}婆引
(二一〇) 大瑜・大總・擬儻↓擬儻_{二合}
(二一一) 大瑜・藍↓藍
(二一二) 大瑜・喃縛↓喃縛引嘯、大總・喃縛↓喃縛
(二一三) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
(二一四) 大瑜・大總・擬儻↓擬儻_{二合}
(二一五) 大瑜・喃縛↓喃縛引嘯、大總・喃縛↓喃縛
(二一六) 大瑜・羅羅↓羅_{二合}略、大總・羅羅↓囉_{二合}囉
(二一七) 大瑜_{二合}引、大總_{二合}引
(二一八) 大瑜・大總・擬↓儻
(二一九) 大瑜・大總・儻_{二合}含↓儻_{二合}憾
(二二〇) 大瑜・大總・縛↓嘯
(二二一) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
(二二二) 大瑜・大總_{二合}
(二二三) 大瑜・大總・擬↓儻
(二二四) 大瑜・儻_{二合}引_短↓儻_{二合}引_短、大總・儻_{二合}引_短↓儻_{二合}引_短
(二二五) 大瑜・大總・縛↓嘯
(二二六) 大瑜・羅羅↓囉_{二合}囉
(二二七) 大瑜_{二合}引、大總_{二合}引
(二二八) 大瑜・大總・擬↓儻
(二二九) 大瑜・大總・儻_{二合}含↓儻_{二合}憾
(二三〇) 大瑜・大總・縛↓嘯
(三二一) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
(三二二) 大瑜・大總_{二合}
(三二三) 大瑜・大總・擬↓儻
(三二四) 大瑜・儻_{二合}引_短↓儻_{二合}引_短、大總・儻_{二合}引_短↓儻_{二合}引_短
(三二五) 大瑜・大總・縛↓嘯
(三二六) 大瑜・羅↓囉_{二合}囉、大總・羅↓囉_{二合}囉
(三二七) 大瑜・大總・馱↓地
(三二八) 大瑜・大總・擬儻↓擬儻_{二合}
(三二九) 大瑜・喃縛↓喃縛引嘯、大總・喃縛↓喃縛
(三三〇) 大瑜・大總・羅羅↓囉_{二合}囉
(三三一) 大瑜・大總・擬儻↓擬儻_{二合}
(三三二) 大瑜・穀↓咩、大總・穀↓咩
(三三三) 大瑜・喃縛↓喃縛引嘯、大總・喃縛↓喃縛
(三三四) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
(三三五) 大瑜・麼隸↓摩隸
(三三六) 大瑜・大總・擬儻↓擬儻_{二合}
(三三七) 大瑜・大總・但羅吃↓咩_{二合}吃
(三三八) 大瑜・喃縛↓喃縛引嘯、大總・喃縛↓喃縛

- (二三九) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (二四〇) 大瑜・大總・擬↓擬
- (二四一) 大瑜・大總・擬爾↓擬爾_{二合}
- (二四二) 大瑜・擬翼↓吽_{入聲}、大總・擬翼↓吽_{入聲}
- (二四三) 大瑜・唵縛↓唵_{引嘑}、大總・唵縛↓唵_嘑
- (二四四) 大瑜・羅↓囉_{二合}
- (二四五) 大瑜・乃哩底曳↓涅哩_{二合}帝、大總・乃哩底曳↓涅哩_{二合}諦
- (二四六) 大瑜・大總・擬↓擬
- (二四七) 大瑜・大總・爾↓爾_{二合}吽
- (二四八) 大瑜・大總_{二合}
- (二四九) 大瑜・唵縛↓唵_{引嘑}、大總・唵縛↓唵_嘑
- (二五〇) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (二五一) 大瑜・報↓問、大總・報↓閉
- (二五二) 大瑜・擬爾惡↓擬_{二合}爾吽噁、大總・擬爾惡↓擬_{二合}爾吽惡
- (二五三) 大瑜・唵縛↓唵_{引嘑}、大總・唵縛↓唵_嘑
- (二五四) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・羅↓囉_{二合}
- (二五五) 大瑜・洪波↓瑟波_{二合}、大總・波↓閉_{二合}
- (二五六) 大瑜・大總・擬爾唵↓擬爾_{二合}吽唵
- (二五七) 大瑜・唵縛↓唵_{引嘑}、大總・唵縛↓唵_嘑
- (二五八) 大瑜・大總・羅↓囉_{二合}
- (二五九) 大瑜・擬爾爾↓擬爾_{二合}吽禰_{入聲}、大總・擬爾爾↓擬爾_{二合}吽禰
- (二六〇) 大瑜・唵縛↓唵_{引嘑}、大總・唵縛↓唵_嘑
- (二六一) 大瑜・羅獻弟↓囉_{二合}、大總・羅獻弟↓囉_{二合}、大總・羅獻弟↓囉_{二合}、大總・羅獻弟↓囉_{二合}
- (二六二) 大瑜・大總・擬爾↓擬爾_{二合}
- (二六三) 大瑜・唵縛↓唵_{引嘑}、大總・縛↓嘑
- (二六四) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・羅↓囉_{二合}
- (二六五) 大瑜・擬爾弱↓擬爾_{二合}吽弱_{入聲}、大總・擬爾弱↓擬爾_{二合}吽弱
- (二六六) 大瑜・唵縛↓唵_{引嘑}、大總・唵縛↓唵_嘑
- (二六七) 大瑜・羅幡↓囉_{二合}播_引、大總・羅幡↓囉_{二合}播
- (二六八) 大瑜・大總・擬爾吽↓擬爾_{二合}吽
- (二六九) 大瑜・唵縛↓唵_{引嘑}、大總・唵縛↓唵_嘑
- (二七〇) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・羅↓囉_{二合}
- (二七一) 大瑜・大總・塞怖↓娑普_{二合}
- (二七二) 大瑜・大總・擬爾↓擬爾_{二合}
- (二七三) 大瑜・唵縛↓唵_{引嘑}、大總・唵縛↓唵_嘑
- (二七四) 大瑜・羅↓囉_{二合}、大總・羅↓囉_{二合}
- (二七五) 大瑜・阿呌捨↓呌捨、大總・阿呌捨↓呌捨
- (二七六) 大瑜・大總・擬爾↓擬爾_{二合}吽
- (二七七) 大瑜・秘↓密
- (二七八) 大瑜・輪↓論

- (二七九) 大瑜：座↓虛
 (二八〇) 大瑜：身↓耳
 (二八一) 大瑜：両手↓定慧
 (二八二) 大瑜：為↓成
 (二八三) 大瑜：円満↓團円
 (二八四) 大瑜：得↓成
 (二八五) 大瑜：大總：縛↓囀
 (二八六) 大瑜：大總：引
 (二八七) 大瑜：羅_二舌_一↓囉
 (二八八) 大瑜：吽吽吽↓吽短聲吽短聲吽短聲
 (二八九) 大總：二合
 (二九〇) 大瑜：吽吽↓吽短聲

《引文箇所》

- 1 『大正』十八・二五四頁下。『瑜祇經』。
- 2 『大正』十八・二五五頁上。『瑜祇經』取意。
- 3 『大正』十八・二五五頁上。『瑜祇經』。
- 4 『大正』十八・二五五頁上。『瑜祇經』。
- 5 『大正』十八・二五五頁上。『瑜祇經』。
- 6 『大正』十八・二五五頁上。『瑜祇經』。
- 7 『大正』十八・二五五頁中。『瑜祇經』。
- 8 『大正』十八・二五五頁中。『瑜祇經』取意。
- 9 『大正』十八・二五五頁中。『瑜祇經』。
- 10 『大正』十八・二五五頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇八頁上。『瑜祇總行私記』。
- 11 『大正』十八・二五五頁下。『瑜祇經』。
- 12 『大正』十八・二五六頁上。『瑜祇經』。
- 13 『大正』十八・二五六頁上。『瑜祇經』。
- 14 『大正』十八・二五六頁上。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇四頁中。『瑜祇總行私記』。
- 15 『大正』十八・二五六頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇四頁中。『瑜祇總行私記』。
- 16 『大正』十八・二五六頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇四頁下。『瑜祇總行私記』。
- 17 『大正』十八・二五六頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇四頁下。『瑜祇總行私記』。
- 18 『大正』十八・二五七頁上。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇六頁上。『瑜祇總行私記』。
- 19 『大正』十八・二五七頁上。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇五頁下。『瑜祇總行私記』。
- 20 『大正』十八・二五七頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇六頁上。『瑜祇總行私記』。
- 21 『大正』十八・二五七頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇五頁上。『瑜祇總行私記』。
- 22 『大正』十八・二六〇頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇八頁上。『瑜祇總行私記』。
- 23 『大正』十八・二六〇頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇八頁中。『瑜祇總行私記』。
- 24 『大正』六一・五〇八頁中。『瑜祇總行私記』取意。
- 25 『大正』十八・二六三頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五〇八頁中。『瑜祇總行私記』。

- 66 『大正』十八・二六六頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁中。『瑜祇總行私記』。
- 67 『大正』十八・二六六頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁中。『瑜祇總行私記』。
- 68 『大正』十八・二六六頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁下。『瑜祇總行私記』。
- 69 『大正』十八・二六六頁中。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁下。『瑜祇總行私記』。
- 70 『大正』十八・二六六頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁下。『瑜祇總行私記』。
- 71 『大正』十八・二六六頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁下。『瑜祇總行私記』。
- 72 『大正』十八・二六六頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁下。『瑜祇總行私記』。
- 73 『大正』十八・二六六頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁下。『瑜祇總行私記』。
- 74 『大正』十八・二六六頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁下。『瑜祇總行私記』。
- 75 『大正』十八・二六六頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁下。『瑜祇總行私記』。
- 76 『大正』十八・二六六頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五一〇頁下。『瑜祇總行私記』。
- 77 『大正』六一・四九八頁中。『瑜祇經疏』取意。
- 78 『大正』十八・二六六頁下。『瑜祇經』。
- 79 『大正』十八・二六七頁上。『瑜祇經』。
- 80 『大正』十八・二六七頁上。『瑜祇經』參照。『大正』六一・五一一頁上。『瑜祇總行私記』參照。

om vajra vudvahūṃ cakra taracakṣu cīkuṭī maṅjuśrīya vajrarāṭhīṅhūṃ srīle vaṃ
khaṃśrī akāśamalokya calahūṃ tejehūṃ

- 81 『大正』十八・二六七頁下。『瑜祇經』。『大正』六一・五一一頁中。『瑜祇總行私記』。

結

上来、述べた考説をまとめる。

まず、第一部について、第一章では、五仏頂法を中心に取り上げ、入唐以前の最澄の密教理解について論じた。『伝述一心戒文』にみえる円澄の五仏頂法修法については、先学が指摘する件の実施に関する問題点はあるが、『延暦僧録』や『大日本古文书』等に奈良時代に仏頂法に関わる事例がみつげられること、最澄や弟子の円澄とも関係する梵釈寺に住持した永忠が『五仏頂法決』なる書を著していること等から、最澄が五仏頂法に関して入唐以前にすでに知識を有していたとみて良いだろう。特に、大仏頂に関しては、『首楞嚴経』の真偽論争や仏頂行道の実施等、当時からすでに何らかの誦呪（または呪法）が修され、『台州録』に大仏頂に関する将来物が記されていることから、入唐以前から仏頂法に触れる機会を有していた可能性は高いと推察される。また、『守護国界章』によると、梵釈寺には鑑真将来の典籍等が備えられていたことが記されている。その将来物の中には、「画五頂像一舖」という菩提流志訳『一字仏頂輪王経』（または『五仏頂三昧陀羅尼経』）と関連するであろう五仏頂に関する図像が存する。これらは、梵釈寺に「画五頂像一舖」に関する図像が『五仏頂法決』と共に蔵されていたことを示唆する。それ故、最澄はこれらの典籍等を梵釈寺において修学していた可能性は、大いにあり、桓武天皇の内供奉十禅師の一人であった最澄が、自身の入唐中に円澄が行った五仏頂法を（当然ながら私的ではなく）先に修法していたと考え、矛盾はないであろう。本論で触れることができなかったが、今後、大仏頂と五仏頂に関し、それぞれ如何に理解していたか、またどのように受容されていたか等、双方の関連性や相違点を追究する必要がある。

第二章では、最澄の密教受法が集約される『内証仏法相承血脉譜』の中、二種の血脉譜「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脉譜」と「雑曼荼羅相承師師血脉譜」を中心に、最澄が唐において受法した仏頂尊に関する密教について論じた。元来、最澄は一年後に帰国した空海が将来した胎金の密教に接し、自分自身の密教理解の不足を自覚していたと考えられている。だが、最澄が入唐前から仏頂尊に何らかの関心を抱いていたことは、第一章で述べた伝記類等が示している。そして、入唐して仏頂尊に対する造詣を一層深めた最澄は、帰国後には、大日如来を主とする灌頂だけでなく、仏頂尊を主とする灌頂をも執行し、さらに自身が受法した仏頂尊を主とする密教を、胎金とは別箇のものとして系統化し、「雑曼荼羅相承師師血脉譜」としてまとめたのではないだろうか。つまり、最澄は、胎金については空海に受法しなければならなかったにしても、仏頂尊を中心とする「雑曼荼羅相承師師血脉譜」に集約される密教は独自のものと自負していたと考えられる。

さらに、「雑曼荼羅相承師師血脉譜」に関係する二經典、菩提流志訳『一字仏頂輪王経』・阿地瞿多訳『陀羅尼集経』と『蘇悉地経』とを俯瞰すると、中尊はいずれも仏頂尊であり、それぞれの中尊に関する説明に近似性があることが認められた。この点を考慮すれば、「雑曼荼羅相承師師血脉譜」にみえる訳者による二經典の中には、すでに蘇悉地の要素が含まれていると解することも可能であろう。いずれにせよ、順暁より受法した「三部三昧耶の印信」だけでなく、仏頂尊を中心とする「雑曼荼羅相承師師血脉譜」に記された受法からも、最澄における密教の独自性が看取でき、入唐前よりすでに知見のあった仏頂法に関す

る知識をより深化させ展開させていったのだろう。

第三章では、最澄による高雄灌頂に関する書とも評される『灌頂七日行事鈔』の真撰の疑義について一考を述べた。『灌頂七日行事鈔』は、「胎藏灌頂行事鈔」や「灌頂行事鈔」等あらゆる呼称を経て、現行の『伝全』四に所収された形式となる。その著者は、「叡山集」とあって、「叡山集」は古より「最澄撰」と扱うものであるといわれていた。しかし、円珍の私録である『山王院藏書目録』や安然の『八家秘録』には本書に関連する書名をみつけれられない。義真記『修禅録』に『灌頂七日行事鈔』に類する書の名を確認できるものの、それは明らかに最澄の撰述と見做しえない書物も収められる「右外」に位置する。更には『修禅録』は義真以降の人物の加筆が一部に認められるため、安直には、本書が義真の時代に存在していたと考えることはできない。先達が「真」とした理由としては、後世の目録でいくつか確認できるように「最澄撰」の拠り所として、葉雋の『破邪弁正記』の説が重要視されていたこと、そして「叡山集」即ち「最澄撰」という考えの由来および三書の『灌頂七日行事鈔』の奥書に記された引文何れもが本書を最澄撰述であると述べていることなどが考えられる。なかでも、『破邪弁正記』の引文において、最澄が唐の順曉阿闍梨から次第を伝授された作法が『灌頂七日行事鈔』として、『大日経』・『一行記』・『蘇悉地経』・『陀羅尼集経』等に基づいて集約されていることが大きな影響を与えたと思われる。しかし、これほどの重要な作法が、円珍や安然に関係する目録に出てこないことには不審を覚える。

第四章では、第三章において『灌頂七日行事鈔』を最澄撰とするには問題があると定めたことを裏けて、本書の成立に葉雋撰『破邪弁正記』が関係する可能性を視座にして考察した。『破邪弁正記』にみられる恵什の疑義「最澄は、胎金兩部の密教を受法乃至傳承をしていない。そのため、順曉受法の「三部三昧耶の印信」は、三種悉知の真言であるから、最澄の高雄灌頂は、蘇悉地法である」に対して、葉雋は、いくつかの資料・記録を糧に、最澄所伝の密教は兩部であることを論証しようと努める。五部灌頂を兩部と見做している箇所が見られるが、これは「最澄所伝の密教は兩部の密教である」と当時は設定されていたことから、葉雋もこれに従っている。こうした伝統を継承した葉雋は、「兩部灌頂行事鈔」(『灌頂七日行事鈔』と『金剛界灌頂行事鈔』)を最澄の撰著であると捉え、論証の資料の一として頻繁に引用している。

しかし、「兩部灌頂行事鈔」については、『破邪弁正記』中では、「順曉からの受法をまとめた書」・「山門に広く流布されている」・「葉雋自身、この書を検討している」等、「兩部灌頂行事鈔」に関する見識が散見される。しかし、この主張をそのまま首肯するには問題がある。それは、第三章でも述べた「兩部灌頂行事鈔」の名が、円珍や安然等の台密諸師の目録の中に確認されないこと、はたまた葉雋自身、「兩部灌頂行事鈔」の作法内容に関する知識を有していなかったばかりか、一方の恵什においてもその疑義を呈していないこと等が挙げられる。

また、「兩部灌頂行事鈔」の一である『灌頂七日行事鈔』は、『陀羅尼集経』を基にした作法書であり、その『陀羅尼集経』の位置づけは、安然の説に準じているようにもみえ、その説は『破邪弁正記』の中にも登場する。それ故、『灌頂七日行事鈔』は、安然以降に成立したと推察した。

別の観点から『灌頂七日行事鈔』の成立について俯瞰すると、最澄撰「雜曼荼羅相承師

師血脈譜」には、『陀羅尼集經』の訳者である阿地瞿多が列ねられていることから、最澄在世時からすでに『陀羅尼集經』に関連する作法や要素が山門に点在していた可能性がある。それにもかかわらず、『陀羅尼集經』に関連する作法が『破邪弁正記』成立以前に確認できないとすれば、最澄やその直近の諸師らが、真言密教との差別化を図るために「叡山」と号される典籍を作成する際、『灌頂七日行事鈔』をその一つとして単に列したと考えることもできる。事実、『破邪弁正記』中にみられる最澄の密教を証明する資料の内、その内容が確認できるものは、『頭戒論』や『越州録』等に過ぎない。かかる状況が、典籍の作成につながったと推測できる。いずれにしても、今回の調査段階で『灌頂七日行事鈔』を最澄撰と考えることは難しいようである。しかし、『灌頂七日行事鈔』に説かれる主尊は仏頂尊であり、台密と仏頂尊との関わりを研究する上で、一つの貴重な資料となりえる。それは、『四十帖決』七において、『灌頂七日行事鈔』の基盤となっている『陀羅尼集經』について、『陀羅尼集經』在二仏頂之中¹と決していることから明らかである。それ故、『陀羅尼集經』に説かれる作法と台密における仏頂尊との関連を解き研究することも価値があると考えた。

第五章では、かかる観点から、『陀羅尼集經』に焦点を当て、その依用について調査を行った。『陀羅尼集經』の訳者である阿地瞿多は、唐においてすでに『陀羅尼集經』に関連する修法を行っていること、また奈良時代にすでに『陀羅尼集經』が多岐にわたって活用されていたこと等、その依用は古より確認できる。しかし、阿地瞿多の修法については、(阿地瞿多)自身の伝記が乏しいのに加えて、如何に修法を行っていたのか等不明であり、奈良時代における依用については、先学²も指摘するように、『陀羅尼集經』に関連する呪や呪法等は行われていたとしても、具体的な記録は乏しく、その修法を密教修法として採り扱うことは妥当ではない。

台密においては、円仁・円珍は、自著の中で『陀羅尼集經』に説かれる文を引くが、その修法に関する記述は見出せない。また、両師は、蘇悉地と相関する一字仏頂輪王に関する資料が遺されているが、『陀羅尼集經』と如何に連関するかを示した明確な資料等はみつけれられない。それは、『陀羅尼集經』と蘇悉地と連関することを明示した安然に至っても、『陀羅尼集經』を依用した修法に関しては同様である。

安然以降の、いわゆる事相全盛期に至ると、『陀羅尼集經』はあらゆる修法に用いられるが、中でも、事相全盛期初頭に位置づけられる長宴や相実を取り巻く、台密における「釈迦四天王法」なる修法が、『陀羅尼集經』所説の修法に関する作法であることが『門葉記』「相実法印不伝此法事」や、『息心抄』「四天王法」等に記され、実際に行ったことが録されている。これらによれば、「釈迦四天王法」とは、釈迦仏頂を中尊とする『陀羅尼集經』一「金輪仏頂像法」に『陀羅尼集經』十一所説の四天王惣印を附随した作法であり、長宴が延久二年(一〇七〇)に、胎藏曼荼羅の釈迦と『陀羅尼集經』の釈迦仏頂に纏わる修法とを結びつけた作法を実際に修したようである。このように、長宴の頃に至って、『陀羅尼集經』に関する明瞭な修法の記録が確認でき、「胎藏灌頂行事鈔」とも称される『陀羅尼集經』を基盤とする『灌頂七日行事鈔』の成立とも関連するであろう資料を見出し得た。しかし、相実は久安二年(一一四六)に至るまで、この修法の存在を知らなかったことが『門葉記』「相実法印不伝此法事」や、『息心抄』「四天王法」等に記述されている。さらに、相実は「釈迦四天王法」を知らなかったばかりか、『灌頂七日行事鈔』の名が初めてみられる

天仁二年（一一〇九）成立の葉雋『破邪弁正記』の頃には、『灌頂七日行事鈔』は比叡山中に流布されていたにもかかわらず、『灌頂七日行事鈔』について触れていない。『灌頂七日行事鈔』の具体的な成立を測定するには、本論において採り上げた『四十帖決』や『息心抄』等の事相全盛期初頭に位置づけられる文献をより詳細に整理・検討していく必要がある。

以上のように、第一部では最澄と仏頂尊に関する事例やそれに纏わる事績について調査を行ったが、最澄自身、明確に表記している文や、それに関連する資料が少なく、筆者の推論の過ぎる記述が多くなった。その上、論考の手薄な箇所も多々あり、今後はそれらの増補・訂正を図るとともに、新たに生じた問題点の解明のため研究を継続していきたい。

次に、第二部では、『瑜祇経』に焦点を当てた論を展開した。

第一章では、台密における従来の『瑜祇経』研究における仏頂尊について先行研究の整理・検討を行った。『瑜祇経』には、仏頂尊に関連する要素が随所に確認できる。それは、「一切如来金剛最勝義利堅固愛染王心品第二」に説かれる諸余の真言に対応する諸尊に、金剛界五部に加えて「仏頂部」を設けていること、「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六（四攝行品）」の品題に仏頂の名が冠されていること、「金剛吉祥大成就品第九」に仏頂尊の効能と関係の深い仏眼仏母に関する修法が説かれていること等である。中でも、先学らは、台密では『瑜祇経』中、「金剛吉祥大成就品第九」に説かれる仏母の身から『蘇悉地経』とも関連する一字頂輪王が化作されることや、胎金合糝を表す「大悲胎藏八字真言」が説かれることから、「金剛吉祥大成就品第九」の重要性を指摘し、この品に関して重厚な研究をなされた。しかし、他品に関する研究は未だ着手されていない。第二章では、『瑜祇経』に説かれる仏頂尊との関係について、未だ研究がなされていない「金剛吉祥大成就品第九」を除いた品の内、品題に仏頂尊の名を冠する「四攝行品」に焦点を当てて論究した。

「四攝行品」では、金剛手菩薩が、「一切処無不相応真言」を呪し、四攝行の想を起こし、四種鉤を結び、一切の有情に利益と安樂を与える四攝の行法を説く、そして一切時において「壊二乗心」を起こし、「壊二乗心真言」を誦することによって、福德増長、如来加護等の利益を得、現世において大金剛位処を証することができるといった内容が説かれている。台密において、初めて『瑜祇経』の註解を行ったのは安然である。その著作である『瑜祇経疏』においては、「壊二乗心」に関する記述が中心であり、「壊二乗心真言」にみられる「摩訶那曩」と「薩縛達摩尼秣弟」に焦点を当て、その意義が述べられている。そして、「摩訶那曩」を文殊、「薩縛達摩尼秣弟」を観音に配当し、文殊の大智と観音の大悲とを合して「壊二乗心」との解釈がなされる。この文殊と観音との関係は、台密の『瑜祇経』理解において重要視される仏頂尊と仏母としての仏眼との関係の類似性を想起させる。しかしながら、「四攝行品」の中でその解釈が具体的にされることは無い。

また、「壊二乗心」の真言・「壊二乗心」の想については説かれているが、その印相について安然は全く触れていない。安然以降の台東両密諸師らの章疏類からその印相について探求すると、「壊二乗心」の印相は、それぞれの用途や目的から三つに大別することができる。それは、①愛染王法において用いられる金剛合掌、②穴太流系の記述にみつけることができる文殊剣としての扱われ方、③三昧・葉上両流系の「法華誦誦作法」にみられる観音のㄐ字を加える解釈である。②・③は、まさに『瑜祇経疏』より始まる解釈から発展し

たことがうかがえる。①については、真寂の『瑜祇總行私記』にその始まりを覓索することができる。

また、安然是「四攝行品」の本尊は一切仏頂遍照最上王であると述べるが、「壞二乗心」に関しては、『阿婆縛抄』や『覺禪鈔』等の仏頂法において、この作法を具体的に説くことは無い。『瑜祇經』には、また「四攝行品」以外にも仏頂尊について説かれる箇所が幾分か認められたが、今後はかかる未解析の箇所も含め、『瑜祇經』全体を通して仏頂尊について理解の深化と研究を継続していく必要があると考えた。

第三章では、密教に関する多くの貴重な書物が保管されている青蓮院吉水蔵所収の『瑜祇經母捺羅』・『*Yupa-yupa*私記』合綴本、並びに『瑜祇經西決』の三書について整理・解析を行った。これら三本は、共に長寿房薬仁の記であり、その書本を基好・栄西が書写し、嘉暦三年（一二三二）に基好の書本とされるものを書写したものが現存の三本と考えられる。

『瑜祇經西決』に記された奥書によると、基好は治承三年（一一七九）の伯耆の国の戦乱に巻き込まれ、大山の聖教類と共に自ら書写した本も多く消失したが、その後多武峰にて、再び書写した旨が記されている。そのためか、これら三本はそれぞれに欠損箇所がいくつか確認でき、奥書も諸本それぞれに対応したものなのかどうか定かではなく、乱雑にまとまっている。しかし、これら三本に記された文を一同に集め展開し整合性を図ることで、すなわちパズルを解くが如く点在した内容を結び付け補填しあうことで、幾分かを修復することができ、その結果、今回はこれら三本の密接な相互関連性が理解された。

本論では、翻刻資料に挙げたとおり、三本をそのままの形式で翻刻を進めたが、今後の課題として、三本におけるバラバラになっている箇所のさらなる整理・校合を図り、また『瑜祇經母捺羅』に内包された「壞二乗心印事」の件も解析を進めたい。

『瑜祇經』に関しては、研究事例も少なく、本論においても、各章それぞれに多くの課題が残った。今後も、本經に関する研究を継続し、論究に努めていきたい。

《註》

1 陀羅尼集經は、仏頂の中に在り。『大正』七五・八七七頁中。

2 三崎良周「奈良時代の密教における諸問題」（宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教」）（法蔵館、一九九四）参照。

《参考文献》

第一部 初期台密における仏頂尊について―最澄を中心に―

第一章 入唐以前の最澄における仏頂尊理解―五仏頂法を中心に―

- 石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』東洋文庫、一九三〇
- 島地大等『日本仏教教学史』仏教書林・中山書房、一九三三
- 石田尚豊『曼荼羅の研究』東京美術刊、一九七五
- 『新修大津市史1 古代』大津市役所、一九七八
- 堀池春峰『南都仏教史の研究』下 諸寺編 法蔵館、一九八二
- 由木義文『東国の仏教―その原型を求めて』山喜房仏書林、一九八三
- 木内堯央『天台密教の形成』溪水社、一九八四
- 三崎良周『台密の研究』創文社、一九八八
- 長部和雄『唐代密教史雑考』溪水社、一九九〇
- 頼富本宏『密教仏の研究』法蔵館、一九九〇
- 三崎良周『台密の理論と実践』創文社、一九九四
- 勝又俊教『密教の日本的展開』春秋社、二〇〇〇
- 藏中しのぶ『『延暦僧録』注釈』大東文化大学東洋研究所、二〇〇八
- 水上文義『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八
- 高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫『初期密教』春秋社、二〇一三
- 大山公淳『伝教大師の密教観』『印度学仏教学研究』八一、一九五六
- 清田寂雲『大仏頂陀羅尼について―特に成菩提院の古写本に注意して―』
『印度学仏教学研究』五二、一九七八
- 大山公淳『伝教大師の密教について』『伝教大師研究別巻』、一九八〇
- 松本信道『大仏頂経』の真偽論争と南都六宗の動向』『駒沢史学』三三、一九八五
- 千葉照観『不空の密教における仏頂尊の位置づけ』
『大正大学総合仏教研究所年報』九、一九八七
- 千葉照観『仏頂尊と仏眼に関する問題―その成立を中心として―』
『印度学仏教学研究』三七―一、一九八八
- 堀池春峰『奈良時代仏教の密教的性格』
宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教」(法蔵館、一九九四)所収
- 三崎良周『奈良時代の密教における諸問題』
宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教」(法蔵館、一九九四)所収
- 佐々木大樹『陀羅尼集経』所収の仏頂系経軌の考察』『智山学報』五三、二〇〇四
- 林敏『大仏頂別行法』の基礎的研究』『仙石山論集』三、二〇〇六
- 林敏『大仏頂別行法』の諸本について』『印度学仏教学研究』五五―二、二〇〇七
- 小林崇仁『施暁と梵釈寺』『蓮花寺仏教研究所紀要』一、二〇〇八
- 松本信道『得清の入唐について』『駒沢大学文学研究紀要』六八、二〇一〇
- 林敏『日本における『首楞嚴経』の展開』『印度学仏教学研究』五八―二、二〇一〇

林敏「唐代仏典目録の作者としての智昇について」

『印度学仏教学研究』六五―二、二〇一七

第二章 『内証仏法相承血脈譜』における仏頂尊の位置づけ

木内堯央『天台密教の形成』溪水社、一九八四

三崎良周『台密の研究』創文社、一九八八

頼富本宏『密教仏の研究』法蔵館、一九九〇

長部和雄『唐代密教史雑考』溪水社、一九九〇

三崎良周『台密の理論と実践』創文社、一九九四

勝又俊教『密教の日本的展開』春秋社、二〇〇〇

水上文義『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八

『新編 天台宗の教義（一）』天台宗総合研究センター、二〇一三

高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫『初期密教』春秋社、二〇一三

大久保良峻『天台学探尋』法蔵館、二〇一四

三崎良周「円仁の密教における一二の問題―蘇悉地の形成と一字仏頂輪王―」

福井康順編『慈覚大師研究』（天台学会、一九六四）所収

佐々木大樹『陀羅尼集経』の研究―特に第四「十一面観音経」と第十「功德天法」の異訳

対照を中心として―『智山学報』五二、二〇〇三

佐々木大樹『陀羅尼集経』に関する諸文献の考察

『大正大学大学院研究論集』二九、二〇〇五

駒井信勝『陀羅尼集経』における灌頂儀礼をめぐる『智山学報』六〇、二〇一〇

駒井信勝『陀羅尼集経』の普集会曼荼羅について『智山学報』六一、二〇一〇

第三章 最澄帰国後における仏頂尊との関係―『灌頂七日行事鈔』を中心に―

石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』東洋文庫、一九三〇

上杉文秀『日本天台史』破塵閣書房、一九三五

浅井円道『上古日本天台本門思想史』平楽寺書店、一九七三

渡邊守順『伝教大師著作解説』叡山学院、一九九二

水上文義『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八

石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』東洋文庫、一九三〇

島地大等『天台教学史』明治書院、一九三四

木内堯央『天台密教の形成』溪水社、一九八四

三崎良周『台密の研究』創文社、一九八八

武覚円『十八道行法解説』叡山学院、一九八八

三崎良周『台密の理論と実践』創文社、一九九四

智山伝法院『十八道念誦次第講義録』『智山伝法院選書』十一、二〇〇二

三崎良周・林慶仁『蘇悉地経・蘇婆呼童子経・十一面神呪心経』

『新国訳大蔵経』密教部2・大蔵出版、二〇〇二

水上文義『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八

高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫『初期密教』春秋社、二〇一三

大久保良峻『天台学探尋』法蔵館、二〇一四

塩入亮忠「現存祖書の分類」『山家学報』十三、一九一七

菊岡義衷「山家大師と密教」『山家学報』十四、一九二〇

佐藤哲英「山王院蔵書目録について―延長三年筆青蓮院蔵本解説―」

『叡山学報』十三、一九三七

大山公淳「伝教大師の密教観」『印度学仏教学研究』八―一、一九六〇

牛場真玄「伝教大師の禅法相承について―内証仏法相承血脈譜を中心として―」

『天台学報』十、一九六七

牛場真玄「伝教大師の禅法相承について―天台法華宗伝法偈を中心として―」

『印度学仏教学研究』一、一九六八

清水谷恭順「伝教大師の密教の相承に関連して」『伝教大師研究』一九八〇

酒井敬淳「伝教大師と台密」『伝教大師研究』一九八〇

福井康順「内証仏法相承血脈譜」新義（承前）『天台学報』三十、一九八七

蓑輪顕量「光定と『内証仏法相承血脈譜』」『印度学仏教学研究』三八、一九九〇

大塚伸夫「『大日経』の曼荼羅行」『密教学研究』二五、一九九三

第四章 葉雋撰『破邪弁正記』にみえる最澄の密教について

島地大等『天台教学史』明治書院、一九三四

上杉文秀『日本天台史』破塵閣書房、一九三五

浅井円道『上古日本天台本門思想史』平楽寺書店、一九七三

木内堯央『天台密教の形成』溪水社、一九八四

渡邊守順『伝教大師著作解説』叡山学院、一九九二

三崎良周『台密の理論と実践』創文社、一九九四

天台宗典編纂所編『続天台宗全書目録解題』春秋社、二〇〇〇

水上文義『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八

大久保良峻『天台学探尋』法蔵館、二〇一四

塩入亮忠「現存祖書の分類」『山家学報』十三、一九一七

菊岡義衷「山家大師と密教」『山家学報』十四、一九二〇

佐藤哲英「山王院蔵書目録について―延長三年筆青蓮院蔵本解説―」

『叡山学報』十三、一九三七

大山公淳「伝教大師の密教観」『印度学仏教学研究』八―一、一九六〇

牛場真玄「伝教大師の禅法相承について―内証仏法相承血脈譜を中心として―」

『天台学報』十、一九六七

牛場真玄「伝教大師の禅法相承について―天台法華宗伝法偈を中心として―」

『印度学仏教学研究』一、一九六八

野本覚成「密教の血脈相承の論争―密教伝来脈譜正訛勘決」梶宝撰一卷を中心にく

『四天王寺』五二八号、一九八五

福井康順「内証仏法相承血脈譜」新義（承前）『天台学報』三〇、一九八七

蓑輪顕量「光定と『内証仏法相承血脈譜』」『印度学仏教学研究』三八、一九九〇

上杉智英「真源撰『往生要集裏書』について」

『仏教大学総合研究所紀要』二〇〇六(一)、二〇〇六
岩崎日出男「順曉から最澄への密教授法について―入唐時、唐土における密教伝播の状況からみたその内容と問題点―」

大久保良峻教授還暦記念論集刊行会『天台・真言諸宗論攷』(山喜房仏書林、二〇一五) 所収

第五章 台密における『陀羅尼集経』の依用について―『息心抄』を中心に―

石田茂作『写経より見たる奈良朝仏教の研究』「奈良朝現在一切経疏目録」

東洋文庫、一九三〇

『京都府古文書緊急調査報告 東寺観智院金剛藏聖教の概要』

京都府立総合資料館編、一九八六

三崎良周『台密の研究』創文社、一九八八

三崎良周『台密の理論と実践』創文社、一九九四

鎌田茂雄『中国仏教史』六 東京大学出版会、一九九九

堀池春峰「奈良時代仏教の密教的性格」

宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教Ⅰ」(法蔵館、一九九四) 所収

三崎良周「奈良時代の密教における諸問題」

宮坂宥勝編『密教大系』第四卷「日本密教Ⅱ」(法蔵館、一九九四) 所収

三崎良周「天台の密教」

宮坂宥勝編『密教大系』第六卷「日本密教Ⅲ」(法蔵館、一九九五) 所収

佐々木大樹『陀羅尼集経』所収の仏頂系経軌の考察『智山学報』五三、二〇〇四

林敏『大仏頂別行法』の基礎的研究『仙石山論集』三、二〇〇六

佐々木大樹『陀羅尼集経』初期密教の諸尊・陀羅尼を統合する経典」

高橋尚夫・木村秀明・野口圭也・大塚伸夫『初期密教』(春秋社、二〇一三) 所収

第二部 『瑜祇経』における仏頂尊の位置づけについて

第一章 従来の『瑜祇経』研究における仏頂尊との関係について

三崎良周『台密の研究』創文社、一九八八

三崎良周『台密の理論と実践』創文社、一九九四

三崎良周・林慶仁『蘇悉地経・蘇婆呼童子経・十一面神呪心経』

『新国訳大蔵経』密教部2・大蔵出版、二〇〇二

水上文義『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八

水上文義『日本天台教学論 台密・神祇・古活字』春秋社、二〇一七

第二章 『瑜祇経』所説の壞二乗心について

大村西崖『密教発達志』国書刊行会、一九七二

石田尚豊『曼荼羅の研究』東京美術刊、一九七五

梅尾祥雲『理趣経の研究』臨川書店、一九八二

- 田村晃祐編『徳一論叢』国書刊行会、一九八六
- 三崎良周『台密の研究』創文社、一九八八
- 頼富本宏訳『大乘仏典〈中国・日本篇〉』「8中国密教」中央公論社、一九八八
- 三崎良周『台密の理論と実践』創文社、一九九四
- 水上文義『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八
- 菅野博史『法華玄義を読む 天台思想入門』大蔵出版、二〇一三
- 大久保良峻『最澄の思想と天台密教』法蔵館、二〇一五
- 津田真一『梵文和訳金剛頂経』春秋社、二〇一六
- 水上文義『日本天台教学論 台密・神祇・古活字』春秋社、二〇一七
- 鈴関宥俊「弥陀と観音とに就て(二)」『智山学報』十一、一九三七
- 佐々木大樹『陀羅尼集経』所収の仏頂系経軌の考察』『智山学報』五三、二〇〇四
- 寺本亮晋「台密の蓮華部について」『印度学仏教学研究』五九―一、二〇一〇

第三章 青蓮院吉水蔵『瑜祇経母捺羅』『サハサヤ私記』『瑜祇経西決』について

- 渋谷慈鑑編『校訂増補天台座主記』第一書房、一九三五
- 多賀宗隼『栄西』吉川弘文館、一九六五
- 渋谷亮泰『昭和現存天台書籍綜合目録』法蔵館、一九七八
- 多賀宗隼『慈円の研究』吉川弘文館、一九八〇
- 三崎良周『台密の研究』創文社、一九八八
- 三崎良周『台密の理論と実践』創文社、一九九四
- 『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』汲古書院、一九九九
- 天台宗典編纂所編『正續天台宗全書目録解題』春秋社、二〇〇〇
- 山本信吉『古典籍が語る―書物の文化史』八木書店、二〇〇四
- 水上文義『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八
- 久野修義『重源と栄西 優れた実践的社會事業家・宗教者』山川出版社、二〇一一
- 水上文義『日本天台教学論 台密・神祇・古活字』春秋社、二〇一七
- 稲田祖賢「台密諸流史私考」『叡山学報』六、一九三三
- 稲田祖賢「台密諸流史私考(承前)」『叡山学報』八、一九三三
- 米田真理子「栄西の入宋―栄西伝における密と禅―」
- 吉原浩人・王勇編『海を渡る天台文化』(勉誠出版、二〇〇八)所収
- 岡野浩二「平安末期における天台僧の修行巡礼―青蓮院門跡吉水蔵聖教にみえる備前・因幡・伯耆―」『倉敷の歴史』十九号、二〇〇九

※写本資料は、天台宗典編纂所収集資料を使用した。

本論文への収録に際しては、既発表論文の誤記や事実誤認等に修正を施し、発表時以後の研究を行って得られた認識を加えた。また、全体の統一がとれるように、各々の論旨を変えない範囲での加筆も行った。それらの初出を示せば、次の通りである。

《初出一覧》

序 新稿

第一部 初期台密における仏頂尊について―最澄を中心に―

第一章 入唐以前の最澄における仏頂尊理解―五仏頂法を中心に―

「平安初期における五仏頂法について」『天台学報』五六、二〇一四

「最澄撰『内証仏法相承血脈譜』からみえる蘇悉地の伝承について」

『大正大学大学院研究論集』三九、二〇一五

第二章 『内証仏法相承血脈譜』における仏頂尊の位置づけ

「最澄撰『内証仏法相承血脈譜』からみえる蘇悉地の伝承について」

『大正大学大学院研究論集』三九、二〇一五

第三章 最澄帰国後における仏頂尊との関係―『灌頂七日行事鈔』を中心に―

「灌頂七日行事鈔」について」『平安仏教学会年報』九、二〇一六

第四章 薬雋撰『破邪弁正記』にみえる最澄の密教について

「破邪弁正記」にみえる最澄の密教について」『天台学報』五九

第五章 台密における『陀羅尼集経』の依用について―『息心抄』を中心に―

新稿

第二部 『瑜祇経』における仏頂尊の位置づけについて

第一章 従来の『瑜祇経』研究における仏頂尊との関係について

新稿

第二章 『瑜祇経』所説の壞二乗心について

「『瑜祇経』所説の壞二乗心について」

『天台学報』六〇、二〇一八収録予定

第三章 青蓮院吉水蔵『瑜祇経母捺羅』『瑜祇経西決』について

「青蓮院吉水蔵『瑜祇経母捺羅』『瑜祇経西決』について」

て」『平安仏教学会年報』一〇、二〇一八収録予定

翻刻資料 青蓮院吉水蔵『瑜祇経母捺羅』『瑜祇経西決』 新稿

結 新稿

本論文の作成にあたり、修士から数えると八年という長期間に渡って、終始適切な助言を賜り、また丁寧な指導して下さいました主査である塩入法道教授に感謝致します。並びに漢文の指導、言葉遣い、考察の方法等細部にわたるご指導をいただきました、同研究室の諸先生方に感謝致します。本当にありがとうございました。

また、本論文の作成過程の「天台宗教学振興事業団論文」において、三年間にわたり、文章の表現方法や考察の方法等、細部にわたって丁寧に指導して下さいました大久保良峻先生に感謝致します。

そして、本書で用いた資料の典籍等に関して、天台宗典編纂所のご協力を賜りました。本当にありがとうございました。